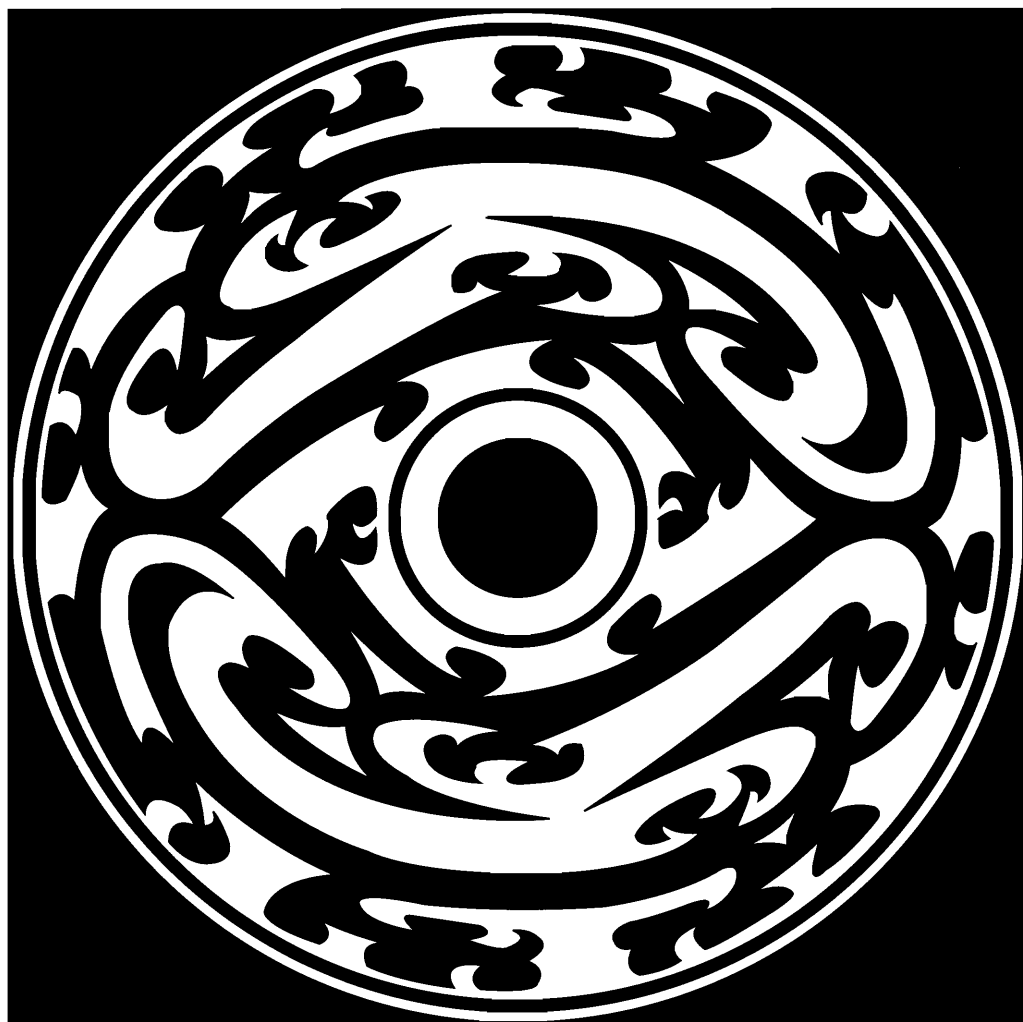


亀ヶ岡文化遺物実測図集



頑張れ! 亀ヶ岡文化

弘前大学人文学部
日本考古学研究室研究報告 1

凡 例

1. 弘前大学人文学部日本考古学ゼミナールでは、大学が青森県にあるという地域的立場を利用して、亀ヶ岡文化（北日本の縄文時代晩期の文化）の研究を大きな課題として取り上げている。本書は、この研究を遂行するための基礎資料として、日本考古学ゼミナールで作成した実測図の集成である。
2. 本書の作成・編集には、弘前大学人文学部の藤沼邦彦（教授・日本考古学担当）と日本考古学ゼミナールに集う学生と卒業生が参加し、関根達人（助教授・文化財論担当）の指導を得た。
3. 各遺跡の実測図を作成する時に中心になった学生は次の通りである。
 - 二枚橋(2)遺跡の土器・土製仮面－萩坂華恵（平成13年度卒業生）
 - 二枚橋(2)遺跡の土偶・土製仮面、観音林遺跡の土偶－佐布環貴（平成13年度卒業生）
 - 二枚橋(2)遺跡・是川遺跡の石刀－市川健夫・竹原仁志（4年生）
 - 是川遺跡の土器－新井田えり子・関根桂子（平成14年度卒業生）
 - 観音林遺跡の土器－向出博之（人文社会科学研究科1年生）
 - 観音林遺跡の石刀－横山寛剛（3年生）、秋山真吾（2年生）
 - 野里遺跡の土器－古川温子・山田祐子（平成13年度卒業生）このほかにも実測図の作成・修正・トレース、拓本の作成、展開図の作成・トレース、図の割り付け、編集などに多くの卒業生、在校生が参加した。上記と重複しない者の名前を挙げると、其田香保里（卒業生）、竹内友香（卒業生）、薦川貴祥（人文社会科学研究科2年生）、小向良（人文社会科学研究科1年生）である。編集は、薦川・小向・向出を中心に、深見・横山・秋山が協力した。
4. 本書で取り上げた主な出土品の遺跡と所有者は次のとおりである。
 - (1)青森県下北郡大畑町二枚橋(2)遺跡（大畑町教育委員会所有）
 - (2)青森県八戸市是川中居遺跡（八戸市教育委員会所有）
 - (3)青森県五所川原市観音林遺跡（五所川原市教育委員会所有）
 - (4)岩手県二戸郡一戸町野里遺跡（一戸町教育委員会所有）
5. 掲載した遺物の実測図の縮尺は、挿図を除けば、すべて3分の1である。
6. 土器の実測図を作成する時は、株式会社サイバのマイブンスコープのⅠ型とⅡ型を活用した。
7. 土器の文様についてはできるだけ展開図をのせた。文様の構成・単位・描く手順などを示すためである。展開図の多くは拓本を利用して作成した模式図である。拓本と展開図の縮尺は一定していない。
8. 実測図や模式図を載せることを大きな目的としたため、文章は簡単なものになった。引用文献もいちいち明示できなかったのが、参考文献として一括して載せた。

9. 本書の作成・編集にあたって、以下の関係機関や個人の方々から御協力・ご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略、順不同）。

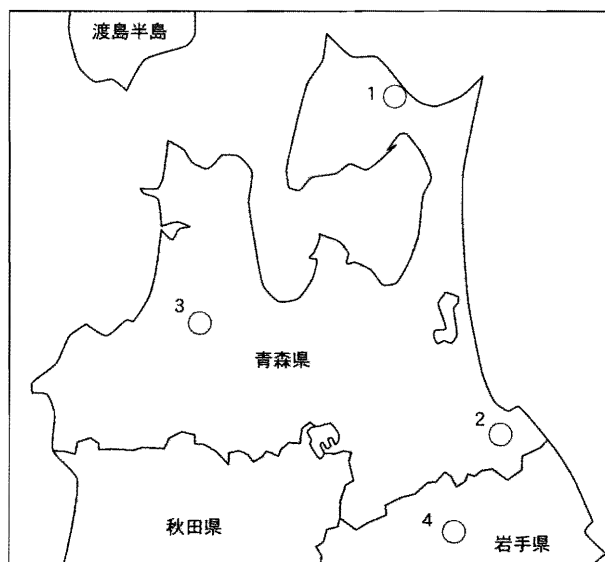
大畑町教育委員会（四戸敏哉・田畑寿宏）、八戸市教育委員会（工藤竹久・小林和彦・宇部則保）、五所川原市教育委員会（藤原弘明）、一戸町教育委員会（高田和徳・中村明央）、青森県教育委員会文化財保護課（三浦圭介）、青森県埋蔵文化財調査センター（福田友之・成田滋彦・工藤大）、青森県立郷土館（鈴木克彦・三宅徹也）、市浦村教育委員会（榊原滋高）、浪岡町教育委員会（工藤清泰）、弘前市教育委員会（成田正彦）、青森短期大学（葛西勲）、東北大学文学部考古学研究室（須藤隆・鹿又喜隆）、宮城県教育庁文化財保護課（三好秀樹・佐藤憲之・須田良平）、東北歴史博物館（山田晃弘・菊地逸夫）、宮城県松島町教育委員会（菅原進）、毛利コレクション（毛利伸）、国立歴史民俗博物館（阿部義平）、文化庁美術学芸課（土肥孝・原田昌幸・森田稔）、文化庁記念物課（岡田康博）、橘善光・奈良正義（青森県むつ市）、高橋与右衛門（岩手県雫石町）、横山英介（函館市）。

また、いつも大局的な観点からご指導いただいている芹沢長介、村越潔、林謙作、小林達雄、渡辺誠、工藤雅樹の諸氏にもお礼申しあげたい。

10. 本書の刊行に際し、弘前大学人文学部の学部長裁量経費を申請し、それを印刷費の一部にあてた。

実測図でとりあげた主な遺跡の分布図

1. 青森県下北郡大畑町二枚橋(2)遺跡
2. 青森県八戸市是川中居遺跡
3. 青森県五所川原市観音林遺跡
4. 岩手県二戸郡一戸町野里遺跡



目 次

I	亀ヶ岡文化遺物実測図集の刊行にあたって	1
II	青森県大畑町二枚橋(2)遺跡	
	1. 二枚橋(2)遺跡の概要	3
	2. 縄文晩期の土器	3
	3. 縄文晩期の土偶	10
	4. 縄文後・晩期の石刀	12
	5. 実測図・観察表 (1)縄文晩期の土器	16
	(2)縄文晩期の土偶	59
	(3)縄文後・晩期の石刀	81
III	二枚橋(2)遺跡・その他出土の土製仮面	109
IV	青森県八戸市是川中居遺跡	
	1. 是川中居遺跡の概要	119
	2. 縄文晩期の土器	119
	3. 縄文後・晩期の石刀	123
	4. 実測図・観察表 (1)縄文晩期の土器	126
	(2)縄文後・晩期の石刀	158
V	青森県五所川原市観音林遺跡	
	1. 観音林遺跡の概要	167
	2. 縄文晩期の土器	167
	3. 縄文晩期の土偶・岩偶	169
	4. 縄文後・晩期の石刀	169
	5. 実測図・観察表 (1)縄文晩期の土器	172
	(2)縄文晩期の土偶	192
	(3)縄文後・晩期の石刀	196
VI	岩手県一戸町野里遺跡	
	1. 野里遺跡の概要	199
	2. 縄文晩期の土器	199
	3. 縄文晩期の土製品	201
	4. 実測図・観察表 (1)縄文晩期の土器	202
	(2)縄文晩期の土製品	207
VII	主な参考文献	213
	編集後記(付. 考古学ゼミナール卒業生・在校生名簿)	215

I 亀ヶ岡文化遺物実測図集の刊行にあたって

今回、亀ヶ岡文化関係の遺物の実測図集を刊行することにした。

藤沼が弘前大学人文学部に赴任したのは平成10年4月である。初めて考古学実習を開講したのが翌年平成11年度の後期、初めて考古学ゼミナールを開講したのが翌々年平成12年度の前期である。

考古学ゼミナールの課題として亀ヶ岡文化を取りあげた。理由は、弘前大学が亀ヶ岡文化の中心地の一つである津軽地方に位置し、遺跡や遺物にめぐまれた地理的・文化的環境を利用できることであつた。亀ヶ岡文化はいうまでもなく縄文時代晩期に北海道渡島半島から東北地方一円に盛行した文化である。その特色は土偶や石刀、土版・岩版などの祭祀的遺物、精巧な土器や漆器などの工芸的な遺物に彩られていることである。その影響を受けた文物は、亀ヶ岡文化圏をはるかにこえて、北は北海道北部まで、南は近畿地方や四国地方まで達している。したがって、亀ヶ岡文化を考えることは広域的な見方を養うことができる。これもゼミナールで亀ヶ岡文化を取り上げた理由の一つである。

現在、青森県教育委員会は三内丸山対策室を設け、縄文時代前期・中期を中心とした円筒文化の大きな遺跡である青森市三内丸山遺跡（特別史跡）の継続的調査と遺跡の顕彰に取り組む活動を行っている。八戸市教育委員会でも、三内丸山遺跡における活動の影響を受けて、是川遺跡の継続的な調査を開始し、亀ヶ岡文化における漆の文化の解明と遺跡の顕彰に取り組んでいる。是川遺跡にある八戸市縄文学習館（是川考古館・歴史民俗資料館）は、すぐれた是川遺跡の出土品を展示するとともに、市民を対象とした生涯学習も熱心に行っている。一方、弘前大学が位置する津軽地方は、縄文時代の遺跡に恵まれているにもかかわらず、縄文時代の遺跡や遺物を利用した公共機関や市民の活動はやや低調である。

亀ヶ岡文化の名称は、津軽地方の木造町にある亀ヶ岡遺跡に由来する。亀ヶ岡遺跡は「奇代之瀬戸物」が掘り出される遺跡として江戸時代から知られており、文政のころには土器や土偶が江戸まで運ばれている。明治以降、学術調査も行われるが、地元民による遺物採集が活発に行われ、出土品は膨大な量に達した。優れた出土品は、地元民の手から各地の好事家の手に移り、現在では東京大学・東京国立博物館・東北大学（久原コレクション）・青森県立郷土館（大高コレクション）など各地の大学・博物館に収容され、展示されているものが多い。出土品の流出は、確かに亀ヶ岡遺跡と亀ヶ岡文化の名を不動なものにするのに役に立った。しかし、今や地元で作られた木造町縄文住居展示資料館（カルコ）を訪ねても、亀ヶ岡遺跡から出土した優れた遺物を多数見ることはできないし、遺跡に関する学術的な情報もあまり得る事ができない。ちょっと寂しい限りである。津軽地方には亀ヶ岡文化の良好な遺跡が多数分布する。亀ヶ岡文化とその遺跡を保護し、いろいろな形で顕彰することは、津軽の人々（とくに子ども達）を元気にし、郷土愛を育成するのに役立つ筈である。亀ヶ岡文化、頑張れ。これも考古学ゼミナールで亀ヶ岡文化を取り上げた理由の一つである。

考古学ゼミナールの開講以来、その活動や考古学実習さらに卒業論文などで作成した考古資料の実測図は膨大で、その多くは亀ヶ岡文化に係る遺物である。すべて県内の教育委員会などから資料を借用して、考古学実習室で実測したものばかりである。今回、この実測図集に取り上げたものは、下北郡大畑町二枚橋(2)遺跡、八戸市是川中居遺跡、五所川原市観音林遺跡、岩手県二戸郡一戸町野里遺跡の出土品である。このうち二枚橋(2)遺跡と観音林遺跡のものはすでに報告書が刊行されているものであるが、土器の文様の展開図など異なった観点から新たに作成したものが多数あるので、掲載することにした。是川中居遺跡の土器は、有名であるが公開された実測図がなく、学術資料としては不便である。今回は、未指定の資料から文様のあるものを選んで実測させていただいたものである。できれば残りのもの（残りの方が多いが）も継続して実測したいと考えている。野里遺跡は一戸町教育委員会の発掘資料である。未報告のものであるがあえて代表的なものを発表させていただいた。

実測図集を刊行する大きな目的は、①弘前大学人文学部の考古学ゼミナールの活動を知ってもらいたいこと、②卒業生や研究者の方が論文を書くときの資料として役立たせて欲しいこと、③亀ヶ岡文化の顕彰のため、である。

土器の実測図には、拓本を利用して作成した文様の展開図をそえた。文様の構成・描く手順（描きやすい手順）などを考えるためである。試みに展開図の中には文様を描くとき、最初に描いたと想定される部分（モチーフ）に色を入れてみた。雲形文の場合なら区画文・配置文に相当する部分である。複雑な構成の文様については、描く手順ごとに、その過程を模式図で示したものもあるが、私たちの考える手順に狂いがあるかもしれないし、図の作り方に工夫が足りないものもあるので、ご批判をいただきたい。

土偶の実測図は、二枚橋(2)遺跡と観音林遺跡が中心で、いずれも縄文時代晩期のものである。いずれも良好な資料であるが、発掘調査においてどの土器型式に伴ったか報告書ではよく分からないものが多いのは残念である。土製仮面については二枚橋(2)遺跡を中心に青森県のものを実測・集成して発表したことがあったが、新たに岩手県の2例を加えて掲載した。

石刀の実測図は、二枚橋(2)遺跡、是川中居遺跡、観音林遺跡のものである。二枚橋(2)遺跡の石刀の特徴は、柄頭に精巧な入組三叉文を持つものが多いことであろう。実測図に拓本を添えたのは、拓本のほうが文様がくっきり見えるものがあったこと、製作工程を示す研磨痕などが観察できたことなどによる。

以上の実測図を作成し、関連資料を各地の報告書から集成しているときに、学生から「土製品や石製品などについて共伴する土器型式を書いていない報告書が多い」「大別の時期（後期、晩期など）も書いていないものがある」「土器についても層位別・遺構別に取り扱われていない報告書が多い」という不満の声が上がった。いくら実測図をとっても型式単位のきめ細かな遺物の変遷を明らかにできないというのだ。労多くして知ること少なし。まったくその通りである。発掘調査の担当者に「遺跡・遺構を層位的に調査し、検出された遺構や遺物がどの土器型式に伴うかはっきりさせて欲しい。遺物は出土した層位や遺構が分かるように報告書に載せて欲しい」とお願いしたい。これは考古学の基本である。

なお『日本考古学研究室研究報告』は今後も継続して発刊する予定である。第2集は、青森県今津遺跡の発掘報告書を予定している。ぜひ皆さまのご指導のほどお願いします。

（藤沼邦彦）

Ⅱ 青森県大畑町二枚橋(2)遺跡

藤沼邦彦・佐布環貴・萩坂華恵・小向良・竹原仁志・市川健夫

1. 二枚橋(2)遺跡（下北郡大畑町大畑字二枚橋）の概要

下北半島の津軽海峡に面した海岸段丘にあり、大畑川と茶水川に挟まれた標高45mの舌状台地に立地する。弥生時代前期の二枚橋式土器の標識遺跡である二枚橋遺跡は、大畑川を隔てて、北側の台地にある。

遺跡に立って北を望めば、津軽海峡を隔てて、遠く北海道を見ることができる。北海道との距離は、遺跡付近から対岸の戸井町の海岸まで、直線で約38kmである。遺跡の北東25kmにある大間崎（本州最北端。大間町）までいけば、北海道との距離はさらに短く、戸井町汐首崎まで僅か19kmしかない。津軽海峡は、対馬暖流から分岐した津軽暖流が、日本海から太平洋側へ速い速度（平均時速2～4ノット、最大6ノット）で流れ、海上交通の難所とされてきた。しかし、縄文時代には、東北北部と北海道渡島半島は、津軽海峡を挟んで、同一の土器文化圏を構成することが多く、きわめて密接な関係にあったことが分かる。今回取り上げた二枚橋(2)遺跡の縄文晩期中葉～後葉の土器や石刀も、同じ亀ヶ岡文化圏の中でも、南の地域より、津軽半島や渡島半島のものに共通する特徴をもつ。

平成9年（1997）、二枚橋(2)遺跡は、大畑町運動場造成工事に伴い、大畑町教育委員会（担当、橘善光）によって発掘調査された。発掘面積は約6,500㎡で、遺跡の主要部はほぼ調査されたことになる。その結果、縄文早期（少数の土器片）・中期～晩期の遺物と、中期の竪穴住居跡3軒、晩期の集石遺構・土坑・埋設土器など200基以上の遺構が検出された。晩期の住居跡は検出されなかったという。晩期の遺物は、大洞C2式から大洞A'式土器にかけてのものであるが、大洞C2式と大洞A式との中間型式と推定される大洞C2-A式（仮称）と大洞A式が圧倒的に多い。土器以外には、石器をはじめ装身具（土製耳飾り・石製玉など）、鹿角製離頭銛、祭祀用具（ミニチュア土器・仮面・土版・岩版・冠形土製品・石刀など）があり、種類・量ともに豊富である。とくに祭祀遺物は、約20点の土製仮面、約200点の石刀、約160点の土偶があり、亀ヶ岡文化の祭祀を考える基礎資料として重要な役割を担うことになろう。発掘報告書は、橘善光・奈良正義が中心になって『二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』（大畑町文化財報告書第12集、2001年）として、刊行された。

『報告書』刊行後、私たちは、青森県教育委員会が行った青森県重宝指定の調査の手伝いを兼ねて、二枚橋(2)遺跡の出土品を調査する機会を与えられた。ここに掲載する縄文晩期関係の実測図（土器・土偶・仮面・石刀）は、その機会に、出土品の主要なものを大畑町教育委員会から借用し、弘前大学人文学部の考古学実習室で作成したもので、これまで卒業論文・ゼミ研究・実習、論文などに大いに利用させていただいた。

（藤沼・萩坂）

2. 縄文晩期の土器

（はじめに）

実測図には大洞C2・C2-A・A式を中心に、文様をもつ土器を取り上げた。晩期中葉～後葉の文様の構成・描き方・変遷を研究するための基礎資料とするため、できるだけ文様の展開図を添えた。この時期の土器文様は、配置文が2～3単位のものが多く、正面図だけでは文様の展開が分からないからである。なお展開図は、文様帯が扇形に広がるような形（器形によって違うが）に拓本をとり、その拓本図をさらにトレースする方法で作成したもので、かなり模式化したものである。

(描き方から見た文様の分類)

文様の分類は、文様を描くときに文様帯を割りつける働きをする区画文あるいは配置文の種類を基準にした。区画文・配置文は、ふつう沈線でかこまれた磨消（無文）部となるが、沈線あるいは彫り込み部として表現されるものを含めた。なお、分類に用いた区画文や配置文の名称は、観音林遺跡など他の遺跡での名称と異なっているので、注意を要する。

〔区画文〕区画文は文様帯を区画して、単位文様を割りつける働きをするもので、表のようにモチーフによって8種類に分けた（区画文1～8）。

区画文1は、縦の平行沈線の間に列点が入るもの（図99.101）。

区画文2は、縦に並ぶ3本の沈線からなるもの（図100.103）。

区画文3は、点対称の弧線の組み合わせからなるもの（図104）。

区画文4は、区画文3の変形とみることができる（図84）。

区画文5は、配置文Ⅲ7の上下に付加文を付けて文様帯の上下線に接するようにしたものである（参考図1を参照。図85）。

区画文6は、区画文5の横幅を短くしたもので、同じ構成の文様である（図83）。

区画文7は、角度の鋭角なS字形のもので、沈線からなる（図60）。

区画文8は、2本の並行沈線をハの字形に並べたもの（図98下段）。

〔配置文〕配置文は、文様帯の内部に埋め込まれるか、あるいは文様帯の上・下線のいずれか一方にのみ接続するもので、配置文以外の部分は連続した文様（縄文を持つことが多い）を構成する。表のようにⅠ～Ⅲに大別し、さらにモチーフの種類で細別した。

配置文Ⅰは、文様帯の上・下線のそれぞれ一方にのみ接続する文様が、2個一対で構成される配置文で、6種類に細別した。

配置文Ⅰ1は、2個の三角形文を点対称に並べたもので、三角形文は沈線で表現される（図45～48.50）。狭い文様帯に連続して配置すると、連続文様は工字文となる（参考図2）。

配置文Ⅰ2は、一つの角が他の角より長く作られた2個の三角形文を点対称に並べたもので、配置文Ⅰ1を若干変形させたものである。幅の狭い文様帯に連続して配置すると、連続文様はややバランスの崩れた感じの工字文となる（図51）。

配置文Ⅰ3は、2個のL字形文の端を入り組むように、点対称に並べたもので、沈線で構成される（図52.53）。

配置文Ⅰ4は、Ⅰ3を上下逆にしたもの（図54～56）。

配置文Ⅰ5は、横長の部分に棒を立てたような楕円文を点対称に並べたもの（図70）。参考図3のように、隙間なく配置するところに特色があり、連続文様は細い隆線からなる工字文となる。

配置文Ⅰ6は、一（なべぶた）状の沈線文（一形文）を点対称に並べたもので、できあがる連続文様は細い隆線からなる均整のとれた工字文となる（参考図4を参照。図111）。



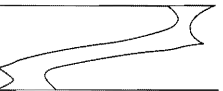
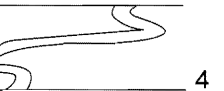
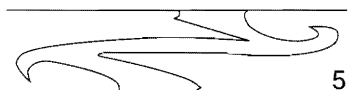
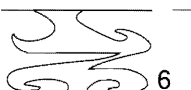







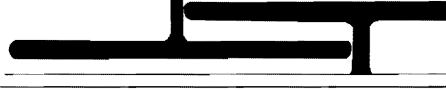

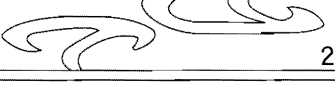


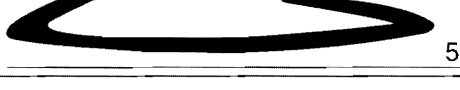
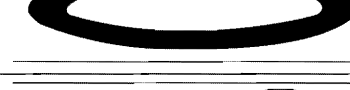

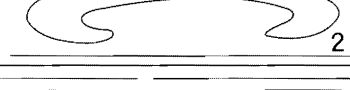

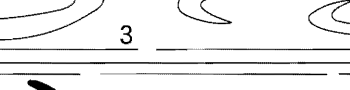




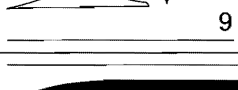



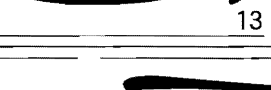


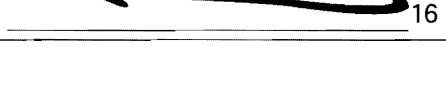
配置文Ⅱは、文様帯の上線あるいは下線に接続する配置文で、6種類に細別した。この配置文は上線に接続するのが普通で、下線に接するものは少ない。





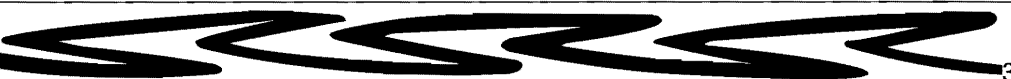



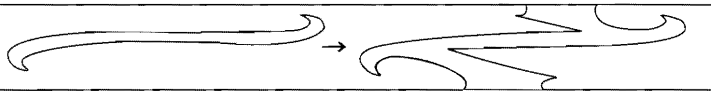


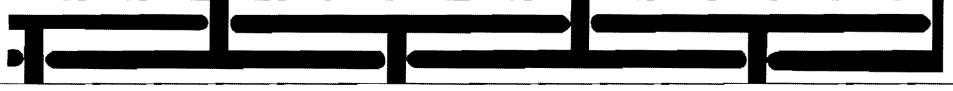


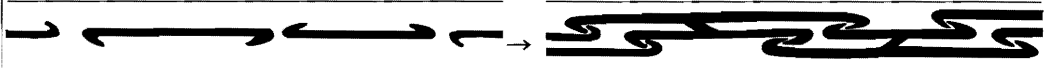
配置文Ⅱ1は、上線に接続した「くの字」形の文様である（図59上段。参考図5を参照）。


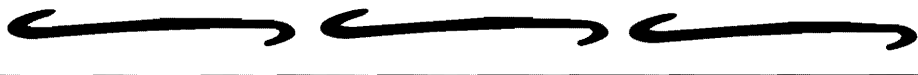



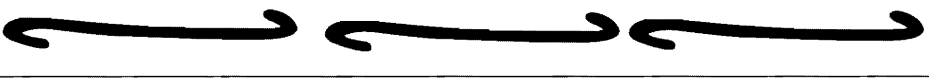



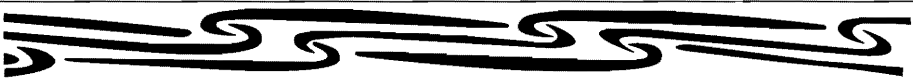


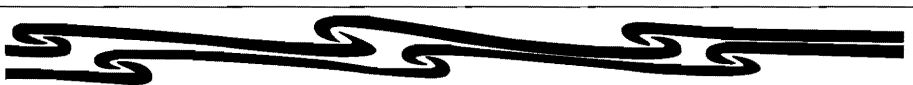

配置文Ⅱ2は、C字文を横にしたもの（横C文とする）を点対称に並べ、さらにノ字形の付加文を加え、その下端が文様帯の下線に接するようにしたもの（図82）。

配置文Ⅱ3は、横長の渦巻文の下端が文様帯の下線に接しているもの。参考図6のように文様帯の上線に接しているものもある（図77）。

配置文Ⅱ4は、C字文を横にした横C文（配置文Ⅲ5）の上に一形文を、下に短い縦線を加えたもの（図94.96）。文様帯の上下線のどちらかに接続するものが多いが、両方に接続する場合もある。

	区画文・配置文・連結配置文の分類および参考図
区画文	 1  2  3  4
	 5  6  7
	 8
配置文 I	 1  2
	 3  4
	 5  6
配置文 II	 1  2  3
	 4  5
	 6
配置文 III	 1  2
	 3  4
	 5  6  7  8
	 9  10  11
	 12  13  14
	 15  16

	区画文・配置文・連結配置文の分類および参考図
	 17
	 18
連結配置文	 1
	 2
	 3
	 4
	 5
	 6
参考図 1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	

	区画文・配置文・連結配置文の分類および参考図
参考図 8	
9	
10	
11	
12	
13	
14	
15	
16	
17	
18	
19	
20	
21	

配置文Ⅱ 5は、横C文の一端が文様帯の上線に接するもの（図72下段）

配置文Ⅱ 6は、横C文の両端が文様帯の上線に接するもの（図106）。上線に接した楕円文といってよい。

配置文Ⅲは、文様帯に組み込まれるもので、18種類に細別した。

配置文Ⅲ 1は、C字文を横にしたもの（横C文。図88）。

配置文Ⅲ 2は、Ⅲ 1を上下逆にしたもの。これを配置したものは二枚橋(2)遺跡にはない。

配置文Ⅲ 3は、Ⅲ 1とⅢ 2を一对にしたもの（図87.92）。

配置文Ⅲ 4は、Ⅲ 1とⅢ 2の一端を連続して入り組むように並べたもの（図93）。

配置文Ⅲ 5は、Ⅲ 1を沈線にしたもの（図29.89）。図29は複雑な文様構成を示すので、参考図7の施文工程を参照。

配置文Ⅲ 6は、Ⅲ 5とそれを逆にしたものを、上下に重ねたもの（図91）。

配置文Ⅲ 7は、Ⅲ 1とⅢ 2の端部を接合させたものが基本形である（図90）。

配置文Ⅲ 8は、Ⅲ 7を沈線化したもので、端部が入り組む形に配置すると、渦巻き状の隆線文が生まれる（参考図8。図76）。

配置文Ⅲ 9は、2個の三角文を、点対称に並べたもの（図39.41）。

配置文Ⅲ 10は、沈線による一状の三角形文を点対称に組み合わせたもの。狭い文様帯に連続的に配置すると、工字文的な連続文様ができあがる（図40.42～44.98上段）。

配置文Ⅲ 11は、「くの字」形の文様を一括した。沈線で描かれ、密接して並べられ、綾杉文となることが多い（図78～81）。

配置文Ⅲ 12は、横長の楕円文の中に線を加えたもので、沈線で描かれている（図105）。

配置文Ⅲ 13は、沈線でS字を横に描いたもの（横S文。図5.35.71.72上段.74.75）。並べ方には、単純に横に並べたもの（参考図9）、端部が上下に重なるように並べたもの（参考図10）、端部が入り組むように並べたもの（参考図11）がある。参考図12は、参考図11の変形とも見ることができる。

配置文Ⅲ 14は、Ⅲ 13を逆さまにしたもの（図1～4.6～16.31～34.36.59下段）。並べ方には、単純に横に並べたもの（参考図13）、単純に並べたものに「し」字を横にしたもの（「横し文」とする）を充填したもの（参考図17）、端部が上下に重なるように並べたもの（参考図14）、端部が入り組むように並べたもの（参考図15.16）がある。

配置文Ⅲ 15は、配置文Ⅲ 14の右上と左下に、「横し文」を付加した形のもの（図18～27）。変則的な形で描きにくいので、配置文として見るより、施文の過程で成立したものである可能性がある（参考図13→18）。

配置文Ⅲ 16は、配置文Ⅲ 14の左上と右下に、「横し文」を付加した形のもの（図28）。変則的な形で描きにくいので、やはり配置文として見るより、施文の過程で成立したものであろう（参考図16→19、あるいは参考図20→19）。

配置文Ⅲ 17は、配置文Ⅲ 15とⅢ 16を入り組ませた形のもの（図17.30）。しかし、上下の横S文を、方向の違う短い沈線で、それぞれ結びつけたものと考えた方が、分かりやすい（参考図20→18.19）。配置文Ⅲ 18は、「横し文」に三角形文（三叉状）を付加したものを点対称に組み合わせたもの（図86）。これに三角形文や「エの字」文を充填すると、隆帯による工字文的な連続文様ができる（参考図21）。

〔連結配置文〕配置文が横に連結して文様帯を一巡するものを、連結配置文と仮称する。この連結配置文については、研究不足であるが、これを用いた文様は、雲形文や連繫入組文よりも工字文を構成する場合が多いようである。

連結配置文 1は、配置文Ⅲ 5とそれを逆さまにしたものを、交互に並べて連結した形のもの（図49.97）。

連結配置文 2は、配置文Ⅰ 1の配列によって生まれた工字文（参考図2）を、沈線で写した形のもの

(図65.68.69)。沈線で上向き下向きの三角形を交互に並べていくように描いた工字文で、三角形の内側に横沈線が入ることが多い。

連結配置文3は、配置文Ⅲ11にとりあげた「くの字」文のうち、横長の「くの字」文を連結して並べたもので、沈線による工字文的な連続的な文様ができる(図57.58)。

連結配置文4は、配置文Ⅲ13を横に並べて連結したもので、沈線による左向き波状文となる(図37.38)。

連結配置文5は、連結配置文2の三角形の底辺にあたる部分に短い沈線を立て、文様帯の上・下線に接合させた形のもので、空間部に、沈刻による白形文(工の字形文)や2個一対の三角形文が埋め込まれる(図61～64.66.67)。

連結配置文6は、下向きの連弧文を並べ、弧線の交わる部分と弧線の頂点が文様帯の上・下線に接する形となるもの。区画された三角形の部分に「横し文」が2個入り組むように埋め込まれる(図73)。

以上のように、文様の分類に多数の区画文や配置文、連結配置文を設定し、説明が煩雑になった部分があるが、区画文・配置文の模式図をみても分かるように、基本的なものはあまり多くない。同じ形のもを並列させたり、点対称に配置して並べたり、密接して並べたり、間隔をとって並べたり、付加文を足したりなど、工夫して多種類の文様を作りだしているだけである。

(完成した文様とその時期)

次に完成した文様を見る立場で、二枚橋(2)遺跡の土器の主要な文様を概観し、所属年代を考えてみたい。

(1)縦・横の区画線が目立つ文様である(図99～101.103)。区画文1・2が使用されているものが多い。時期は大洞C2式である。

(2)磨消縄文で構成された雲形文などの文様である(図82～85.87.90.92.104.106)。磨消部をもつ区画文や配置文が使用されている。このうち図87は、(4)の連繫入組文とよく似た文様構成をしており、雲形文から連繫入組文に移行する過程を示す資料と思われる。類例は観音林遺跡や青森県宇鉄遺跡でも見られる。図88は、磨り消しされていないが、(2)と文様構成が同じである。図102も文様が崩れ、磨り消しされていないが、文様構成の一部が(2)の文様と似ている。以上の文様の時期は大洞C2式である。

(3)文様帯の縄文地に沈線による「横C文」を並べた文様である(図89.91)。時期は大洞C2式である。

(4)いわゆる連繫入組文である(図1～33)。縄文地あるいは無文地の文様帯に太めの沈線で、「横S文」を基調とした配置文を中心に、「工の字形」文や「一」形文などを上下に重層的に配置したもので、横S文の上下は工字文的に見えるのが特色である。文様構成が重層的になるため、文様帯の幅が広いのが特色で、壺に多く見られる文様となっている。北海道七飯町聖山遺跡の聖山式の文様と共通する。時期は、大洞C2式より新しく、大洞A式より古いと思われるので、大洞C2-A式(仮称)としておく。

(5)「横S文」が横に並ぶものである(図34.35.36.74)。「横S文」の両端は入り組むものが多いが、入り組まないものも少数ある(図74)。(4)の連繫入組文と違っている点は、横S文の単位の数が増えていること、工の字形文や「一」形文などは入り組み合う横S文の隙間に充填されるだけで、上下に重層的に配置されないこと、そのため文様帯の幅が狭くなっていることなどである。(4)と(6)の中間的な文様といえよう。時期は大洞C2-A式から大洞A式と推定する。

(6)入り組み合う横S文の両端が接続して波状文となったものである(図37.38)。(5)から変化したものである。時期は大洞A式～大洞A'式と思われる。

(7)いわゆる工字文のうち重層せず、隆線部が単純に横に連なっていくものである(図39～51.97.111)。点対称的な2個の三角文あるいは「一」形文を横にならべて作られたものが多い。時期は大洞C2-A式から大洞A式と想定される。

(8)いわゆる工字文の仲間であるが、隆線によるものと沈線によるものがある(図65.68～70.94.96)。(7)に似た構図であるが、工字文の中に横線を入れており、(7)よりも(9)の工字文に似た印象をうける。時

期は、図94.96が大洞C2-A式から大洞A式、図70が大洞A式、図65が大洞A式から大洞A'式、図68.69が大洞A'式と推定される。

(9)いわゆる工字文のうち重層的に見えるものを集めた(図61～64.66.67)。のびやかな感じの工字文が多い。時期は、図61～64.66が大洞A式から大洞A'式、図67が大洞C2-A式と推定される。

(10)いわゆる綾杉文に似たものを集めた(図52～60.78～81)。時期は、図52～60が大洞A式から大洞A'式、図78～81が大洞A式であろう。

(11)短い「横S文」や「横し文」、「横C文」などが三叉文・「エ」の字形文・ㄱ形文などに入り混じって文様を構成しているもので、複雑な印象をうけるもの(図71.72.86.93)、単純なもの(図75.76.97)、構成がはっきりしないもの(図108～110)、工字文的印象をうけるもの(図95)がある。時期は大洞C2式～大洞C2-A式のものが多いと思われるが、刺突文を伴う注口土器(図110)は弥生前期の砂沢式である。

(12)楕円文を横に連ねたもの(図105)、渦巻文を並べたもの(図77)、互い違いに並べた三角形の中に一對の横し文を配した文様(図73)などを一括した。時期は大洞C2式～大洞C2-A式と想定される。

(まとめ)

今回とりあげた二枚橋(2)遺跡の土器の文様のなかで目立つものは、いわゆる連繋入組文で、北海道渡島半島の聖山遺跡、津軽半島の亀ヶ岡遺跡、宇鉄遺跡、観音林遺跡などに数多く見られ、津軽海峡を挟んで亀ヶ岡文化圏のなかに地域的な小さな土器文化圏を構成している。この文化圏は、内反りで柄頭に入組三叉文をもつ石刀の分布圏ともほぼ一致する。今後は、さらに北海道との関連を調べて見たいと思う。

(藤沼・小向)

3. 縄文晩期の土偶

(はじめに)

二枚橋(2)遺跡では、縄文時代晩期に伴う数多くの祭祀遺物が出土しており、土偶も小さな破片も含めると157個体に達する。このうち展示会などに貸し出し中のものを除いた150点の土偶を実測することができた。すでに大畑町教育委員会から発掘調査報告書が刊行されているが、図化の観点が異なっている点もあるので、あえて再実測したものを掲載させていただくことにした。ただし、図面をとることのできなかった7点(図18.48.65.66.87.88.114)は、報告書の掲載図を利用した。

(土偶の分類)

実測図として掲載した土偶の残存部位・法量・形態・文様・作り方(中空・中実など)・赤彩の有無・アスファルトの付着の有無などについては観察表に述べてある。

分類は次のようにした。

I 類—いわゆる遮光器土偶に属するもの(図11.12)。

II 類—頭部に向かい合う一對の角状の突起をもつ土偶とそれに近い形態のものを集め、次のように3種類に細分した。

II a 類—頭部に向かい合う一對の角状の突起をもつ土偶で、中空のもの(図1.5.18など)。

II b 類—中実で板状の胴部をもつ土偶。II c 類と比べると文様が少ない(図32)。

II c 類—中実で板状の胴部をもつ土偶で、腕から胴部全体にかけて正中線や背筋の線を中心に文様が描かれる(図52など)

III 類—いわゆる屈折土偶で、すべて中実である。足の屈曲の強さで2種類に細分される。

III a 類—脚を強く曲げ、手を膝に置いたもの。正面からみるとあたかも胡座をかいているようにみえる。1個体あるのみで、他の遺跡でもほとんど知られていない形態である(図65)。

Ⅲb類－脚あるいは膝をかるく屈めた姿態の土偶である。腕は普通の土偶のように両脇にある（図61）。

Ⅳ類－中実でX字状の形となるもので、いわゆるX字状土偶である（図73など）。

Ⅴ類－頭部にアーチ状あるいは鰭状の大きな髪形をもつもので、いわゆる結髪土偶である。作りで2種類に細分される。

Ⅴa類－結髪土偶で中空のものである。大型遮光器土偶の流れを引くと考えられる（図90など）。

Ⅴb類－結髪土偶で中実のものである（図101など）。

Ⅵ類－体部が刺突文で飾られるもので、いわゆる刺突文土偶である。頭部は帽子を被ったようなものが多い。作りで2種類に細分される。

Ⅵa類－刺突文土偶で中空のものである。大型遮光器土偶の流れを引くものである（図108など）。

Ⅵb類－刺突文土偶で中実のもの（図114など）。

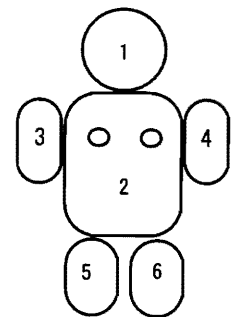
Ⅶ類－脚部などが省略された土偶で、小型で無文のものである（図135など）。

（土偶の残存部位）

残存する土偶の部位については、観察表に載せるにとどめたが、その数字は、1（頭部）・2（胴部）・3（右腕）・4（左腕）・5（右脚）・6（左脚）となる（挿図参照）。

（土偶の年代）

二枚橋(2)遺跡の土偶は、内容的にも量的にも優れた資料であるが、共伴した土器型式が明らかでないものが多い。しかし、その多くは晩期後半のもので、大洞C2式から大洞A式にかけての土偶が中心であると思われる。



土偶の部位

Ⅰ類の大型遮光器土偶（図12）は、有名な亀ヶ岡遺跡出土の遮光器土偶（東京国立博物館所蔵）と似た形態を持つ脚部破片であり、おそらく宝冠状の頭頂部突起をもつものであろう。しかし、文様を比較すると、列点文が失われ、雲形文も入組文化しており、亀ヶ岡遺跡の土偶（大洞C1式）よりは新しい要素をもつ。胴部上半の破片である図11も腕が極端に細くなり、雲形文も退化している。したがって図11.12は、大洞C1式の土偶より新しいが、大洞C2式に特有な角状突起をもつ土偶（図18）よりは古い形態の土偶と見ることができる。

Ⅱ類の角状突起をもつ土偶の仲間、Ⅲ類の屈折土偶、Ⅳ類のX字形土偶は大洞C2式から大洞A式にかけての時期のものである。点数は、角状突起をもつ土偶の仲間が69点、屈折土偶が12点、X字形土偶が12点、合計93点あり、この時期の土偶が二枚橋(2)遺跡出土土偶の中心となっていることを示している。角状突起をもつ土偶のうち図1.18.20.21は、遮光器土偶のように大きな目を持ち、極めて特徴的である。遮光器土偶の目の表現の名残を強く留めたものといえよう。その作り方は、目の部分に粘土を貼り付け、周囲を沈線で楕円形に描き、その中央に横線を引いて、膨らんだ大きな目を表現するもので、横線の上下には列点文を加えている。膨らんだ大きな目は、二枚橋(2)遺跡で出土した土製仮面にもみられ、両者が同一の時期のものであることを示している。角状突起をもつ土偶でこれほど膨らんだ大きな目をもつ土偶は、他の遺跡ではほとんど見られないので、現在の所、二枚橋(2)遺跡の大きな特徴と言ってよい。

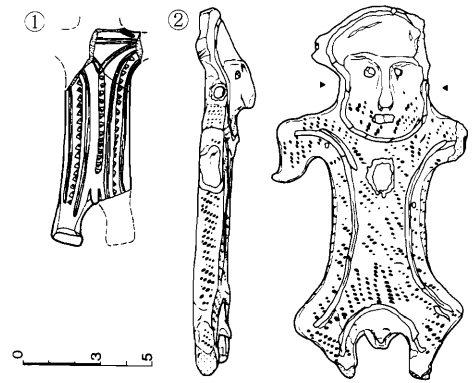
Ⅲ類の屈折土偶は腰や膝を軽く屈めたものが多い。腰部にはパンツ状の区画文があり、細かい沈線が施されているのが特徴となっている。こうしたパンツ状の区画文をもつ屈折土偶は、東北地方に広く分布する。

Ⅳ類のX字形土偶は、手足を大きく広げたもので、頭部と四肢の先端が同じ形に抽象的に表現されているものが多いのが特色である。扁平に作られ、乳房は小さく表現されるが、ないものもある。五所川原市観音林遺跡では、5個のX字形土偶がまとまって出土している。X字形土偶はもっと古くからあるが、二枚橋(2)遺跡や観音林遺跡から出土している形態のものは、大洞C2式から大洞A式にかけての代表的な土偶の一つといえよう。

V類の結髪土偶とVI類の刺突文土偶は、大洞A式から大洞A'式にかけてのものである。腰から脚部にかけての形態をみると、腰が大きく張り、大股になるもの（図92～94.98）と腰が張らず両足の間隔も狭いもの（図111.113.122.124～126ほか）とがある。前者は腰の部分に多重の同心円文が描かれるが、後者は単純な刺突文が多い。図131は刺突文ではなく、縄文であるが、形態は後者の仲間である。前者の方が、後者より古い形態を留めており、時期もより古いのであろう。後者は典型的な結髪土偶や刺突文土偶の特徴である。また、腕が極端に小さく表現されるのもこの仲間の大きな特徴である。

（その他、特徴ある土偶）

図132は股間に男性器のような突起と肛門と思われる刺突が見られる。扁平な作りで、乳房の表現もない。文様はX字形土偶に見られるものと共通するので、時期は大洞C2式から大洞A式にかけてのものであろう。1例のみである。股間にこうした突起をもつものは、東北地方の晩期の遺跡ではあまり例がないと思われるが、よく似たものが千歳市ウサクマイA遺跡で表面採集されている。このウサクマイA遺跡の土偶は、「男性土偶」とされ、タンネットウL式期のものと考えられている。二枚橋(2)遺跡のものとはほぼ同じ時期である。この二つの土偶が男性土偶であるかどうかを別にしても、こうしたものが比較的近い時期に北海道と下北半島にあらわれることは注意してよいであろう。



①二枚橋(2)遺跡 ②ウサクマイA遺跡

（おわりに）

二枚橋(2)遺跡の発掘資料は、質量ともにすぐれた祭祀遺物を多数含むが、共伴した土器型式が不明であるものが多かったため、きめ細かな土偶の変遷を辿ることはできなかった。しかし、晩期後半のすべての時期の土偶が揃っており、また大洞C2式を代表する角状突起を頭にもつ土偶が膨らんだ大きな目をしているなど、地域的な個性も見られ、研究資料として極めて重要であることが改めて認識された。

今回は、実測図の公開を目的としたので、土偶の用途などについて触れることができなかったが、さらに各地の資料を収集検討し、二枚橋(2)遺跡の土偶のもつ意義について改めて論文を書きたいと思う。

（佐布）

4. 縄文後・晩期の石刀

二枚橋(2)遺跡では、報告書によると、石剣・石刀・石棒類は268点出土したという。この中には加工されていない自然礫が含まれており、これらは石剣・石刀・石棒類から除外した。また再整理の過程の中で接合したものもある。したがって現在、確認している石剣・石刀・石棒類の総点数（個体数）は199点で、石刀とよばれるものが多い。これらは、主に遺跡の北斜面や南斜面に発達した遺物包含層から縄文時代晩期の土器とともに出土したものであるが、共伴した土器型式が明確にされているものは少ない。

今回、取り上げたものは石刀を中心としたものであるが、いわゆる石剣や石棒とよばれるものも含まれている。いずれも片手でもち、自由に振り回すことができる大きさである。破片が多いが、全体の形が分かる資料も少数ある。実測図を掲載したものは116点あるが、形が分かるもの・柄頭の部分や切っ先の部分が残存しているもの・両端とも欠けているが文様が見られるものに限定している。両端が欠損し、文様もない破片は、特徴をとらえることが難しいので、数点を除いて掲載を省略した。なお、全体の形の分かるもの・柄部が残存している破片・文様のある破片・形態に特徴のあるものなど65点については、研究ノートの形で報告したことがある（竹原仁志・市川健夫2002）。

(石刀の形態分類)

分類は、二枚橋(2)遺跡出土の全形のうかがえる資料を中心にして、北海道や東北地方で出土している形の分かる石刀を参考にしながら、全体の形・柄部の形成の仕方・刀身部の断面などを考慮して分類した。断面が円形に近いものはいわゆる石棒として一括したが、この中にはいわゆる石剣も含まれている。

I類－刀身は内反りで、刃部と背部が平行に反っているものである。刀身の断面は楔形のものが多い。柄頭は方形を基調とし、入組三叉文やS字文などの文様が彫刻され、赤彩されるものが多い。また、背部などに玉抱き三叉文風の文様や鋸歯文、直線的な溝が彫刻されているものがあり、玉抱き三叉文風の文様の場合は赤彩の痕跡が見られるものが多い。全体に形の整った丁寧な作りのものが多いといえよう。

I類は柄部の形成の仕方によって二つに分かれる。明瞭な関(まち)によって刃部と柄部が区別されるものをI A類、刃部と柄部の区別はあまり明瞭でないが、柄部のほうが厚さ・丸みを持つこと(断面差と表現する)で区別されるものをI B類とする。I B類の柄部の形成は、正面図(背部を上、刃部を下にした図)では分かりにくいので、刀身部と柄部の断面図や刃部側から見た実測図で表現するように努めた。

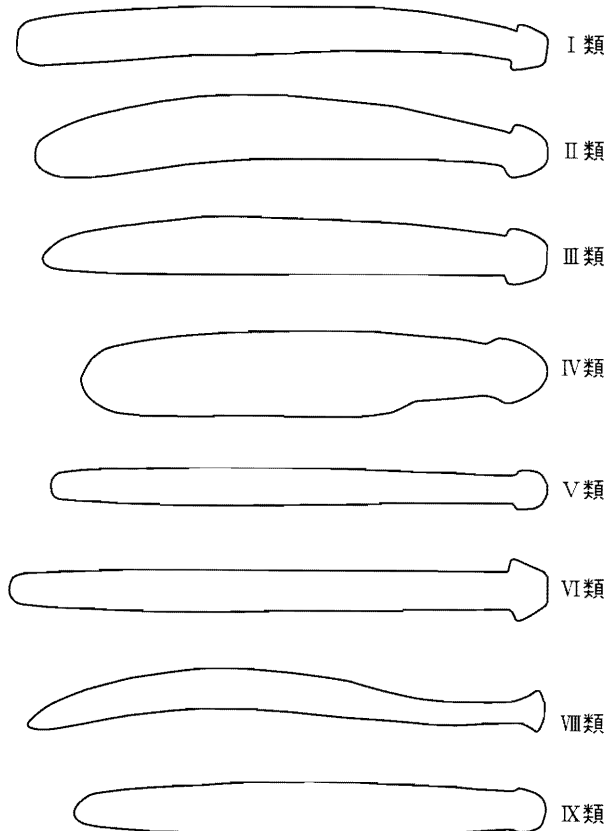
II類－刀身は内反りで、I類と比較すると反りの度合いが強く、刀身の幅が広くなる傾向があるのが特色である。刀身の断面は楔形あるいは扁平な楕円形のものが多い。柄頭は台形を基調とし、文様を持つものはない。柄部の形成は、刃部と柄部の断面差によるものが多い。背部に溝があるもの、刃部に刻みをもつものがある。

III類－刀身の内反りの度合いが小さく、刃部が真っ直ぐに近いものであるが、背部には湾曲が見られる。刀身の断面は楔形もあるが、扁平な楕円形のものが多い。柄頭は台形を基調とし、平行線や綾杉文で飾られる。刃部に刻み目をもつものもある。刃部と柄部の区別はあまり明瞭ではなく、刃部と柄部の断面差によるものが多い。

IV類－刀身の内反りの度合いが小さく、刃部が真っ直ぐに近いものであるが、背部には湾曲が見られる。刀身の断面は卵形に近い楔形である。柄頭は円形に近く、文様はない。刃部と柄部の区別は明瞭な刃関による。全体に厚みがあり、ゴロツとした感じである。1点のみである。

V類－刀身が真っ直ぐなもので、柄部より刀身部の方がやや広めであるが、背部と刃部はほぼ平行するといつてよい。刀身の断面は扁平な楕円形あるいはレンズ形となる。柄頭は方形あるいは台形を基調とするが、角の部分が丸みを帯びたものが多い。文様は平行線あるいは工字文的なものがある。

VI類－刀身の内反りの度合いが小さく、背部と刃部がほぼ平行するものである。刀身の断面は扁平な楕円形あるいは楔形となる。刃部と柄部の区別は刃関によるものと刀身部と柄部の断面差によるものがある。柄頭は方形あるいは台形を基調とするが、角の部分が丸みを帯びたものが多い。文様は無文が多いが、細い平行線状の文様を持つこともある。



石刀の分類(類型)

Ⅶ類－全体の形が分からないもので、柄部や柄頭に特徴のあるものを集めた。

ⅦA類－柄部と刀身部の境で折れて、刀身部が失われ、柄部のみ残った破片である。破損面は研磨されている。柄部と刀身部の境付近に沈線が巡っている。柄部は刀身部と比べ一段細くなっており、柄部の形成は両関（背関と刃関）によると考えてよいと思われる。柄頭はやや大振りの台形で、上下に膨らみをもち、入組三叉文がぐるりと巡る。製作は丁寧で、Ⅰ類の仲間に近いものであろう。1例のみ。

ⅦB類－柄部の破片で、一部に剥離が見られる。柄頭は丸みを帯びた三角状の形で、上下から交互に三角形に切り込みをいれてジグザク状の文様を構成している。1例のみ。

ⅦC類－柄頭に相当する部分が細く棒状になっており、アスファルトと思われる黒い物質がついている。この部分を別に作った柄頭にはめ込み、アスファルトで固定したものであろう。1例のみ。

ⅦD類－柄部が端に向かって次第に細くなり、柄頭に相当する部分に貫通孔が1個ある。1例のみ。

Ⅷ類－刀身から柄部にかけての破片で、他の遺跡での類例などから全体の形は内反りになるものと見られる。柄頭の部分が撥形状になり、文様はない。刀身の断面は楔形である。2例ある。背部から柄部にかけて溝が彫り込まれている。

Ⅸ類－刀身が真っ直ぐなもので、柄部より刀身部の方がやや広めになるが、背部と刃部はほぼ平行するといつてよい。刀身の断面は厚みのある楕円形あるいはレンズ形となり、背部と刃部との区別は全体の形からも断面からもつけることができない。ここではこうしたものを石棒として一括する。柄頭は方形あるいは台形を基調とし、工字文的な文様が多いようである。

（修理の痕跡のある石刀）

修理の痕跡のある石刀が2点ある。図14は柄頭の部分が上下に割れた破片で2個の貫通孔がある。破損面は斜めになっており、重なりあう部分に2個の小さな孔をあけ、孔に紐を通して破片どうしを緊縛して修理したものと思われる。図4は刀身に沿って剥離した柄部の破片で、刀身部に近い部分に1個の貫通孔があり、破損面にアスファルトと思われる黒い付着物がついている。おそらく破損面にアスファルトを塗って破片どうしを接合し、孔に紐を通して緊縛して修理したのであろう。

（年代）

二枚橋(2)遺跡の石刀は、報告書にあるように、遺物包含層から縄文時代晩期後半の土器とともに出土したものであるが、共伴した土器型式が明確にされているものは少ない。しかし、Ⅶ類を除けば、大洞C2式から大洞A式に伴うものが大部分であろう。そこで他の遺跡でのあり方などを参考にしながら、分類に則して所属年代を概観してみたい。

Ⅰ類に属する資料は、青森県今津遺跡で大洞C2式土器に共伴している。また北海道渡島半島の札苅遺跡でも大洞C2式とされる土坑墓から出土している。同じ渡島半島の聖山遺跡では聖山式土器（大洞C2式～大洞C2-A式と推定）とともに出土している。したがってⅠ類の年代は大洞C2式から大洞C2-A式にかけてのものである。

Ⅱ類に属する資料は、聖山遺跡で聖山式土器とともに出土しているので、二枚橋(2)遺跡のものも大洞C2式から大洞C2-A式にかけての土器に伴ったものであろう。ただし、弘前市十腰内遺跡などの例からよく似た形のものは後期まで遡るものがありそうである。

Ⅲ類に属する資料のうち柄頭に綾杉文をもつ石刀は、二枚橋(2)遺跡の大洞A式土器によく似た綾杉文があるので、大洞A式に伴うものであろう。柄頭に平行線が巡る石刀は時期を絞り込むよい資料がないので、大洞C2式から大洞A式までの幅で考えておきたい。

Ⅳ類に属する資料は、類例をさがしても数が少ないようである。明瞭な刃関で柄部が形成されているので、Ⅰ類とほぼ同じ時期（大洞C2式～大洞C2-A式）であろう。宇鉄遺跡の出土例は、形態だけでなく雰囲気までよく似ている。これには明瞭な刃関がないが、Ⅳ類の仲間と見てよい。

Ⅴ類に属する資料は、柄部にきちんとした工字文があるので、大洞A式に伴うものであろう。細い平

行沈線の文様をもつ石刀もほぼ同じ時期のものであろう。

Ⅵ類は、北上市九年橋遺跡など各地で出土している。形態はⅤ類に近いものがある。時期を限定できる資料を見つけていないので、大洞C2式から大洞A式までの幅で考えておきたい。

Ⅶ類のうちⅦA類は、柄部がきちんと作りだされていること、柄部に丁寧な入組三叉文があることからⅠ類とほぼ同じ時期（大洞C2式～大洞C2-A式）であろう。ⅦB類・ⅦD類は類例が少なく、時期を限定する資料がないので、大洞C2式～大洞A式の幅で考えておきたい。ⅦC類は刃関があること、別作りの柄頭を嵌め込むことが予想されることなどから、Ⅰ類とほぼ同じ時期（大洞C2式～大洞C2-A式）と考えられる。

Ⅷ類に属する資料は、秋田県鹿角市大湯遺跡で多数出土しており、後期前半の土器に伴うようである。また青森県上尾駸遺跡では後期初頭～十腰内Ⅱ式に伴っている。したがってⅧ類は後期前半に位置づけられる。

Ⅸ類－石棒として一括したものである。年代の考察は次に譲りたい。

（おわりに）

今回、考察することができなかった石刀の分布、石刀の柄頭や背部に見られる文様の分析、内反りの石刀の系譜などについても、さらに資料を集成し発表する予定でいる。

（藤沼・竹原・市川）

〔二枚橋(2)遺跡の基本文献〕

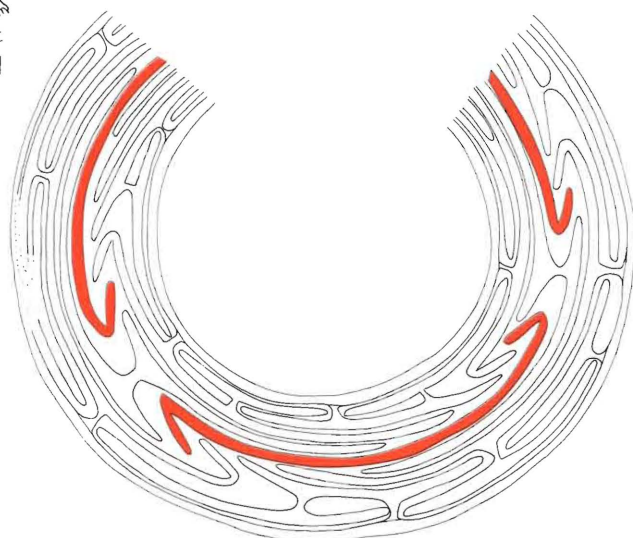
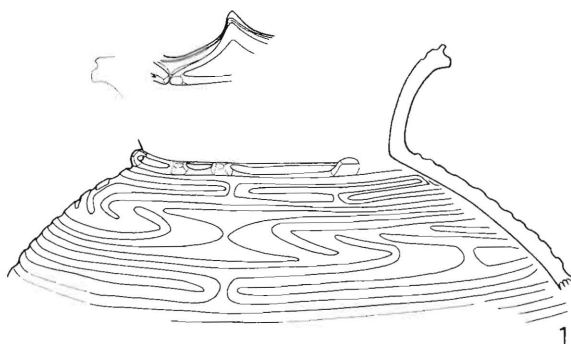
○橘善光・奈良正義編『二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』大畑町文化財報告書第12集、2001年

○藤沼邦彦・佐布環貴・萩坂華恵「青森県における縄文時代の土製仮面について」青森県史研究第6号、2002年

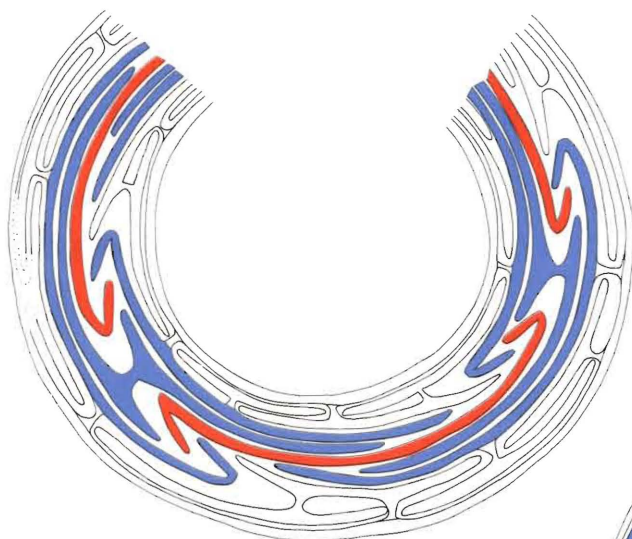
○橘善光「土偶はどこで解体された!!－二枚橋(2)遺跡」青森県史研究第6号、2002年

○竹原仁志・市川健夫「二枚橋(2)遺跡出土の石刀について」『海と考古学とロマン』、同刊行会事務局、2002年

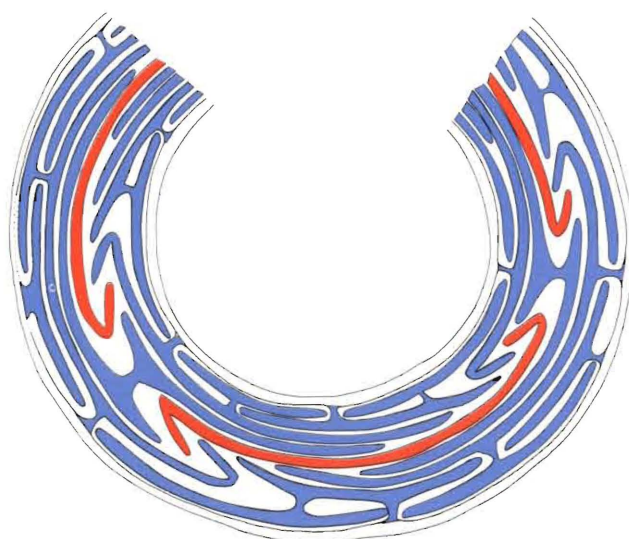
○橘善光「亀ヶ岡文化と祭祀の世界」『海と考古学とロマン』、同刊行会事務局、2002年



1 - I 配置文Ⅲ14を施す。

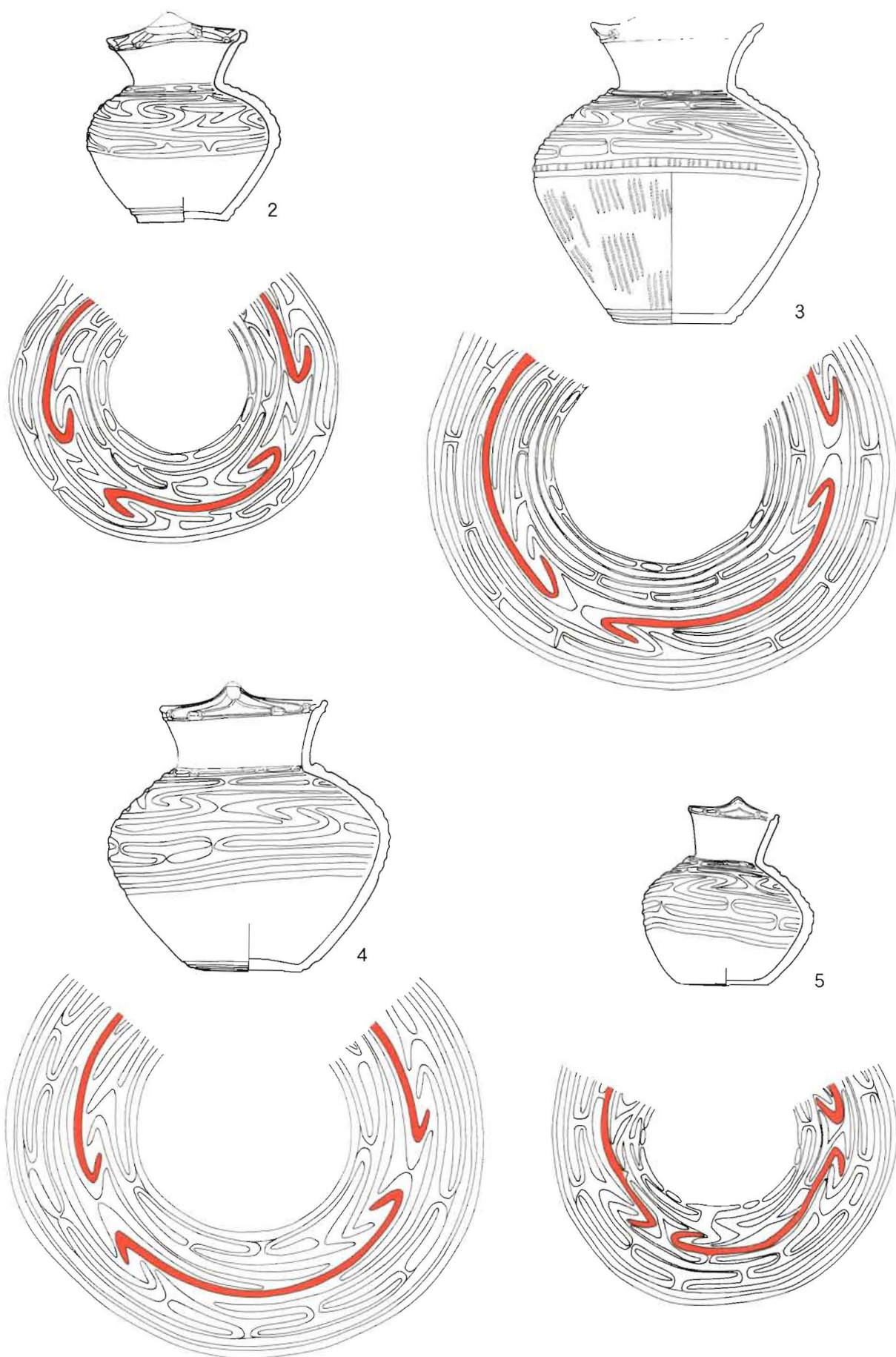


1 - II 横「し」文を配置文に入り組ませ
「工」の字形文を施す。



1 - III 残りの空間に工字文状の充填文
を点対称に施す。

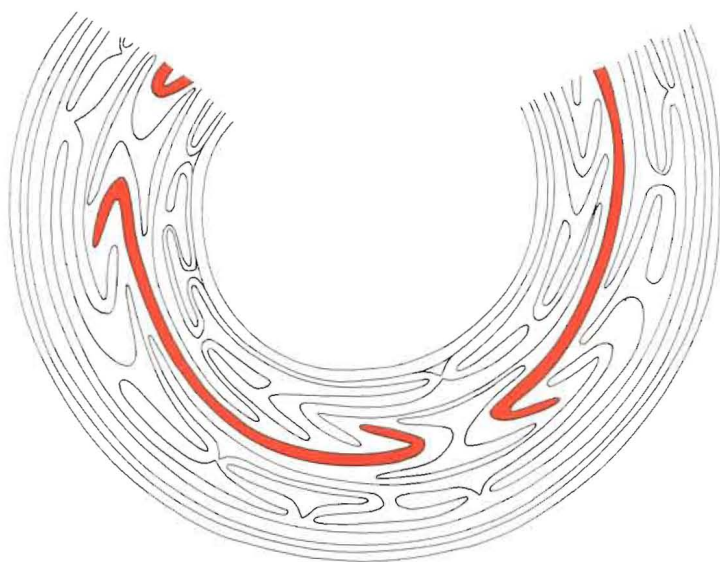
第1図 二枚橋(2)遺跡出土土器(図1)



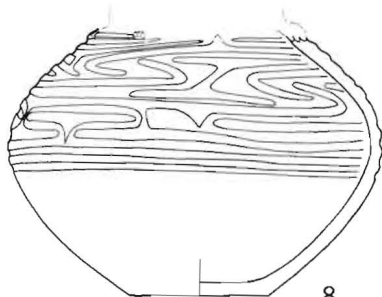
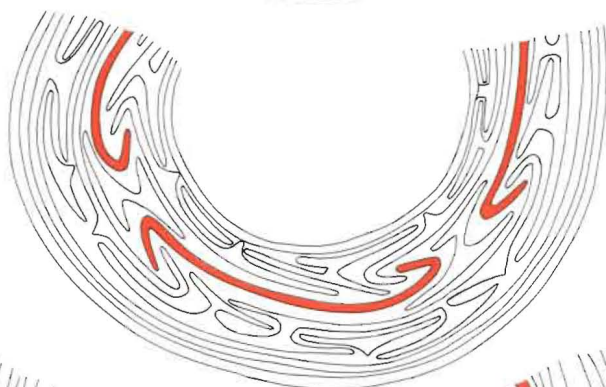
第2図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図2～5)



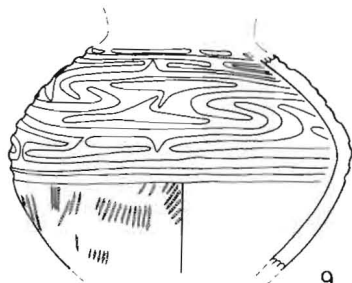
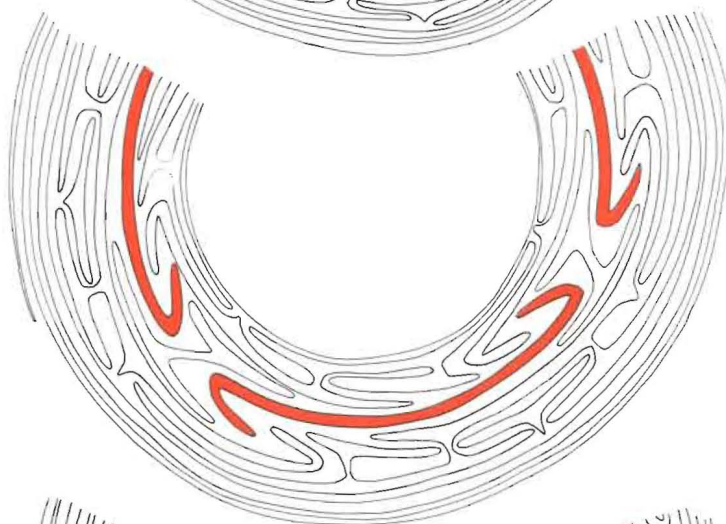
6



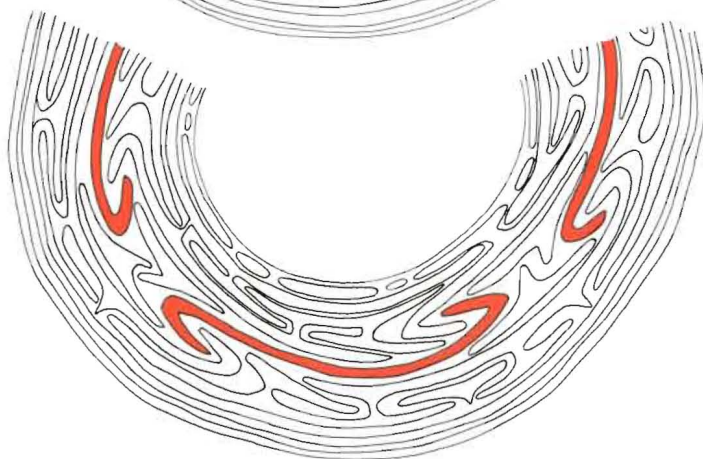
7



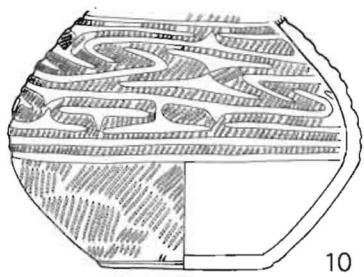
8



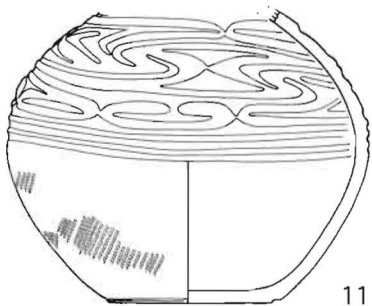
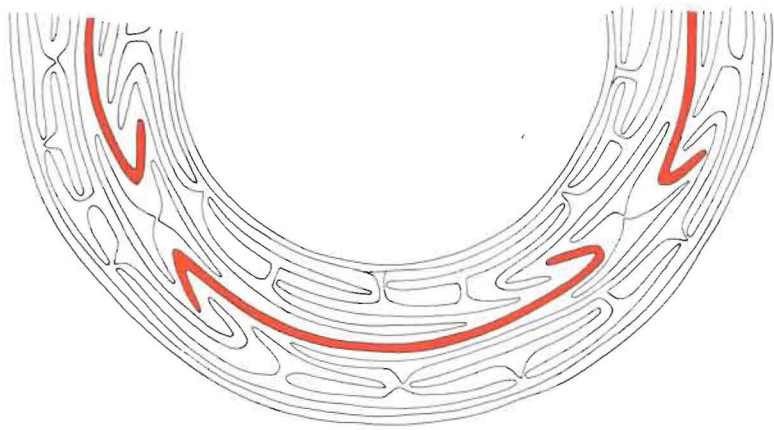
9



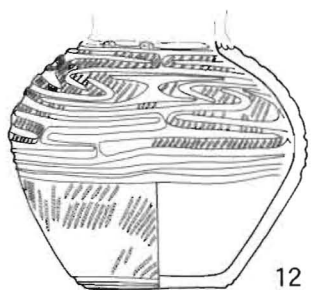
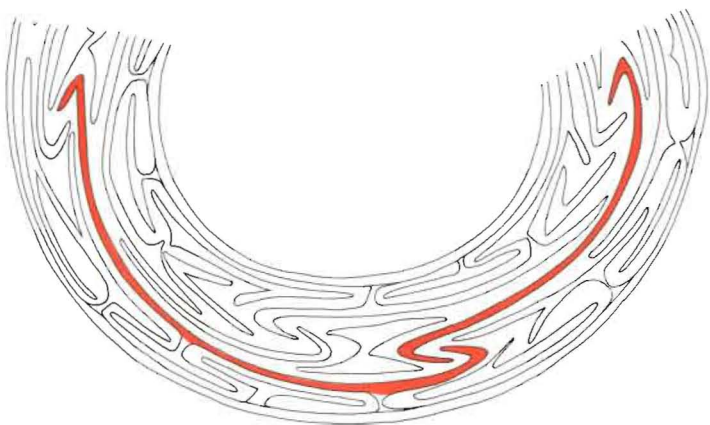
第3図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図6~9)



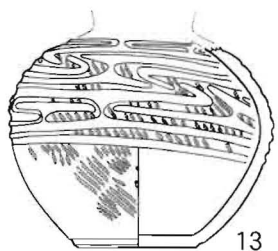
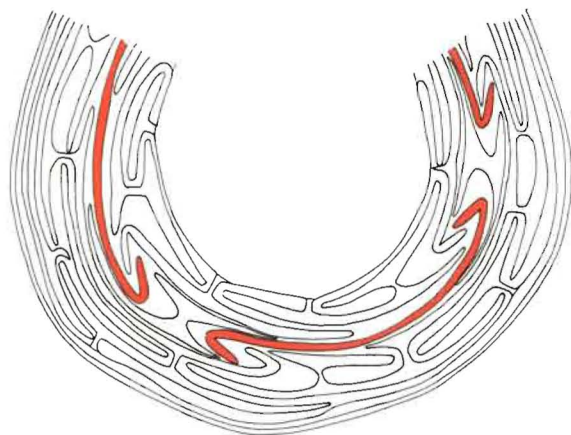
10



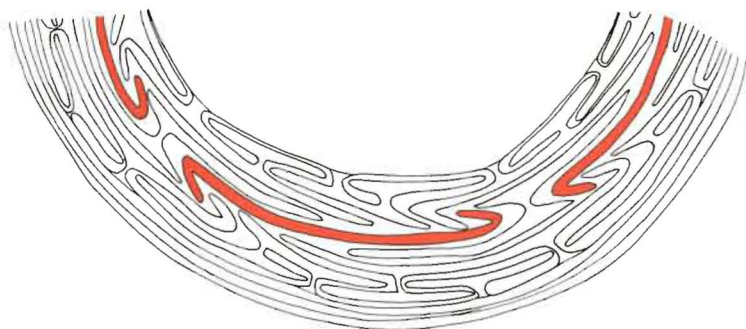
11



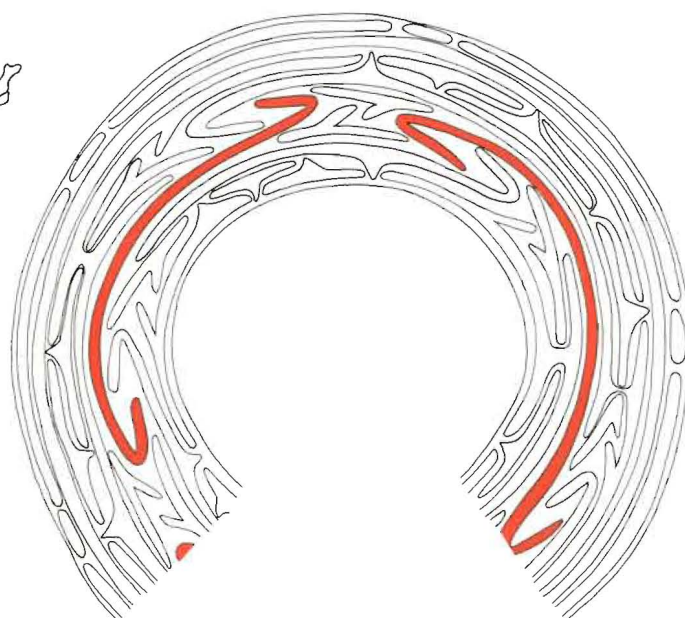
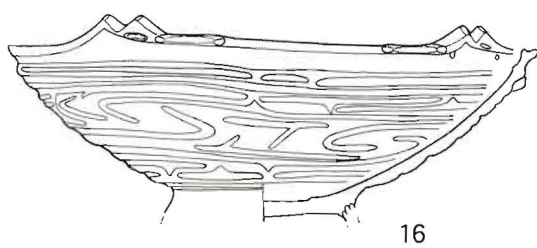
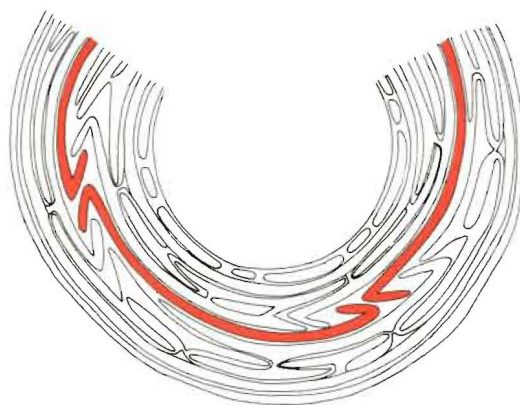
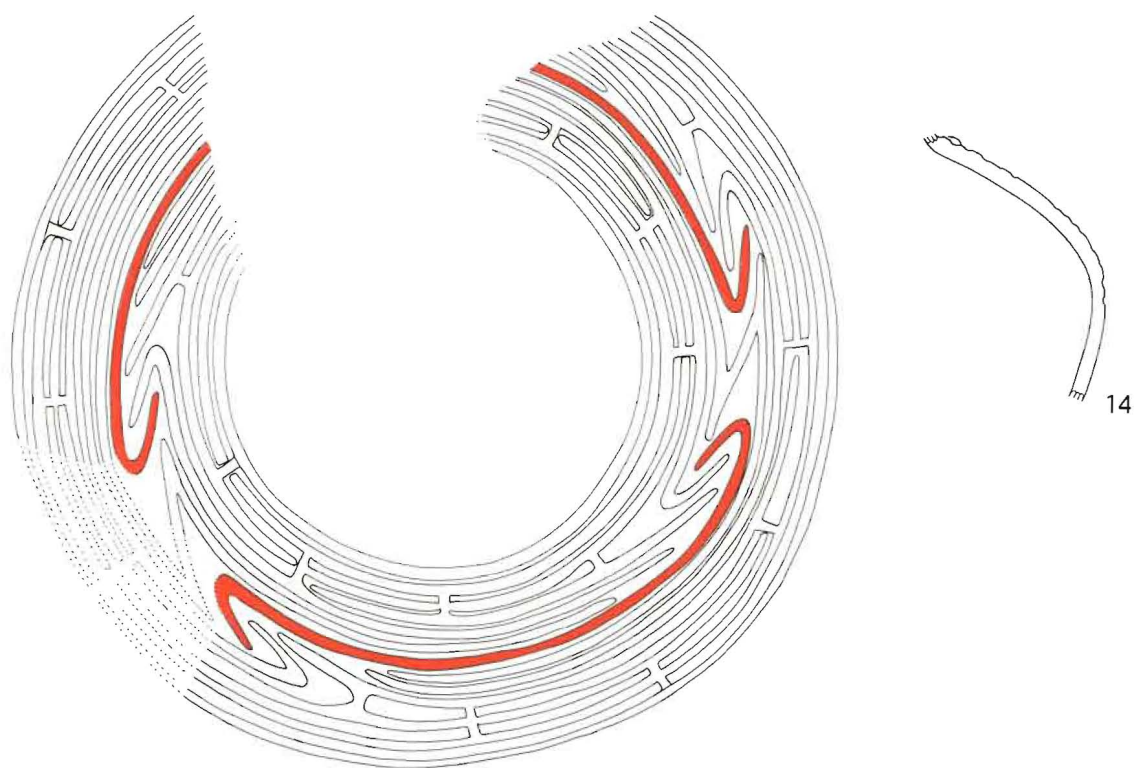
12



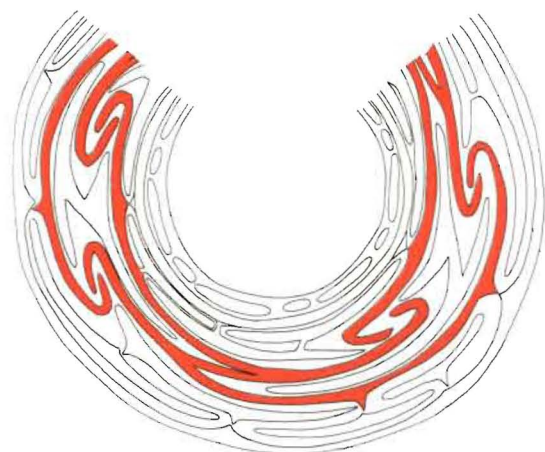
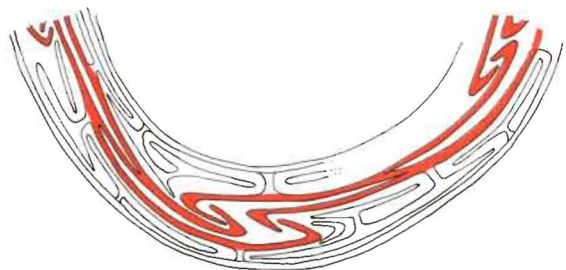
13



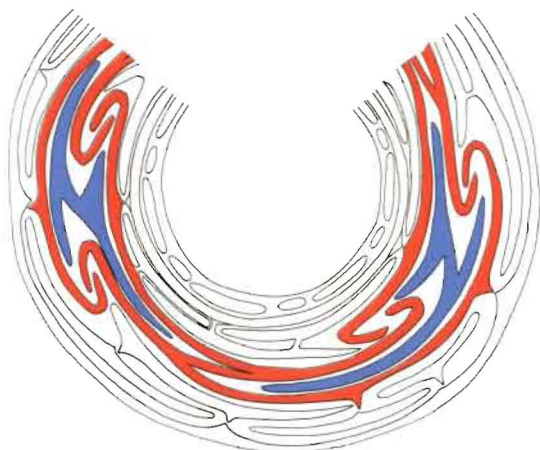
第4図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図10~13)



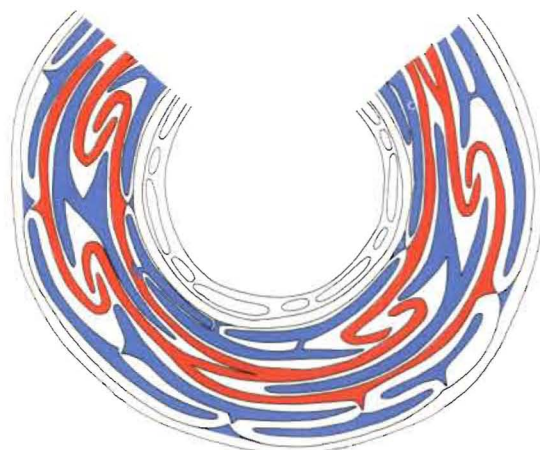
第5図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図14~16)



18-I 配置文Ⅲ15を施す。



18-II 「エ」の字形文を充填する。

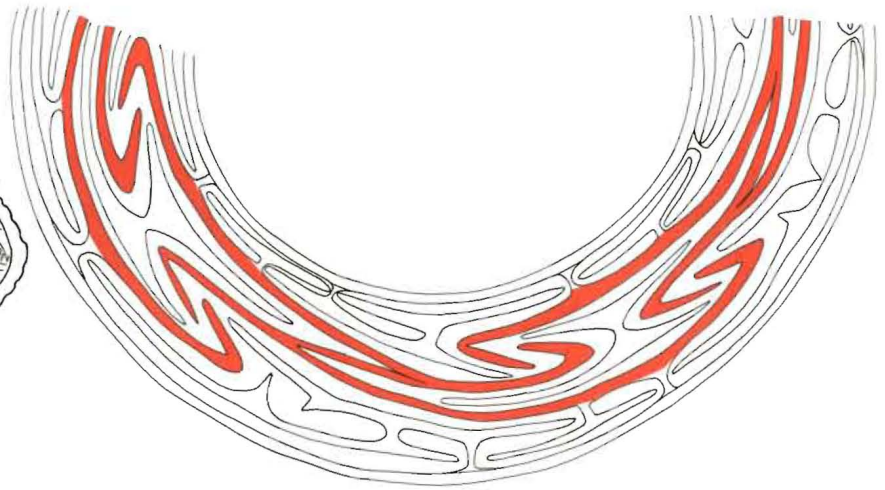


18-III 残りの空間に工字文状の充填文を点対称に施す。

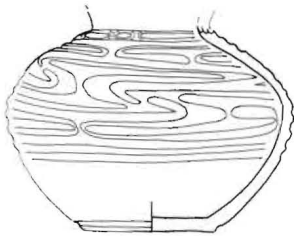
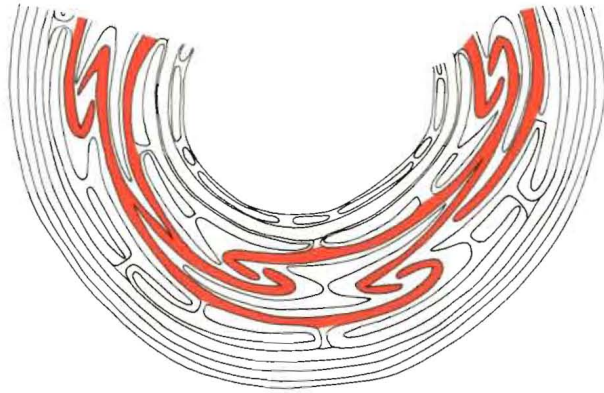
第6図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図17~18)



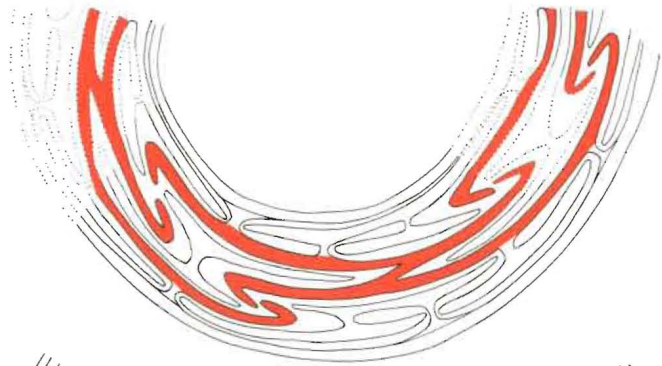
19



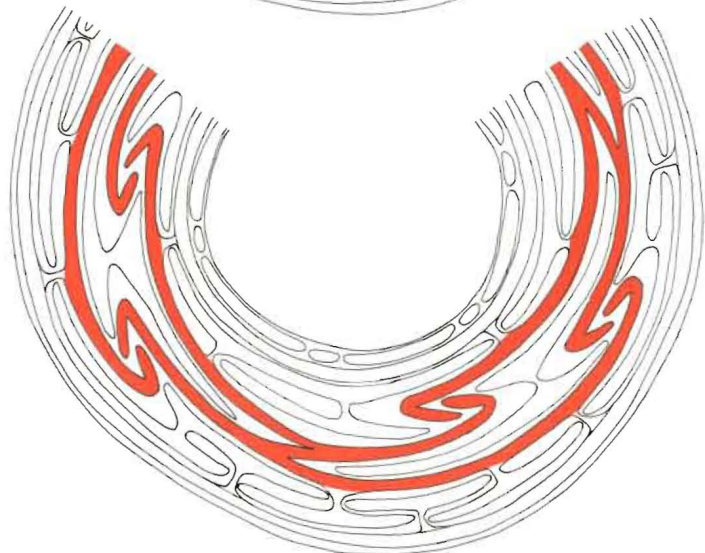
20



21



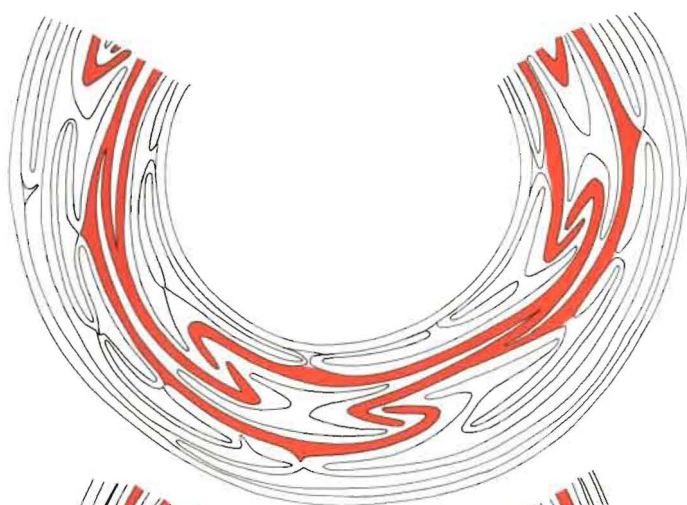
22



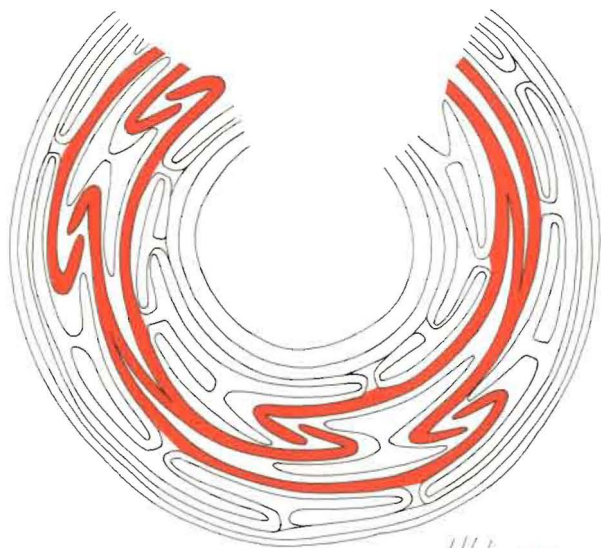
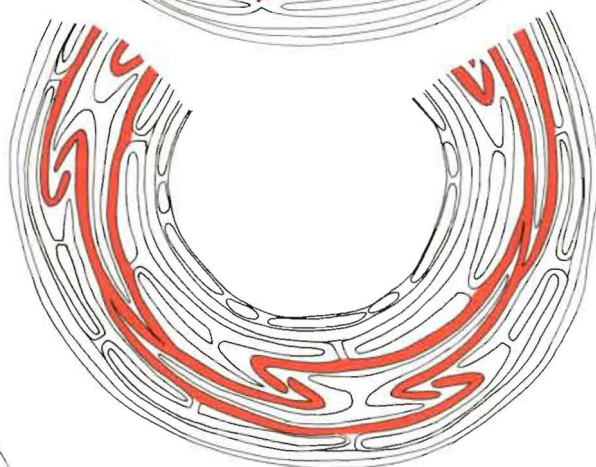
第7図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図19~22)



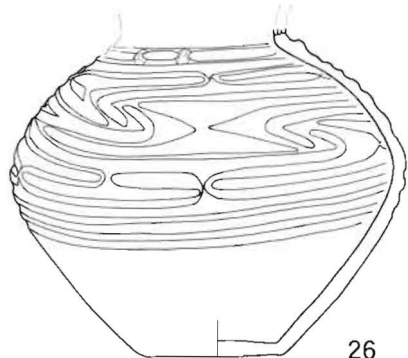
23



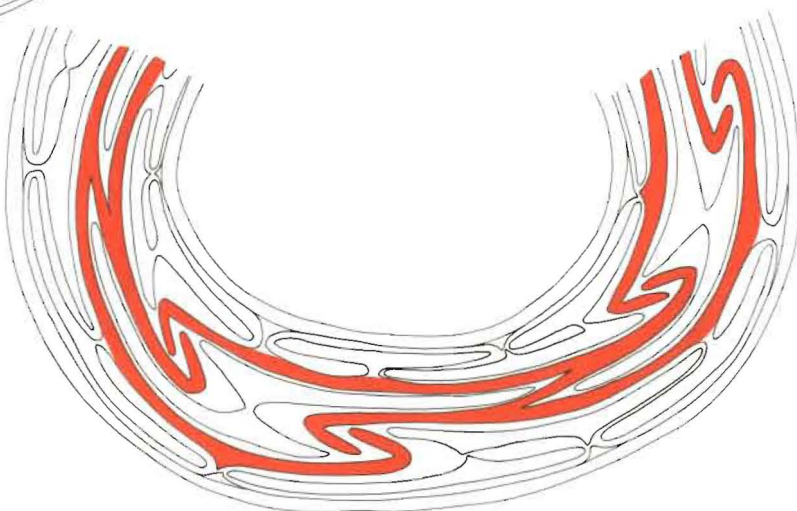
24



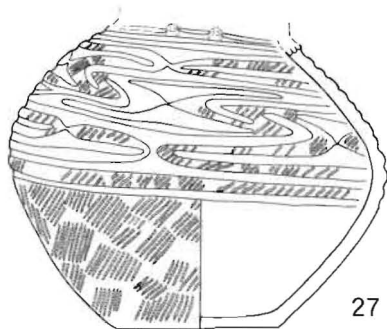
25



26



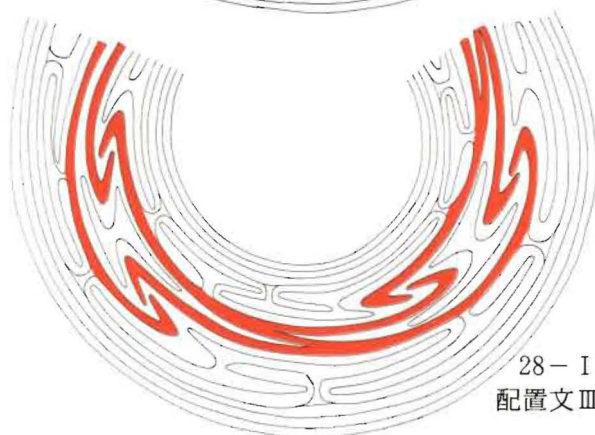
第8図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図23~26)



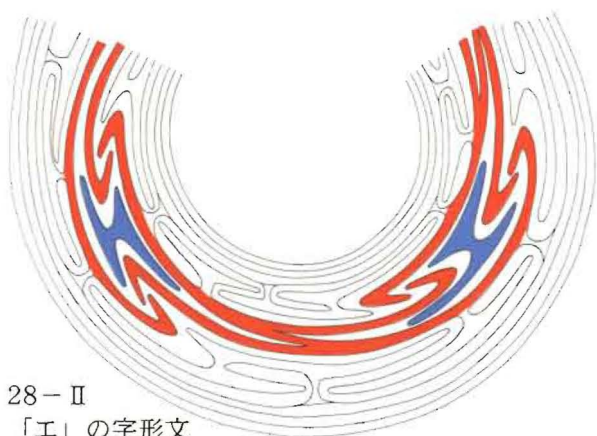
27



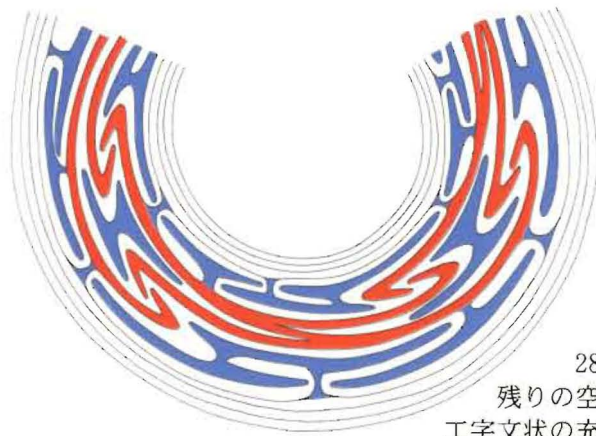
28



28-I
配置文Ⅲ16を施す。

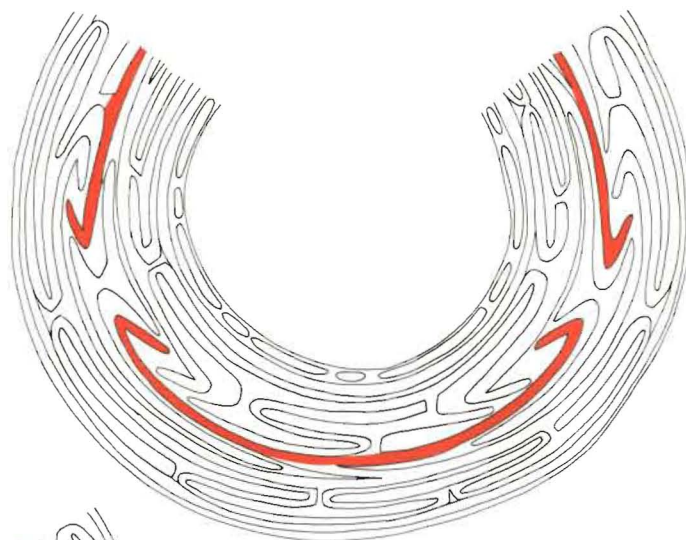
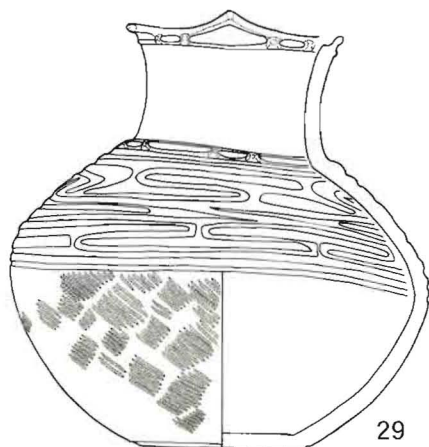


28-II
「工」の字形文
を施す。

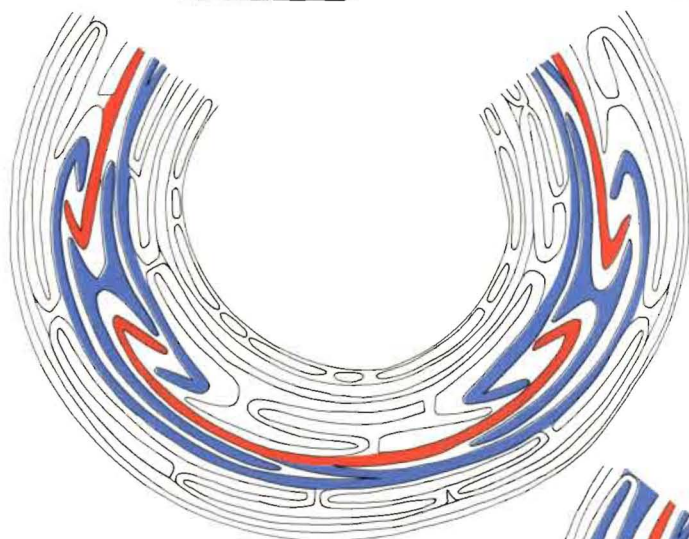


28-III
残りの空間に
工字文状の充填文
を点対称に施す。

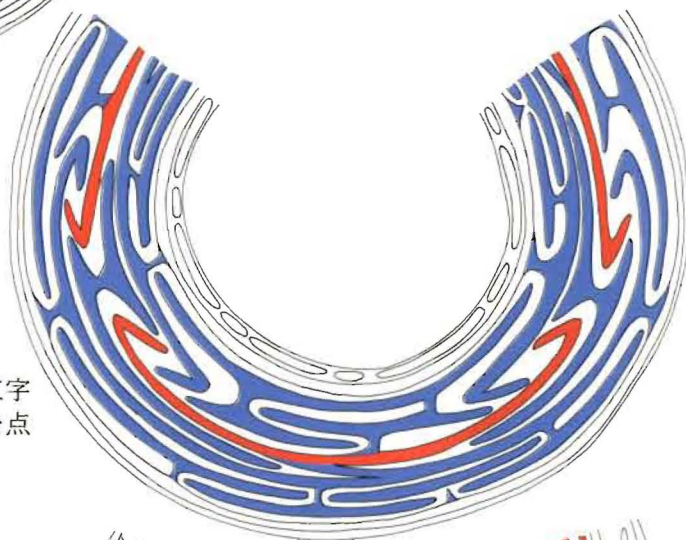
第9図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図27~28)



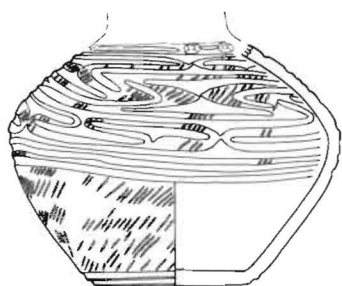
29-I 配置文Ⅲ 5を施す。



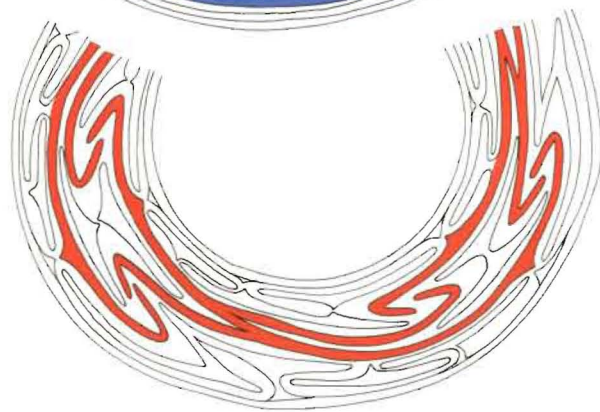
29-II C字文及び「エ」の字形文を充填する。



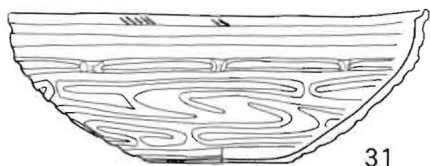
29-III 残りの空間に工字文状の充填文を点対称に施す。



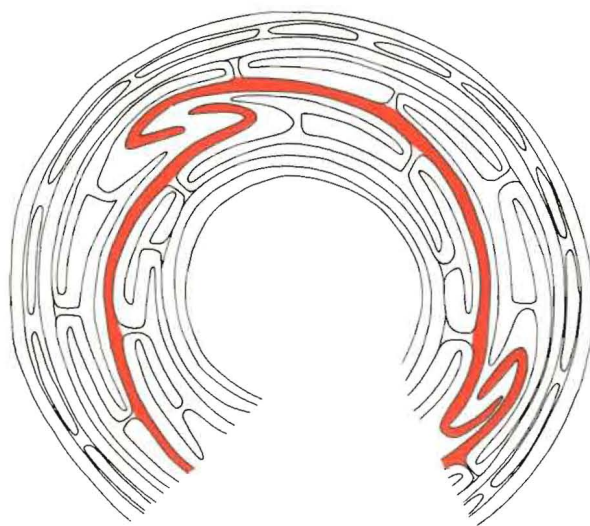
30



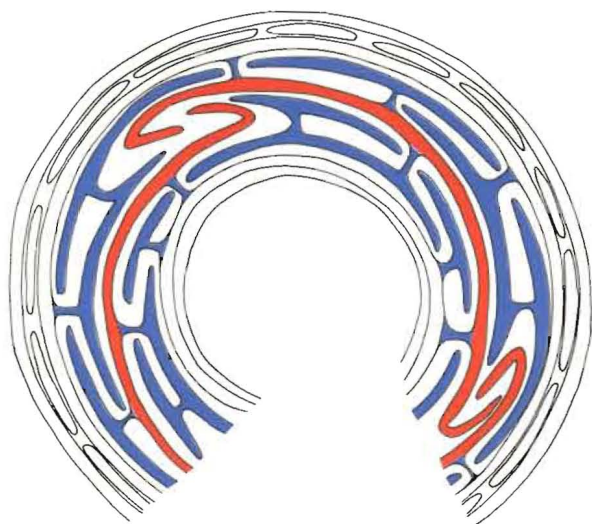
第10図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図29~30)



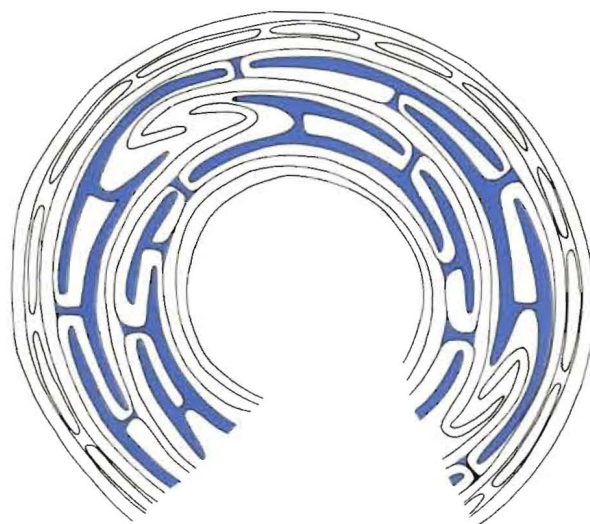
31



31-I 配置文Ⅲ14を施す。



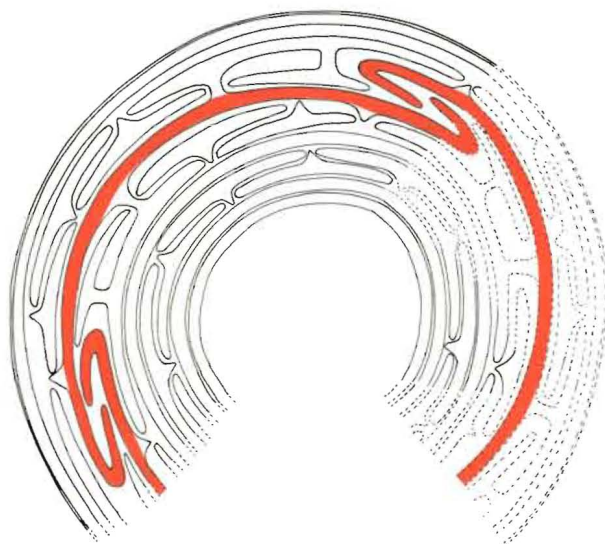
31-II 配置文の上下に工字文状の
充填文を点対称に施す。



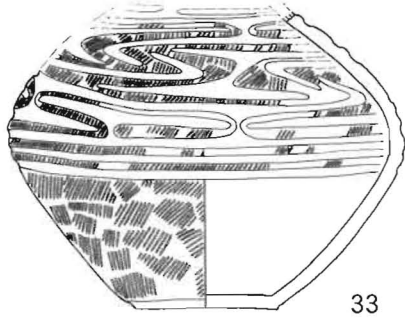
31-III 充填文の抜き出し。



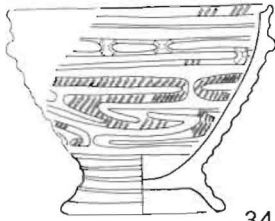
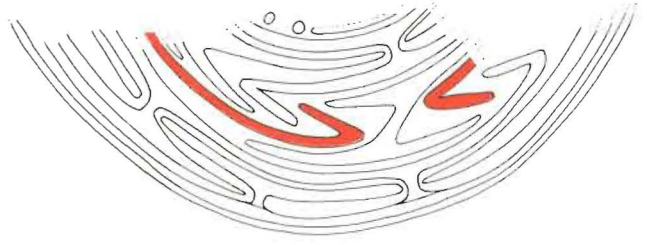
32



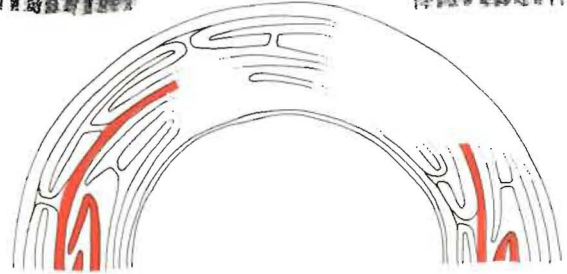
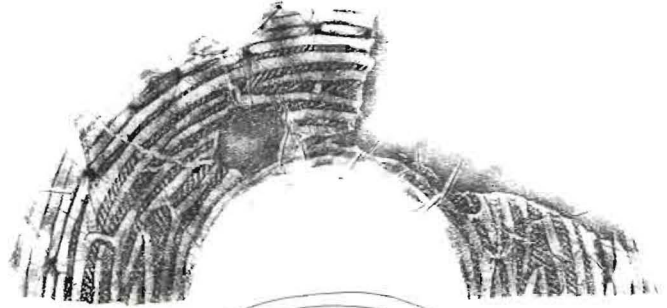
第11図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図31~32)



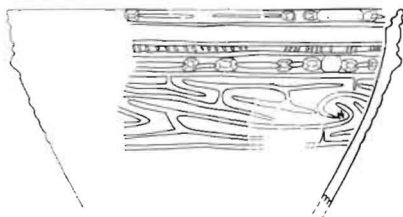
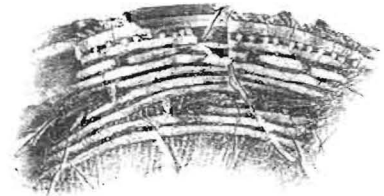
33



34



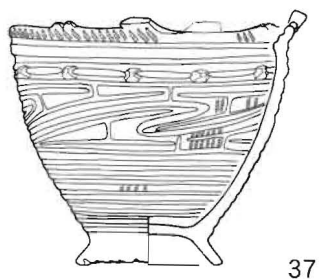
35



36



第12図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図33~36)



37



37-I 連結配置文4を施す。



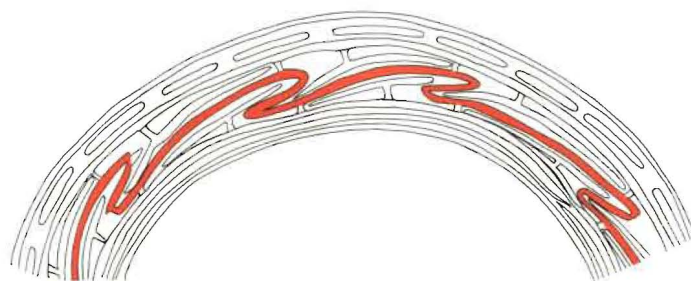
37-II 連結配置文の上下に工字文状の充填文を点対称に施す。



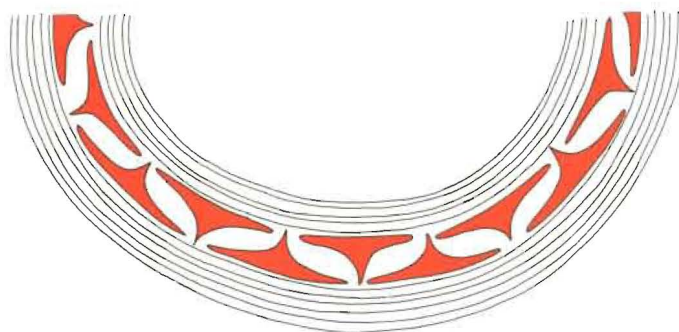
37-III 充填文の抜き出し。



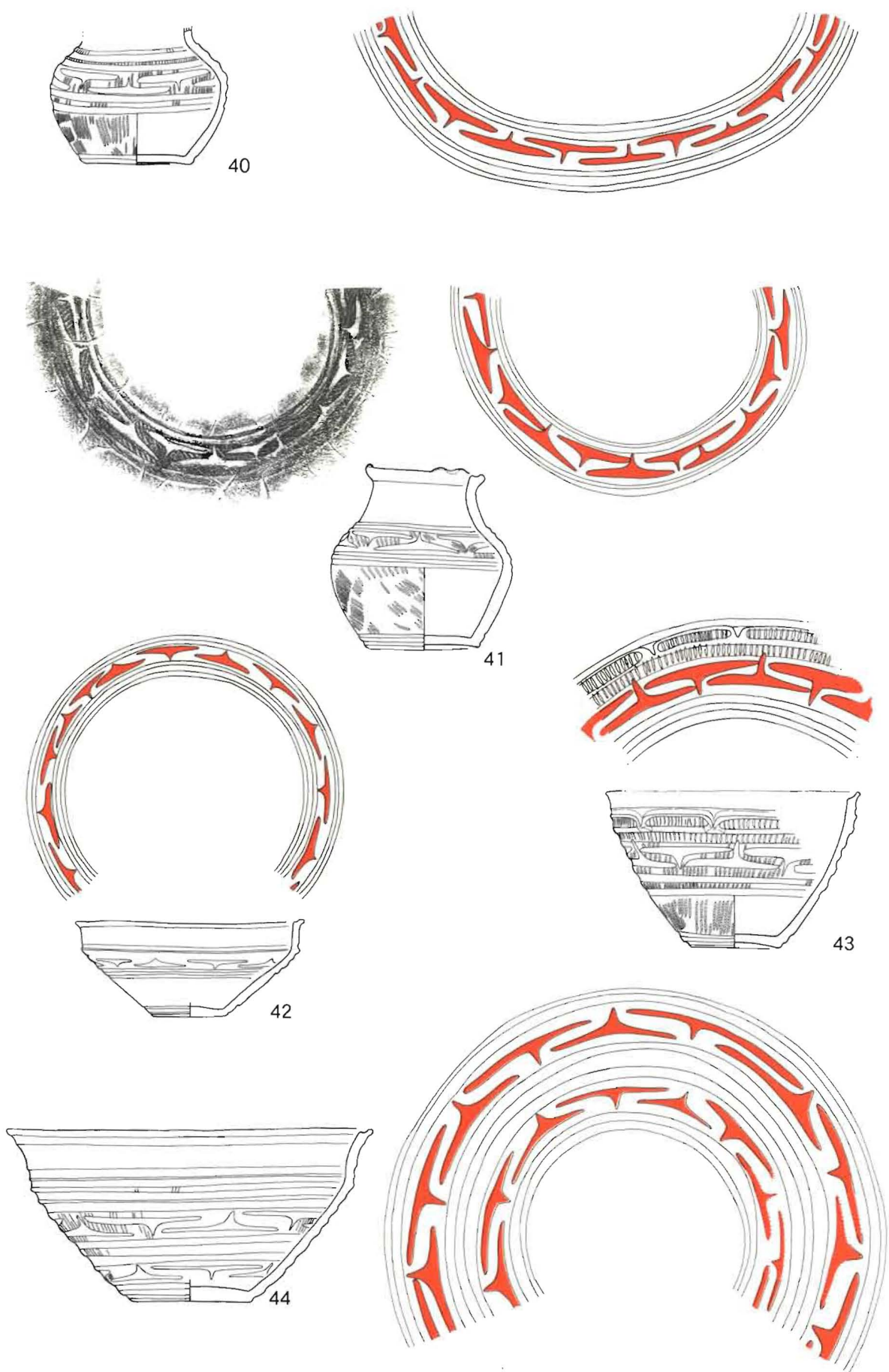
38



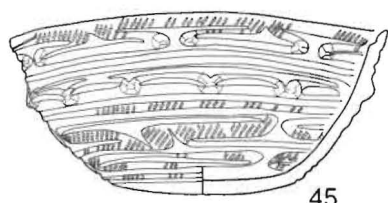
39



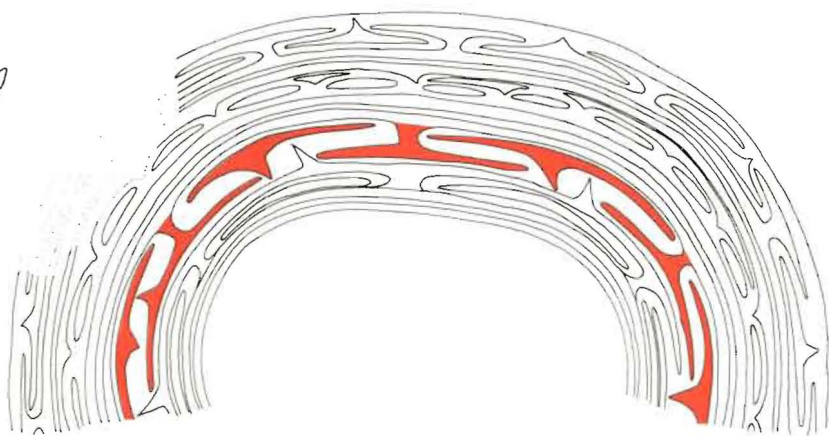
第13図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図37~39)



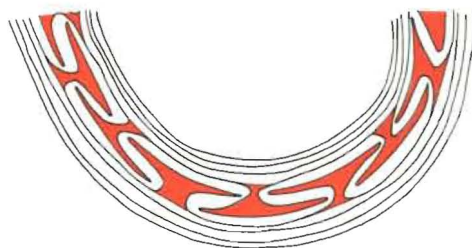
第14図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図40~44)



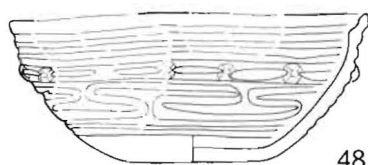
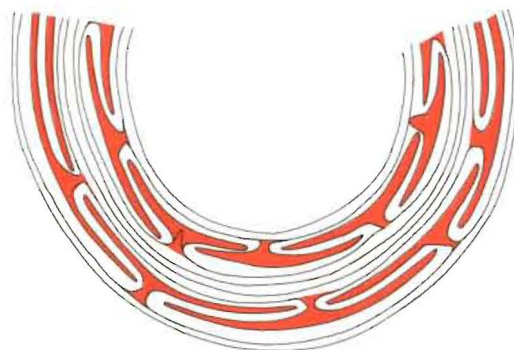
45



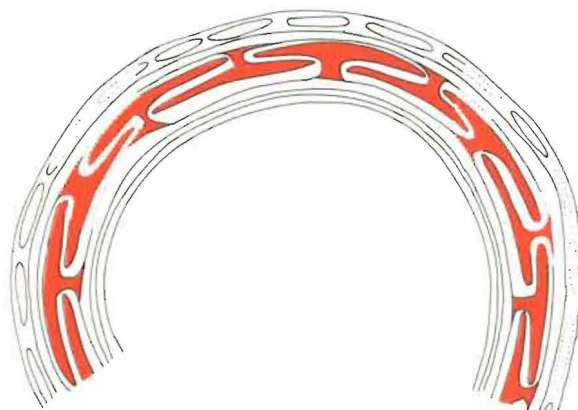
46



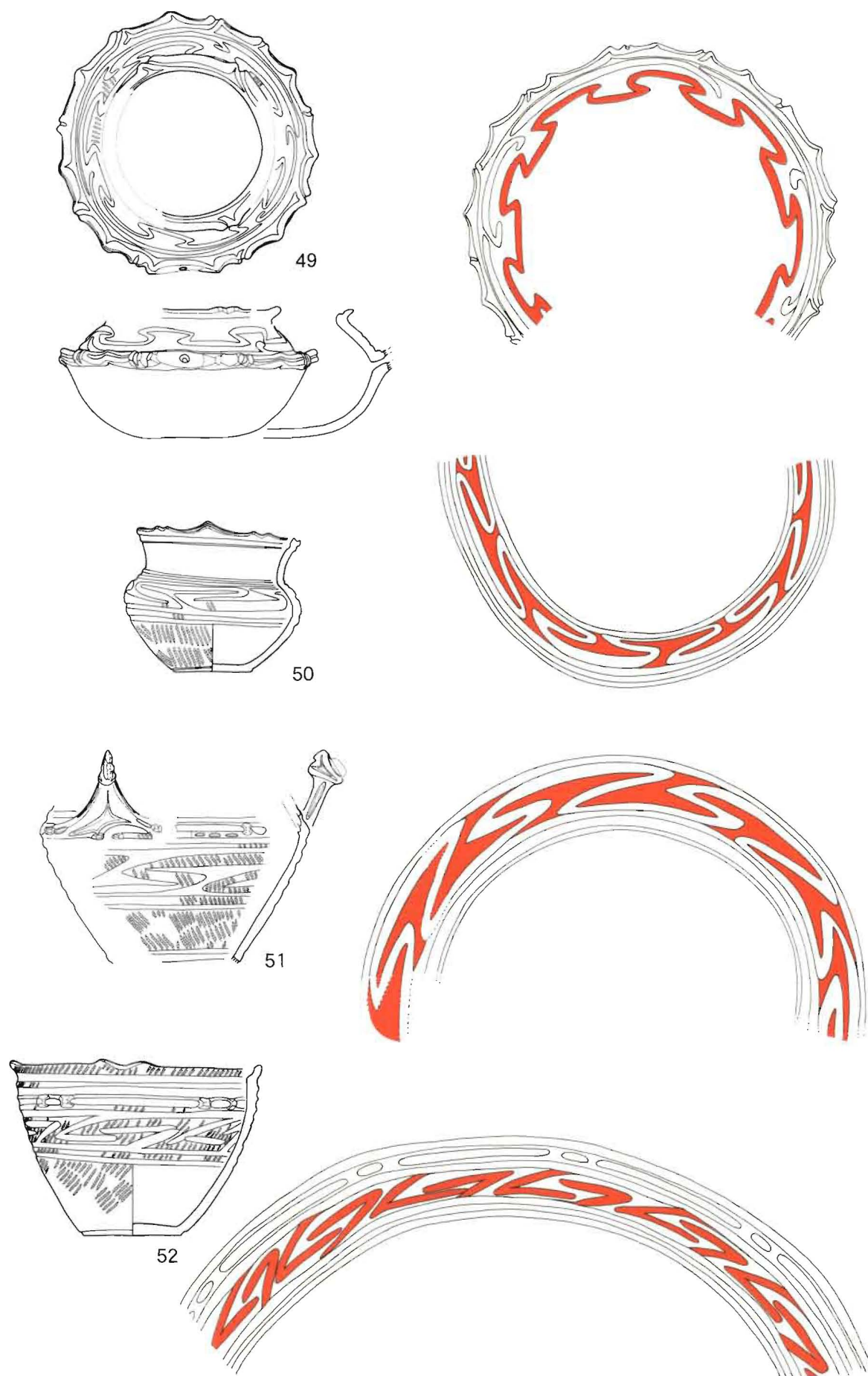
47



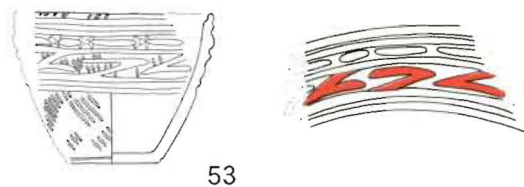
48



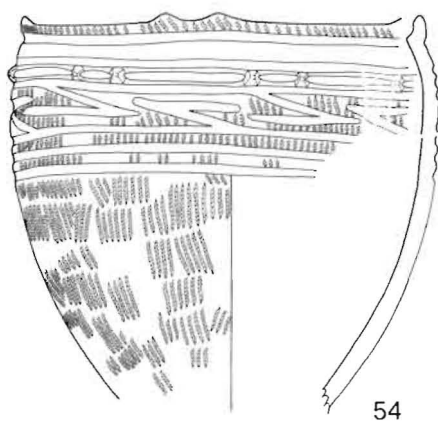
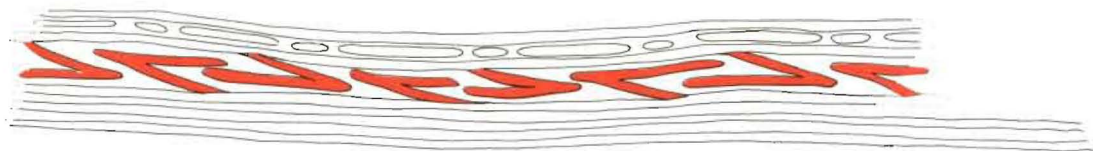
第15図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図45~48)



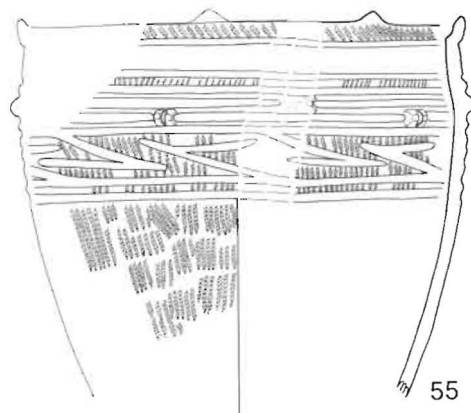
第16図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図49~52)



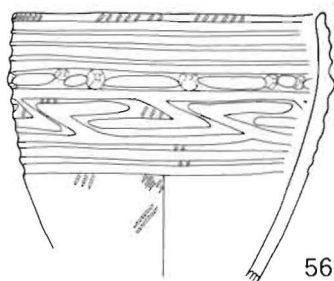
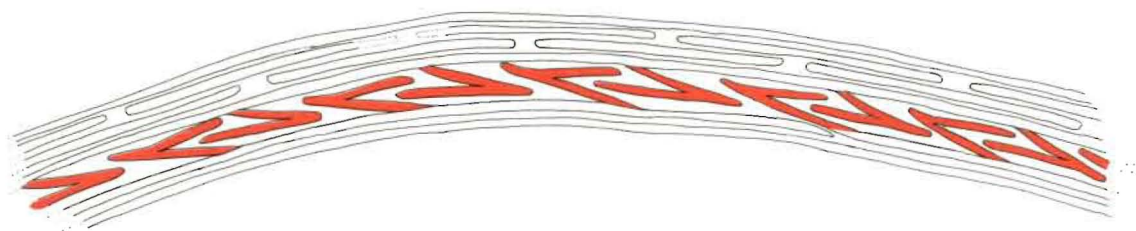
53



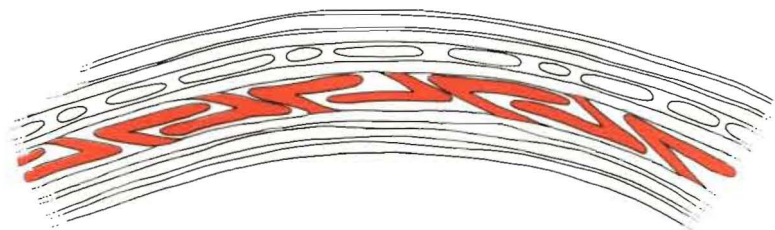
54



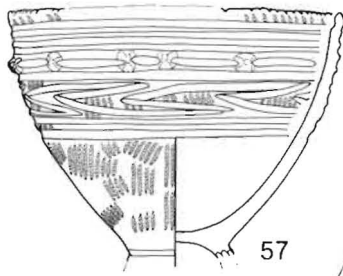
55



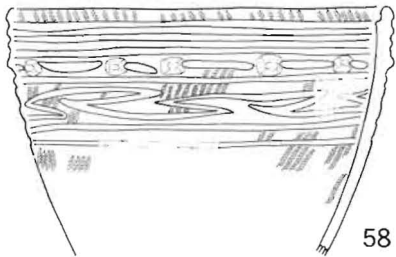
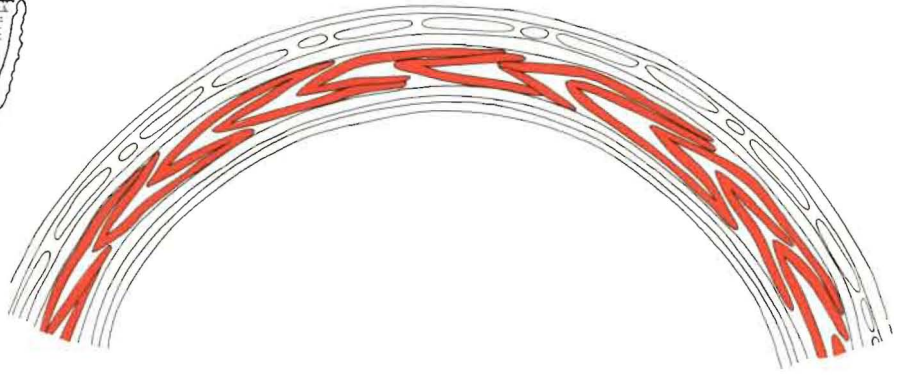
56



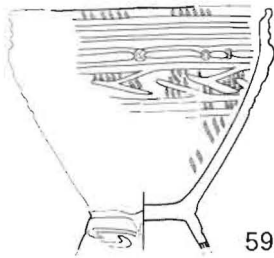
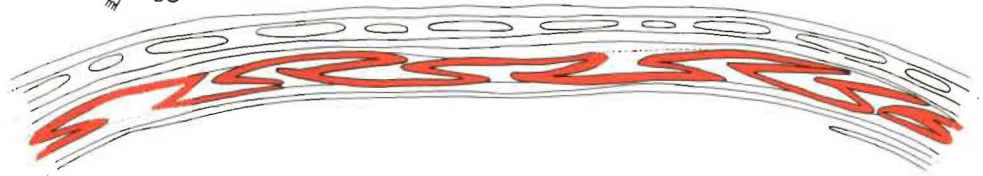
第17図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図53~56)



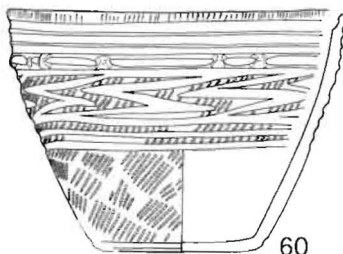
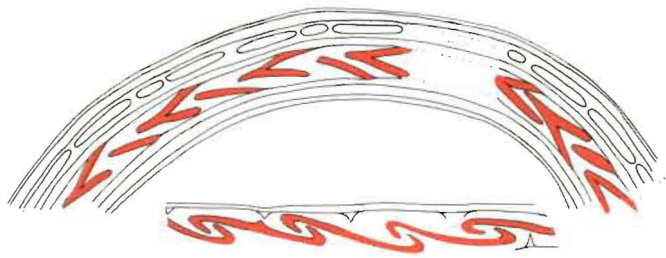
57



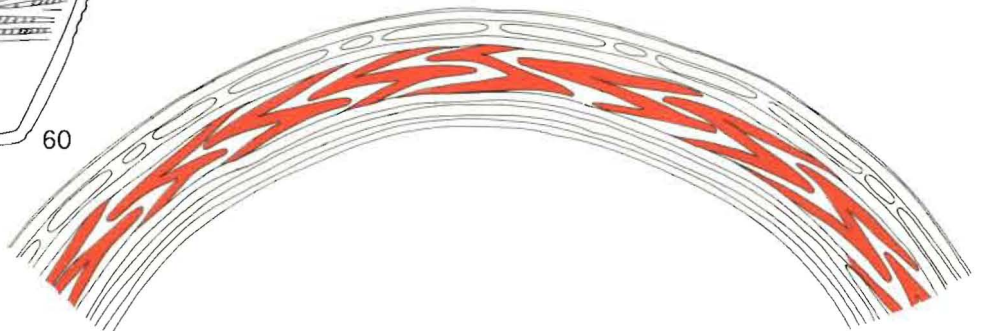
58



59



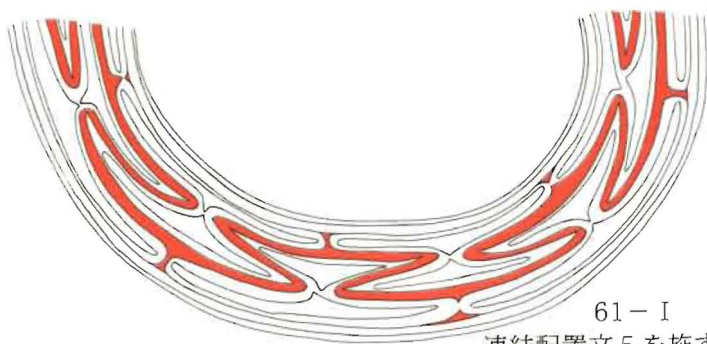
60



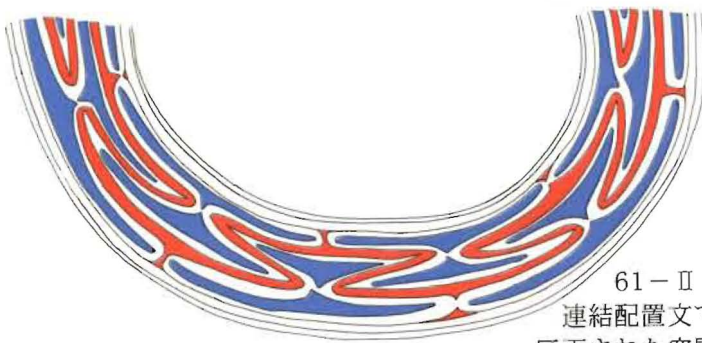
第18図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図57~60)



61



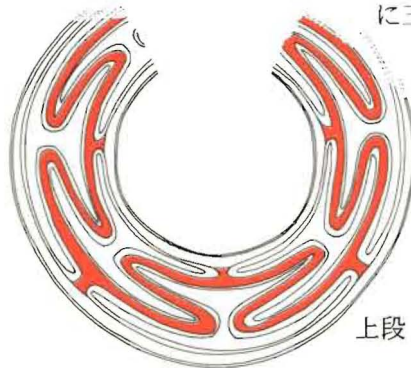
61-I
連結配置文5を施す。



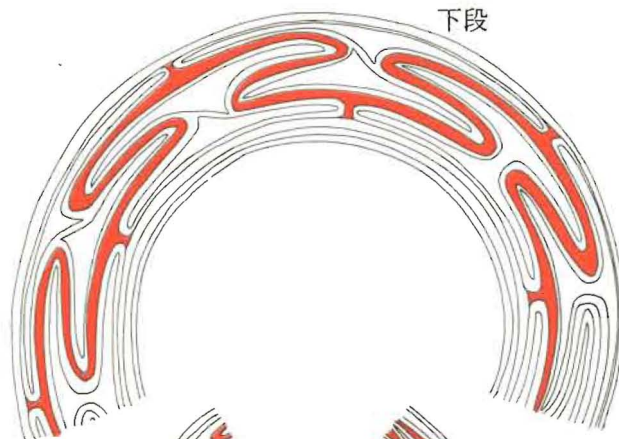
61-II
連結配置文で
区画された空間
に三叉文を施す。



62



上段



下段



63

第19図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図61~63)



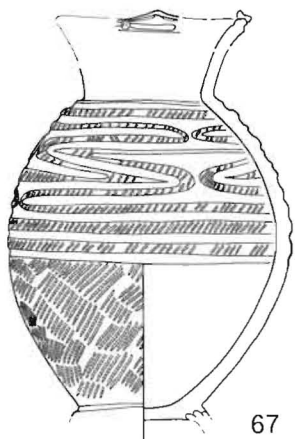
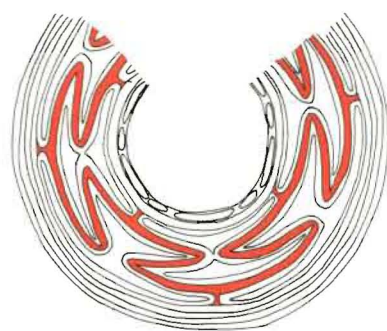
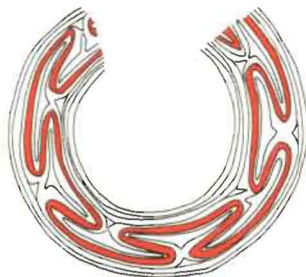
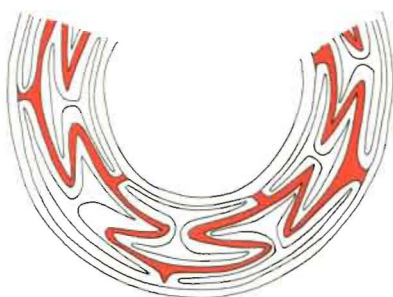
64



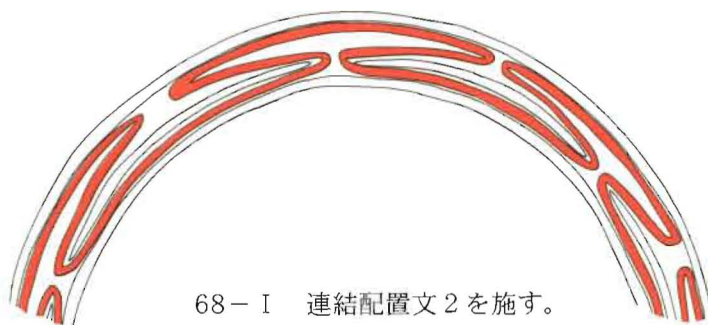
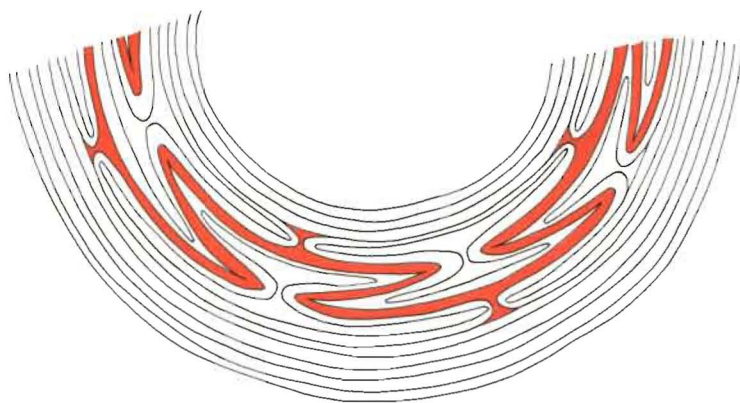
65



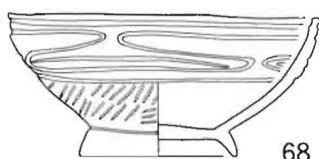
66



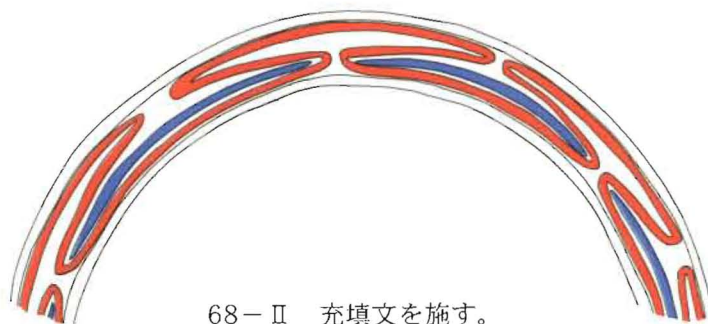
67



68-I 連結配置文2を施す。

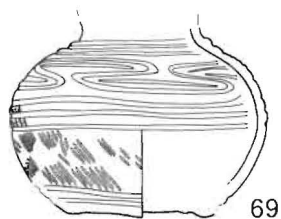


68

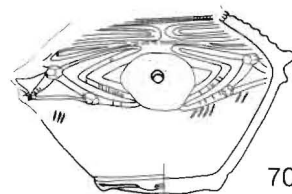


68-II 充填文を施す。

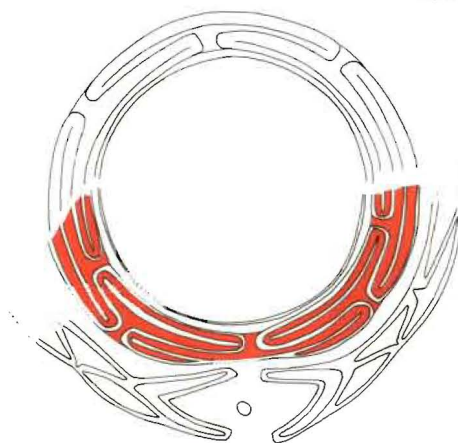
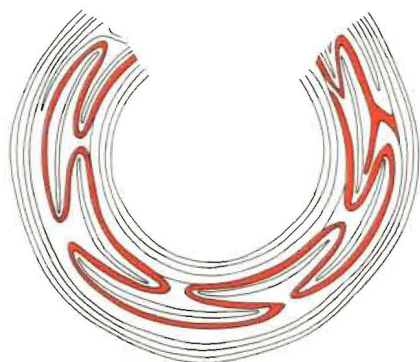
第20図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図64~68)



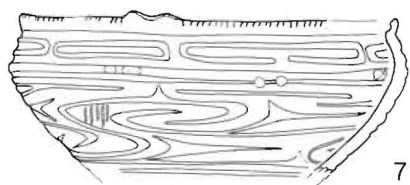
69



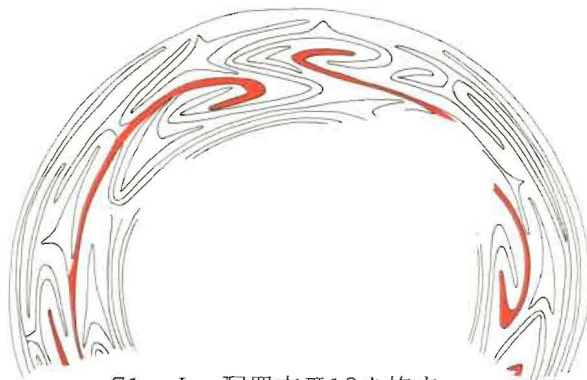
70



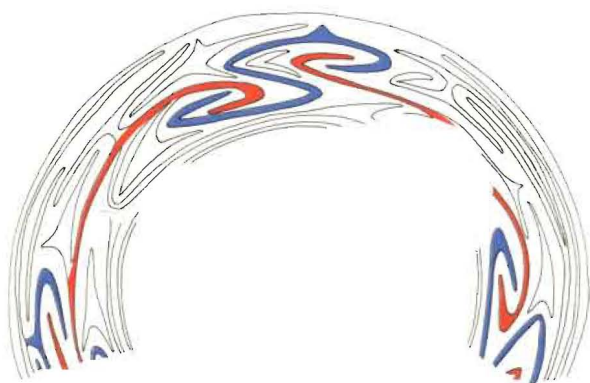
底面



71



71-I 配置文Ⅲ13を施す。

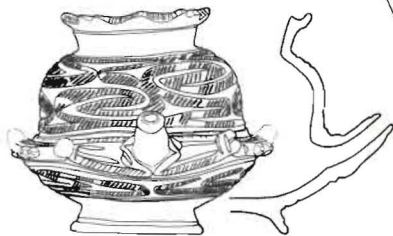


71-II 配置文Ⅲ13の間にS字状の充填文を施す。

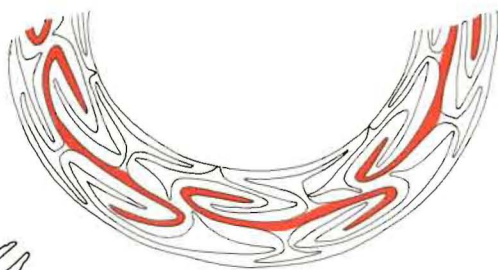


71-III 残りの空間に充填文を施す。

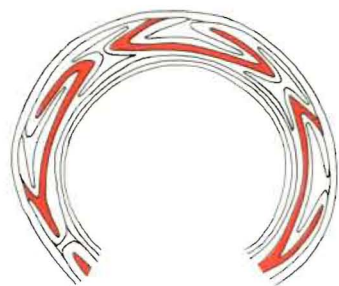
第21図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図69~71)



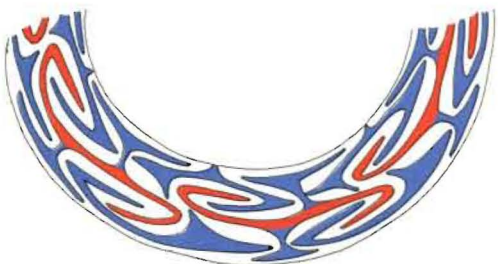
72



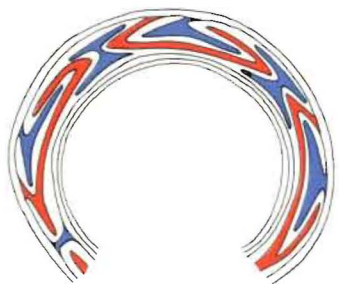
72上-I 配置文Ⅲ13を施す。



72下I 配置文Ⅱ5を施す。



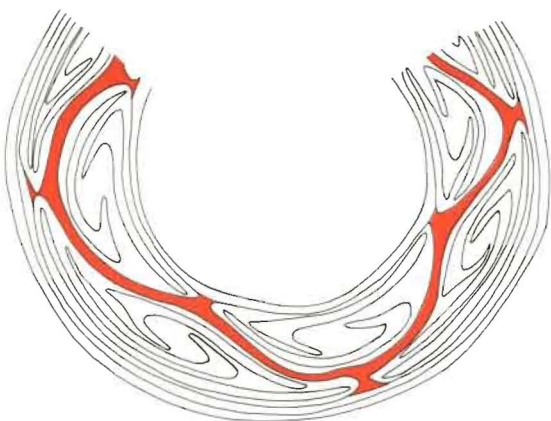
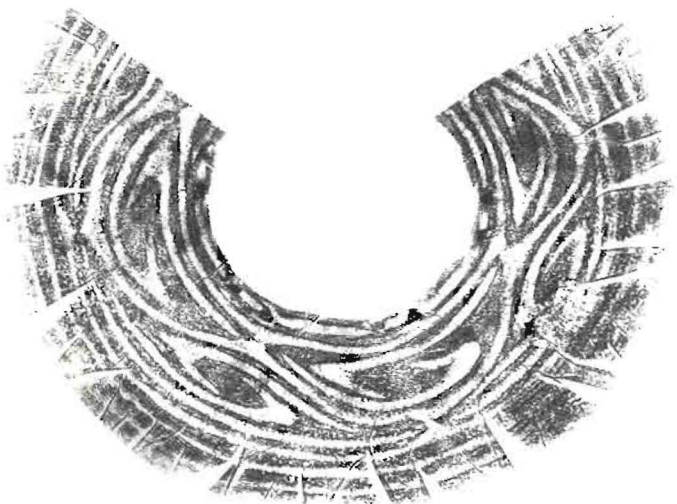
72上-II 充填文を点対称に施す。



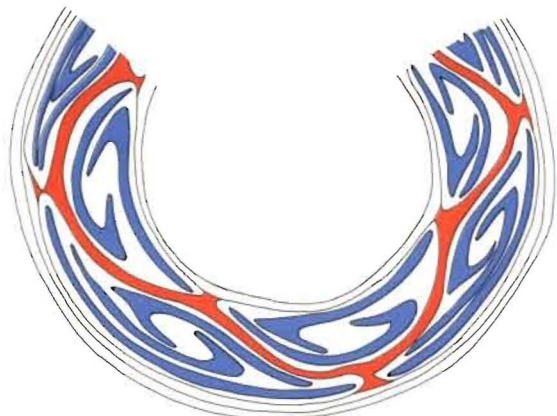
72下-II 三叉文・「エ」の字形文を施す。



73

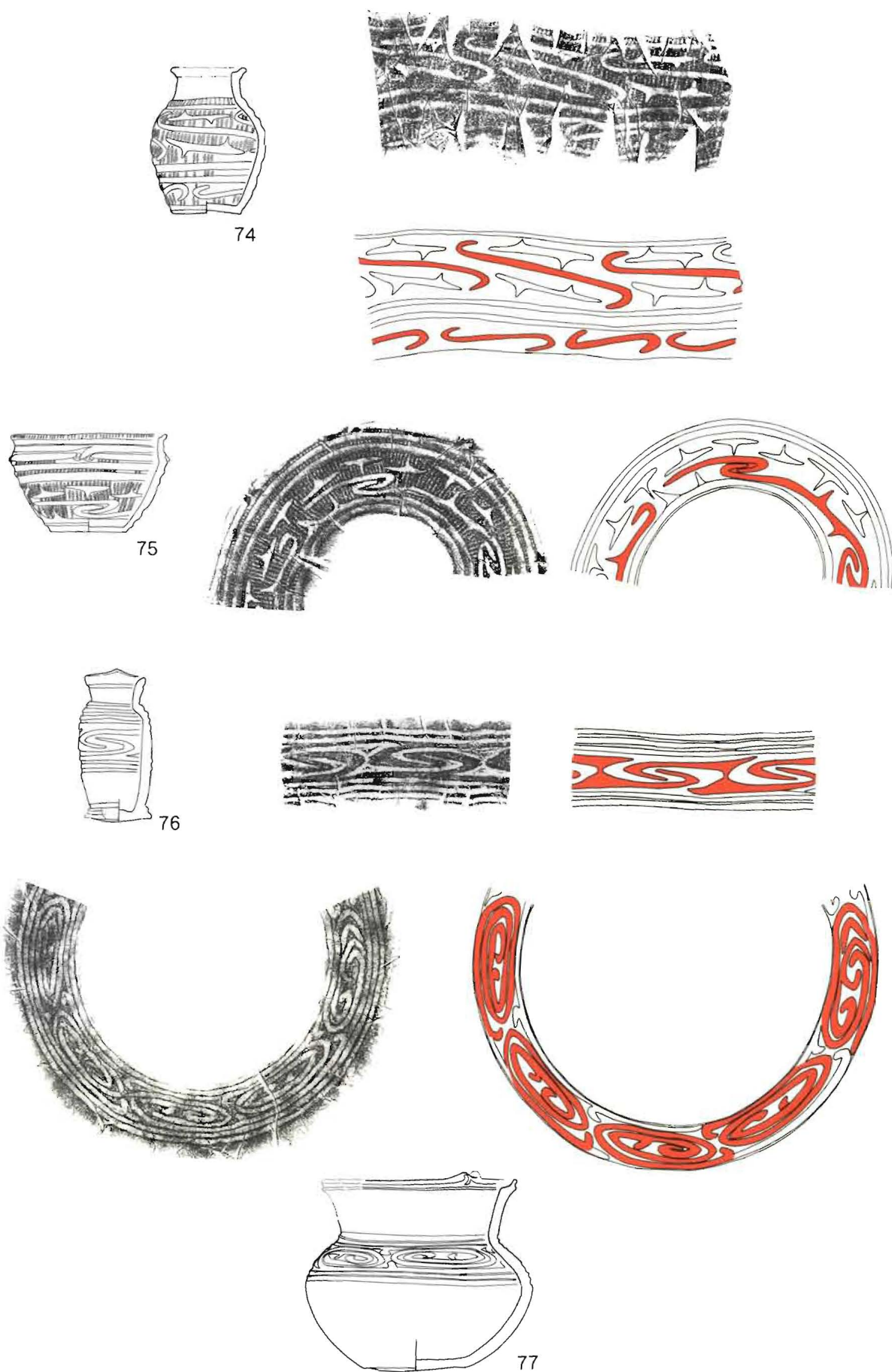


73-I 配置文Ⅲ13を施す。

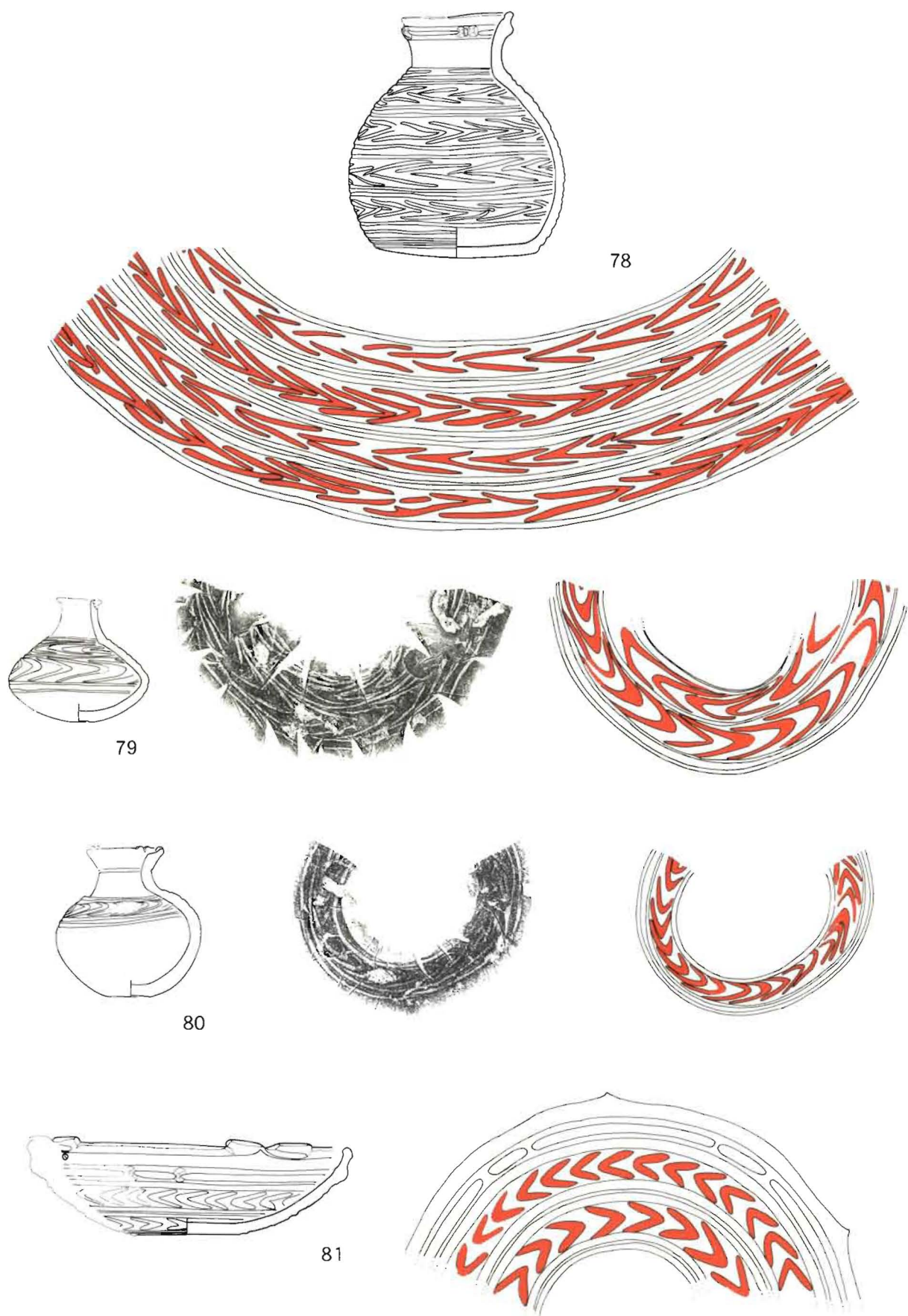


73-II 連結配置文によって区画された空間に横「し」文を二個一対に施す。

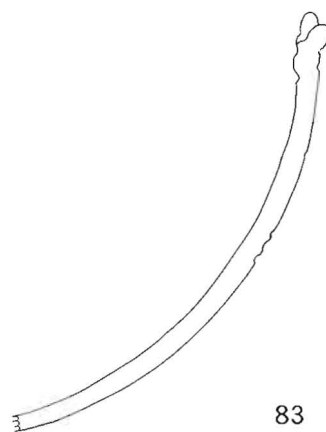
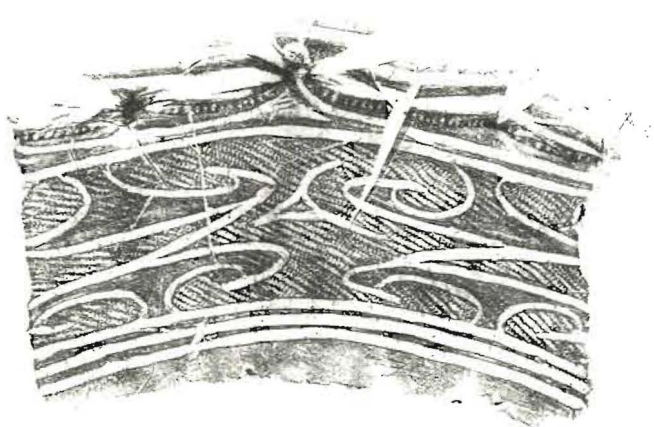
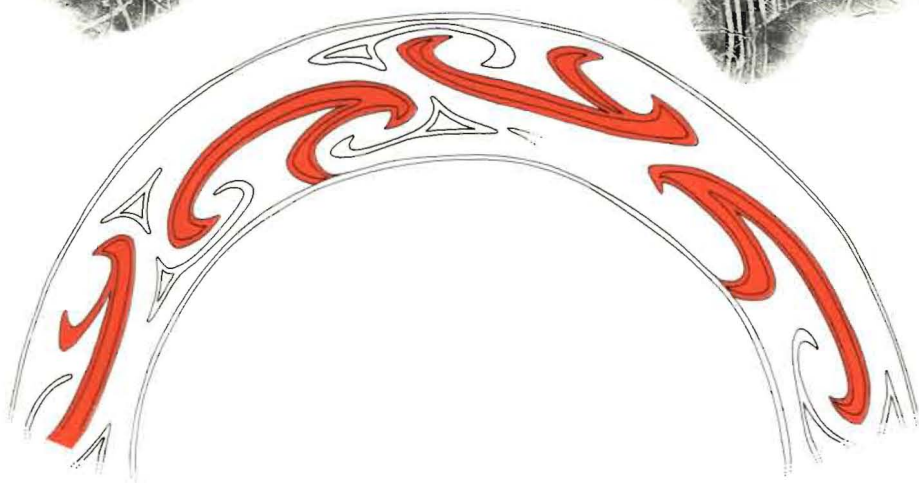
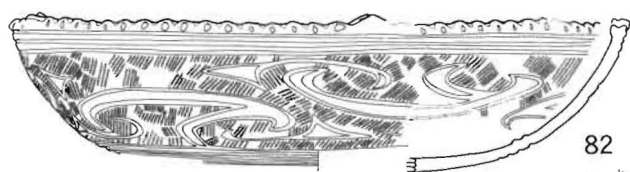
第22図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図72~73)



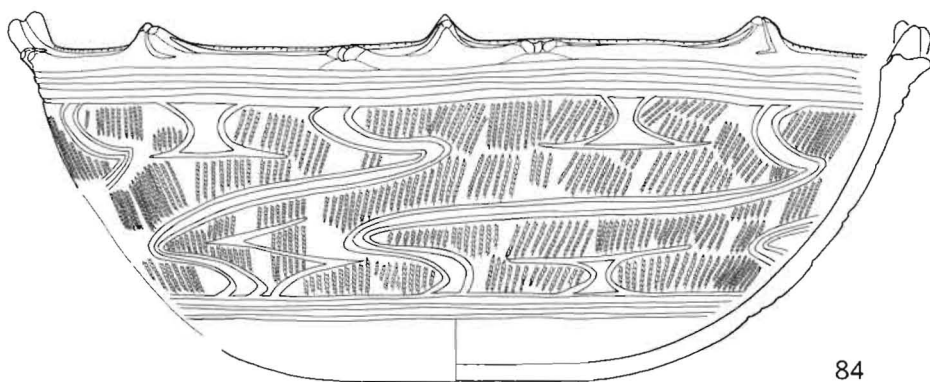
第23図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図74~77)



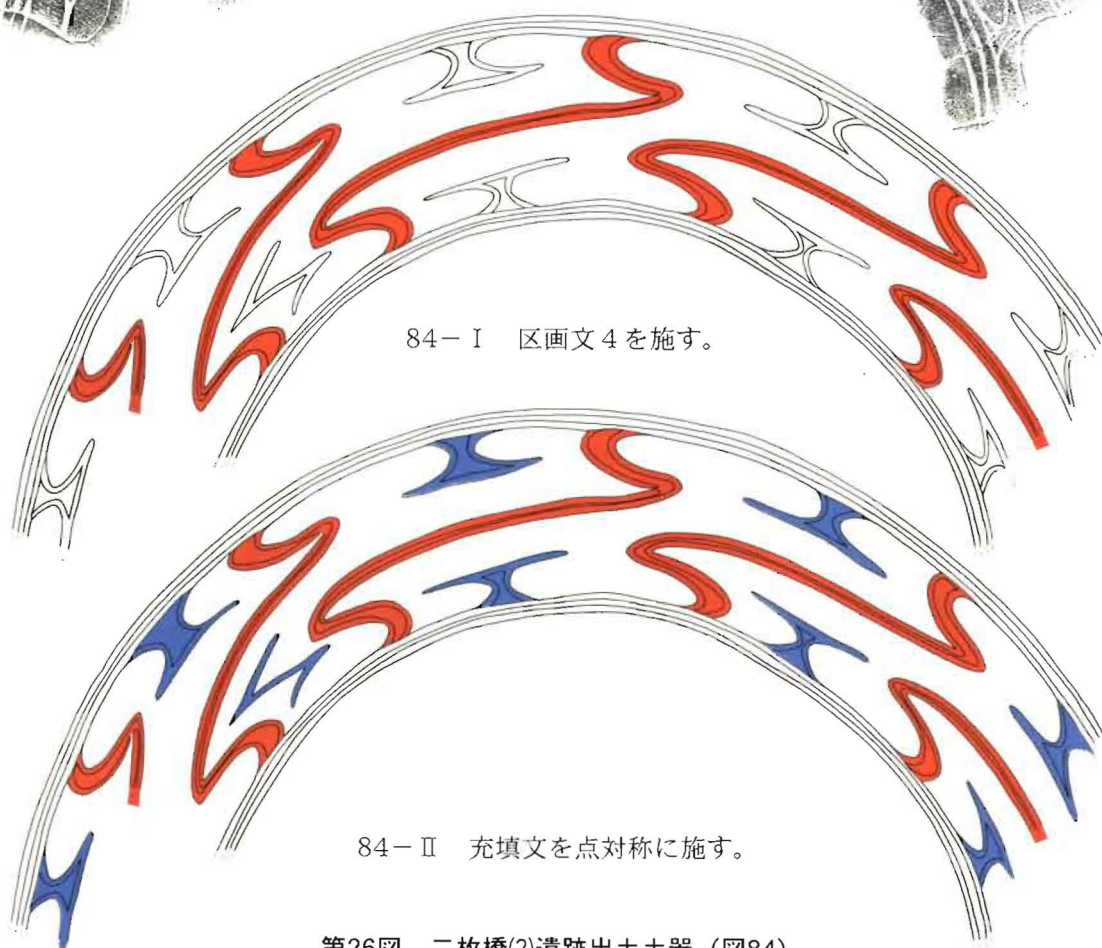
第24図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図78~81)



第25図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図82~83)



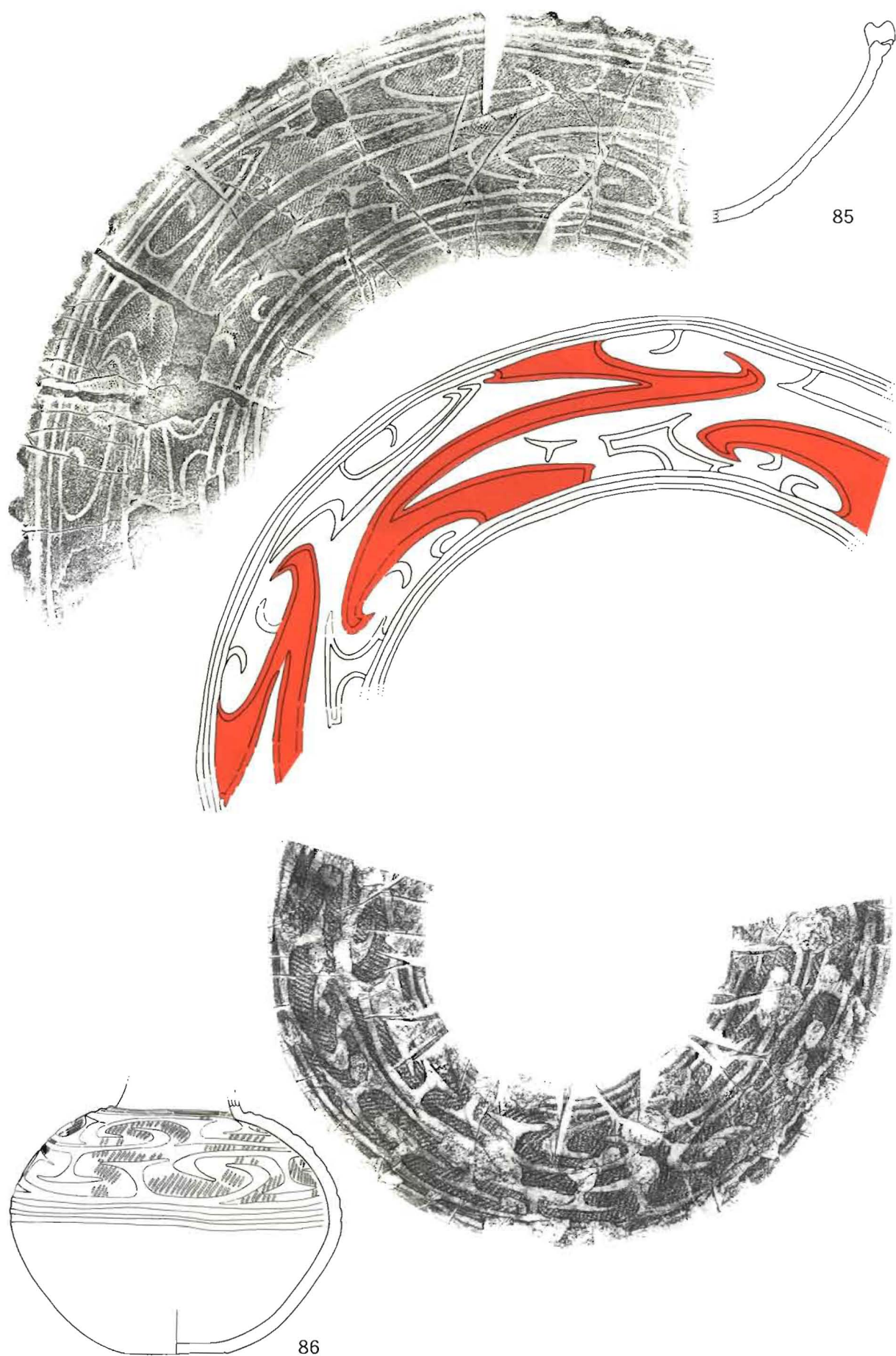
84



84-I 区画文4を施す。

84-II 充填文を点対称に施す。

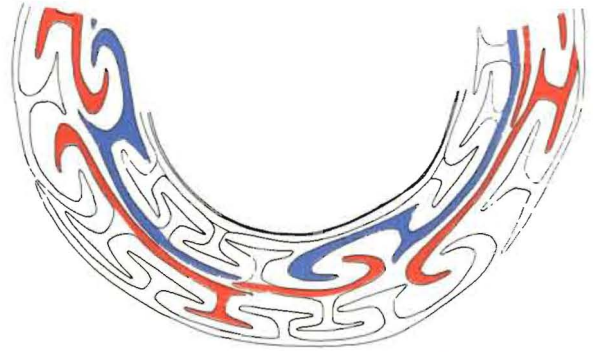
第26図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図84)



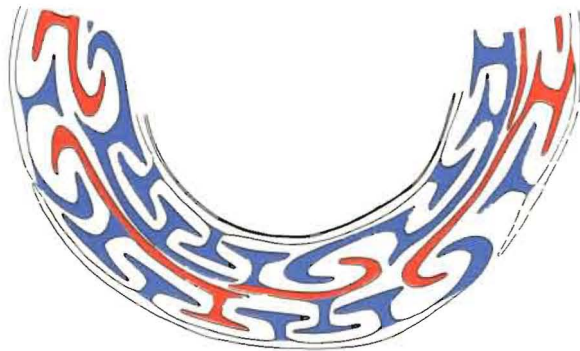
第27図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図85~86)



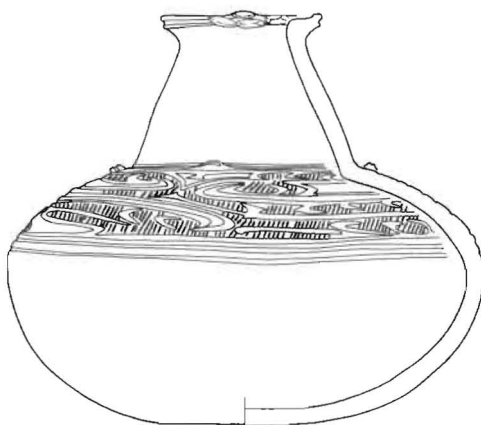
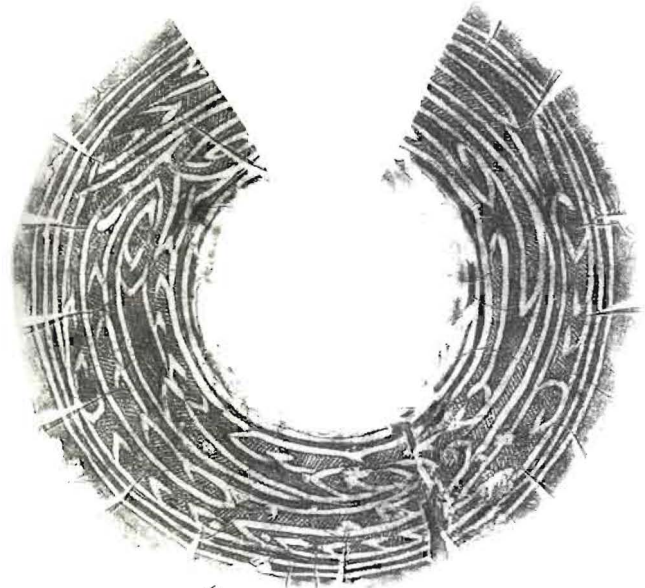
86-I 配置文Ⅲ18を施す。



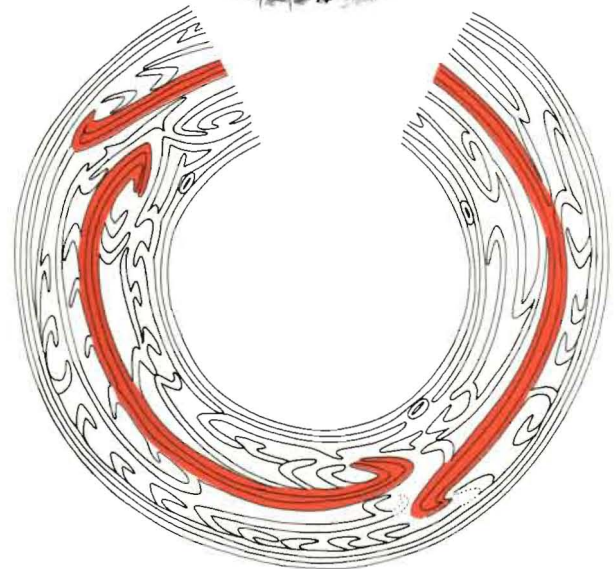
86-II 「工」の字形文の左上端を配置文に入り組ませる形で施す。



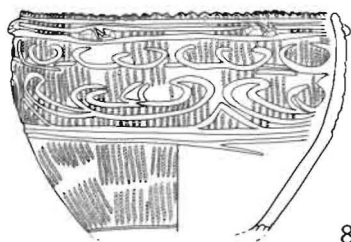
86-III 残りの空間に工字文状の充填文を点対称にを施す。



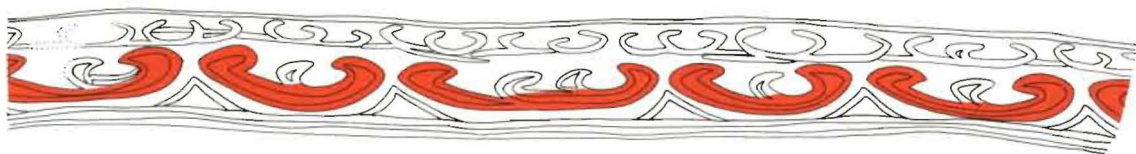
87



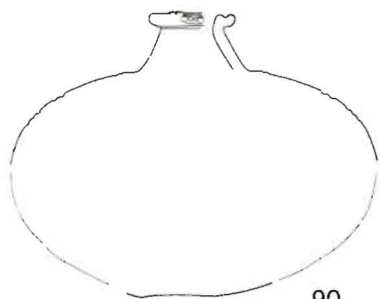
第28図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図86~87)



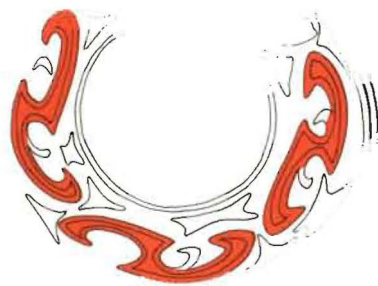
88



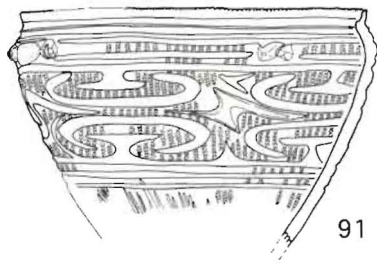
89



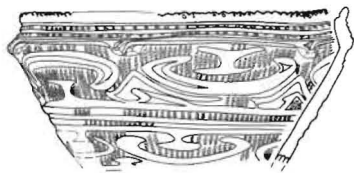
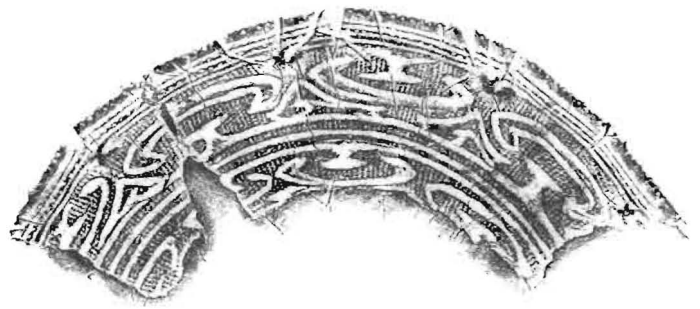
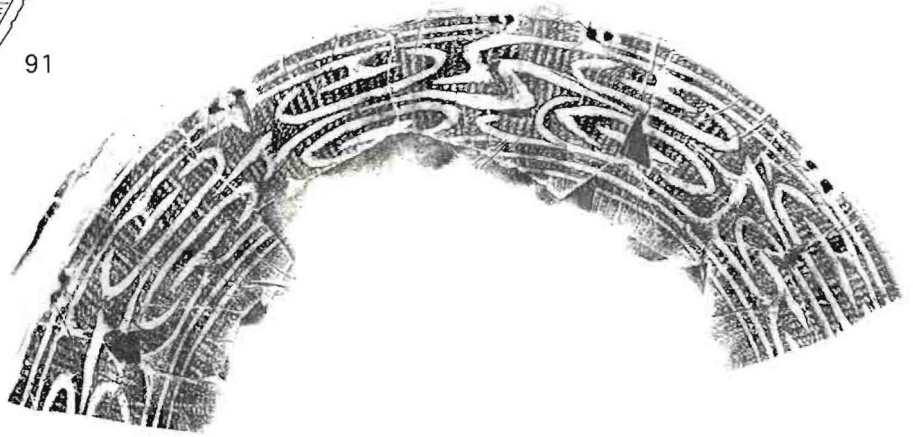
90



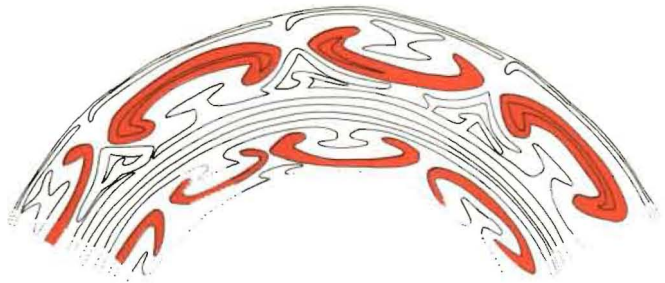
第29図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図88~90)



91



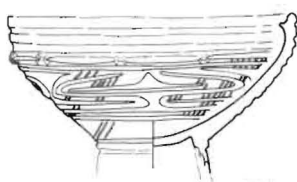
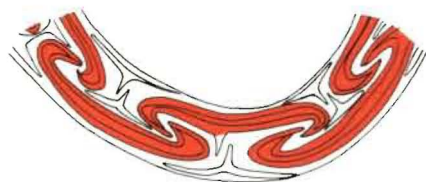
92



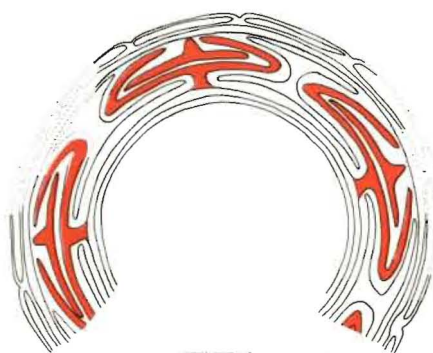
第30図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図91~92)



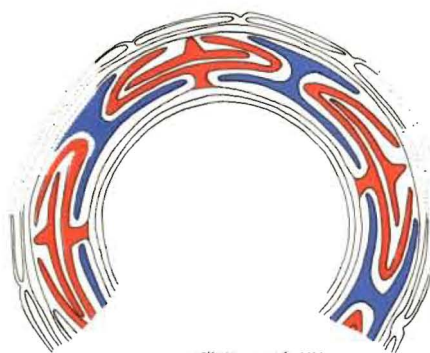
93



94



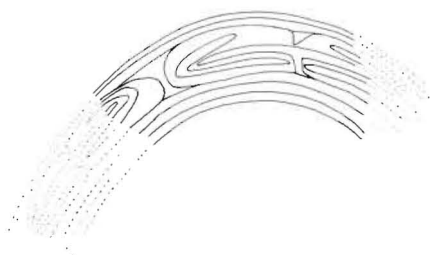
94-I 配置文Ⅱ 4を
施す。



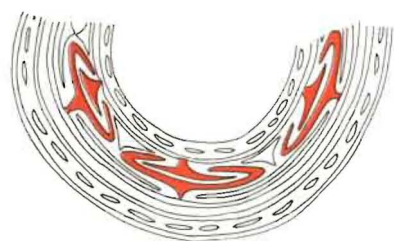
94-II 残りの空間に
「工」の字形文
を施す。



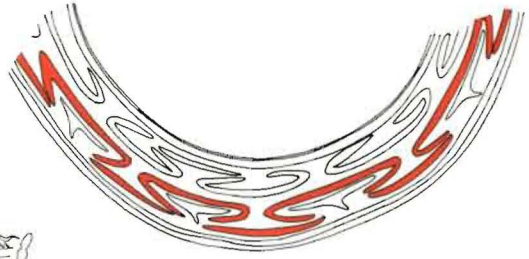
95



96



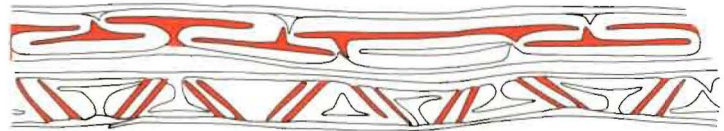
第31図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図93~96)



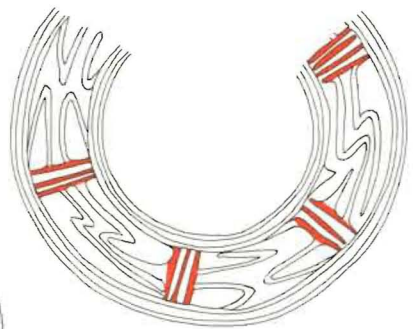
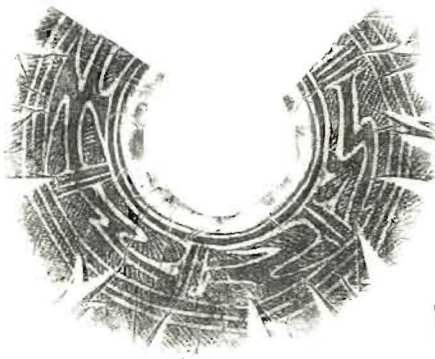
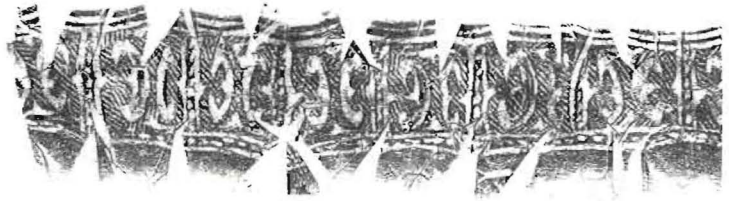
97



98

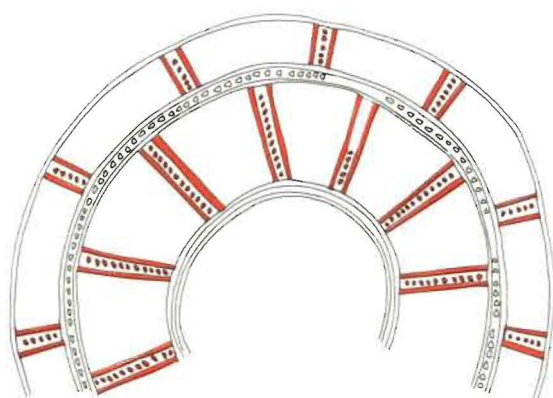
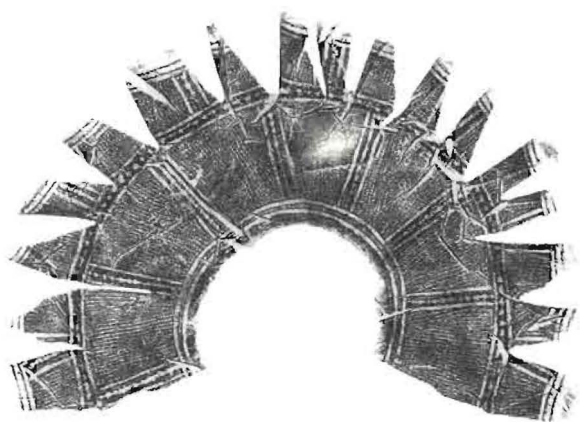


99



100

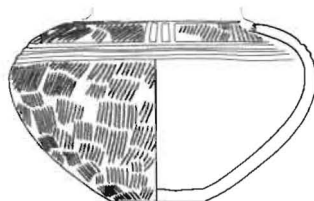
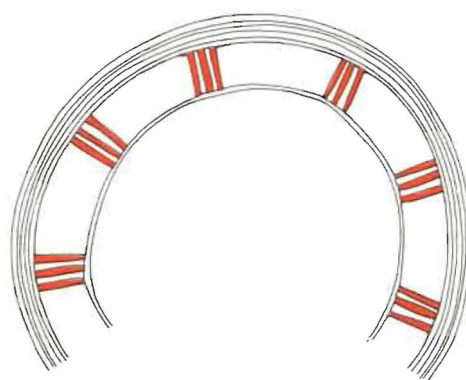
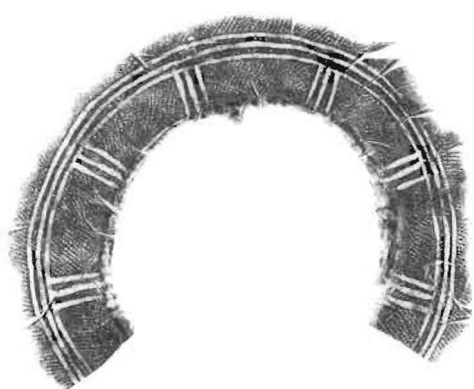
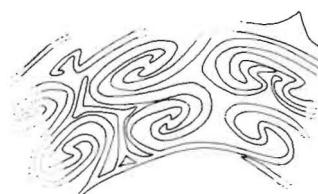
第32図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図97~100)



101

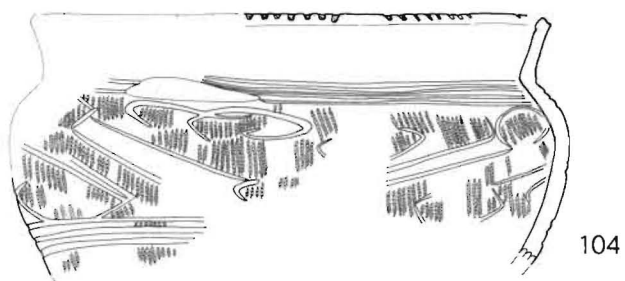


102

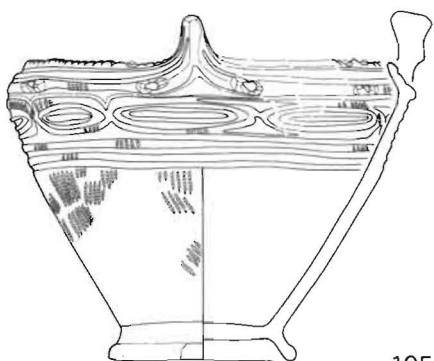


103

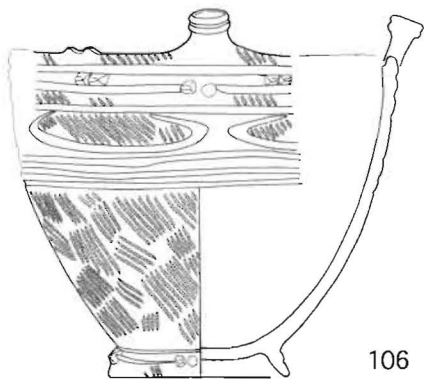
第33図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図101~103)



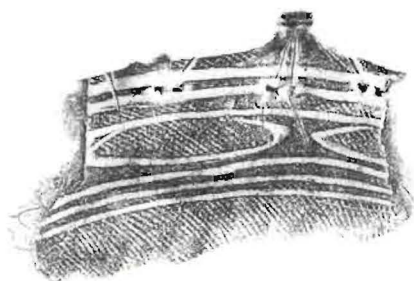
104



105



106



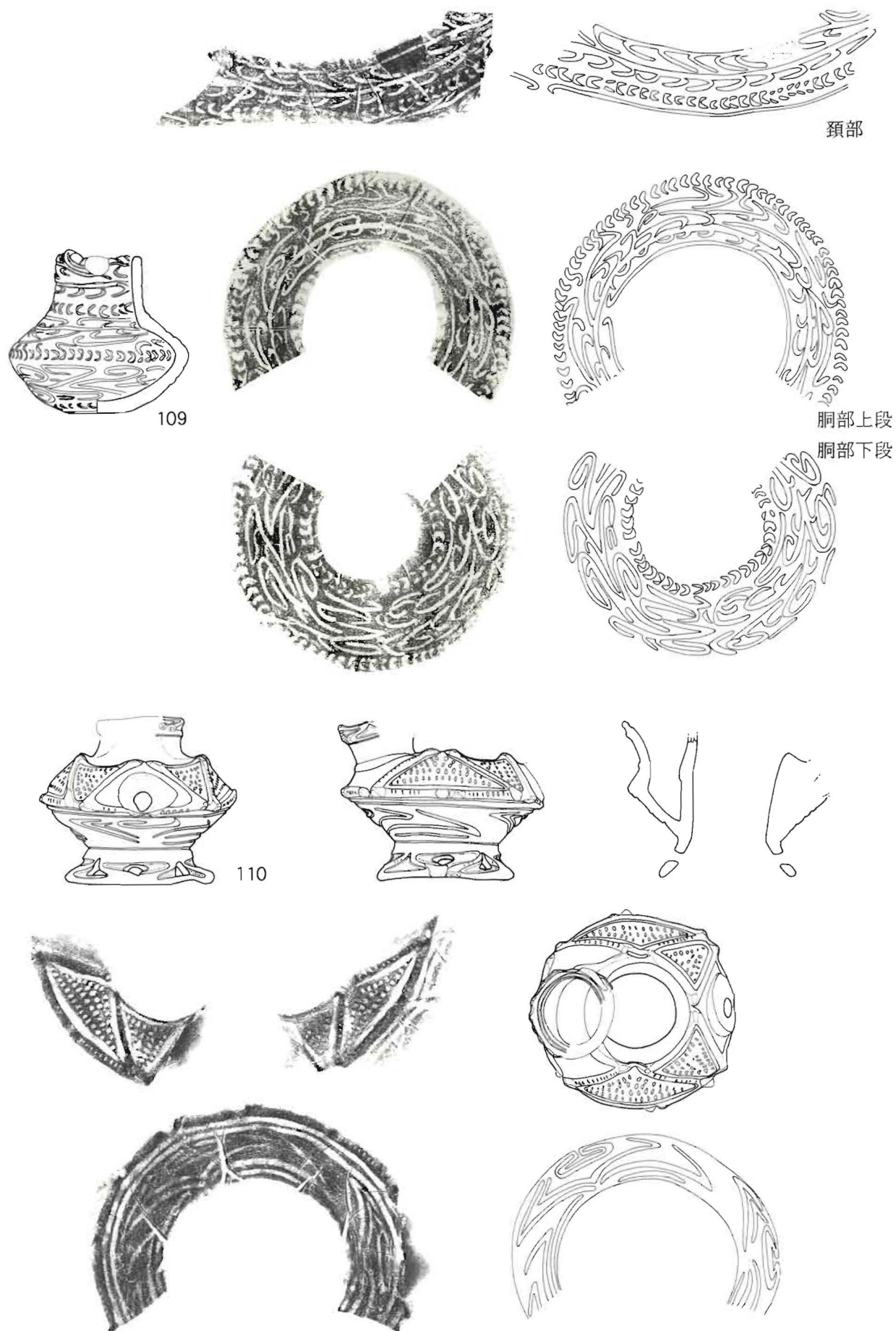
107



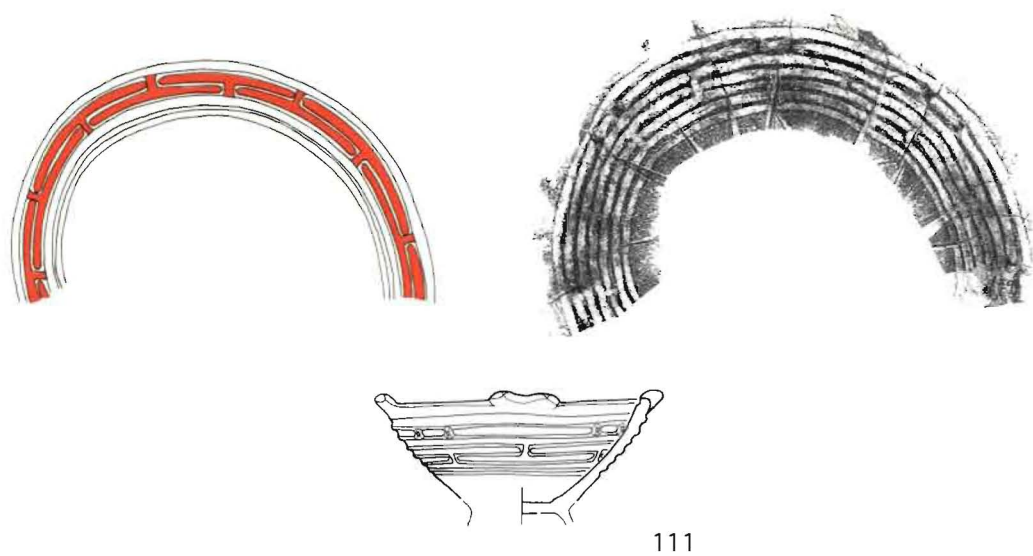
108



第34図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図104~108)



第35図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図109~110)



111

第36図 二枚橋(2)遺跡出土土器 (図111)

番号	器種	分類	特徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
1	壺	配置文Ⅲ14	口縁部に単独の山形突起。体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起および橋状突起を交互に3単位ずつ施す。充填文により工字文状の文様を形成する。赤彩。	無	(13.0)	(23.0)
2	壺	配置文Ⅲ14	口縁部に単独の山形突起。体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。赤彩。	無	(10.7)	10.5
3	壺	配置文Ⅲ14	口縁部に単独の山形突起。体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	R L	(16.2)	15.6
4	壺	配置文Ⅲ14	口縁部に単独の山形突起。体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	無	(15.5)	15.3
5	壺	配置文Ⅲ13	口縁部に単独の山形突起。体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。2.4などの壺に器形・文様とも極めて類似するが、それらに用いる配置文Ⅲ14とは逆向きの配置文Ⅲ13を用いている為、鏡に写したように逆向きの連続文様を形成する。口縁部内面の沈線は山形突起に対応する位置で上向きの三角形の沈刻を成す。	無	10.2	9.3
6	壺	配置文Ⅲ14	体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	15.0	15.4
7	壺	配置文Ⅲ14	体部上端に2個一対の突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	無	10.9	10.6
8	壺	配置文Ⅲ14	体部上端に2個一対の突起が2単位残存。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	無	(10.6)	15.0
9	壺	配置文Ⅲ14	体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	(9.0)	13.9
10	壺	配置文Ⅲ14	体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	(10.3)	14.2
11	壺	配置文Ⅲ14	体部上半に配置文が2単位。配置文及び横「し」文の施し方が他の配置文Ⅲ14が施される土器とは異なるが、文様の印象はあまり変わらない。充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	(11.8)	14.6
12	壺	配置文Ⅲ14	口縁部に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が1単位残存。体部上半に配置文が2単位。	L R	(10.1)	12.0
13	壺	配置文Ⅲ14	体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	R L	(8.4)	10.6
14	壺	配置文Ⅲ14	頸部・底部全欠損。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	不明	(10.8)	不明
15	壺	配置文Ⅲ14	口縁部に単独の山形突起。体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。赤彩。	L R	(12.4)	11.4

二枚橋(2)遺跡土器観察表(1)

番号	器種	分 類	特 徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
16	高杯	配置文Ⅲ14	口縁部に2個一対の山形突起が4単位。体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。赤彩。	無	(8.4)	20.9
17	壺	配置文Ⅲ17	体部上半に配置文が1単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	R L	(11.6)	8.8
18	壺	配置文Ⅲ15	口縁部に単独の山形突起。体部上端に2個一対の突起が4単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	17.0	15.2
19	壺	配置文Ⅲ15	体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	13.3	15.5
20	壺	配置文Ⅲ15	口縁部に単独の山形突起。体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	無	12.3	10.6
21	壺	配置文Ⅲ15	体部上端に2個一対の突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	無	(8.9)	11.5
22	壺	配置文Ⅲ15	体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	15.0	16.4
23	壺	配置文Ⅲ15	体部上端に2個一対の突起が3単位残存。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	無	14.0	14.4
24	壺	配置文Ⅲ15	体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	R L	13.5	13.5
25	壺	配置文Ⅲ15	体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。赤彩。	L R	14.8	14.1
26	壺	配置文Ⅲ15	体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	無	(13.2)	16.0
27	壺	配置文Ⅲ15	体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	(12.1)	15.3
28	壺	配置文Ⅲ16	口縁部に単独の山形突起。体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。底部破損部にアスファルトが付着。	L R	(14.8)	14.8
29	壺	配置文Ⅲ5	口縁部に単独の山形突起。体部上端に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が5単位。体部上半に配置文2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	R L	17.6	16.8
30	壺	配置文Ⅲ17	体部上半に配置文が1単位。充填文により工字文状の文様を形成する。漆塗。	L R	(9.7)	13.3
31	鉢	配置文Ⅲ14	体部上端に11単位の突起。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	無	6.2	16.9
32	鉢	配置文Ⅲ14	口縁部にB突起が4単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。赤彩。	無	7.5	18.4

二枚橋(2)遺跡土器観察表(2)

番号	器種	分類	特徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
33	壺	配置文Ⅲ14	体部上端に眼鏡状突起が1単位残存。体部上半に配置文が2単位残存。充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	(12.3)	(16.0)
34	台付鉢	配置文Ⅲ14	体部上端に2個一対の突起が4単位、2段に渡って互い違いに施される。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	8.3	(9.2)
35	台付鉢	配置文Ⅲ13	口縁部に2個一対の山形突起が4単位。頸部の平行沈線間に刻み。体部上端に突起が10単位。体部上半に配置文が2単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	R L	9.2	(9.0)
36	鉢	配置文Ⅲ14	頸部の平行沈線間に刻み。体部上端に2個一対の突起が9単位残存。体部上半に配置文が4単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	無	(8.0)	(11.5)
37	台付鉢	連結配置文4	口縁部に2個一対の大型突起及び2個一対の小型突起が交互に4単位。体部上端に突起が12単位。体部上半に連結配置文。充填文により工字文状の文様を形成する。	R L	9.9	11.5
38	台付鉢	連結配置文4	口縁部に2個一対の大型突起が1単位残存、及び2個一対の小型突起が2単位残存。頸部の平行沈線間に刻み。体部上端に突起が3単位残存。体部上半に連結配置文。充填文により工字文状の文様を形成する。	R L	8.5	11.0
39	壺	配置文Ⅲ9	体部上端の沈線上に刻み。体部上半に配置文が5単位施され、木の葉状の文様を形成する。	R L	10.8	11.1
40	壺	配置文Ⅲ10	体部上端の3本の平行沈線間に刻み。体部上半は配置文が5単位施され工字文状の文様を形成する。	R L	(7.5)	9.5
41	壺	配置文Ⅲ9	口縁部に2個一対の山形突起が2単位残存。体部上半は配置文が5単位施され、工字文状の文様を形成する。	R L	10.0	9.8
42	鉢	配置文Ⅲ10	体部上半は配置文が6単位施され工字文状の文様を形成する。	無	5.3	12.2
43	鉢	配置文Ⅲ10	頸部の2本の平行沈線上に刻み。平行沈線の上段には突起が2単位残存。体部上半は配置文が2単位残存しており、工字文状の文様を形成する。	R L	8.5	(13.8)
44	鉢	配置文Ⅲ10	体部に配置文がそれぞれ上半5単位、下半4単位の2段にわたって施され、工字文状の文様を形成する。	条痕	9.6	19.7
45	鉢	配置文Ⅰ1	頸部に2個一対の突起が5単位残存。体部上端に単独の突起が12単位。体部には配置文が3単位施され、充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	7.5	15.4
46	壺	配置文Ⅰ1	口縁部に単独の山形突起。体部上半に配置文が4単位施され、工字文状の文様を形成する。赤彩。	無	(9.5)	8.5
47	壺	配置文Ⅰ1	体部上半、下半ともに配置文が3単位ずつ施され、工字文状の文様を上下2段にわたって形成する。	L R	(7.7)	(10.8)
48	鉢	配置文Ⅰ1	体部上端に突起が12単位残存。体部上半に配置文が5単位施され、工字文状の文様を形成する。	無	6.1	14.5
49	注口	連結配置文1	口縁部に2個一対の山形突起が3単位残存。体部上半に連結配置文。最張部には2個一対の山形突起が8単位、単独の山形突起が9単位、それぞれ交互に配される。	R L	7.1	14.1

二枚橋(2)遺跡土器観察表(3)

番号	器種	分類	特徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
50	壺	配置文Ⅰ 1	口縁部に単独の山形突起。体部上半は配置文が4単位施され、工字文状の文様を形成する。	R L	8.2	9.7
51	鉢	配置文Ⅰ 2	頸部に大型の角状突起が1単位。体部上半に配置文が4単位施され、工字文状の文様を形成する。	R L	(11.6)	(11.9)
52	鉢	配置文Ⅰ 3	口縁部に2個一対の山形突起が4単位。体部上端に2個一対の突起が4単位。体部上半に配置文が6単位。	L R	9.6	13.6
53	鉢	配置文Ⅰ 3	体部上端に2個一対の突起が1単位残存、単独の突起が1単位残存。体部上半に配置文が2単位残存。	R L	6.1	(6.5)
54	鉢	配置文Ⅰ 4	口縁部に2個一対の山形突起が3単位残存。体部上端に2個一対の突起が5単位残存。体部上半には配置文が5単位残存。	R L	(16.4)	17.3
55	鉢	配置文Ⅰ 4	口縁部に山形突起が5単位残存。体部上端には2段に渡って互い違いに2個一対の突起が施され上段は3単位、下段は5単位残存。体部上半には配置文が6単位残存。	R L	(15.6)	18.8
56	鉢	配置文Ⅰ 4	体部上端に2個一対の突起が4単位残存、単独の突起が5単位、それぞれ交互に施される。体部上半は配置文が5単位残存。	L R	(11.0)	13.2
57	台付鉢	連結配置文 3	口縁部に刻み。体部上端に2個一対の突起が5単位、単独の突起が5単位、それぞれ交互に配される。体部上半には連結配置文が施される。	R L	(10.2)	13.6
58	鉢	連結配置文 3	体部上端に2個一対の突起が4単位、単独の突起4単位が、それぞれ交互に配される。体部上半には連結配置文。	R L	(10.3)	15.3
59	台付鉢	上：配置文Ⅱ 1 下：配置文Ⅲ 14	体部上端には2個一対の突起が3単位残存、単独の突起が4単位残存、それぞれ交互に配される。体部上半には配置文が7単位残存。体部と台部の境には体部と異なる配置文が合計4単位施される。	R L	(9.7)	(9.0)
60	鉢	区画文 7	口唇部外面に刻みが連続する。体部上端に2個一対の突起が4単位、1個の突起が4単位、それぞれ交互に配される。体部上半には区画文が8単位施される。	L R	10.0	13.6
61	壺	連結配置文 5	体部上半に連結配置文。充填文によって工字文状の文様が形成される。	無	11.7	12.0
62	注口	連結配置文 5	口縁部に2個一対の山形突起が1単位残存。体部上半、下半に同様の連結配置文。上半は「工」の字形文、下半は向かい合う三叉文の充填によってそれぞれ工字文状の文様が形成される。	無	13.0	(14.0)
63	注口	連結配置文 5	最張部の隆帯に刻み。体部上半に連結配置文。充填文によって工字文状の文様が形成される。	無	(6.9)	12.2
64	壺	連結配置文 5	体部上端に2個一対の突起が4単位。体部上半には連結配置文。充填文によって工字文状の文様が形成される。	L R	(8.3)	8.8
65	壺	連結配置文 2	体部上半に連結配置文。充填文によって工字文状の文様が形成される。	無	8.0	8.5
66	壺	連結配置文 5	体部上半に2個一対の突起で構成される眼鏡状突起が4単位。体部上半に連結配置文。充填文によって工字文状の文様が形成される。	無	9.0	8.4
67	台付壺	連結配置文 5	口縁部に単独の山形突起が1単位。体部上半に連結配置文。充填文によって工字文状の文様が形成される。	L R	(16.4)	11.5

二枚橋(2)遺跡土器観察表(4)

番号	器種	分 類	特 徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
68	台付鉢	連結配置文 2	体部上半に連結配置文。	L R	5.8	12.4
69	壺	連結配置文 2	体部上半に連結配置文。底面に 4 単位の脚部。	R L	(8.0)	10.3
70	注口	配置文 I 5	体部上半に配置文が 3 単位残存。配置文によって工字文状の文様が形成される。最張部の隆帯は沈刻により「ハ」の字状の隆線を形成する。底面には 4 単位の脚部。	L R	(7.2)	(11.3)
71	鉢	配置文 III 13	口縁部に 2 個一対の山形突起が 2 単位残存。体部上端は 2 個一対の突起が 4 単位、2 段に渡って互い違いに配される。体部上半は配置文が 2 単位。	R L	(6.8)	16.1
72	注口	上：配置文 III 13 下：配置文 II 5	口縁部に 2 個一対の山形突起が 4 単位、単独の山形突起が 4 単位、交互に配される。体部上半、下半には別々の配置文がそれぞれ 3 単位ずつ施される。	L R	9.1	(10.5)
73	壺	連結配置文 6	口縁部に単独の山形突起。体部上端に 2 個一対の突起で構成される眼鏡状突起が 4 単位。体部上半には連結配置文。	無	17.1	14.5
74	壺	配置文 III 13	頸部の沈刻と沈線の間に刻み。体部上半、下半に同じ配置文が 3 単位ずつ施される。赤彩。	R L	7.9	6.2
75	鉢	配置文 III 13	体部上端に 2 個一対の突起で構成される眼鏡状突起が 4 単位。体部に配置文が 4 単位。充填文により工字文状の文様を形成する。	R L	5.3	8.6
76	壺ミニ	配置文 III 8	口縁部に単独の山形突起が 1 単位。体部上半に配置文が 2 単位。	無	8.2	3.9
77	壺	配置文 II 3	口縁部に 2 個一対の山形突起が 2 単位残存。体部上半には配置文が 5 単位。赤彩。	無	11.6	12.1
78	壺	配置文 III 11	体部に 4 段に渡って配置文（綾杉文）が、1 段ずつ交互に向きを変えて施される。赤彩。	無	13.3	11.6
79	壺	配置文 III 11	体部上半に 2 段に渡って配置文（綾杉文）が、1 段ずつ交互に向きを変えて施される。	無	(6.6)	7.6
80	壺	配置文 III 11	口縁部に 2 個一対の山形突起が 1 単位残存。体部上半に配置文（綾杉文）が施される。赤彩。	無	8.1	7.9
81	浅鉢	配置文 III 11	口縁に B 突起が 3 単位残存。体部上端に 2 個一対の突起が 2 単位残存。体部には 2 段に渡って配置文（綾杉文）が 1 段ずつ向きを変えて施される。赤彩。	無	5.3	(17.6)
82	浅鉢	配置文 II 2	口唇上面に山形突起が 4 単位。口唇外面に刻み。沈線が山形突起を貫いて口唇上面を一巡。口唇上面の沈線は口唇外面の刻みと刻みの間の位置で三角の張り出しを作り、小波状の隆帯を形成している。体部には配置文を 2 単位施し、充填文によって X 状の文様を形成している。	L R	(6.3)	25.0
83	浅鉢	区画文 6	口唇上面に単独の突起と 2 個一対の突起が 1 単位ずつ残存。体部には区画文が 2 単位残存。	R L	(17.0)	不明
84	浅鉢	区画文 4	口唇上面に単独の山形突起（残存 3 単位）と 2 個一対の山形突起（残存 2 単位）を交互に配する。比較的小型の 2 個一対の山形突起が単独の山形突起の左右上面にそれぞれ 1 ずつずつ配される。体部には区画文が 5 単位残存。	L R	15.0	37.1

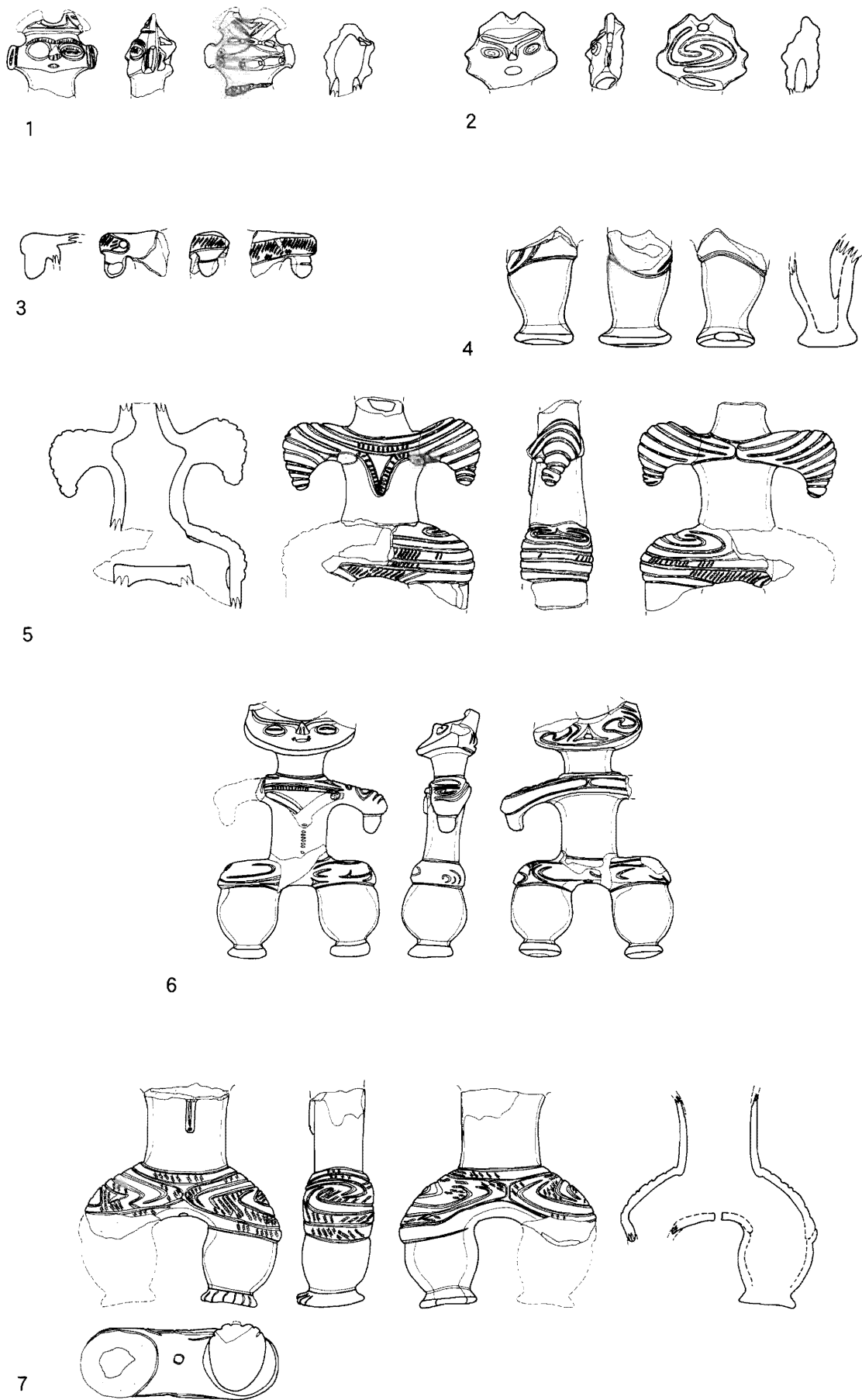
二枚橋(2)遺跡土器観察表(5)

番号	器種	分類	特徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
85	浅鉢	区画文 5	口唇上面に比較的大きな山形突起、その両脇には、比較的小さな山形突起を施す。大きな山形突起を貫いて口唇上面を一巡する沈線は外面側に鋸歯状にしており、口唇外面を連続する刻み目と噛み合って小波状の隆帯を形成している。体部には区画文が2単位残存し、充填文によって雲形文を形成している。	L R	(10.5)	不明
86	壺	配置文Ⅲ 18	体部上半に配置文を2単位施している。充填文により工字文状の文様を形成する。	L R	(14.3)	18.2
87	壺	配置文Ⅲ 3	口唇上面から口唇外面にかけて突起を菱形の配置で4個一対で配しており、残存は1単位のみ。体部上端に山形突起を4単位。体部上半に配置文を2単位施している。2つの配置文はかなり形状が異なるが、どちらも引き伸ばしたC字文を基礎として付加部を設けたものであるため、配置文Ⅲ 3に分類した。	L R	16.7	19.2
88	鉢	配置文Ⅲ 1	小波状口縁。口縁の突起になっている部分の外面に刺突。体部上端に2個一対の突起が6単位配される。体部上半に配置文が5単位。	R L	(8.9)	13.8
89	高杯	配置文Ⅲ 5	口縁に比較的大きな突起が2単位残存、2個一対の比較的小さな突起が5単位残存。体部には配置文が2単位残存。	R L	(5.0)	(16.3)
90	壺	配置文Ⅲ 7	口唇上面に2個一対の山形突起が1単位。口唇外面に2個一対の突起が1単位。体部には配置文が3単位。接合困難な複数の破片に分かれており、実測を行えなかったため、外形と拓本のみで資料化した。赤彩。	無	(11.8)	(14.8)
91	鉢	配置文Ⅲ 6	口唇上面に刻み目が連続。体部上端には、2個一対の突起3つと、大きな突起の剥離痕の計4つが等間隔に配される。角状突起の剥離痕の左右に2個一対の突起が1つずつ配されている。体部上半には配置文が4単位施される。	R L	(9.7)	15.0
92	鉢	配置文Ⅲ 3	小波状口縁。口縁の突起になっている部分の外面及び頸部3本の平行沈線間に刺突。体部上端に2個一対の突起が4単位残存。体部上半・下半共に配置文がそれぞれ2単位残存。	R L	(6.8)	14.0
93	壺	配置文Ⅲ 4	頸部下端の沈刻と体部上端の沈線の間に刻み。体部には配置文が2単位噛み合う形で施されるため、上向きと下向きのC字文が交互に噛み合って一巡する形状となる。赤彩。	無	7.4	5.9
94	台付鉢	配置文Ⅱ 4	体部上端に突起が8単位残存。体部上半には配置文が3単位施される。	L R	(6.4)	11.7
95	鉢	不明	配置文Ⅱ 4に似た沈線文が体部に描かれるが、残存部からは文様の規則性を完全には判断できない。	無	(4.7)	11.0
96	壺	配置文Ⅱ 4	体部上半に配置文が3単位施され、文様帯の上端及び下端で、2本の平行沈線間に横位の短沈線が連続する。赤彩。	無	7.4	7.0
97	壺	連結配置文 1	口縁に単独の比較的大型の山形突起、小型の2個一対の山形突起が5単位。大型の突起は口唇上面に引かれた短沈線により切られる。体部上半には連結配置文が施される。赤彩。	R L	6.3	7.8
98	壺	上：配置文Ⅲ 10 下：区画文 8	口唇上面に山形突起、外面に2個一対の突起が互い違いの位置関係でそれぞれ4単位ずつ配される。体部上端には、2個一対の突起が4単位配される。体部は上半に配置文が3単位、下半に区画文が4単位施される。	無	9.0	8.5
99	壺	区画文 1	口唇上面の山形突起と口唇外面の突起が互い違いに9単位ずつ配される。口唇上面の山形突起のうちひとつは大型で前後に二又になっている。体部には区画文が7単位施され、文様帯下端では2本の平行沈線間に横位の短沈線が施される。赤彩。	L R	7.9	9.2

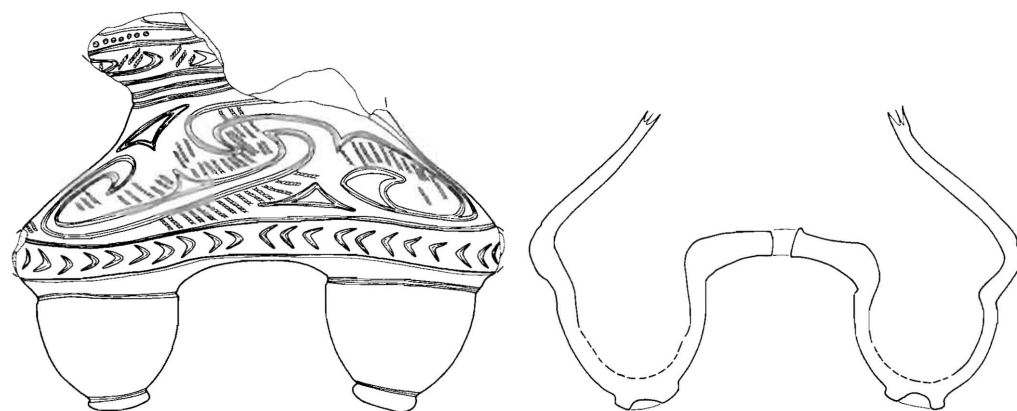
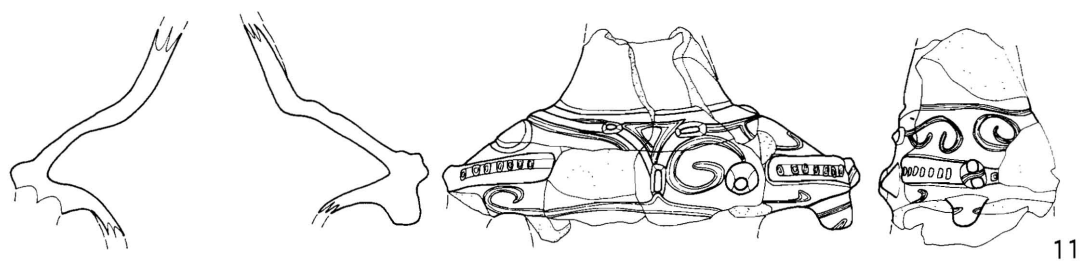
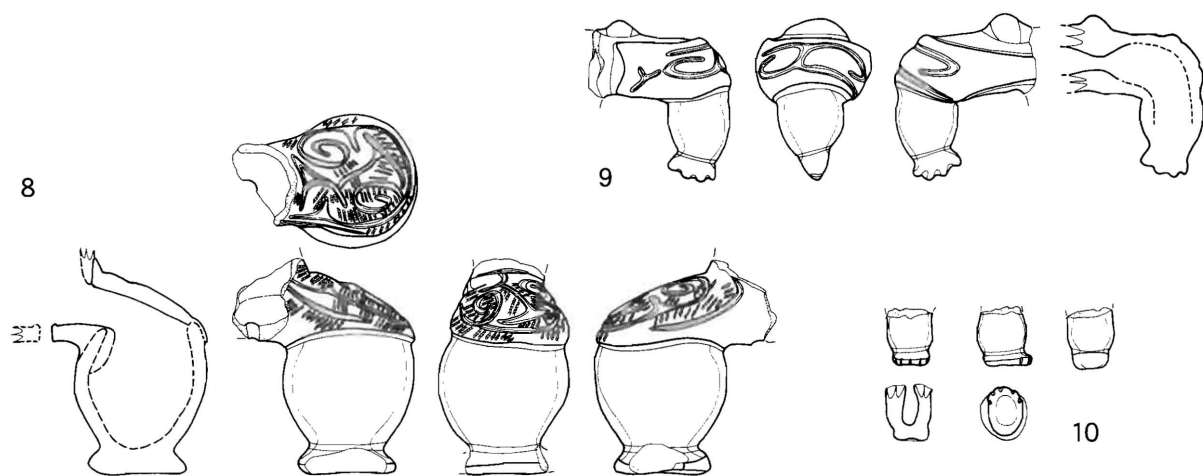
二枚橋(2)遺跡土器観察表(6)

番号	器種	分 類	特 徴	縄文	大 き さ (cm)	
					器 高	器 幅
100	壺	区画文 2	口唇上面に単独の山形突起、外面に 2 個一対の突起が 1 つ。山形突起の左右の上面に 2 個一対の突起が 1 つずつ付く。体部上半には区画文が 4 単位。口唇外面の 2 個一対の突起直下に 2 つの穿孔。	R L	9.3	9.7
101	壺	区画文 1	口唇外面に 1 個の眼鏡状突起、その左右の上面に 2 個一対の突起が 1 個ずつ。体部は二段にわたって同じ区画文が互い違いに 7 単位ずつ施される。体部文様帯の上端及び上下段を区分する平行沈線間には、区画文同様の刺突が施される。体部を縦に貫く亀裂上にアスファルト付着。	R L	8.5	10.2
102	鉢	不明	体部上端に、左右に 2 個一対の突起が 1 つずつ配された角状の突起。角状突起のほかに 2 個一対の突起が 1 単位残存。体部には地文の縄文の上に沈線による文様が施されるが、残存部のみからは規則性を判断できなかった。	L R	6.6	(8.2)
103	壺	区画文 2	体部上半に区画文が 6 単位施される。赤彩。	R L	(7.3)	12.4
104	鉢	区画文 3	口唇上面に刻み。体部上半に区画文が 6 単位。	R L	(11.1)	(22.4)
105	鉢	配置文Ⅲ 12	口唇上面に刻み。口縁から体部上端にかけての外面に比較的大きな把手状突起が 1 個。また体部上端には 2 個一対の突起が 6 単位残存。体部上半には配置文が 5 単位残存。	R L	14.0	16.5
106	鉢	配置文Ⅱ 6	口唇上面に、先端がリング状の突起及び 2 個一対の山形突起が 1 単位ずつ残存。体部上端には 2 個一対の突起が 2 段にわたって互い違いに施され、上段は 2 単位、下段は 1 単位残存。体部上半には配置文が 2 単位残存。体部と台部の境には 2 個一対の突起が 2 単位残存。	R L	14.5	(16.6)
107	壺ミニ	不明	体部から底面にかけて不規則な沈線文が施される。	無	3.7	3.9
108	壺ミニ	不明	体部には不規則な沈線文が施される。	無	(3.0)	3.5
109	壺	不明	横位に連続する弧状の沈刻によって区切られた頸部、体部上半、体部下半にやや規則性に乏しい沈線文が施される。	無	9.2	10.0
110	注口	不明	口縁部及び体部上半、台部には沈刻によって三角形の隆帯が形成されている。三角形の隆帯の頂点には 2 個一対の突起が施される。体部上半及び台部の隆帯上に刻み。体部下半にはやや規則性に乏しい沈線文が施される。台部の沈刻部は透かし彫り。	無	(9.4)	(11.4)
111	台付鉢	配置文Ⅰ 6	口縁部には 2 個一対の山形突起が 4 単位。体部上端には 2 個一対の突起が 4 単位。体部には配置文が 4 単位。赤彩。	無	(5.0)	(11.6)

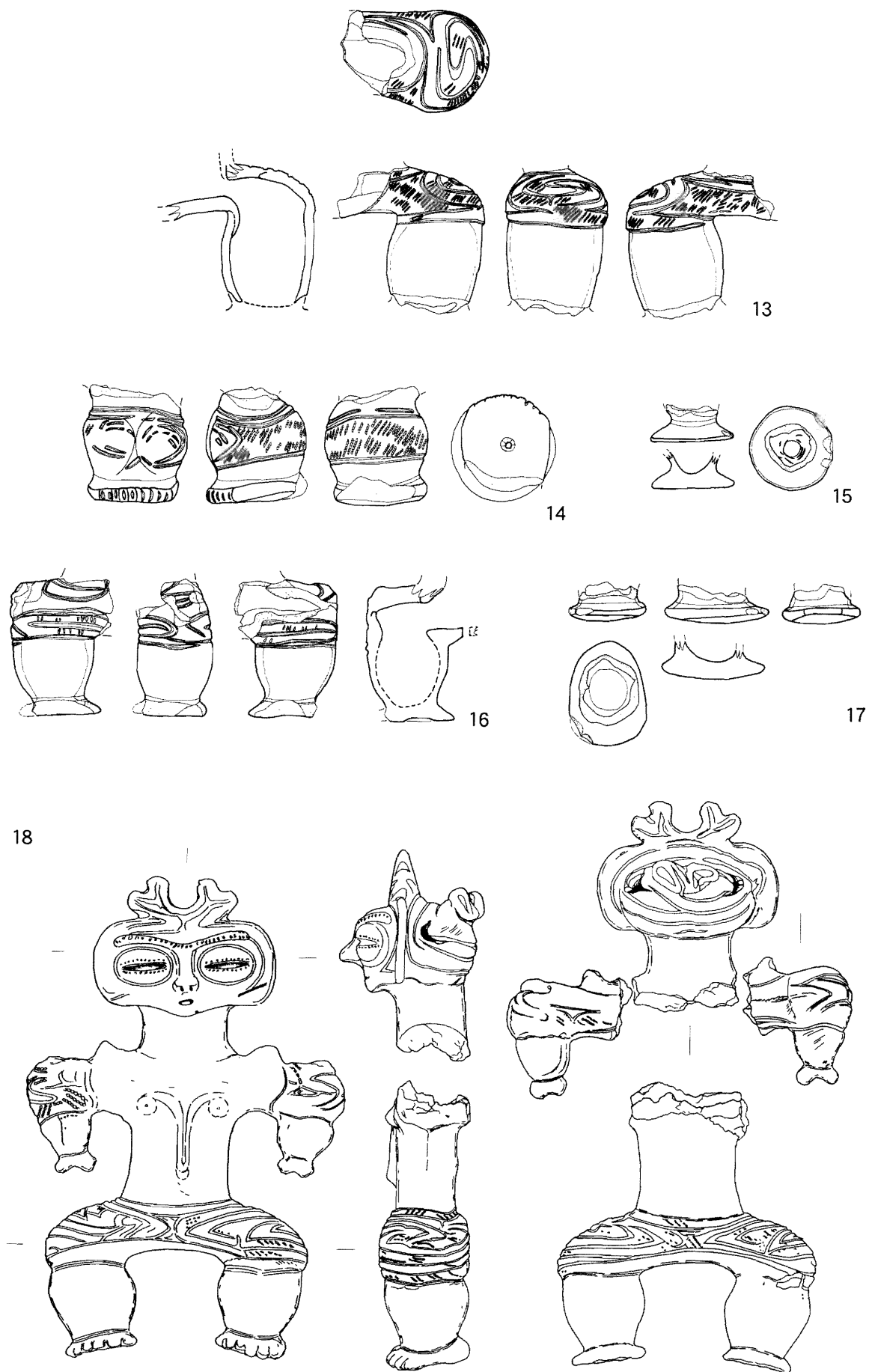
二枚橋(2)遺跡土器観察表(7)



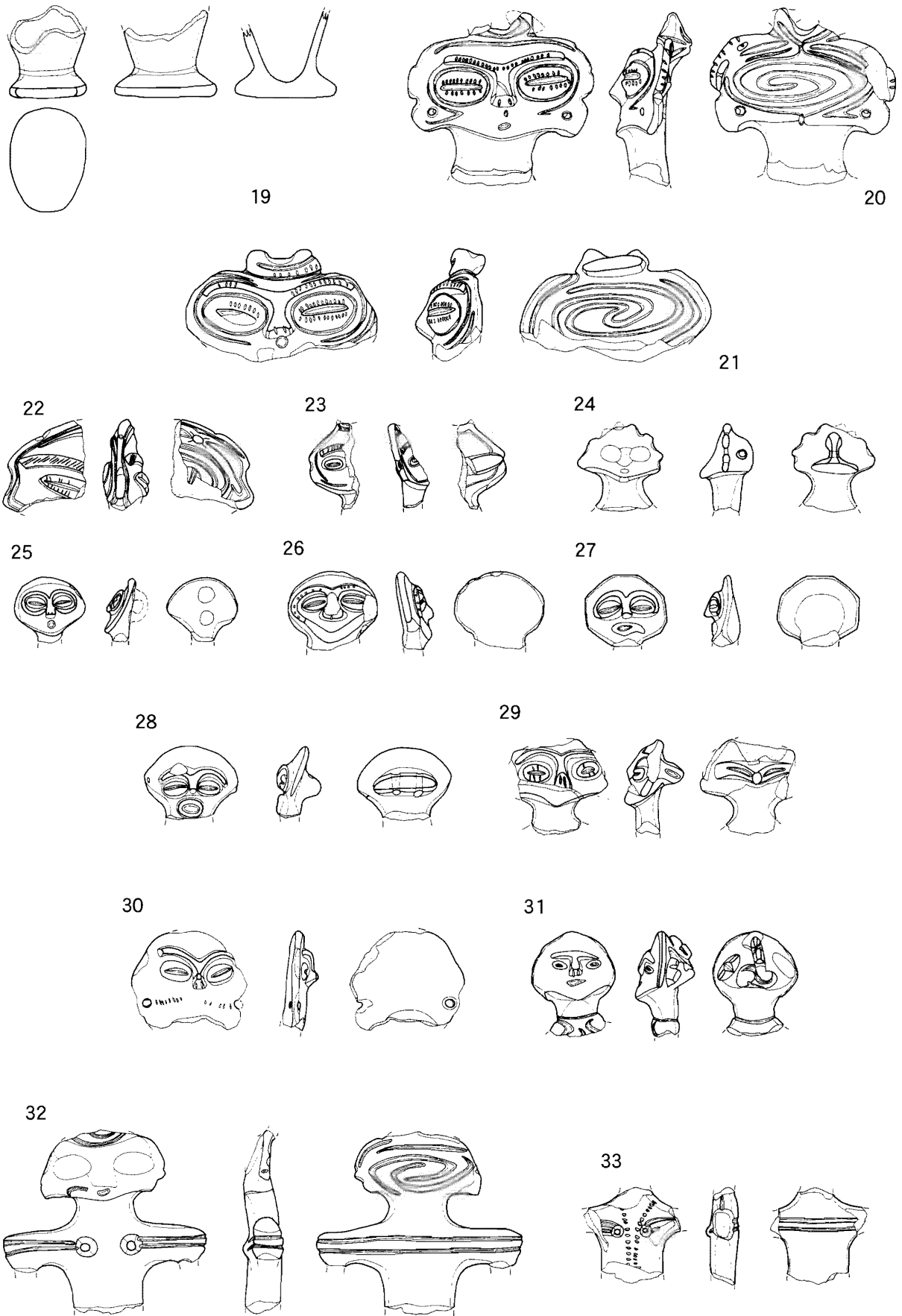
第37図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図1～7)



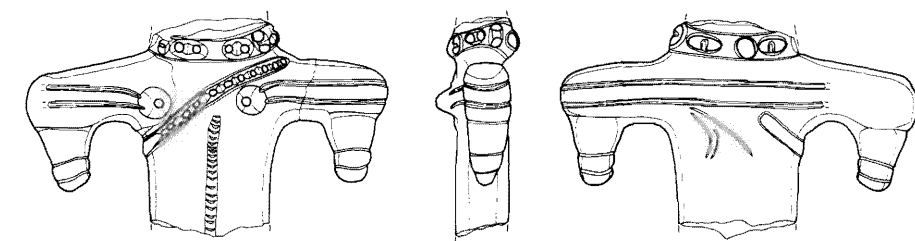
第38図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図8~12)



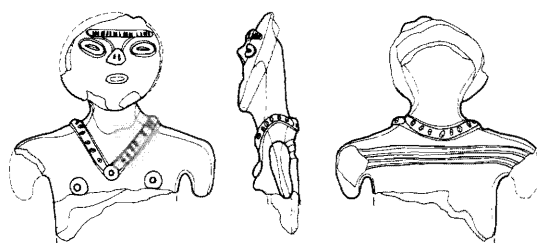
第39図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図13~18)



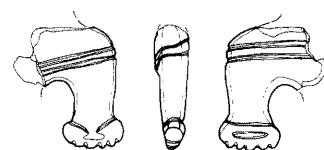
第40図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図19~33)



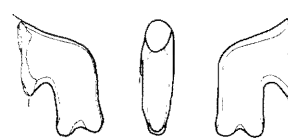
34



35

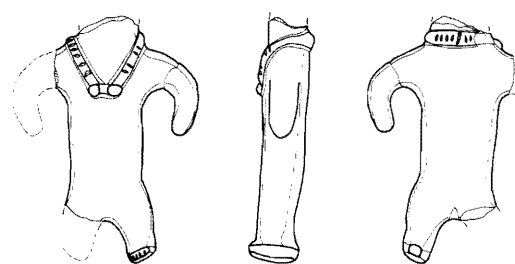
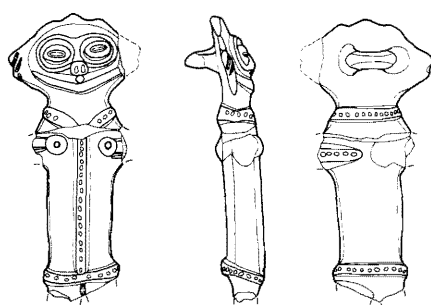


36



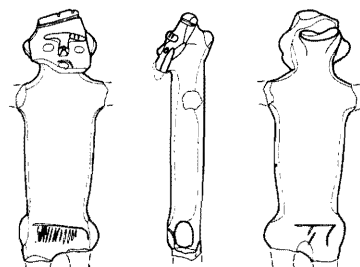
37

38

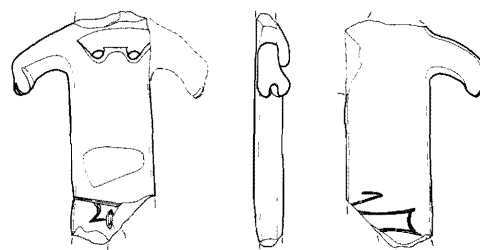


39

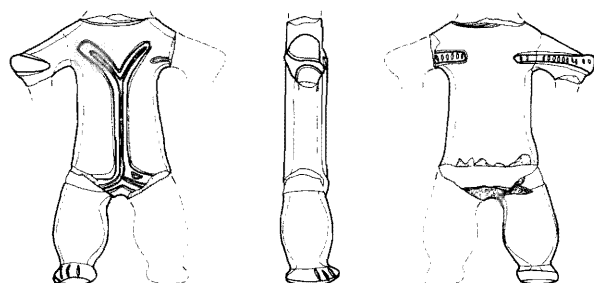
40



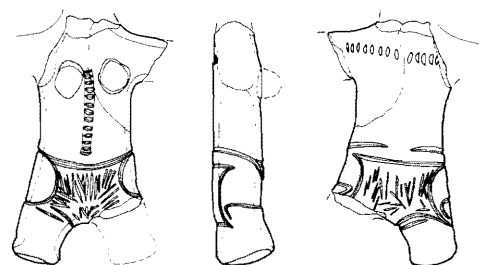
41



42



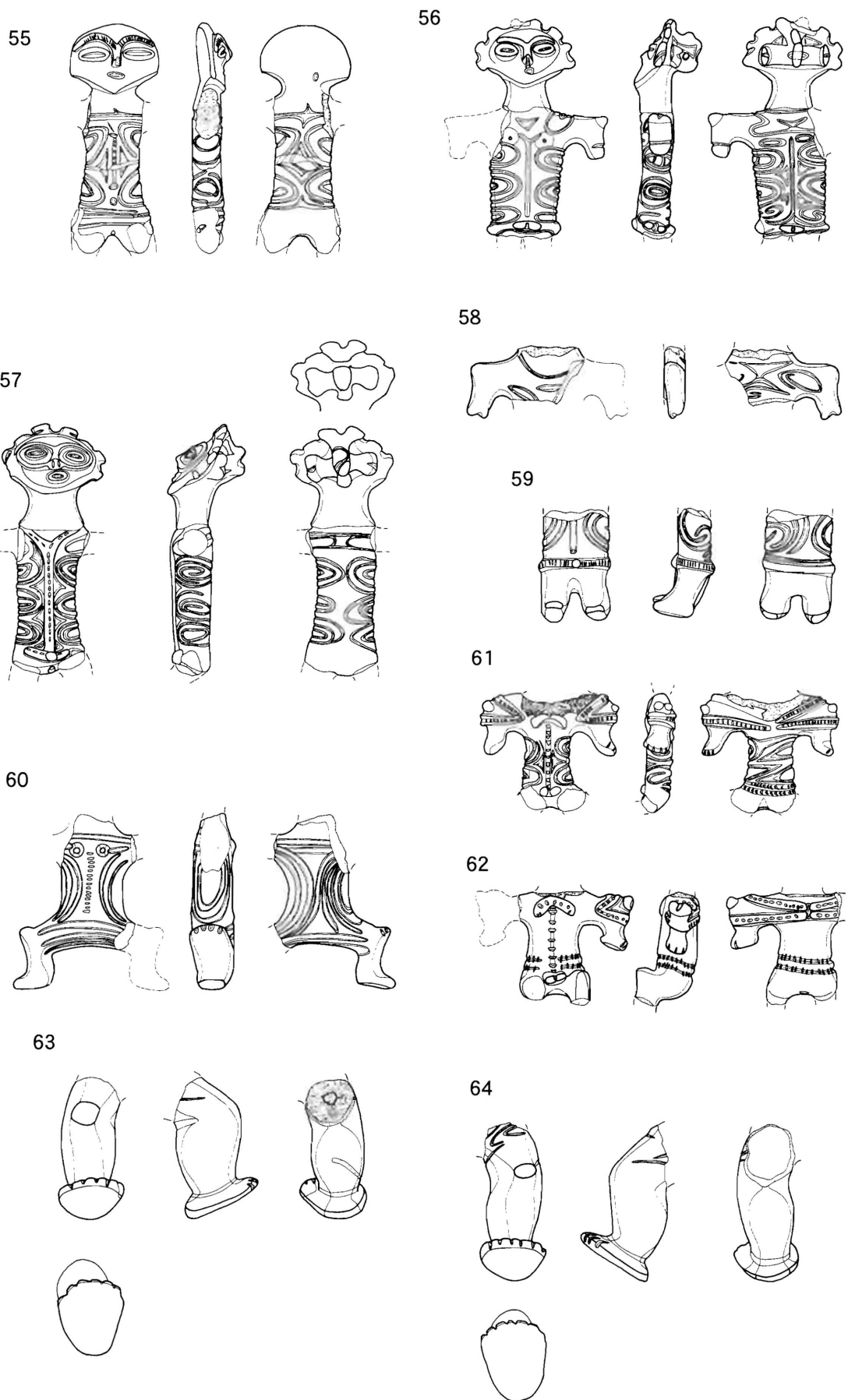
43



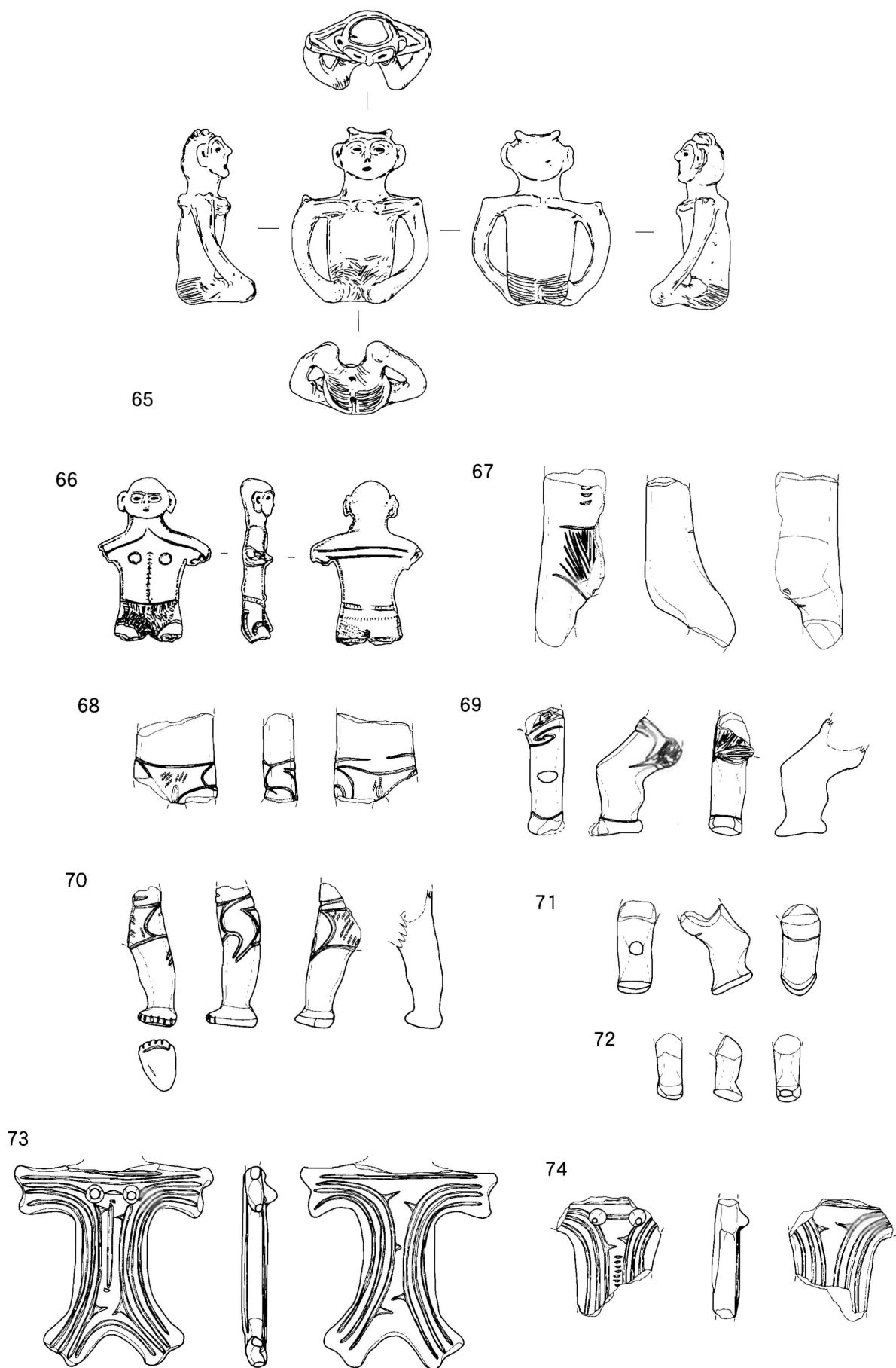
第41図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図34~43)



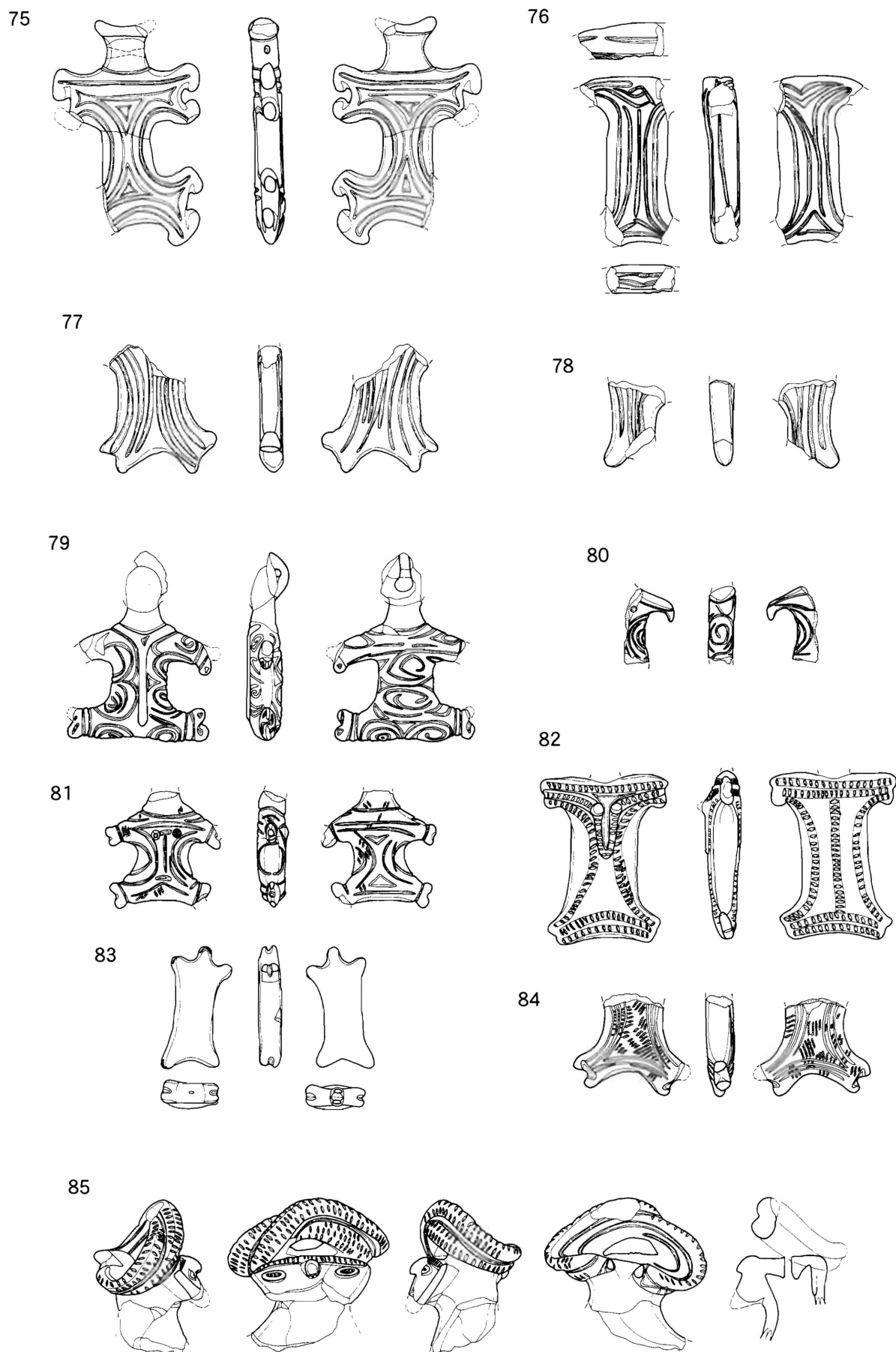
第42図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図44~54)



第43図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図55~64)

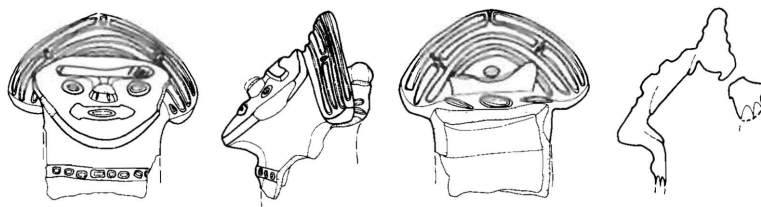


第44図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図65~74)



第45図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図75~85)

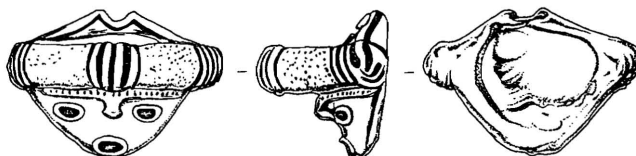
86



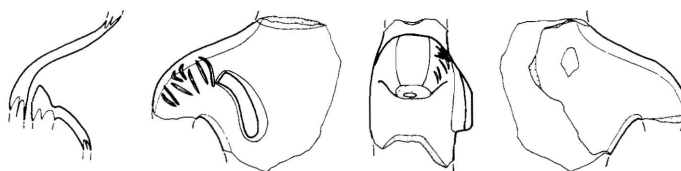
87



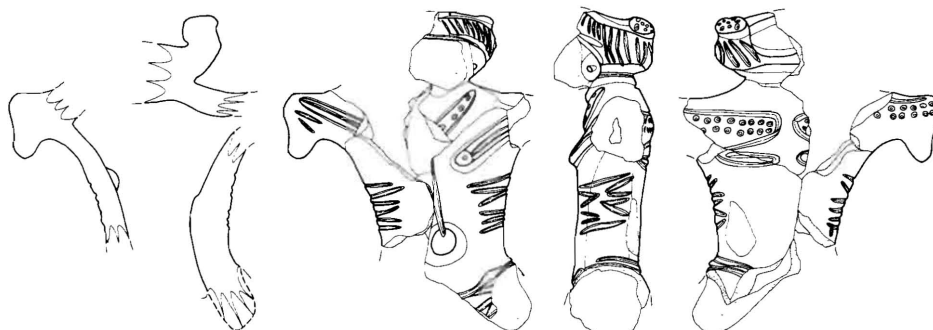
88



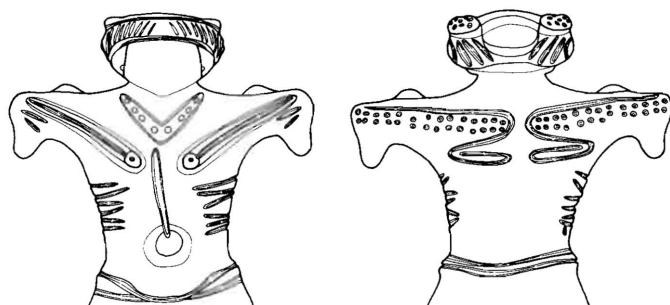
89



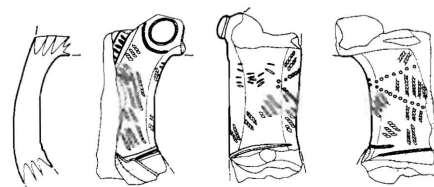
90



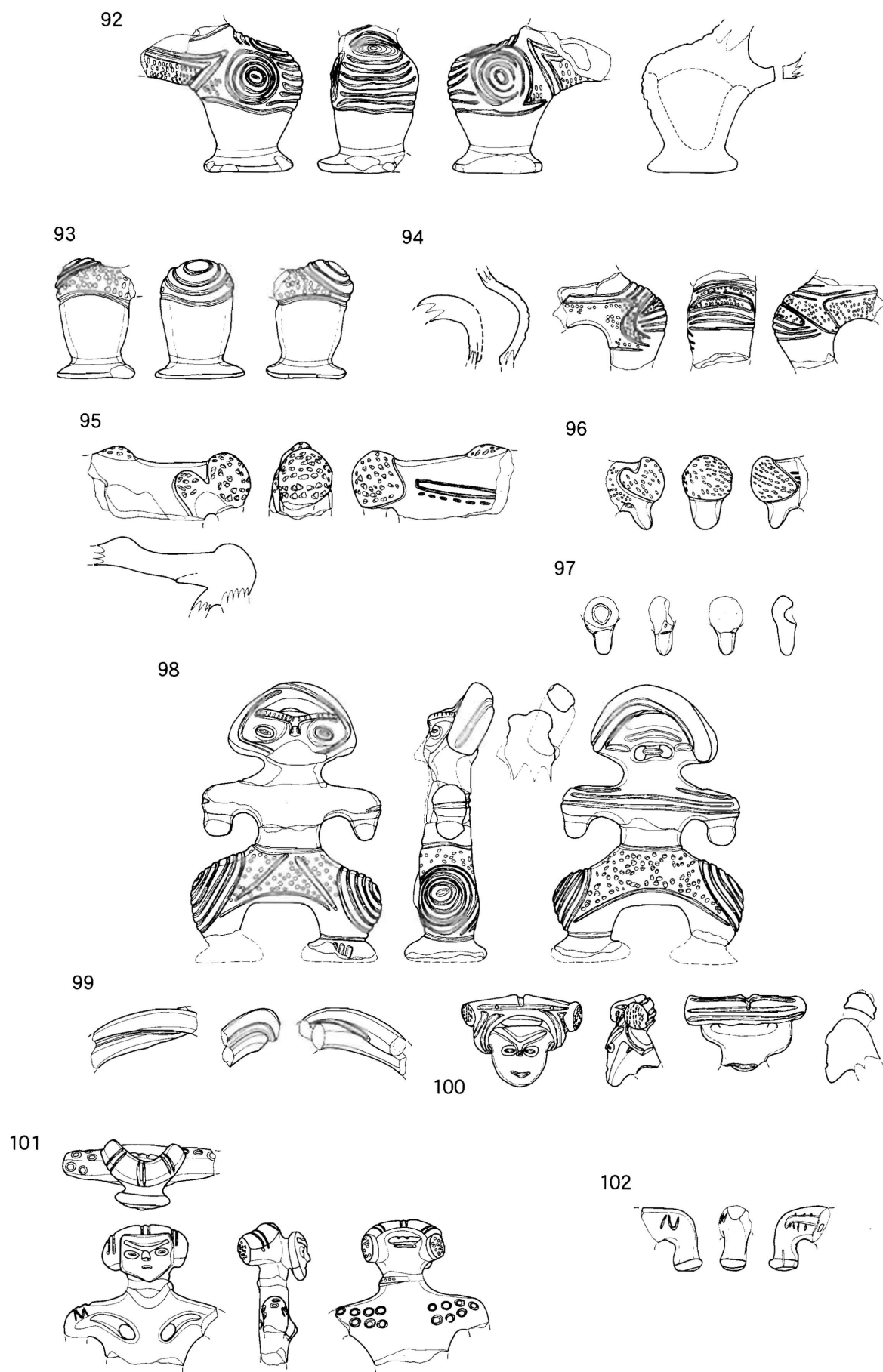
90の復元図



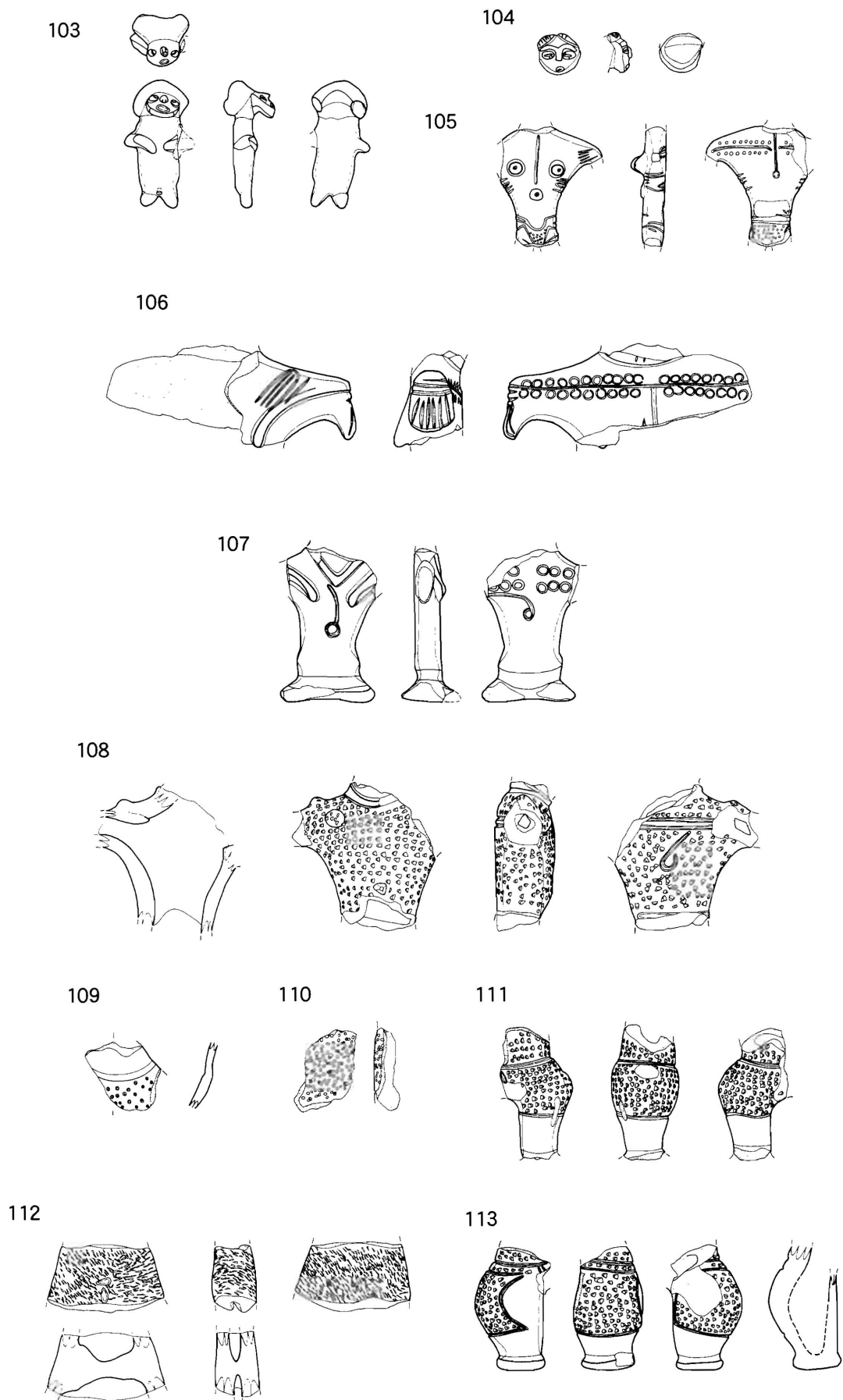
91



第46図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図86~91)

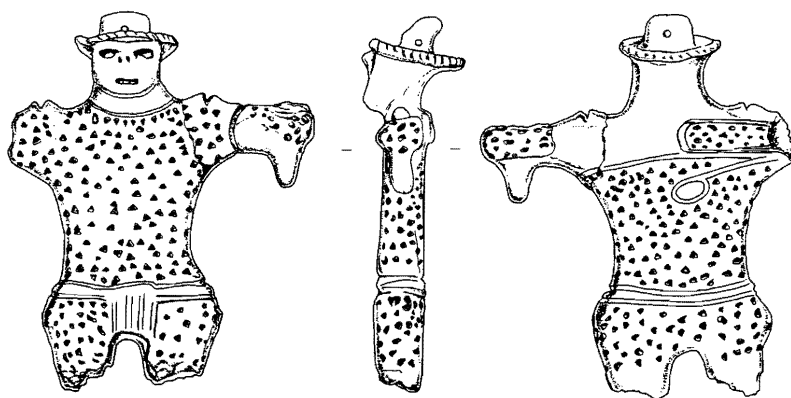


第47図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図92~102)

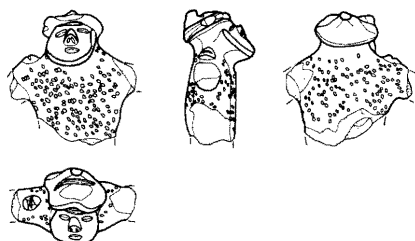


第48図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図103~113)

114



115



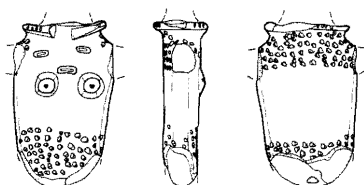
116



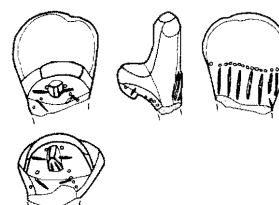
117



118



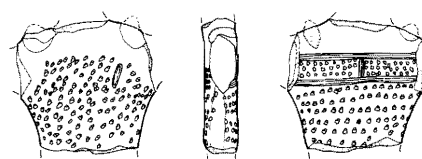
119



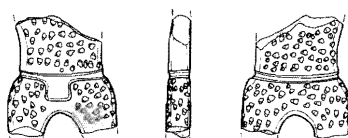
120



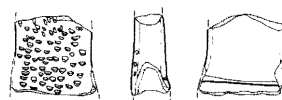
121



122



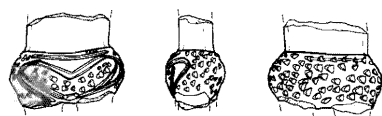
123



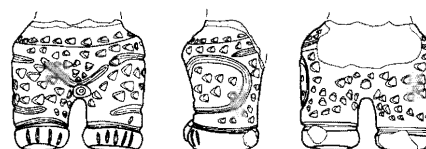
124



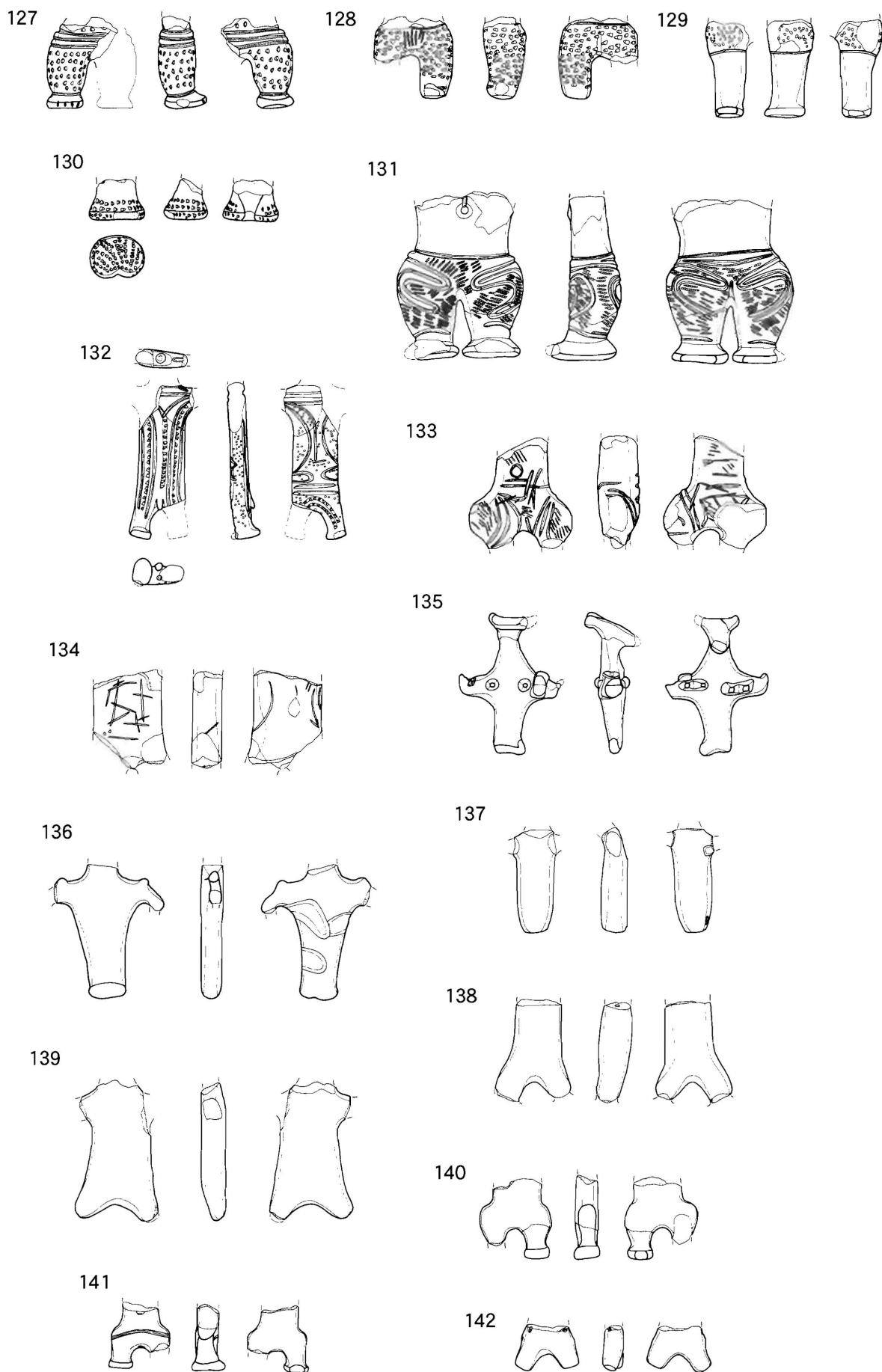
125



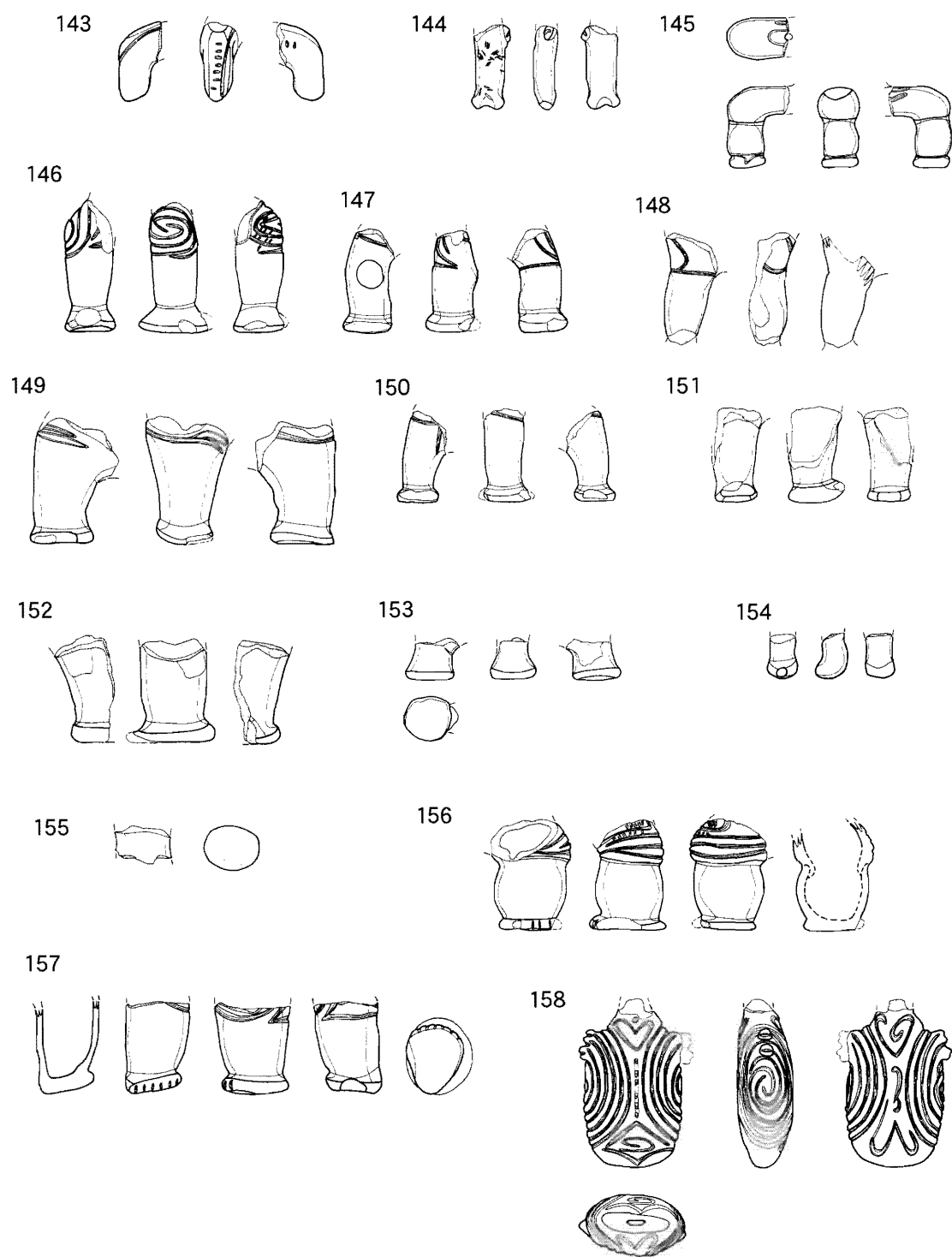
126



第49図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図114~126)



第50図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図127~142)



第51図 二枚橋(2)遺跡出土土偶 (図143~158)

番号	残存部	分類	作り	乳房	性器	正中線	赤彩	縦(cm)	横幅(cm)	重さ(g)	備考
1	1	Ⅱ a	空	—	—	—	○	5.5	5.8	41.7	角状突起、後頭部に透かし、右目剥離、首破損面にアスファルト。
2	1	Ⅱ a	空	—	—	—	×	3.7	4.7	20.2	角状突起、後頭部に入組沈線文。
3	3	Ⅱ a	空	—	—	—	×	2.4	3.5	10.5	乳房から背面にかけて隆帯。LR縄文。
4	5	Ⅱ a	空	—	—	—	×	6.0	3.6	41.2	パンツ状区画文。
5	2,3,4	Ⅱ a	空	○	×	隆・刺	○	12.8	10.3	153.7	腕部分は中実になっている、乳房剥離、正中線は隆帯、尻に入組沈線文、LR縄文、乳房にアスファルト。
6	1,2,4,5,6	Ⅱ a	空	剥離	穿孔	隆帯	○	13.6	8.9	123.6	顔が斜め上を向く、正中線は隆帯で一部剥離、股に穿孔、肩・腰部に入組沈線文。左の乳房にアスファルト。
7	2,6	Ⅱ a	空	—	穿孔	隆・沈	○	11.7	10.1	114.6	正中線は隆帯、股に穿孔、腰部に入組沈線文、RL縄文、足の指の表現。
8	5 or 6	Ⅱ a	空	—	穿孔	—	×	8.8	7.4	99.2	入組沈線文、LR縄文。
9	4	Ⅱ a	空	×	—	—	×	6.6	5.6	82.6	肩部隆帯に沈線文、手の指あり。
10	5 or 6	Ⅱ a	空	—	—	—	○	2.3	1.9	8.2	足の指の表現。
11	2,4	I	空	○	—	—	×	8.7	16.7	214.6	肩部に隆帯、渦巻き文、風化が著しい。
12	2,5,6	I	空	—	穿孔	沈線	×	16.4	19.6	526.6	わずかにLR縄文が残る、C字状沈線文の組み合わせ。
13	5 or 6	Ⅱ a	空	—	×	—	×	8.0	7.9	122.2	入組沈線文、LR縄文、腰部と脚部に輪積み痕。パンツ状の区画文。
14	6	Ⅱ a	空	—	—	—	×	6.4	5.6	105.6	LR縄文、体部との境は塞がっている、正面は二瘤に隆起、足底に穿孔、足の指先表現。
15	5 or 6	Ⅱ a	空	—	—	—	×	1.9	4.4	19.6	内面に爪あとが残る。黒色物質が付着している。
16	5 or 6	Ⅱ a	空	—	—	—	×	7.4	5.5	77.1	入組沈線文、刻み文、内面の胴部と腰部・腰部と脚部に二箇所の輪積み痕。
17	5 or 6	Ⅱ a	空	—	—	—	○	2.2	4.2	31.6	足の形は楕円形、内面はよく磨いてある。
18	1,2,3,4,5,6	Ⅱ a	空	○	穿孔	隆・沈	○	25.2	16.5	775.0	角状突起、目が大きく膨らむ、肩に瘤状突起、肩・腰部にRL縄文、入組沈線文。
19	5 or 6	Ⅱ a	空	—	—	—	×	4.9	4.2	49.9	足の形は楕円形、内面はよく磨いてある。
20	1	Ⅱ	実	—	—	—	○	9.3	10.0	175.2	角状突起、目が大きく膨らむ、耳に貫通孔、後頭部に渦巻き沈線、土面の容貌によく似る。
21	1	Ⅱ	実	—	—	—	×	6.2	10.3	110.7	角状突起、右目剥離、後頭部に入組沈線文。
22	1	Ⅱ	実	—	—	—	×	4.9	4.5	27.9	目・眉の上に刻み、後頭部に曲沈線文・突起、顔部1/4残存。
23	1	Ⅱ	実	—	—	—	×	4.6	2.6	9.1	裏面隆帯、眉に刻み、顔部1/2残存。
24	1	Ⅱ	実	—	—	—	×	4.7	4.5	26.2	後頭部の突部に貫通孔、眼・鼻・口など剥離。
25	1	Ⅱ	実	—	—	—	×	3.5	3.8	10.9	後頭部の突起の剥落、眼・鼻貼り付け、口は刺突。
26	1	Ⅱ	実	—	—	—	×	4.3	4.9	25.1	眉・目・鼻は貼り付けにより表現、口が無い、顎をわずかに突き出す。
27	1	Ⅱ	実	—	—	—	×	3.9	4.4	19.0	顔面は八角形、後頭部が膨らむ。
28	1	Ⅱ	実	—	—	—	×	4.0	5.0	25.1	後頭部の突起に縦位の穿孔2つ。

二枚橋(2)遺跡出土土偶観察表(1)

番号	残存部	分類	作り	乳房	性器	正中線	赤彩	縦(cm)	横幅(cm)	重さ(g)	備 考
29	1	Ⅱ	実	—	—	—	×	5.2	5.1	36.6	後頭部に三角形突起。
30	1	Ⅱ	実	—	—	—	×	5.3	6.2	31.7	口が無い、耳に貫通孔、首周りに刻み列、扁平な作り。
31	1	Ⅱ	実	—	—	—	○	5.7	4.5	41.6	後頭部に突起、首から体に曲沈線文。
32	1,2	Ⅱ b	実	○	×	—	×	10.0	11.0	127.1	眼・鼻の剥離、後頭部に入組沈線文、背面から胸部に二条の沈線文。
33	2	Ⅱ b	実	○	—	二条刺	?	5.3	5.3	34.7	正中線はY字に二条の刺突列、背面に二条の沈線。
34	2,4	Ⅱ b	実	○	—	刻み	×	9.9	14.5	224.2	首周りに二個一對の突起列、たすき掛け状の突起列、背面から胸部に二条の沈線。
35	1,2,4	Ⅱ b	実	○	—	—	○	9.1	8.1	68.1	首周りに隆帯、刺突、体部は無文。
36	3 or 4	Ⅱ b	実	—	—	—	×	4.9	4.5	20.1	手の指先表現、背面から胸部に二条の沈線、表裏不明。
37	3 or 4	Ⅱ b	実	—	—	—	×	4.7	3.4	17.8	無文、二股に分かれる、表裏不明
38	1,2,4	Ⅱ b	実	○	凹	隆・刺	○	11.6	4.7	62.5	後頭部に橋状の突起、首周りと腰に微隆帯、胴が長い。
39	2,4,6	Ⅱ b	実	×	刺突	×	×	9.0	5.9	82.1	胴体は無文、首回り隆帯に刺突と突起、足の指先表現、黒色物質が右足に付いている。
40	1,2	Ⅱ b	実	×	×	×	×	10.2	3.8	52.1	耳の張り出しあり、胴体無文、胴が長い。パンツ状の区画文。
41	2,3	Ⅱ b	実	連結	凹	×	×	9.5	5.7	53.0	無文、手は二股、胴が長い、パンツ状区画文、腹部は剥離痕か発掘時の傷。
42	2,5	Ⅱ b	実	×	×	隆帯	×	10.8	6.6	82.8	Y字状の隆帯による正中線、左足にアスファルトによる補修痕、足の指先表現。
43	2,5	Ⅱ b	実	剥離	×	刻み	×	10.1	6.2	97.7	乳房剥離、刻み列による正中線、パンツ状区画文。
44	1,2,5,6	Ⅱ b	実	○	×	×	×	8.5	3.4	28.5	後頭部に剥落痕あり、右乳房剥落、胴部無文、パンツ状区画文、足は少し前に出る。
45	2,5,6	Ⅱ b	実	—	刺突	×	×	5.8	4.1	38.6	胴部無文、パンツ状区画文、足は少し前に出る。
46	2,4,5,6	Ⅱ b	実	○	凹・刺	刺突	×	7.5	5.3	38.5	乳房を繋ぐ刺突列、背面は刺突文、パンツ状区画文。臍は隆帯。
47	1,2,3	Ⅱ b	実	○	×	沈線	×	8.7	6.0	75.6	顔がわずかに上方を向く、背上部の工字文は隆帯。臍は窪んでいる。
48	1,2	Ⅱ c	実	×	—	×	○	12.6	9.6	257.0	眼の剥落、入組沈線文。
49	2,5	Ⅱ c	実	○	—	沈線	×	9.7	5.6	55.5	表と背面では異なる文様、パンツ状区画文、3地点からの接合資料。
50	2,3,5,6	Ⅱ c	実	○	×	刺・沈	×	8.4	6.4	43.4	肩と腰部分の隆帯の剥落、渦巻き沈線文、足は少し前に出る。
51	2,5,6	Ⅱ c	実	○	×	沈線	×	9.4	8.2	70.5	肩と腰回りに隆帯と刺突とB突起。渦巻き文・入組沈線文、三叉文。
52	2,3,4,5,6	Ⅱ c	実	○	刺突	隆・刺	?	11.5	9.8	179.7	肩に沈線文が引かれ首側に細かい刺突、胸から背面と腰回りに隆帯、渦巻き沈線文。
53	1,2,3,4	Ⅱ c	実	○	—	沈線	×	7.5	6.6	32.9	頭部が右に傾く、右目剥落、左乳房は剥落面に刺突あり。曲沈線文が施文、風化が激しい。

二枚橋(2)遺跡出土土偶観察表(2)

番号	残存部	分類	作り	乳房	性器	正中線	赤彩	縦(cm)	横幅(cm)	重さ(g)	備考
54	2	Ⅱ c	実	—	×	沈線	×	6.0	3.4	26.7	首・両腕は剥落、胴部に入組沈線、三叉文。胴部の破損面にアスファルト。
55	1,2	Ⅱ c	実	×	刺突	刺突	×	11.9	4.6	75.4	頭部は扁平、乳房が無い、胴部に左右対称の沈線文、脚部は接合部での欠損。
56	1,2,4	Ⅱ c	実	○	—	—	○	11.4	6.8	91.2	両乳房とも剥離面に刺突が残る、後頭部の突起、肩を左右に張り出す同心円の沈線文。
57	1,2	Ⅱ c	実	隆帯	刺突	隆・刺	○	13.1	5.3	94.5	後頭部の突起、胴部に渦巻き沈線文、背上部に微隆起と沈線、脚部が前に突き出る可能性。
58	2,3	Ⅱ c	実	×	—	—	×	3.9	6.0	19.4	背面に沈線文が多い、風化が激しい、首破損面にアスファルト。
59	2,5,6	Ⅱ c	実	—	×	沈線	○	5.9	3.7	45.8	胴部は入組沈線文、腰回りに隆帯で刻みと突起、足は前に突き出る。
60	2,5	Ⅱ c	実	○	×	刺突	×	8.1	6.5	80.3	胴部に弧線と直沈線文、背面文様は点対称となる。足は大腿に開く。
61	2,3,4	Ⅲ b	実	×	刺突	刺突	×	6.2	7.2	45.0	胴部正面は曲沈線文、背面は三角沈線文、腰に二条刺突列、首破損面にアスファルト。
62	2,4	Ⅲ b	実	リボン状	刺突	刺突	×	5.9	5.9	54.8	肩部には突起と隆帯がつく、腰回りに二条の刻み列、手の指先表現、椅子に腰掛けるように屈折する。首破損面にアスファルト。
63	5	Ⅲ b	実	—	—	—	×	7.5	3.4	69.7	右足、膝で屈折、足の指先の表現、足の付け根にアスファルト。パンツ状の区画文の一部がみられる。
64	6	Ⅲ b	実	—	—	—	×	8.3	3.4	69.1	左足、足の付け根部分に入組沈線文とパンツ状区画文の一部が見える。
65	1,2,3,4,5,6	Ⅲ a	実	○	刺突	×	×	9.2	7.4	94.1	角状突起、肩に瘤状の突起、足は前方に突き出し腕が乗る、腰に沈線が引かれる。
66	1,2	Ⅲ b	実	○	刺突	刺突	×	8.7	6.0	59.3	耳の表現が明瞭、背面に二条の沈線文、腰に沈線が引かれる。パンツ状区画文。
67	2	Ⅲ b	実	—	刺突	刺突	×	9.5	3.5	104.3	縦に割れている、正中線・パンツ状区画文・性器を確認できる、風化が激しい。
68	2	Ⅲ b	実	—	凹	×	×	4.8	4.5	37.4	パンツ状区画文内の前後に窪みある、パンツ内はLR縄文。屈折土偶の可能性が高い。
69	6	Ⅲ b	実	—	—	—	×	6.4	2.2	37.7	60の右足に似る、パンツ状区画文の下に入組沈線文、胴部に足を接合した跡がソケット状に窪む。
70	6	Ⅲ b	実	—	—	—	?	7.5	2.6	32.3	足の屈折具合は前へ突き出す程度、足に指先の表現、足の裏にも沈線、パンツ状区画文内はLR縄文。
71	5	Ⅲ b	実	—	—	—	×	5.0	2.1	24.3	ひざ小僧が見られる。
72	5 or 6	Ⅲ b	実	—	—	—	×	3.6	1.5	7.2	無文、足はつまみ出しにより作り出す。
73	2,3,4,5,6	Ⅳ	実	○	—	沈線	○	10.9	10.7	103.1	三条一組の沈線が腕から足に施文、内側の沈線は棘状の沈線文となっている。
74	2	Ⅳ	実	○	×	刺突	○	6.5	5.6	44.6	三条一組の沈線文、正中線の表現は異なるが73の文様に酷似。
75	1,2,3,4,6	Ⅳ	実	×	×	文様	○	12.1	7.9	95.7	頭部に左右から刺した貫通孔、乳房無し。
76	2	Ⅳ	実	×	刺突	沈線	×	9.0	4.7	66.5	頭部が接合するはずの面に沈線文がある。頭部無しか。乳房無し。

二枚橋(2)遺跡出土土偶観察表(3)

番号	残存部	分類	作り	乳房	性器	正中線	赤彩	縦(cm)	横幅(cm)	重さ(g)	備考
77	2,5,6	IV	実	—	×	文様	×	7.0	6.3	42.4	縦方向の曲沈線文、足は先端が二又に分かれる。
78	2,5	IV	実	—	×	文様	○	4.6	3.4	16.6	縦方向の沈線文、沈線内に赤彩が残る、表裏不明。
79	2,4,5,6	IV	実	×	○	隆帯	?	10.2	7.6	72.7	顔面部剥落。後頭部に橋状突起があり、X字形土偶には珍しい。磨耗が激しい。黒色物質の付着。
80	2,4	IV	実	刺突	—	—	×	4.1	2.9	8.6	縦半分に割れている、乳房の位置に刺突、渦巻き沈線文。
81	2,3,4,5,6	IV	実	○	沈線	沈線	×	6.3	6.2	39.0	RL縄文を転がしてから沈線文を施す。左乳房の剥落面にアスファルトの付着。臍は刺突で表現。
82	2,3,4,5,6	IV	実	○	×	隆・沈	×	9.1	6.8	87.1	爪形文が施される、頭部は破損。
83	1,2,3,4,5,6	IV	実	×	刺突	×	×	6.6	3.7	26.9	無文、四肢と頭部は二又に分かれる。
84	2,5,6	IV	実	—	×	×	×	5.4	5.9	33.6	RL縄文を転がしてから沈線文を施す。正面は胴の丸みを帯びた方とした。
85	1	V a	空	—	—	—	○	8.3	8.6	128.8	頭部は結髪、二本の粘土紐が正面で交差する、頭頂部に貫通孔、顎は欠損。
86	1	V a	空	—	—	—	○	7.5	7.6	120.8	結髪、後頭部に櫛を表す突起と穿孔あり。眉に縄文か。口の左右端に三角形の張り出し、内面に輪積み痕。
87	1	V a	空	—	—	—	○	5.1	7.1	83.5	両耳に貫通孔。
88	1	V a	空	—	—	—	○	5.7	8.7	103.9	頭部結髪。
89	2	V a	空	隆帯	—	×	×	6.3	7.6	53.9	腕は中空部分が細くなっている、帯状の乳房、肩に沈線文。
90	1,2,3	V a	空	隆帯	—	沈線	×	13.2	9.9	115.0	頭部は結髪で縦半分に欠損。顔面剥落、耳に貫通孔、脇腹に沈線文、内面に輪積みの補強を行う。
91	2	V a	空	○	—	—	×	6.8	3.6	41.8	胴部の縦半分、乳房が肩寄りにある、首にV字隆帯、LR縄文、背に「く」の字形刺突列。
92	5 or 6	V a	空	—	穿孔	—	○	7.9	8.7	117.3	脚部と体部の境目は塞がっている。股には貫通孔、円沈線文。
93	5 or 6	V a	空	—	—	—	○	6.4	4.3	65.2	胴へ続く剥落面は塞がっているが振ると中空と分かる、沈線文、丸い刺突文。
94	5 or 6	V a	空	—	—	—	×	5.2	6.0	52.9	正面の刺突文は擦れている、内面に輪積み痕、股の粘土を脚部の方になでつけて接合している。
95	2	V a	空	×	—	×	○	8.7	4.0	74.6	肩が丸く膨らみ肩パット状になっている。肩に瘤状の突起、へら先の刺突文。
96	4	V a	実	—	—	—	×	3.9	3.1	22.6	肩が丸く膨らみ肩パット状になっている、刺突文、腕は短い。
97	3 or 4	V a	実	—	—	—	×	3.1	1.9	4.4	胴部との接合部に窪みあり。
98	1,2,3,4,5,6	V b	実	—	×	—	○	14.9	9.5	304.4	頭部は結髪、後頭部に櫛の表現と見られるB突起、顎と胸部剥落、同心円の沈線文、足の指先表現。下半身は全体に赤彩が残る。

二枚橋(2)遺跡出土土偶観察表(4)

番号	残存部	分類	作り	乳房	性器	正中線	赤彩	縦(cm)	横幅(cm)	重さ(g)	備考
99	1	V b	実	—	—	—	○	3.0	5.8	20.9	頭部の結髪の一部、大きい土偶と考えられる。全体にミガキがかけられ赤彩される。
100	1	V b	実	—	—	—	×	5.0	6.4	40.1	頭部は結髪、耳部に刺突、眉と鼻・目は粘土の貼り付け、首破損面にアスファルト。
101	1,2	V b	実	隆帯	—	×	○	7.5	8.2	91.0	頭部は結髪、顔面は前方に突き出る、後頭部に櫛の表現、肩にM字形の沈線、背面に円沈線文。
102	4	V b	実	—	—	—	×	3.4	3.3	11.7	肩にN字形の沈線文。
103	1,2,3,5,6	V b	実	隆帯	刺突	×	×	6.6	3.3	20.0	顔は上方を向く、頭部は結髪形、目と鼻は粘土粒の貼り付け、腕か帯状の乳房がつく。
104	1	V b	実	—	—	—	○	2.1	2.2	3.1	前髪は表現あり、目の隆帯の上に刻み、壊れた面は滑らか、少し上方を向く。
105	2	V b	実	○	×	沈線	×	6.2	5.3	29.6	肩と脇腹に沈線文、細い腰にパンツ状区画文、乳房とヘソの突起頂部に刺突。
106	2,4	V b	実	隆帯	—	—	○	5.1	12.8	107.5	右肩から正面にかけて剥落、背面に竹管の刺突文、短い腕に指先の表現。
107	2,5,6	V b	実	隆帯	×	沈線	×	8.1	4.9	62.2	脚部が無いが平らなので地面に立てられる。帯状の乳房、首にV字の隆帯、背面に円沈線文。臍は沈線で表現。
108	2	VI a	空	○	—	×	×	7.5	7.5	94.1	肩に瘤状の突起、ヘラ先の刺突文、刺突によるヘソ表現、背面に二条の沈線文、6の字の沈線文。
109	2	VI a	空	—	—	—	×	3.5	3.9	10.7	首から胸部にかけての破片か。刺突文。
110	2	VI a	実	—	—	×	×	4.2	3.3	11.0	体部の破片か。刺突文。
111	2,5 or 6	VI a	実	—	—	—	×	6.9	3.7	58.2	丸みを帯びた腰、ヘラ先の刺突文、脚部は中実だが、腰から中空になっている。
112	2	VI a	空	—	凹	×	×	3.5	5.9	49.8	台形で全体に細かい刻み、正面にわずかな凹みがある。
113	5 or 6	VI a	空	—	—	—	×	6.4	3.5	51.8	ヘラ状刺突文。
114	1,2,4	VI b	実	×	×	×	×	14.7	12.0	225.0	帽子状突起、肩にB突起、乳房無し、128に似る禪状の沈線文、背面に6の字の沈線文。
115	1,2	VI b	実	×	—	×	×	5.5	5.1	43.6	帽子状突起、顔は上方を向く、肩に瘤状突起、細かい刺突文、乳房無し。
116	1	VI b	実	—	—	—	○	3.5	4.6	30.0	顔面剥落、耳部に刺突、後頭部に沈線文と刺突の組み合わせで頭髪を表現している可能性がある。
117	1	VI b	実	—	—	—	×	3.0	4.2	20.9	帽子状突起の縁に刻み、突起に刺突が正面と背面に2つ、側面に1つずつの計6箇所。
118	1,2	VI b	実	○	刺突	×	×	6.8	4.1	49.9	土版状、帽子状突起の剥落、刺突を腰付近と背面の肩部に施文。
119	1	VI b	実	—	—	—	×	4.2	3.5	22.2	顔が極端に下を向く、裏面に刺突と直沈線が施文される。
120	2	VI b	実	隆帯	—	隆・沈	○	5.9	8.5	62.1	肩に瘤状の突起、ヘラ状刺突文、沈線文、乳房は帯状に伸び肩側の端で膨らみ、黒色物質が沈線内や赤彩されている付近に付着している。

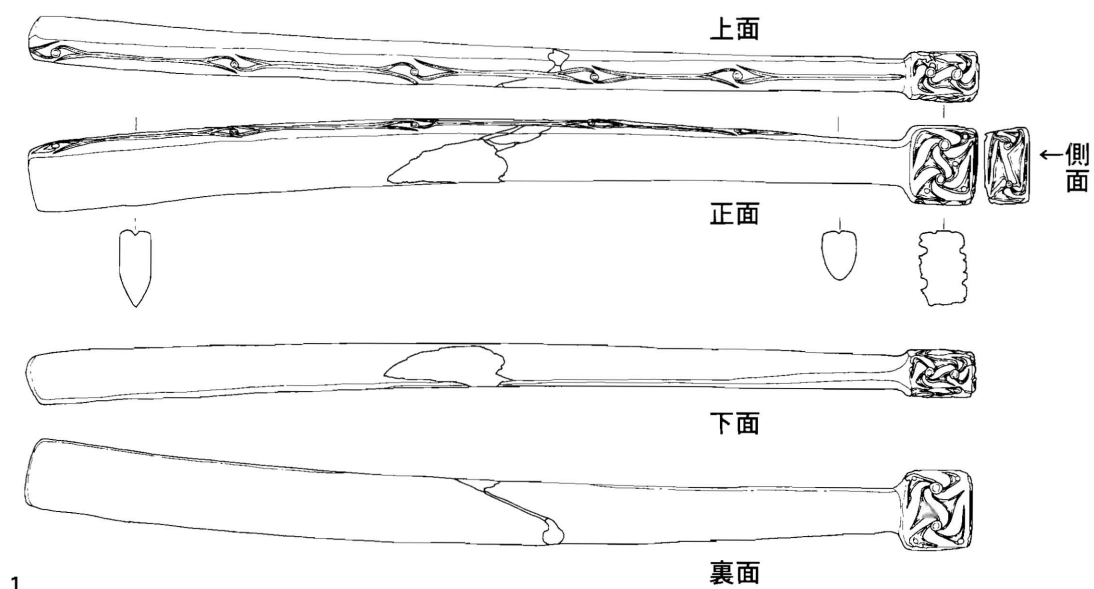
二枚橋(2)遺跡出土土偶観察表(5)

番号	残存部	分類	作り	乳房	性器	正中線	赤彩	縦(cm)	横幅(cm)	重さ(g)	備考
121	2	VI b	実	×	—	×	×	5.4	5.6	47.6	ヘラ先の刺突文と沈線。肩瘤の剥離。
122	2	VI b	実	—	×	×	×	5.0	4.3	20.9	正面で四角く凹む沈線文、脇腹以外にヘラ先の刺突文、禪状の沈線文。
123	2	VI b	実	—	—	×	×	3.2	3.3	17.3	表裏不明、前面のみ刺突文、風化が激しい。
124	2	VI b	実	—	—	—	×	4.2	2.3	17.6	縦に割れた胴部、正面側に刺突文。
125	2	VI b	実	—	刺突	×	×	3.9	4.6	33.7	入念なミガキの後ヘラ先の刺突文や沈線文。性器と肛門を表す。
126	2,5,6	VI b	実	—	刺突	—	×	5.4	5.4	96.3	ヘラ先の刺突文と沈線文。肛門は他の刺突文とは異なり丸く、深い。
127	5	VI b	実	—	—	—	×	4.9	3.9	27.5	ヘラ先の刺突文、腰回りに横三条の沈線、足の指先表現。
128	6	VI b	実	—	刺突	—	×	4.4	4.2	30.7	腰に横方向の沈線を引き、縦に6本の短い沈線を延ばし禪状の文様となる。性器とは別に股に深さ約1.5cmの肛門表現。
129	5 or 6	VI b	実	—	—	—	×	5.2	2.4	24.2	脚の付け根に丸刺突文、表裏不明。
130	1 or 5 or 6	VI b	実	—	—	—	×	2.2	3.0	11.4	ヘラ先による連続刺突文、帽子状突起の可能性もある。
131	2,5,6	—	実	—	刺突	刺・隆	×	8.9	6.8	163.3	非常に丁寧に磨いている。下半身にLR縄文を施す。曲沈線文。
132	2,5	—	実	×	突起	刺突	?	8.3	3.4	23.6	男性土偶か。頭部の剥落面に凹みが残る、刺突列や沈線文、丸い刺突文。
133	2	—	実	×	×	×	×	6.2	5.5	52.6	腰が張る、ランダムに沈線、L縄文を施す。
134	2	—	実	—	×	×	×	5.3	4.0	36.0	正面と背面不明、細い沈線文、丁寧なミガキ。
135	1,2,3,4	VII	実	○	×	×	×	7.6	5.5	27.7	脚部無し、肩に隆帯貼り付け、背面にB突起が二つ貼り付け。
136	2,4	VII	実	×	×	×	×	7.2	5.9	33.1	脚部無し、肩に瘤状の突起、背面に指の圧痕が見られる。
137	2	VII	実	×	×	×	×	5.6	2.3	18.6	脚部無し、風化による磨耗が激しい。
138	2,5,6	II b	実	—	×	×	×	5.6	4.0	30.9	無文、腰の壊れ面に芯棒を用いたような斜め方向の穴。
139	2,5,6	II b	実	×	×	×	×	7.7	4.5	43.0	風化による磨耗が激しく文様など不明。
140	2,6	II b	実	—	×	×	×	4.4	3.9	18.5	無文、腰が張り出す。
141	2,5	II b	実	—	刺突	刺突	×	3.6	3.2	12.3	正面にヘソか正中線の末端が残る。
142	5,6	II b	実	—	×	×	×	2.5	3.5	7.7	腰の両脇に刺突。
143	3	—	実	—	—	—	×	3.7	2.0	11.9	沈線文、刺突列、風化が激しい。
144	4	—	実	—	—	—	×	4.0	1.9	7.0	腕の側面にB突起、爪あのような細かい沈線。
145	3 or 4	—	実	—	—	穿孔	×	3.8	2.9	16.7	上面に楕円形の凹みと脇まで続く貫通孔。
146	5 or 6	—	実	—	—	—	×	6.2	2.3	35.0	細かいLR縄文の上に入組沈線文、縦方向に入念なミガキ。

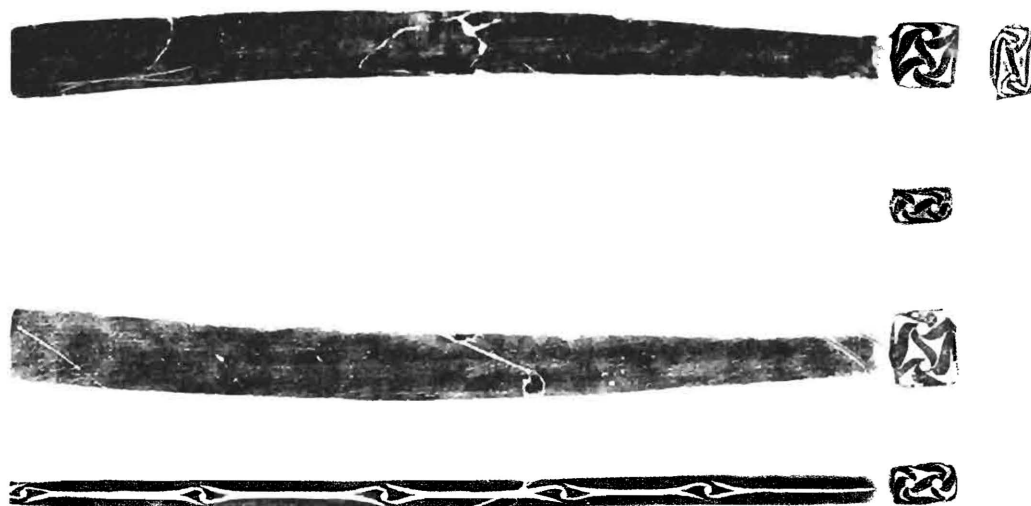
二枚橋(2)遺跡出土土偶観察表(6)

番号	残存部	分類	作り	乳房	性器	正中線	赤彩	縦(cm)	横幅(cm)	重さ(g)	備考
147	5	—	実	—	—	—	×	4.9	2.5	23.4	膝小僧が膨らむ。パンツ状区画文の一部が見られる。
148	6	—	実	—	—	—	×	5.3	2.5	18.4	入念なミガキ調整がなされるが焼成が悪い。パンツ状区画文。
149	5	—	空	—	—	—	○	6.0	4.1	61.3	立つが不安定。腰付近に沈線文。
150	5	—	実	—	—	—	×	4.4	2.3	15.8	膝膨らみあり。
151	5	—	実	—	—	—	×	4.5	2.3	25.3	無文。
152	5 or 6	—	実	—	—	—	×	5.0	2.9	37.4	縦半分に割れた足の内股側。
153	5	—	実	—	—	—	×	2.0	2.5	7.9	調整時の爪あとが内股に残る。
154	5 or 6	—	実	—	—	—	×	2.1	1.4	3.6	足と考えられるが、腕の可能性もある、先は摘み出して成形。
155	不明	—	実	—	—	—	×	2.8	1.7	11.2	足の一部か。無文。
156	6	Ⅱ a	空	—	—	—	×	5.2	3.8	32.6	RL縄文、沈線文、足の指先表現、腰部に黒色物質付着。
157	6	Ⅱ a	空	—	—	—	×	4.2	3.0	25.8	腰に近い部分に沈線文、足の指先表現。
158	2,3,5,6	—	空	—	穿孔	刺突	×	8.0	4.8	78.6	動物型土製品、厚手の中空作り、下部にヘラ状工具による空気孔、腕は連続するB突起。入組沈線文が施される。

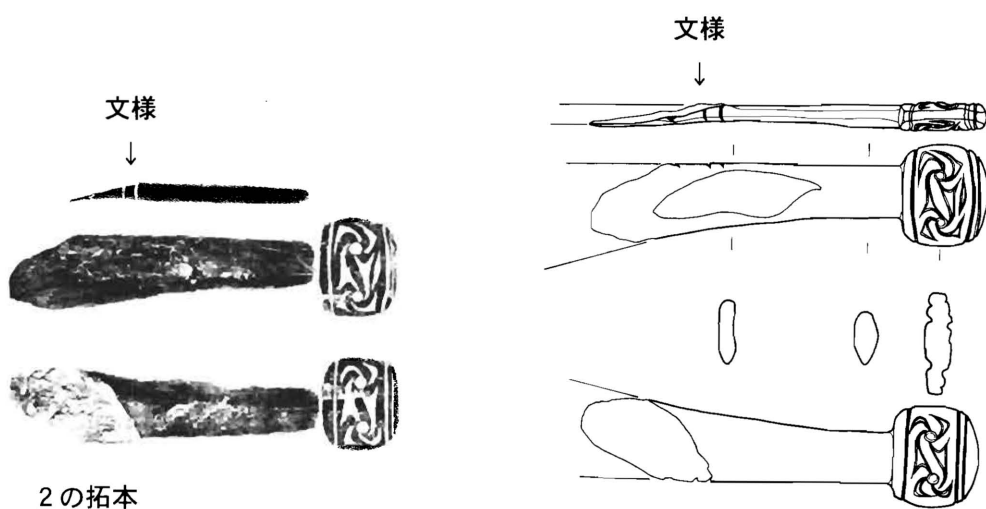
×は無し。—は（残存無しなどで）不明。○は有り。



1



1の拓本

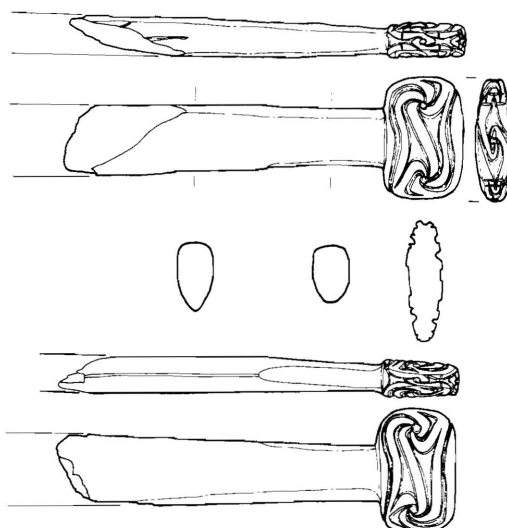


2の拓本

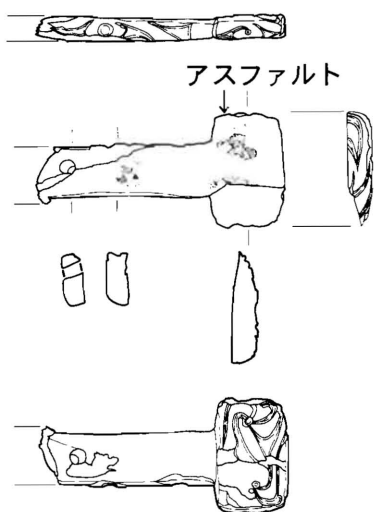
第52図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図1～2)



3の拓本



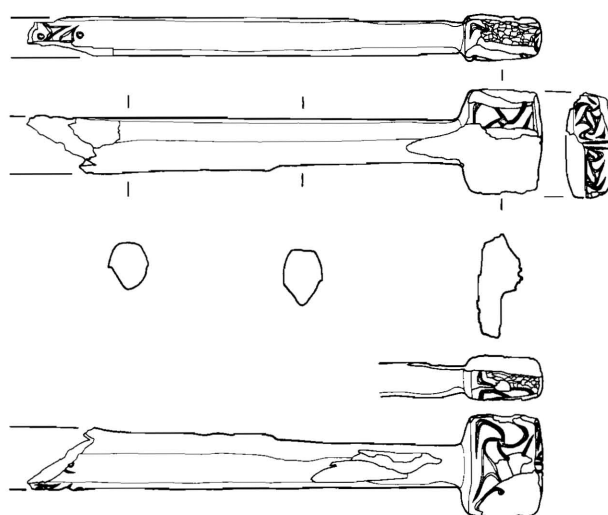
3



4



4の拓本

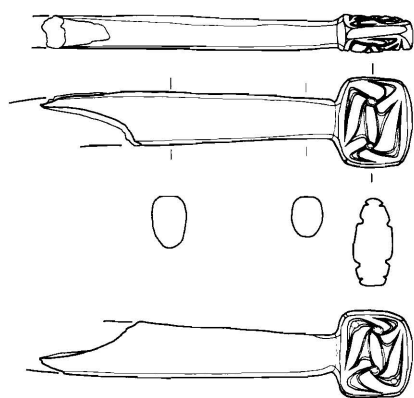


5

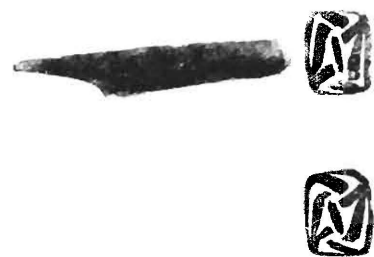


5の拓本

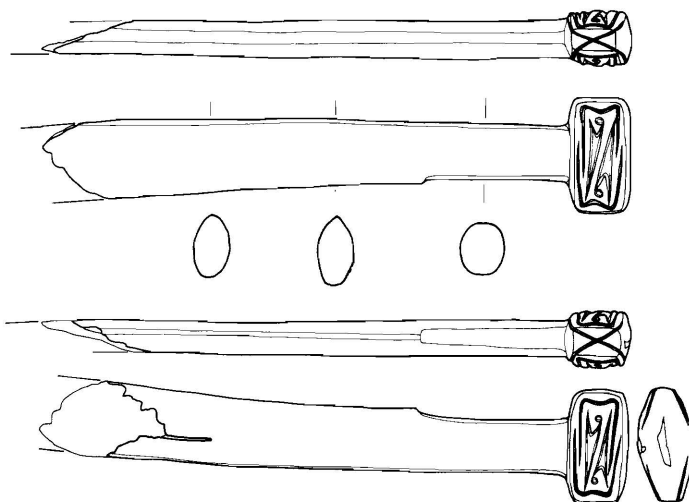
第53図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図3～5)



6



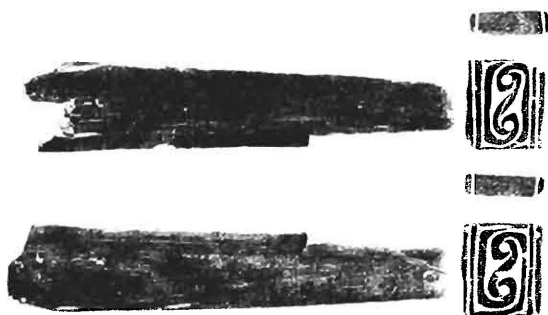
6の拓本



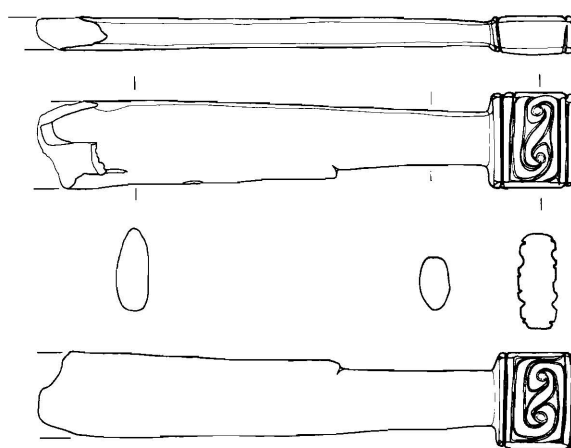
7



7の拓本

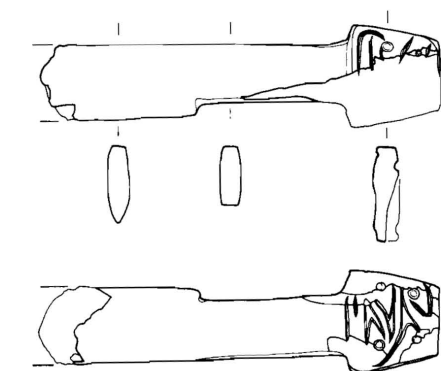


8の拓本



8

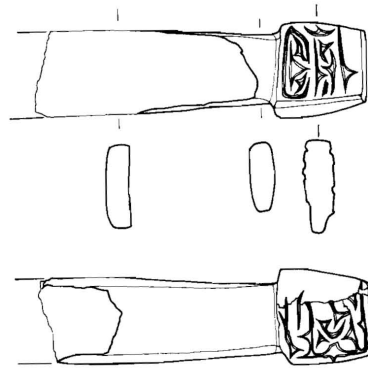
第54図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図6～8)



9



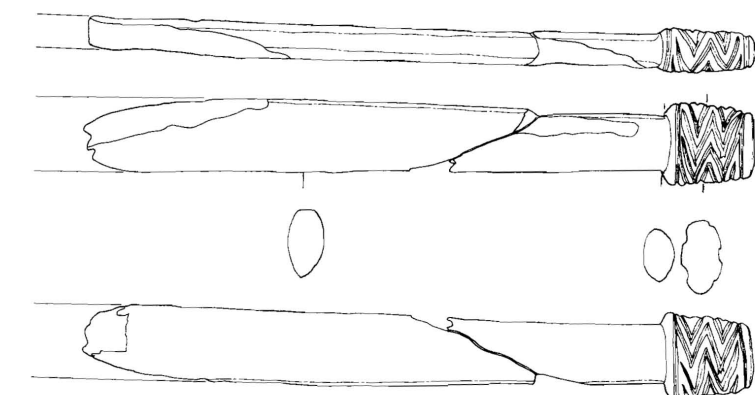
9の拓本



10



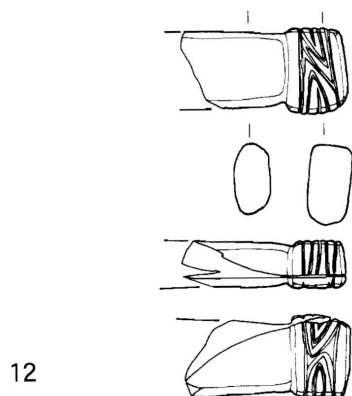
10の拓本



11



11の拓本



12

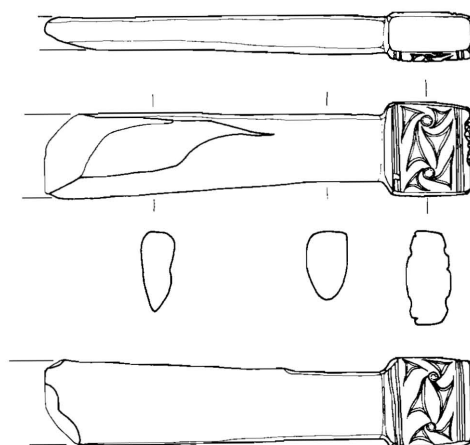


12の拓本

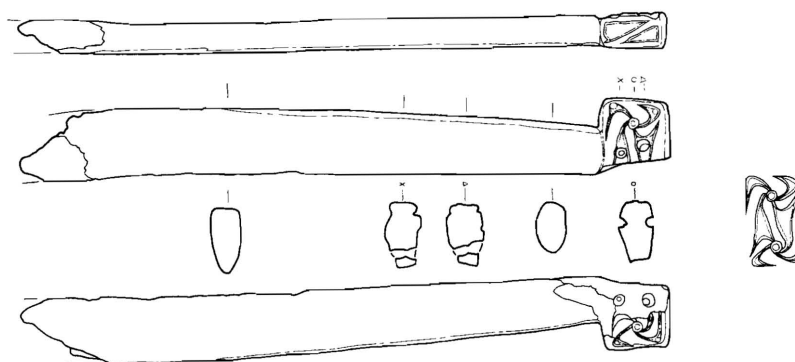
第55図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図9～12)



13の拓本



13



復元図

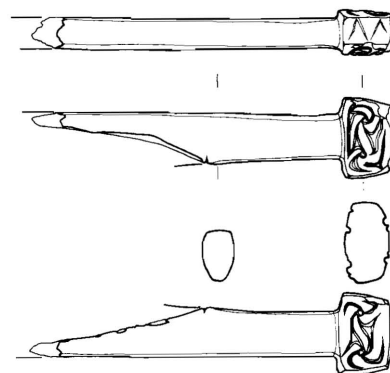
14



14の拓本

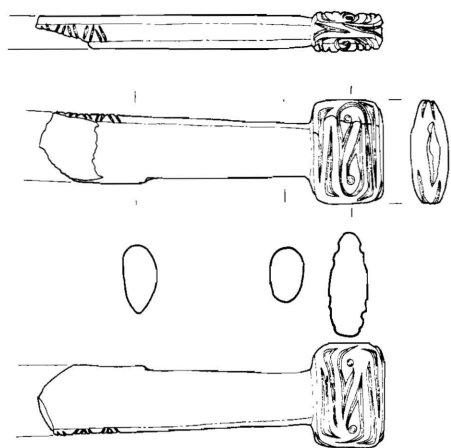


15の拓本

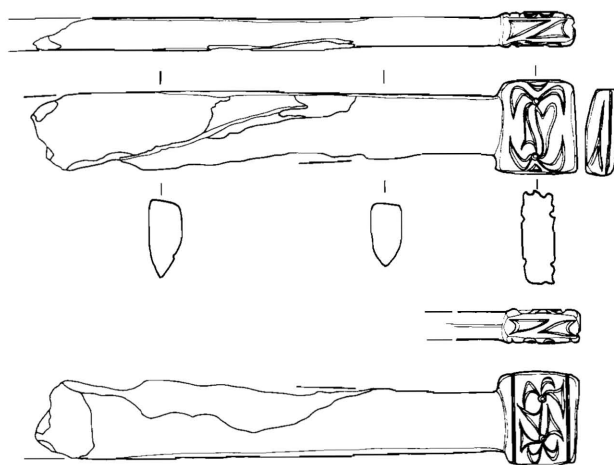


15

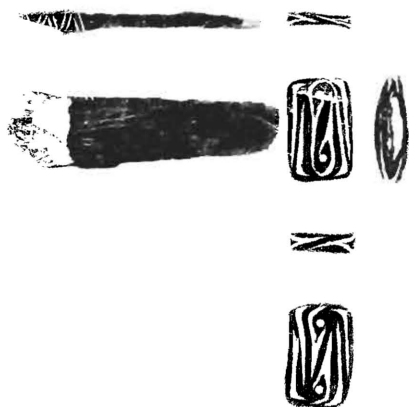
第56図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図13~15)



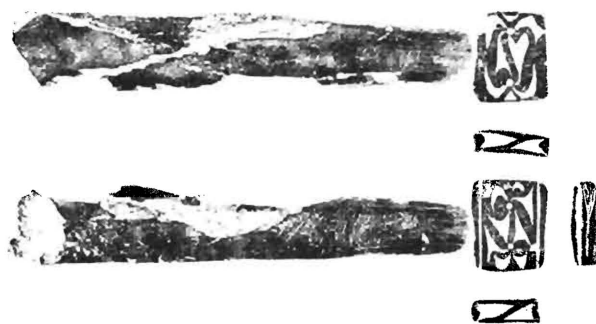
16



17



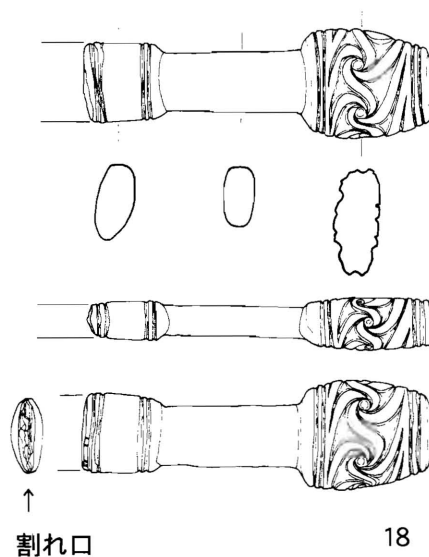
16の拓本



17の拓本



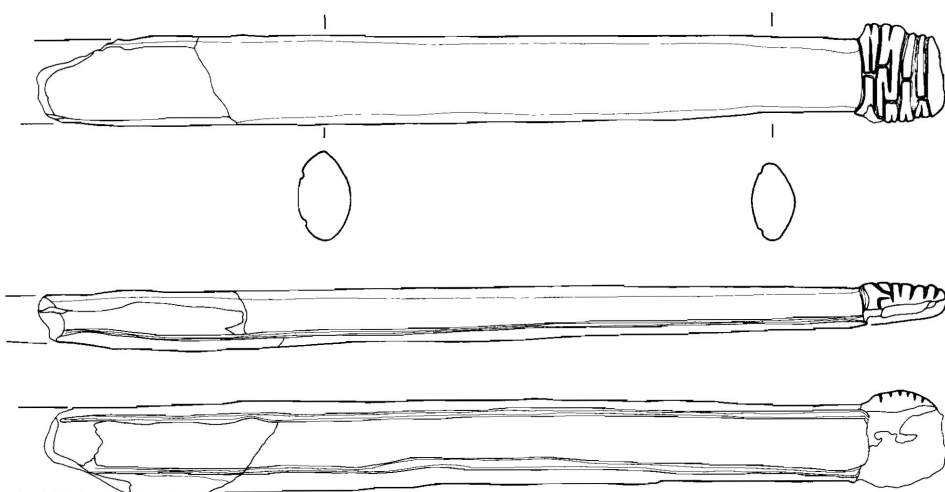
18の拓本



18

割れ口

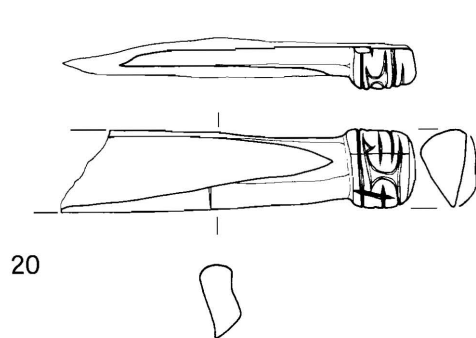
第57図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図16~18)



19



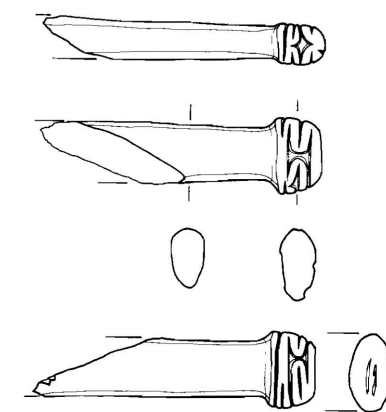
19の拓本



20



20の拓本

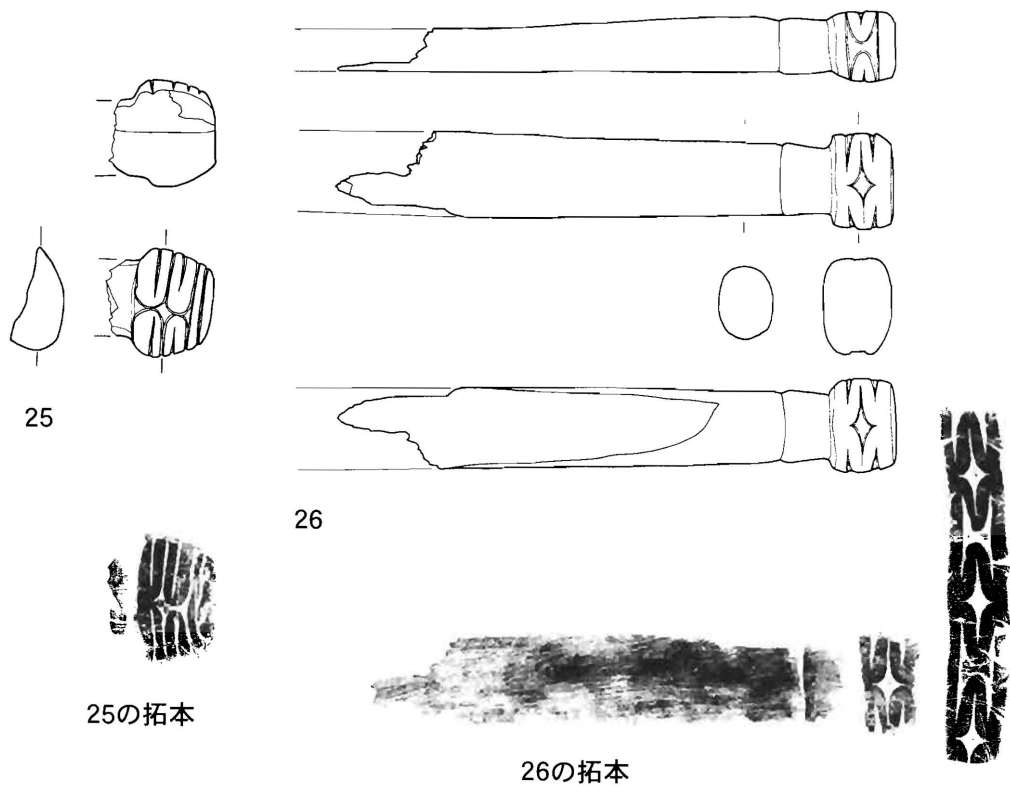
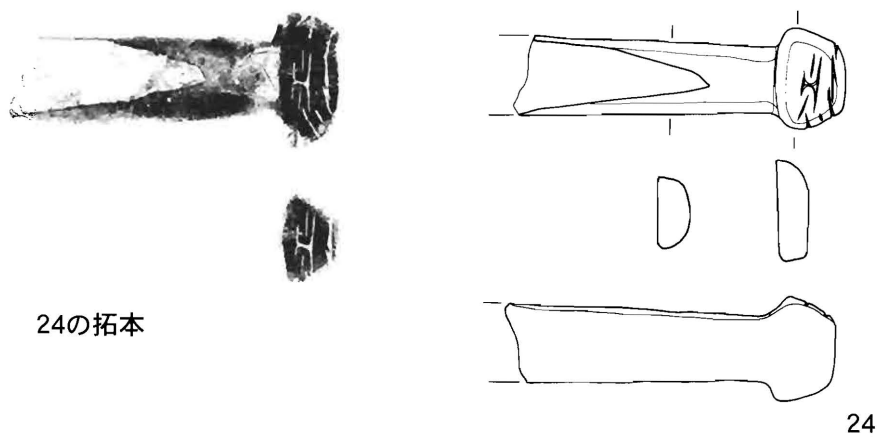
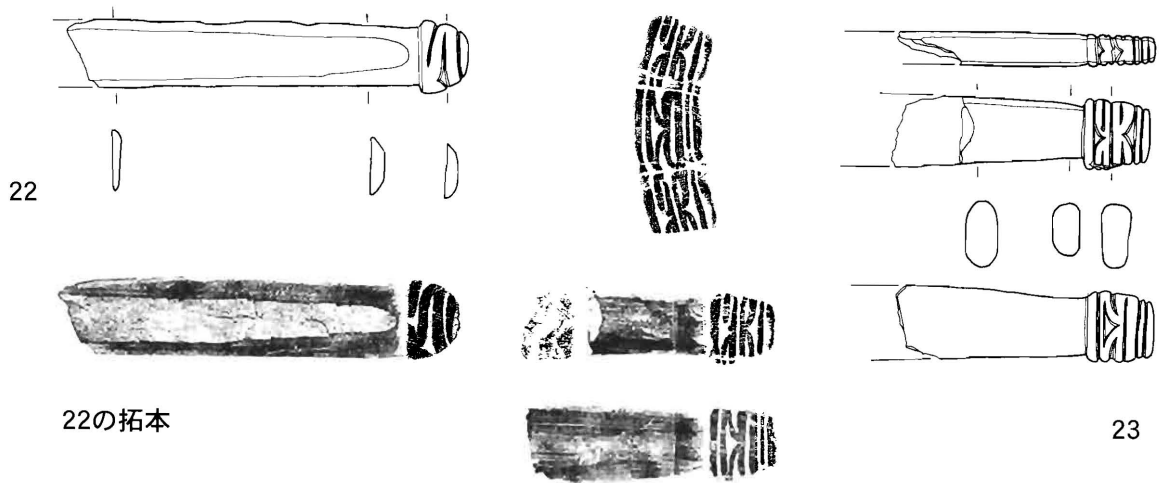


21

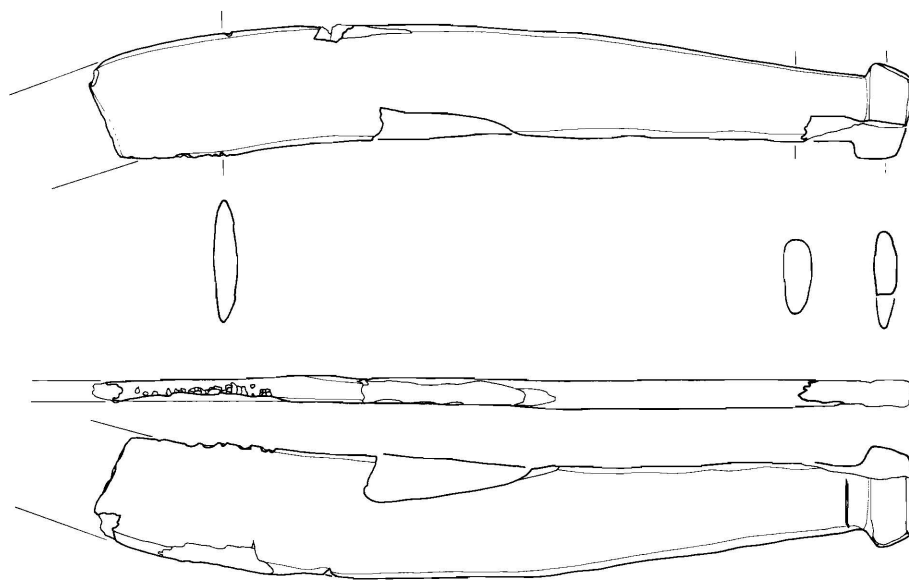


21の拓本

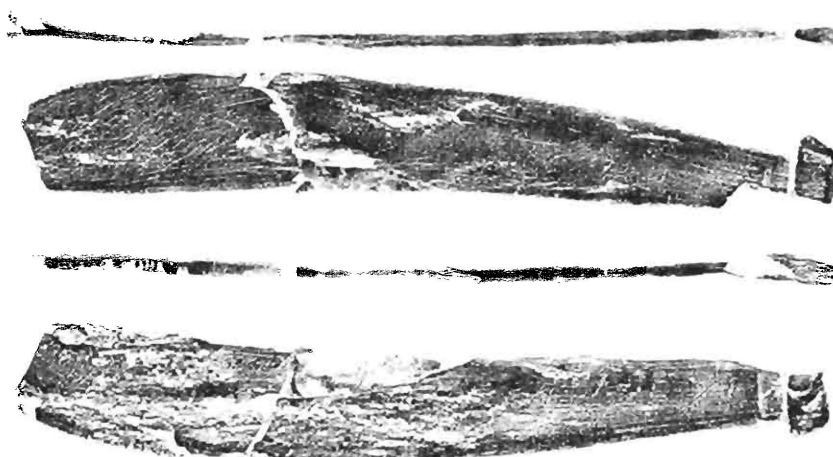
第58図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図19~21)



第59図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図22～26)



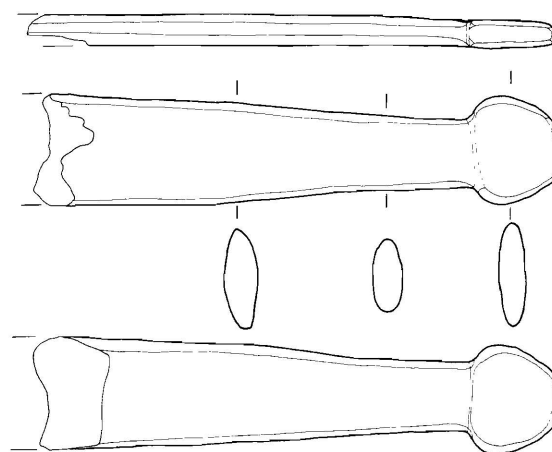
27



27の拓本

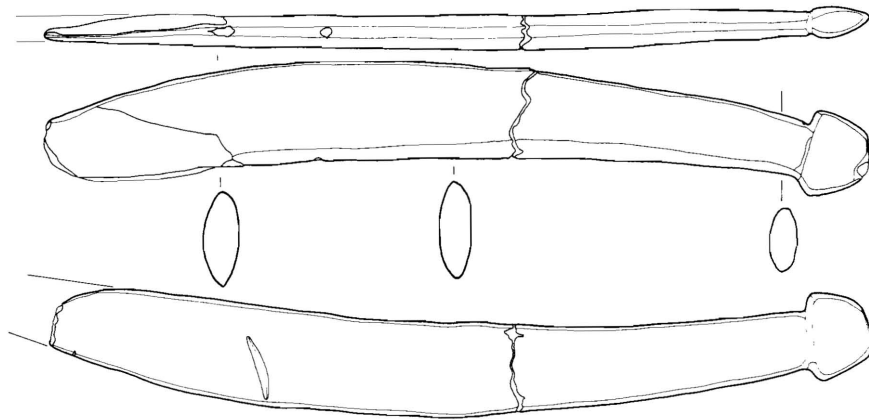


28の拓本

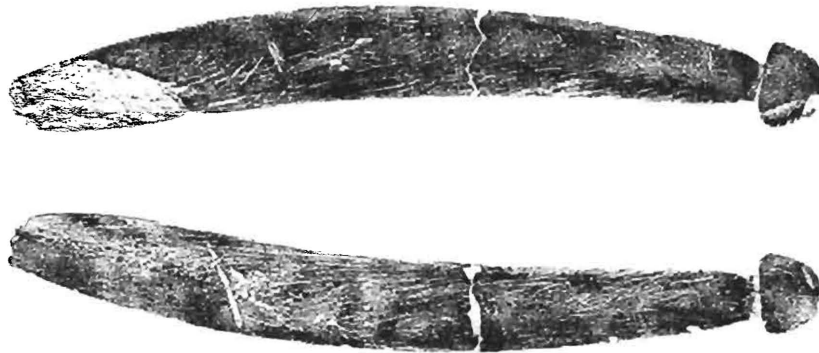


28

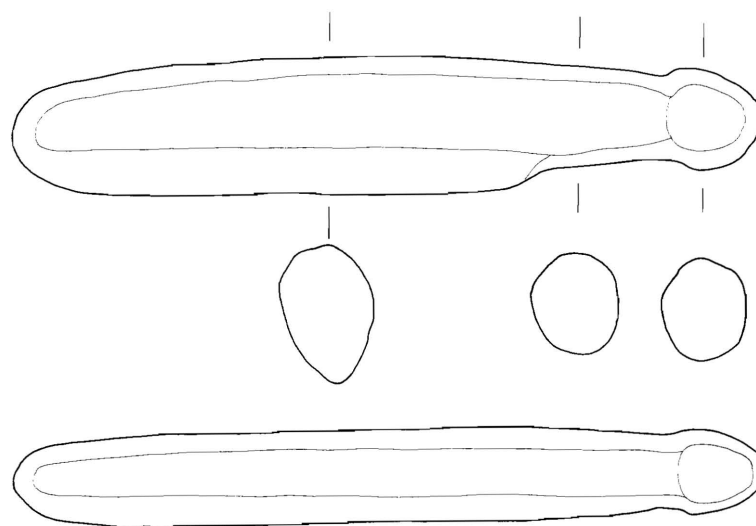
第60図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図27~28)



29

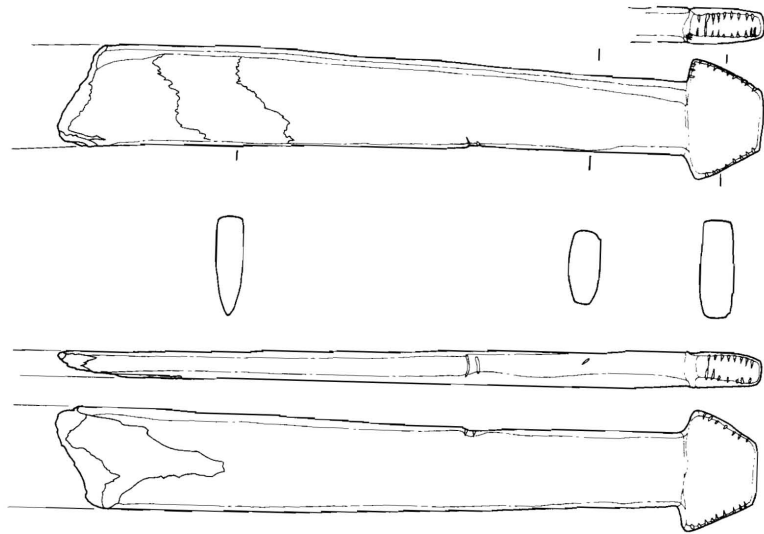


29の拓本



30

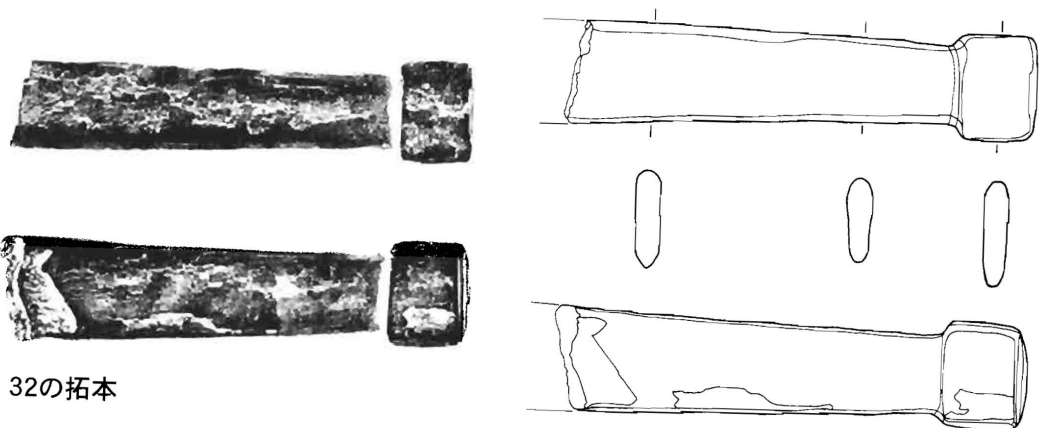
第61図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図29~30)



31



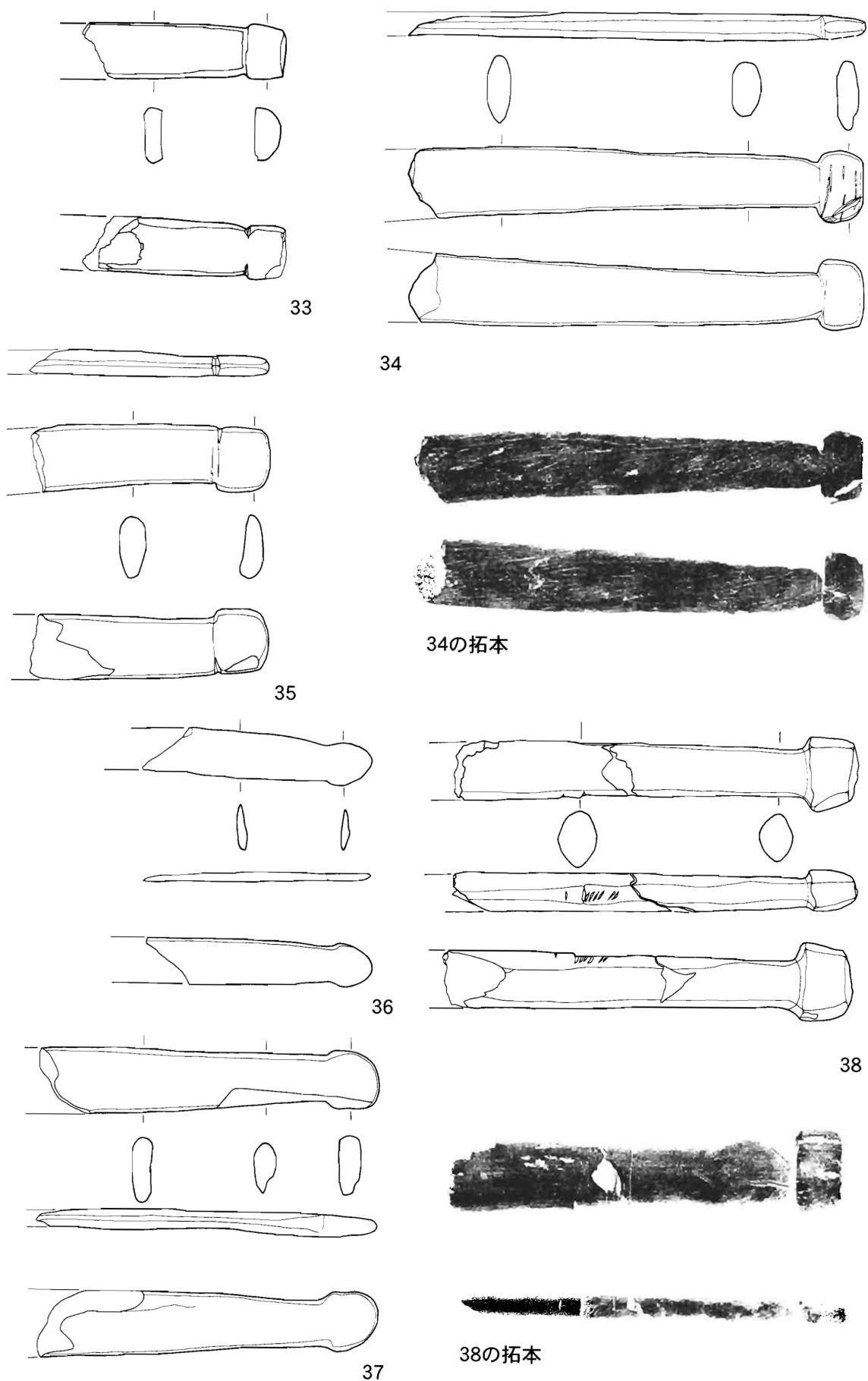
31の拓本



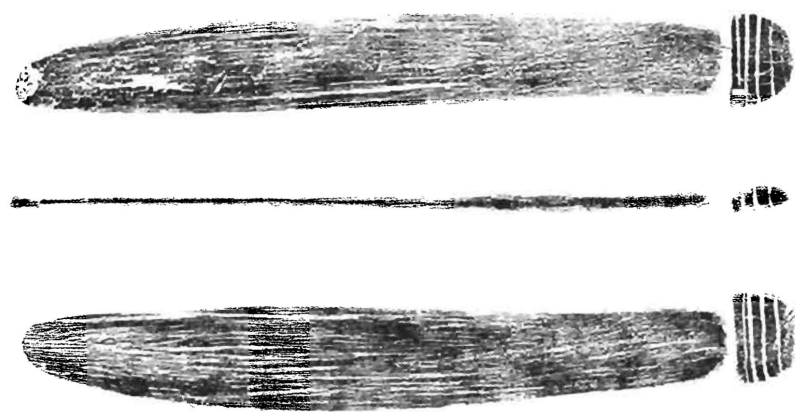
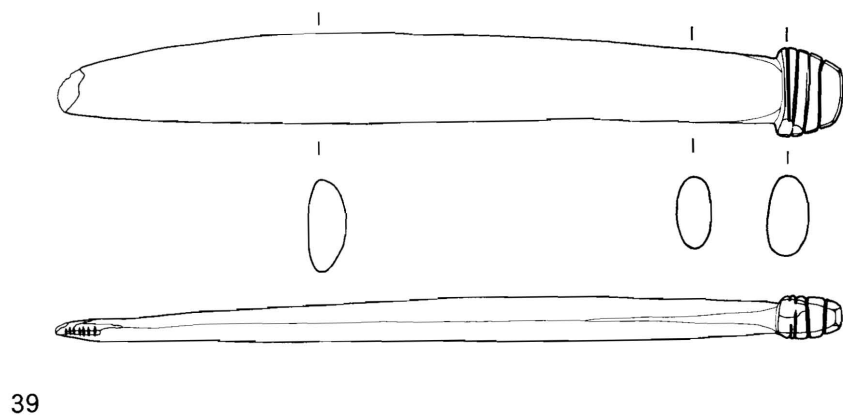
32の拓本

32

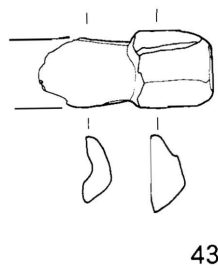
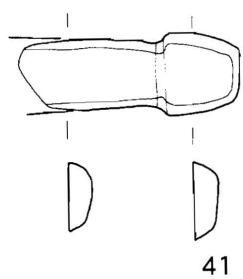
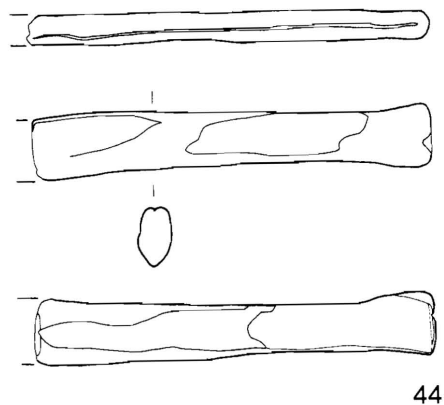
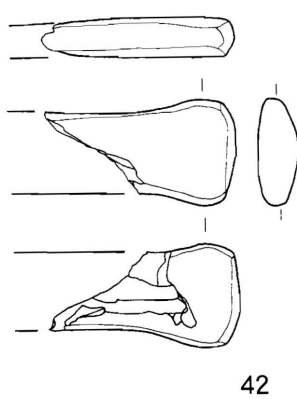
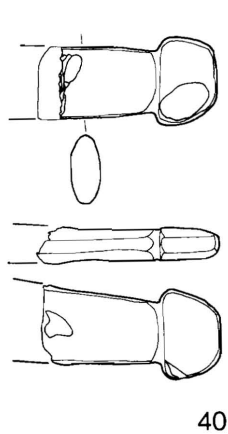
第62図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図31~32)



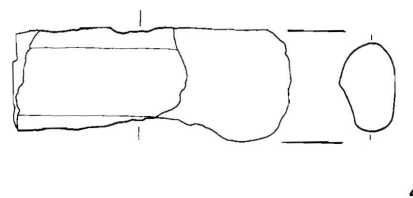
第63図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図33~38)



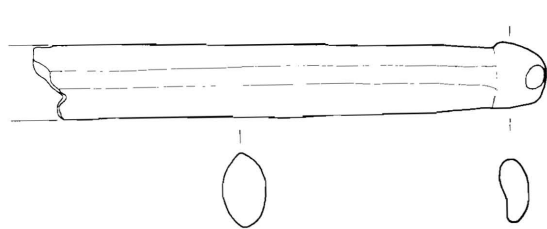
39の拓本



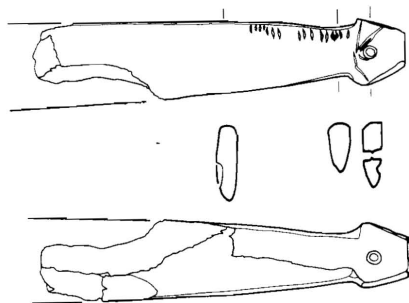
44の拓本



第64図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図39~45)



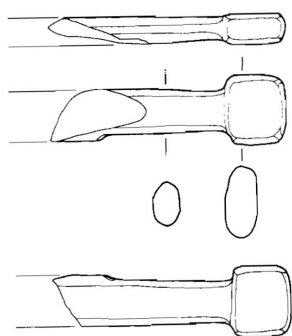
46



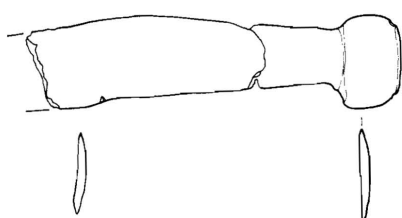
47



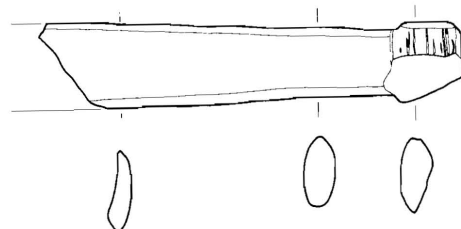
47の拓本



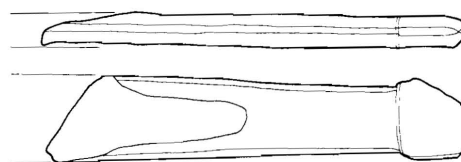
49



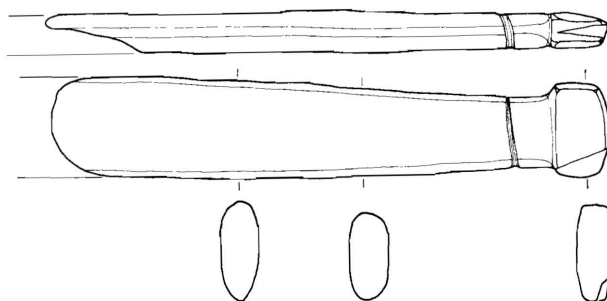
51



48



48の拓本

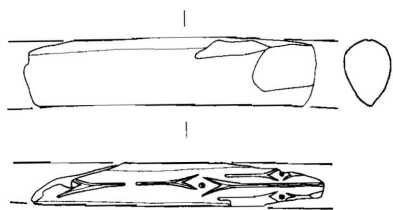


50



50の拓本

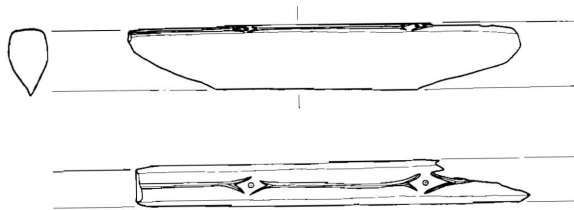
第65図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図46~51)



52



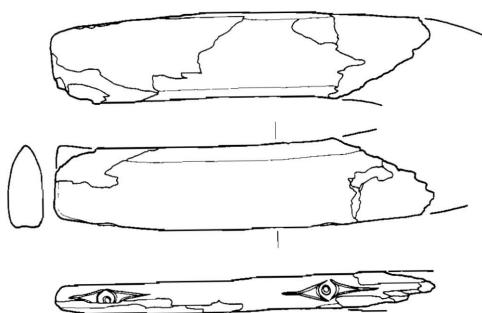
52の拓本



55



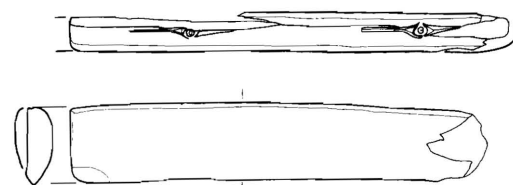
55の拓本



53



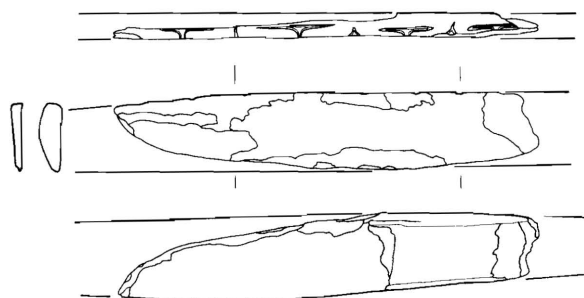
53の拓本



56



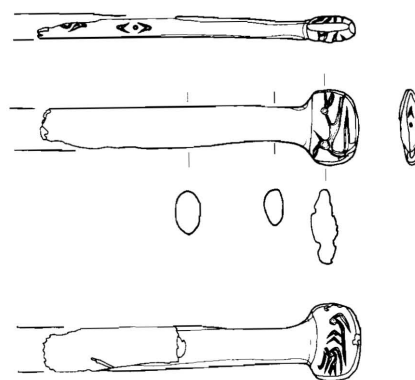
56の拓本



54



54の拓本



57



57の拓本

第66図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図52~57)

文様
↓

58の拓本

58

61

61の拓本

63

63の拓本

59

59の拓本

62

62の拓本

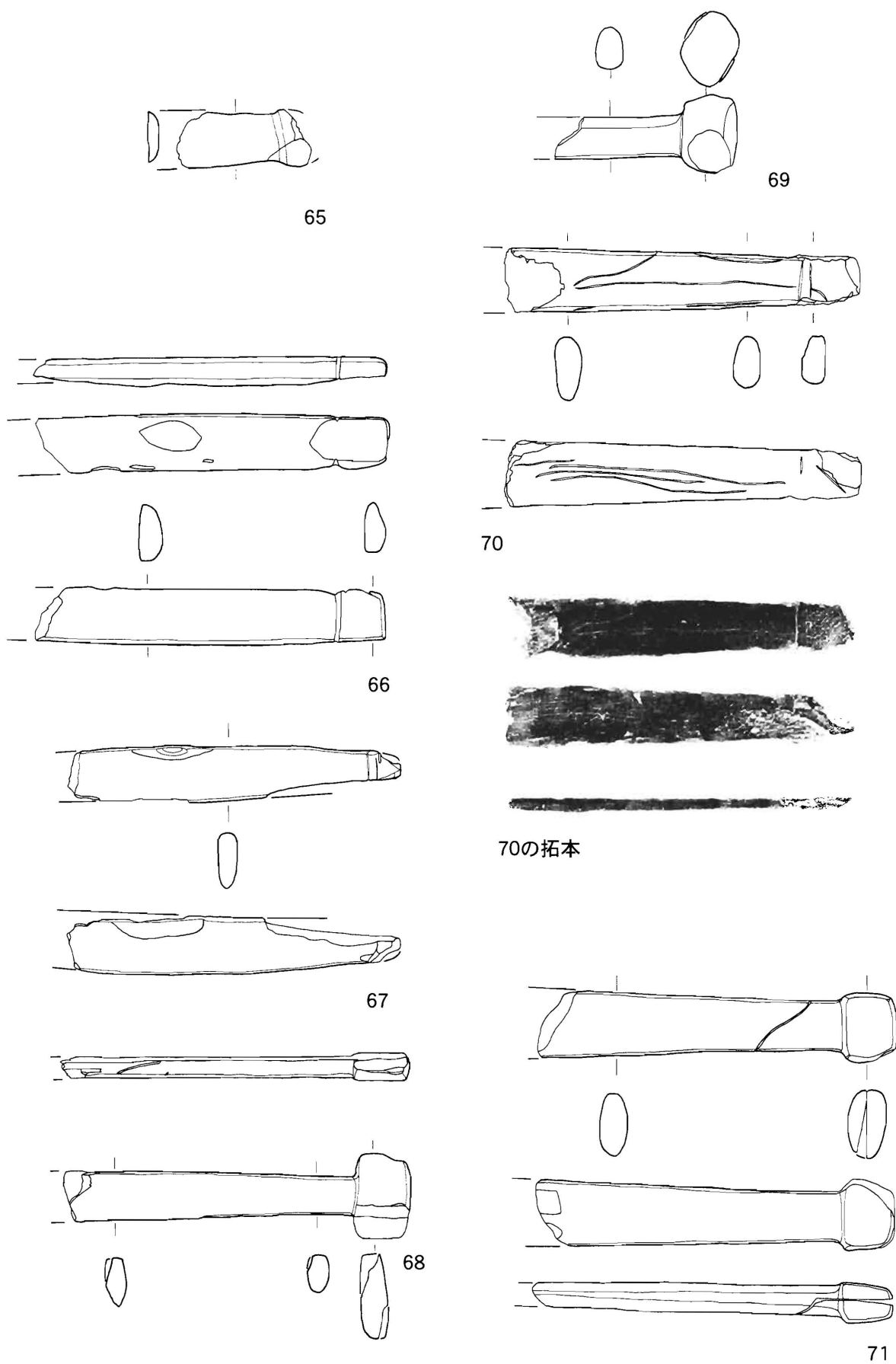
64

64の拓本

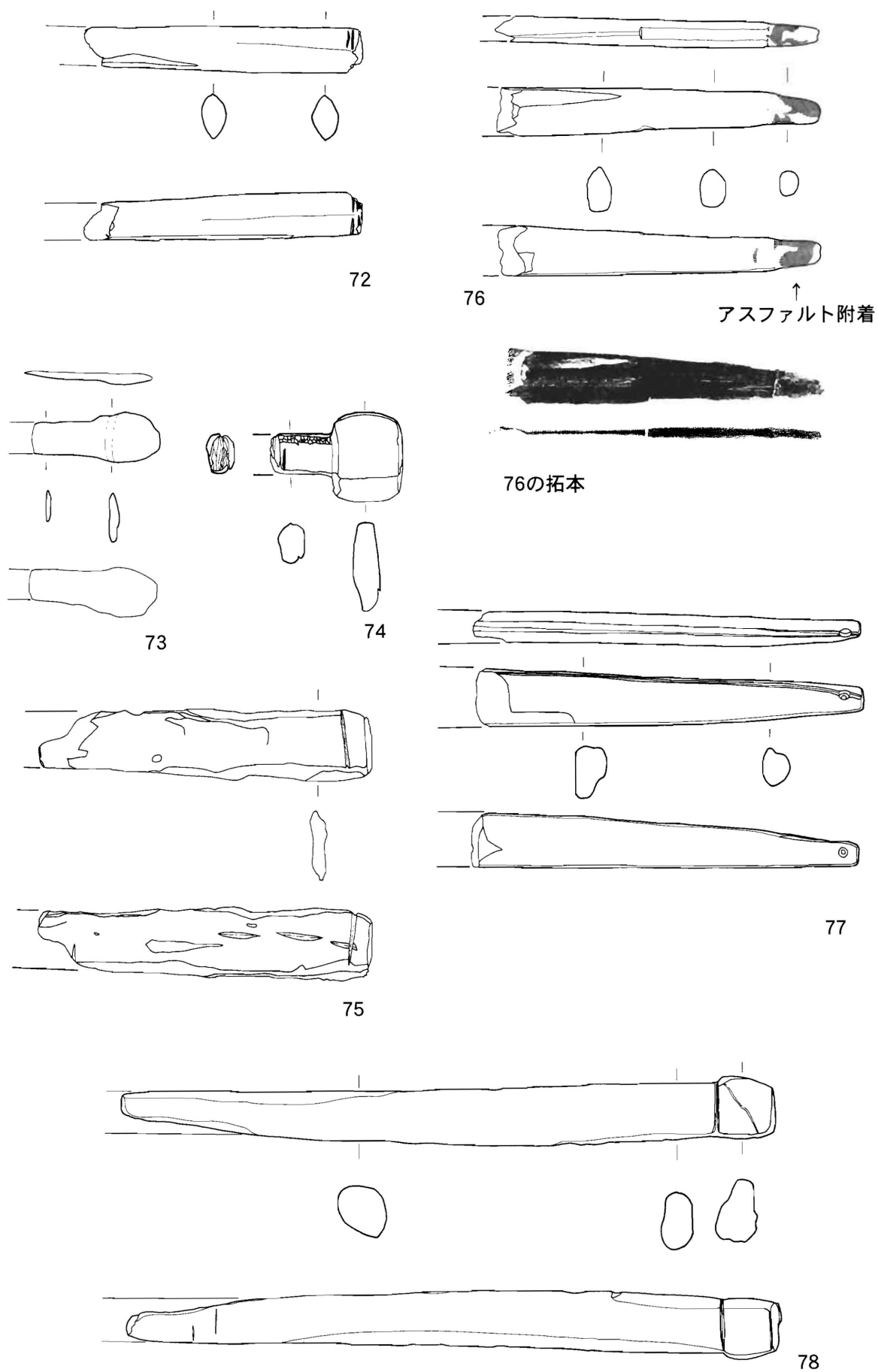
60

60の拓本

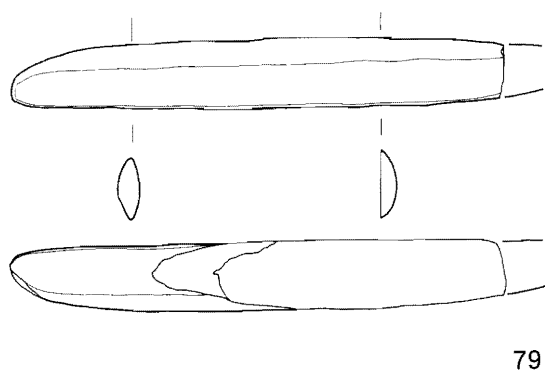
第67図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図58~64)



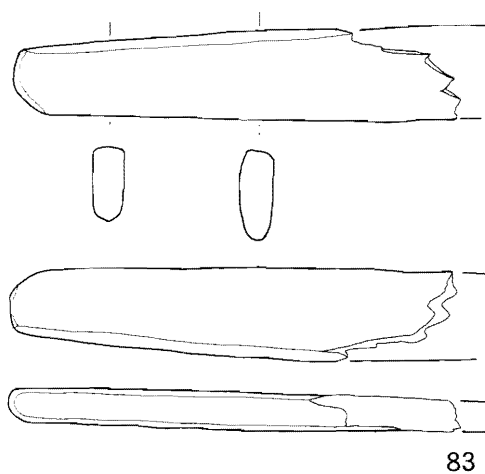
第68図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図65~71)



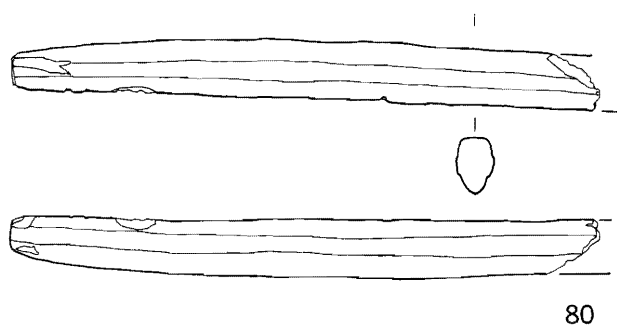
第69図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図72~78)



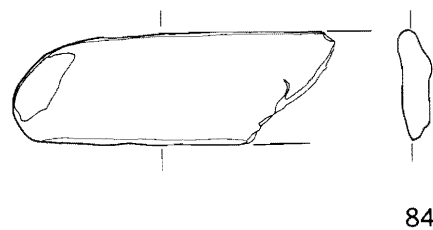
79



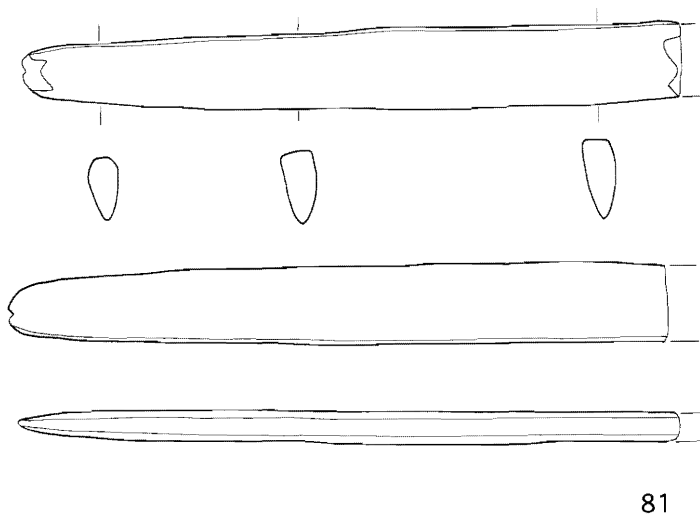
83



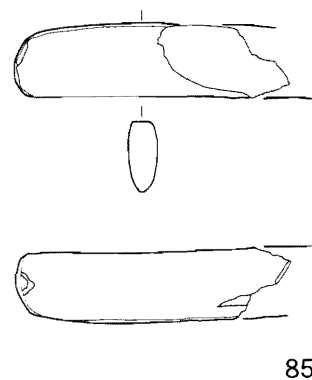
80



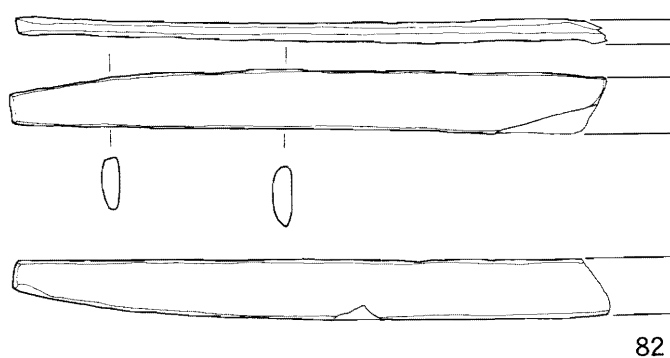
84



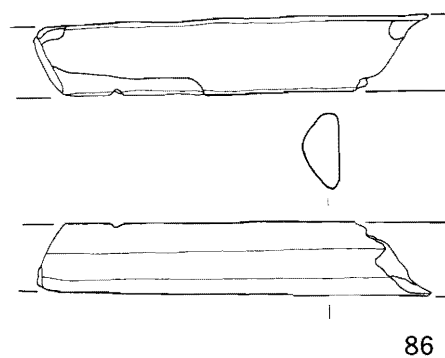
81



85

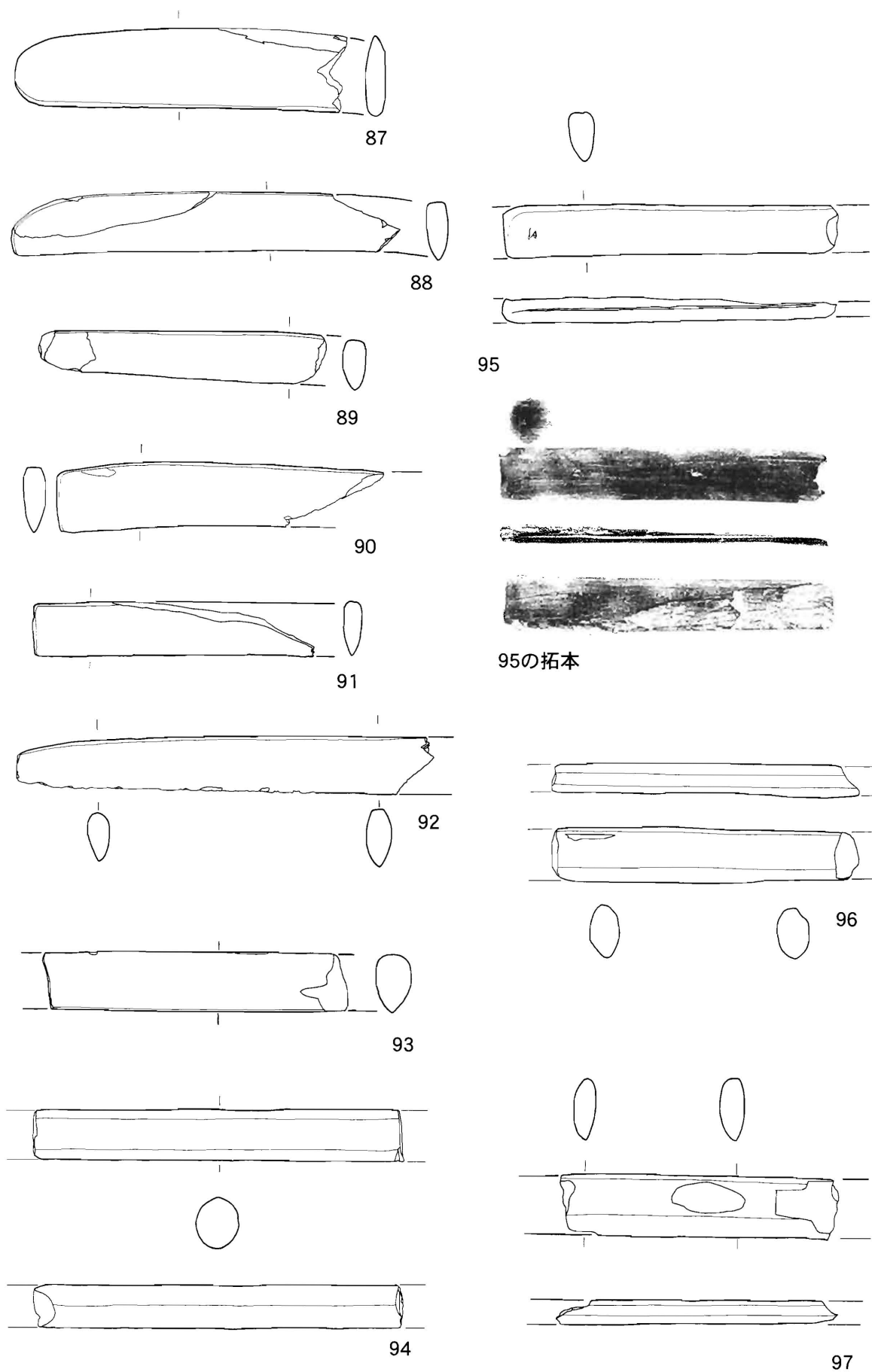


82

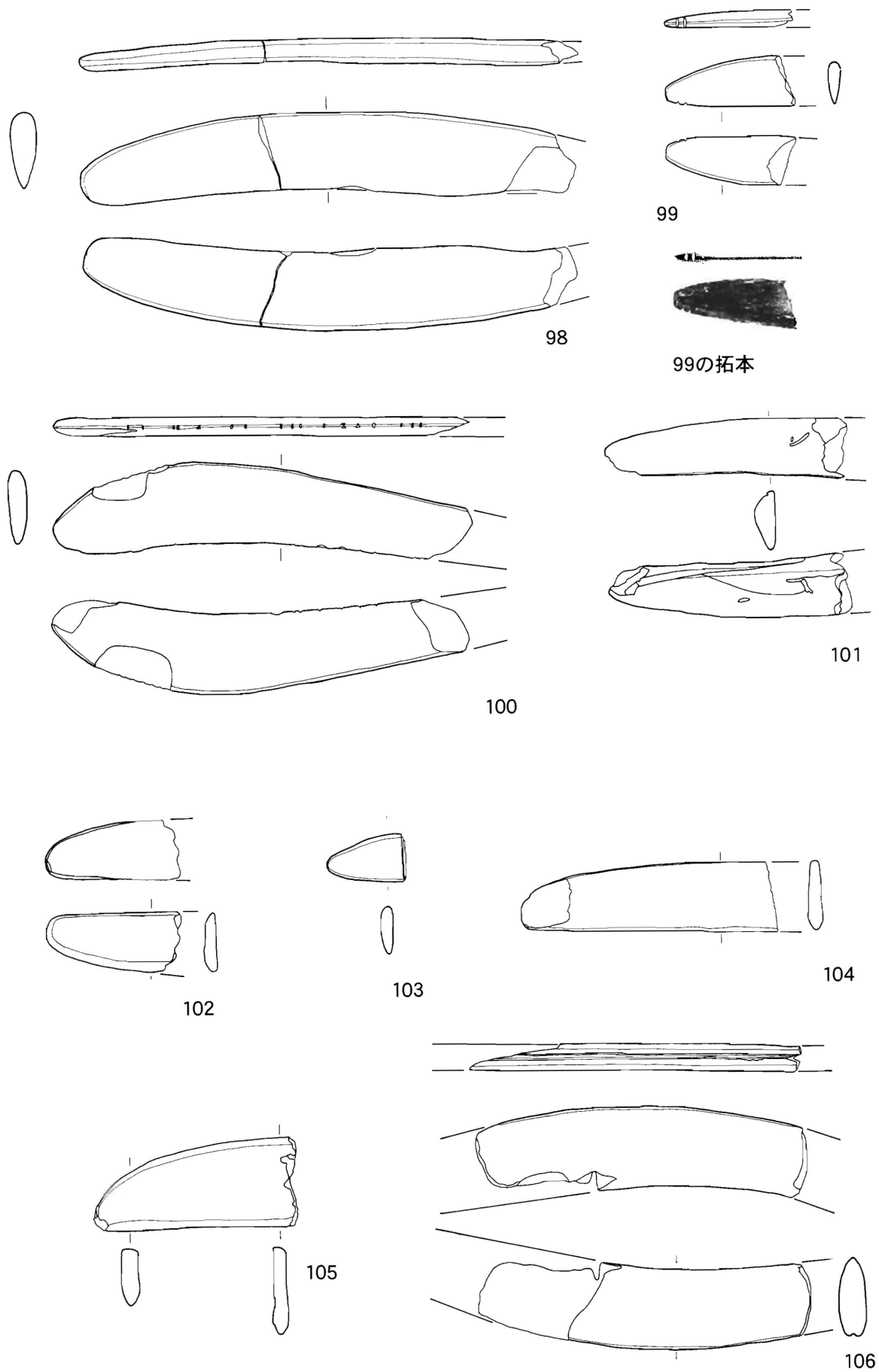


86

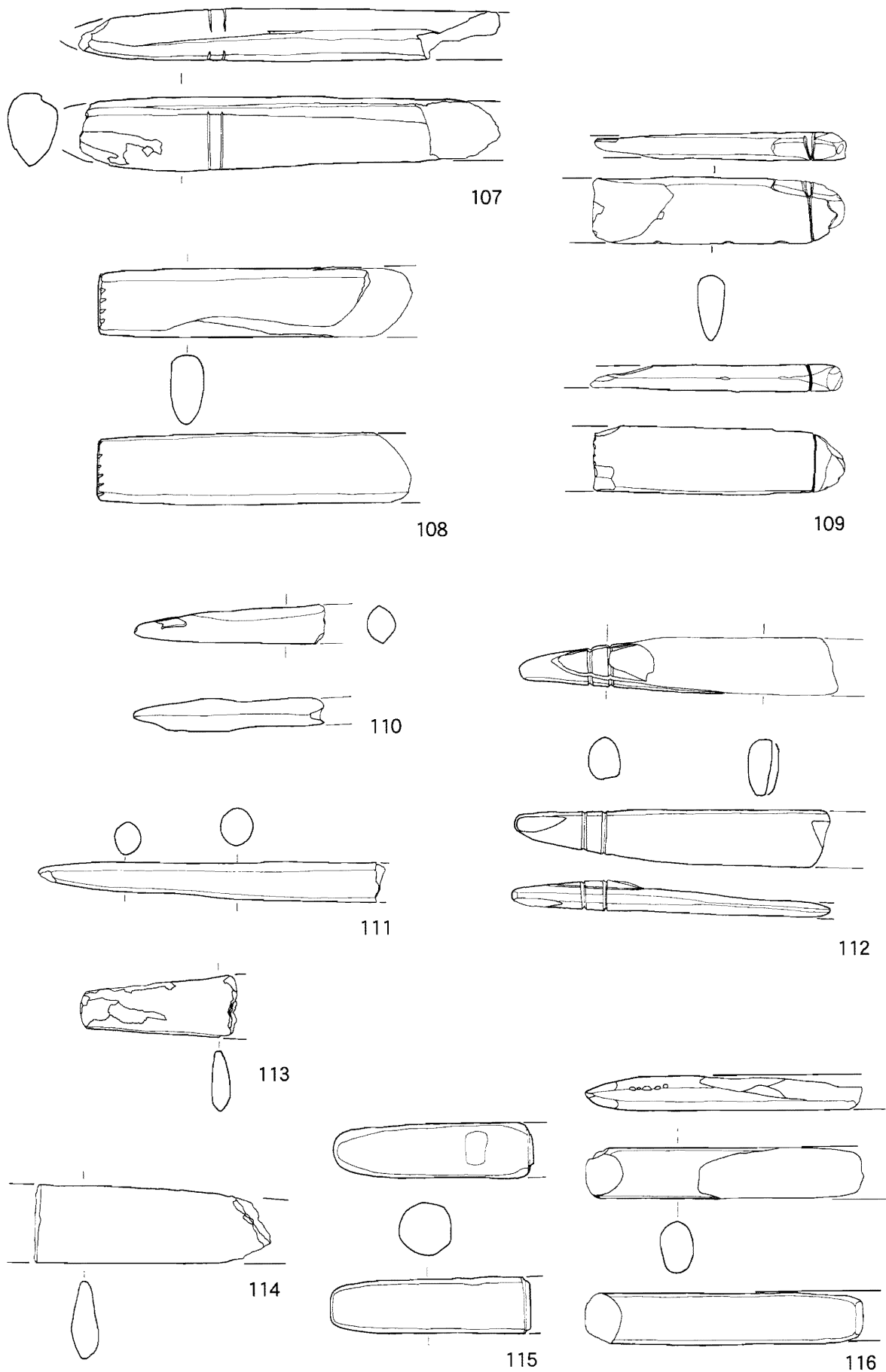
第70図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図79~86)



第71図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図87~97)



第72図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図98~106)



第73図 二枚橋(2)遺跡出土石刀 (図107~116)

番号	分類	部位	特 徴	柄部の 形成	柄頭の 形状	文 様	石質	計測値 (cm)			重量 (g)
								最大長	最大幅	最大厚	
1	I A	ほぼ 完形 品	柄頭の各面に入組三叉文が施される。 赤彩。ねじりが加えられている。	断面差	方形	有	粘板岩	38.7	3.1	1.9	290.2 石膏 含む
2	I	柄	柄頭に入組三叉文が施される。背に 刻みがある。赤彩。	断面差	円形	有	石墨片 岩	(16.0)	4.0	0.65	78.1
3	I B	柄	柄頭に入組三叉文が施される。背に 文様の痕跡がある。	刃関	方形	有	石墨片 岩	(16.1)	5.1	1.55	130.2
4	I B	柄	柄頭に入組三叉文が施される。柄部 にアスファルトが付着し、修復に使用 したと思われる貫通孔がある。赤 彩。	刃関	方形	有	黒色片 岩	(10.1)	4.5	1.1	55.7
5	I B	柄～ 身	柄頭と背に入組三叉文が施される。 赤彩。刀身に文様の痕跡がある。	刃関	方形	有	粘板岩	(20.7)	4.2	1.8	140.5
6	I A	柄	柄頭に入組三叉文が施される。	不明	円形	有	黒色片 岩	(15.0)	3.6	1.6	97.5
7	I B	柄～ 身	柄頭に入組三叉文が施される。上下 面にX字文が施される。側面に窪み がある。赤彩。	刃関	方形	有	粘板岩	(23.7)	4.7	2.3	188.5
8	I B	柄～ 身	柄頭に入組三叉文が施される。柄部 上下面には沈線が施される。赤彩。 破損部の一部に研磨が見られる。	刃関	方形	有	黒色片 岩	(21.9)	3.9	1.2	172.0
9	I B	柄～ 身	柄頭に入組三叉文が2段で施される。 赤彩。	刃関	台形	有	黒色片 岩	(16.3)	4.2	1.1	87.9
10	I A ?	柄	柄頭に入組三叉文が施される。赤彩。	不明	台形	有	黒色片 岩	(13.2)	3.8	1.1	86.5
11	Ⅲ	ほぼ 完形 品	柄頭に綾杉文がめぐる。赤彩。	無	台形	有	黒色片 岩	(6.4)	3.3	1.8	60.6
12	不明	柄	柄頭にZ状の文様が施される。	無	方形	有	粘板岩	(27.2)	3.4	1.3	186.1
13	I B	柄～ 身	柄頭に入組三叉文が施される。	刃関	方形	有	不明	(17.2)	3.8	1.9	159.0
14	不明	柄～ 身	柄頭に入組三叉文が施される。柄頭 は破損しており、2つの補修孔があ る。赤彩。	不明	方形	有	粘板岩	(26.0)	2.9	1.4	167.3
15	I B	柄	柄頭に入組三叉文が施される。上下 面に鋸歯文が施される。破損部に整 形痕がある。	刃関	台形	有	粘板岩	(14.7)	3.3	1.8	73.7
16	I B	柄～ 身	柄頭に入組三叉文が施される。柄部 側面に窪みがある。赤彩。背に鋸歯 文が施される。	刃関	方形	有	石墨片 岩	(14.0)	4.2	1.5	103.9
17	I A	柄～ 身	柄頭に入組三叉文が施される。柄頭 側面にも三叉文が施される。赤彩。	刃関	方形	有	石墨片 岩	(22.0)	3.8	1.6	171.0
18	VIA	柄	柄頭に入組三叉文が施される。破損 部を研磨している。	断面差	台形	有	粘板岩	(14.3)	4.5	2.0	148.9

二枚橋(2)遺跡出土石刀観察表(1)

番号	分類	部位	特 徴	柄部の 形成	柄頭の 形状	文 様	石質	計測値 (cm)			重量 (g)
								最大長	最大幅	最大厚	
19	V	柄～ 身	柄頭に工字文が施される。	無	台形	有	粘板岩	(36.4)	4.1	2.2	483.8
20	IX ?	柄	柄頭に工字文が施される。片面が剥離している。	不明	方形	有	不明	(14.0)	2.9	1.8	93.2
21	V	柄	柄頭に工字文が施される。柄頭側面に3条の溝がある。	不明	台形	有	石墨片岩	(11.2)	3.1	1.6	67.6
22	VかIX	柄～ 身	柄頭に工字文風の文様が施される。片面が剥離している。	無	台形	有	不明	(16.0)	2.5	1.6	43.2
23	IX ?	柄	柄頭に工字文が施される。	不明	台形	有	黒色片岩	(10.3)	2.7	1.1	56.2
24	IX ?	柄	柄頭に工字文が施される。片面が剥離している。	無	台形	有	不明	(13.3)	4.1	(1.4)	90.1
25	VかIX	柄	柄頭に工字文が施される。片面が剥離している。	不明	台形	有	粘板岩	(4.2)	4.0	1.6	29.4
26	IX	柄～ 身	柄頭に工字文が施される。	無	方形	有	石墨片岩	(22.6)	3.9	2.7	250.8
27	II	完形	刃部に敲打痕がある。	断面差	台形	無	不明	(33.2)	4.8	1.3	284.3 石膏含む
28	VI	柄～ 身	柄頭は無文。	断面差	台形	無	石墨片岩	(21.2)	4.5	1.3	184.7
29	II	完形	先端に剥離があるが、ほぼ完形である。	無	台形	無	黒色片岩	32.7	3.8	1.5	287.2
30	IV	完形	刀身に厚みがある。	刃関	円形	無	緑色凝灰岩	30.1	5.6	3.7	660.0
31	VI	柄～ 身	柄頭の上下面に刻みがある。刃関に刻みがある。	刃関	台形	無	石墨片岩	(28.4)	4.9	1.4	265.0
32	V	柄～ 身	柄頭は無文。	不明	方形	無	石墨片岩	(19.0)	4.3	1.1	159.8
33	不明	柄	両面ともに剥離してる。	不明	方形	無	不明	(10.7)	2.9	(1.4)	58.5
34	VI	柄	柄頭に4本の細い沈線が施される。	断面差	方形	無	不明	(12.5)	3.4	1.0	84.8
35	不明	柄～ 身	柄頭は無文。	不明	方形	無	黒色片岩	(24.2)	3.8	1.5	194.4
36	不明	柄	両面が剥離している。	不明	円形	無	不明	(11.9)	2.4	(0.5)	16.6
37	VI	柄～ 身	刀身と柄頭の間に段差がない。	断面差	円形	無	変朽安山岩	(18.1)	3.5	1.0	98.1
38	VI	柄～ 身	刃関付近に刻みがある。	刃関	方形	無	不明	(20.2)	4.0	2.3	239.6
39	III	完形	柄頭に4条の平行沈線がめぐる。切っ先に刻みが7本ある。	無	台形	有	黒色片岩	(31.5)	3.7	2.3	264.9
40	不明	柄	柄頭は無文。	不明	台形	無	不明	(7.3)	3.0	1.3	50.3
41	不明	柄	片面が剥離している。	不明	台形	無	不明	(7.6)	4.3	(1.7)	57.6

二枚橋(2)遺跡出土石刀観察表(2)

番号	分類	部位	特 徴	柄部の 形成	柄頭の 形状	文 様	石質	計測値 (cm)			重量 (g)
								最大長	最大幅	最大厚	
42	VIII	柄	柄頭が撥形である。	不明	撥形	無	不明	(16.2)	2.7	1.4	77.0
43	不明	柄	剥離が見られる。	不明	方形	無	不明	(8.8)	3.3	(0.9)	35.0
44	VIII	柄	背に溝がある。	断面差	撥形	無	黒色片 岩	(6.9)	2.7	1.3	37.8
45	不明	柄	片面が剥離している。	不明	不明	無	不明	(11.0)	(4.2)	(2.6)	149.3
46	IX	柄～ 身	柄頭は無文。	無	円形	無	黒色片 岩	(20.5)	2.9	2.0	165.0
47	V	柄～ 身	柄頭に穿孔がある。柄部に刻み目が 多数ある。	無	台形	無	黒色片 岩	(14.9)	2.7	1.0	59.0
48	V	柄～ 身	柄頭に沈線がある。	断面差	方形	有	不明	(16.9)	3.4	1.3	114.5
49	I ?	柄～ 身	柄頭は無文。	刃関	方形	無	石墨片 岩	(9.4)	2.8	1.3	37.8
50	V	柄～ 身	柄頭に4本の沈線が施される。柄部 に沈線が1条めぐる。	刃関	方形	有	不明	(14.9)	3.8	0.5	34.4
51	II ?	柄～ 身	大部分が剥離している。	刃関	方形	無	粘板岩	(22.4)	(4.0)	(1.6)	228.7
52	I ?	身	背に入組三叉文が施される。	不明	不明	有	不明	(11.7)	2.7	1.6	81.1
53	I ?	身	背に入組三叉文が施される。	不明	不明	有	不明	(17.4)	3.6	1.5	114.4
54	I ?	身～ 切っ先	背に入組三叉文が施される。	不明	不明	有	黒色片 岩	(17.1)	3.1	1.5	64.6
55	I ?	身～ 切っ先	背に入組三叉文が施される。	不明	不明	有	黒色片 岩	(15.9)	2.5	1.7	95.3
56	I ?	身	背に入組三叉文が施される。	不明	不明	有	不明	(16.7)	3.1	1.5	124.4
57	I	柄～ 身	柄頭に入組三叉文が施される。赤彩。 背に入組三叉文が施される。	断面差	方形	有	粘板岩	(12.8)	2.8	1.0	39.4
58	不明	身	刀身に鋸歯文が施される。	不明	不明	有	不明	(5.4)	3.0	0.5	9.4
59	VII B	柄	柄頭に上下互い違いに三角形の刻み が施される。	不明	台形	有	黒色片 岩	(7.8)	2.9	1.0	32.9
60	不明	柄	柄頭に幅の広い沈線がめぐる。片面 が剥離している。	不明	方形	有	不明	(11.4)	3.7	0.9	47.8
61	不明	柄	柄頭に5本の彫込みが施される。片 面が剥離している。	不明	方形	無	黒色片 岩	(10.6)	3.1	0.6	38.2
62	IX ?	柄	柄頭に1条の沈線がめぐり、多数の 刻線がある。	沈線	円形	有	粘板岩	(11.3)	3.6	2.6	123.7
63	IX	柄～ 身	柄頭に菱形の文様が施される。	無	台形	有	不明	(14.4)	3.4	1.9	118.5
64	IX	柄	柄頭に4条の平行沈線がめぐる。	不明	円形	有	粘板岩	(8.9)	2.5	1.7	57.1
65	不明	柄	片面が剥離している。	不明	不明	無	不明	(7.0)	2.9	(0.5)	14.4

二枚橋(2)遺跡出土石刀観察表(3)

番号	分類	部位	特 徴	柄部の 形成	柄頭の 形状	文 様	石 質	計測値 (cm)			重量 (g)
								最大長	最大幅	最大厚	
66	不明	柄～身	柄頭と柄の境に沈線がめぐる。片面が剥離している。	不明	方形	無	黒色片岩	(18.7)	(3.0)	1.5	141.8
67	不明	柄～身	柄頭と柄の境に2本の沈線がみられる。	不明	不明	無	不明	(17.5)	3.1	1.0	86.8
68	I B	柄～身	柄頭は無文。	刃関	方形	無	黒色片岩	(18.3)	4.7	1.5	110.0
69	不明	柄	柄頭は厚みがあり、ねじれている。	不明	方形	無	粘板岩	(9.5)	4.0	3.3	97.7
70	不明	柄～身	柄頭と身に沈線がある。	不明	方形？	無	不明	(18.8)	3.4	1.4	152.3
71	VI	柄～身	柄頭は無文。	無	台形	無	黒色片岩	(19.0)	3.7	2.0	165.8
72	不明	身	柄側に沈線がある。	不明	不明	無	不明	(14.8)	2.5	1.4	78.5
73	不明	柄	両面が大きく剥離している。	不明	不明	無	黒色片岩	(6.7)	(2.6)	(0.6)	10.1
74	不明	柄	破損部に擦り切り痕が見られる。	不明	方形	無	不明	(7.0)	4.8	1.4	63.0
75	不明	柄	未製品か？	不明	不明	無	不明	(17.8)	3.7	1.1	108.7
76	VIII C	柄～身	アスファルトが付着している部分に別の素材で作った組頭を装着するものと思われる。	刃関	不明	無	黒色片岩	(17.2)	2.6	1.4	94.2
77	VIII D	身～切っ先	柄頭に相当する部分に貫通孔がある。	無	不明	無	黒色片岩	(20.7)	2.9	1.6	152.1
78	不明	柄～身	石刀の未製品か？敲打痕が見られる。	不明	方形？	無	黒色片岩	(34.7)	3.4	2.2	408.0
79	不明	身～切っ先	片面が剥離している。	不明	不明	無	不明	(19.9)	2.8	0.9	69.4
80	不明	身～切っ先	刃部の一部が摩滅している。	不明	不明	無	粘板岩	(23.5)	2.3	1.5	130.0
81	不明	柄～身	断面が楔形である。刀身が内反りである。	不明	不明	無	黒色片岩	(26.5)	3.4	1.3	205.0
82	不明	身～切っ先	断面が楔形である。刀身が内反りである。	不明	不明	無	黒色片岩	(24.1)	2.5	0.9	111.7
83	不明	身～切っ先	断面が楔形である。刀身が内反りである。	不明	不明	無	不明	(18.2)	3.7	1.5	160.3
84	不明	身～切っ先	断面が楔形である。刀身が内反りである。	不明	不明	無	不明	(12.9)	4.6	1.5	104.1
85	不明	身～切っ先	断面が楔形である。刀身が内反りである。	不明	不明	無	粘板岩	(11.1)	2.9	1.2	56.5
86	不明	身～切っ先	両端が欠損。	不明	不明	無	不明	(15.9)	3.0	1.4	117.1
87	不明	身～切っ先	断面が楔形である。	不明	不明	無	不明	(17.8)	4.2	1.1	157.5

二枚橋(2)遺跡出土石刀観察表(4)

番号	分類	部位	特 徴	柄部の 形成	柄頭の 形状	文 様	石 質	計測値 (cm)			重量 (g)
								最大長	最大幅	最大厚	
88	不明	身～ 切っ先	断面が楔形である。	不明	不明	無	黒色片 岩	(12.7)	3.6	1.1	92.7
89	不明	身～ 切っ先	断面が楔形である。	不明	不明	無	黒色片 岩	(15.4)	2.6	1.2	85.0
90	不明	身～ 切っ先	断面が楔形である。	不明	不明	無	石墨片 岩	(17.6)	3.6	1.3	121.3
91	不明	身～ 切っ先	断面が楔形である。	不明	不明	無	不明	(15.0)	2.9	1.0	70.2
92	不明	身～ 切っ先	刃部がやや磨滅している。	不明	不明	無	黒色片 岩	(22.0)	3.0	1.4	155.0
93	不明	身	両端が欠損。	不明	不明	無	黒色片 岩	(15.5)	3.3	1.9	185.0
94	不明	身	両端が欠損。	不明	不明	無	黒色片 岩	(19.5)	2.8	2.4	250.0
95	不明	身～ 切っ先	背に1条の溝がある。刀身先端付近 に文様がある。	不明	不明	有	黒色片 岩	(17.8)	2.7	1.3	98.6
96	不明	身	両端が欠損。	不明	不明	無	不明	(16.4)	2.9	1.6	134.8
97	不明	身	両端が欠損。	不明	不明	無	黒色片 岩	(15.0)	3.3	1.3	111.7
98	Ⅱ	身～ 切っ先	断面が楔形である。	不明	不明	無	不明	(26.5)	4.1	1.3	235.1
99	Ⅱ	切っ先	刃部先端に2本の刻みがある。	不明	不明	無	不明	(6.8)	2.7	0.6	21.4
100	不明	身～ 切っ先	刃部に約19本の刻みがある。	不明	不明	有	不明	(22.3)	4.3	1.0	142.5
101	不明	身～ 切っ先	破損がはげしい。	不明	不明	無	不明	(13.0)	(3.3)	(1.1)	61.3
102	不明	切っ先	片面が剥離している。	不明	不明	無	不明	(7.3)	3.3	(0.8)	29.7
103	不明	切っ先		不明	不明	無	不明	(4.4)	2.6	0.5	9.5
104	不明	身～ 切っ先	先端部が破損している。	不明	不明	無	不明	(13.7)	3.7	0.8	71.1
105	不明	切っ先	背に溝がある。	不明	不明	無	不明	(10.7)	4.5	0.9	83.7
106	不明	身	両端が欠損。	不明	不明	無	不明	(12.3)	2.2	1.6	72.0
107	不明	身～ 切っ先	刀身に2条の沈線が巡る。両端が欠 損。	不明	不明	無	不明	(22.5)	2.6	3.7	350.7
108	不明	身～ 切っ先	切っ先に刻みがある。	不明	不明	無	粘板岩	(16.7)	3.7	1.8	198.7
109	不明	柄～ 身	身に1条の沈線がある。	不明	不明	無	不明	(13.3)	3.5	1.3	106.6
110	不明	身～ 切っ先	石棒の破片と思われる。	不明	不明	無	黒色片 岩	(10.2)	2.0	1.6	43.7
111	不明	身～ 切っ先	石棒の破片と思われる。	不明	不明	無	黒色片 岩	(18.8)	2.2	1.9	101.6

二枚橋(2)遺跡出土石刀観察表(5)

番号	分類	部位	特 徴	柄部の 形成	柄頭の 形状	文 様	石質	計測値 (cm)			重量 (g)
								最大長	最大幅	最大厚	
112	不明	柄か 切っ先	破損部に擦り切り痕がある。	不明	不明	有	黒色片 岩	(17.1)	3.0	1.6	77.4
113	不明	切っ先	背が摩滅している。	不明	不明	無	不明	(8.5)	2.8	1.2	44.2
114	不明	身	欠損部に研磨痕がある。	不明	不明	無	不明	(12.7)	4.1	1.5	120.0
115	不明	柄か 切っ先	石棒の破片と思われる。破損部に擦り切り痕が見られる。	不明	不明	無	硬質砂 岩	(10.6)	2.9	2.9	164.1
116	不明	身～ 切っ先	石斧に転用した可能性がある。	不明	不明	無	不明	(14.7)	2.7	1.8	129.7

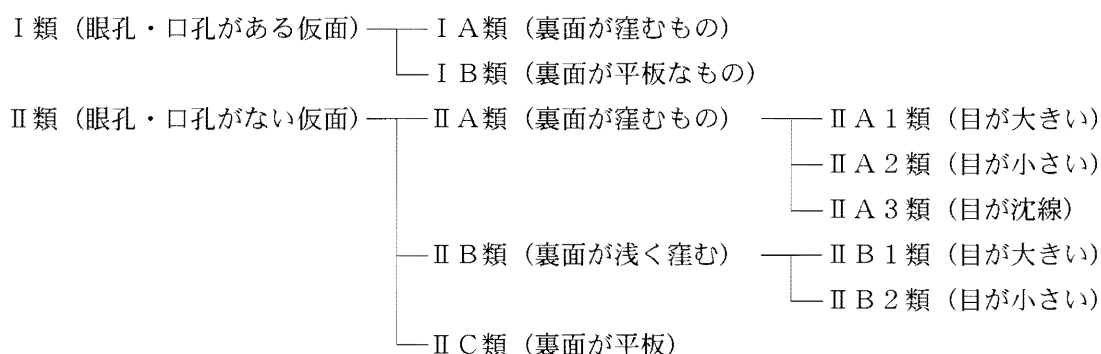
二枚橋(2)遺跡出土石刀観察表(6)

Ⅲ 二枚橋(2)遺跡・その他出土の土製仮面

藤沼邦彦・佐布環貴・萩坂華恵

縄文時代の土製仮面は、全国で約60の遺跡から約100点出土している。そのうち7割が東北地方北部の青森・岩手・秋田の3県で占め、しかも大部分が晩期に属する。青森県のは35点あり、このうちの20点が二枚橋(2)遺跡出土である。この資料を中心に「青森県における縄文時代の土製仮面」(藤沼・佐布・萩坂2002年)を纏めたことがあるが、私たちのゼミで調査し、実測図を作成したものはここに再録した。県外のものとして岩手県山井遺跡・伊保内遺跡の土製仮面を新たに加えた。

土製仮面の分類は、仮面の被るという本来の機能を重視し、大分類には目・口に孔があけられているか、裏面は顔にあてるとに相応しいように窪んでいるかを基準とした。細分類は青森県出土の仮面の実情(Ⅱ類が多い)に合うようにした。紐穴の有無は、破片が多いため分類の基準に入れなかったが、仮面の機能を考える上で重要であるので、一覧表の項目に含めた(紐孔の位置により両端・頂部・裏面突起に分けた)。



①二枚橋(2)遺跡 [橘ほか2001年、藤沼・佐布・萩坂2002年] (図1～20)

二枚橋(2)遺跡では、大畑町教育委員会の調査で、土製仮面が20点も出土している。これらの仮面は台地を取り巻く斜面上部の遺物包含層から広く出土しているが、とくに北斜面と南斜面に集中し、同一グリッドや隣接したグリッドで同じ層位から複数(2～3個)出土しているものがある。これは複数の仮面が短期間に廃棄されたこと、そして二枚橋(2)遺跡を残した縄文社会では複数の仮面が同時に使用されたことを物語っていると考えてよい。特殊な出土状況はないようである。

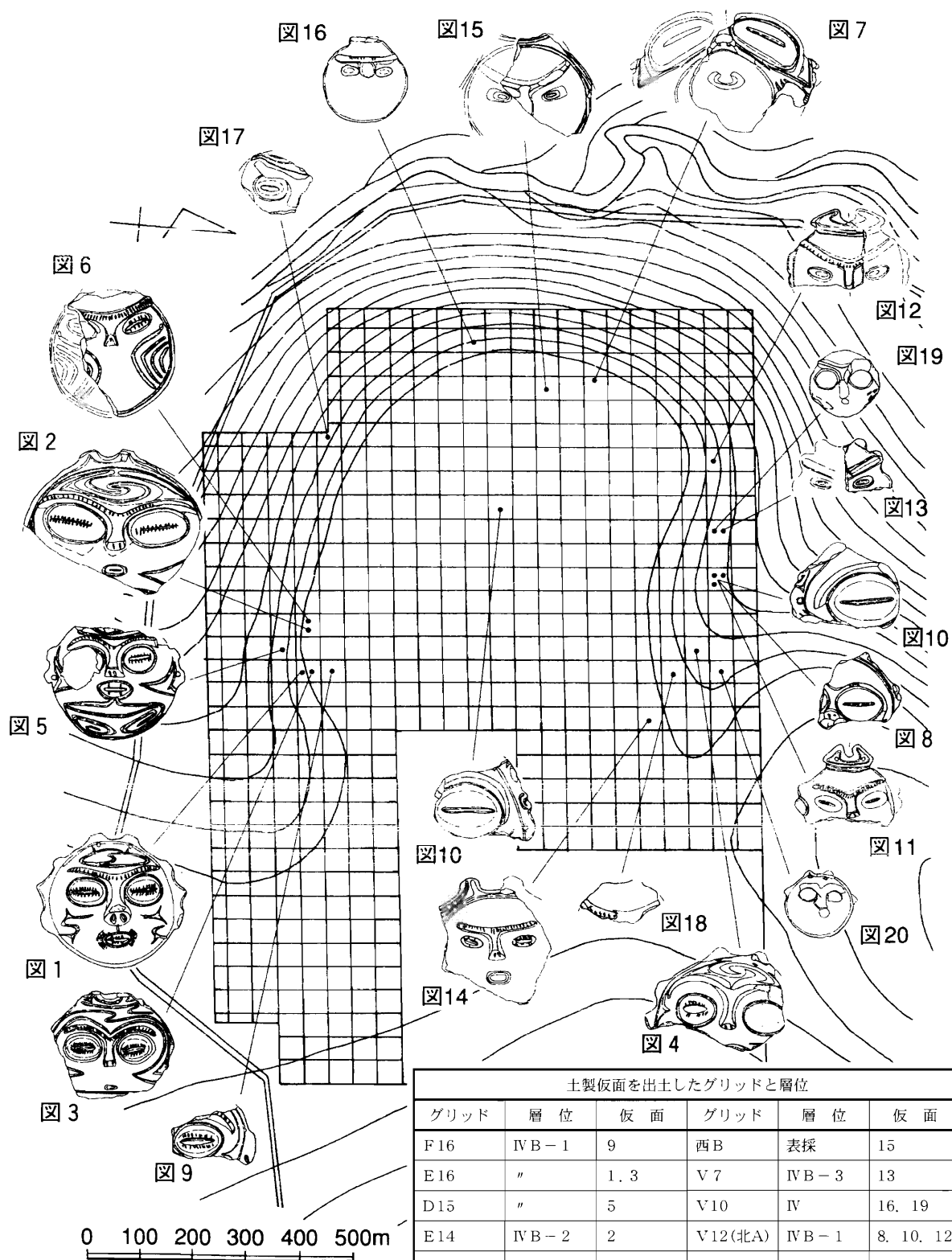
報告書は土面の年代を晩期後半とする。共伴の土器を報告書で検討すると、その多くは大洞C2式あるいは大洞C2-A式(大洞C2式と大洞A式との間にくるものを便宜的に表現。聖山式などが相当)であり、ついで大洞A式となる。しかし仮面の文様を考慮すれば、大洞C2式あるいは大洞C2-A式に狭めることができよう。20点の仮面は全てⅡ類で、うちⅡA類が19点、ⅡC類が1点である。

②伝亀ヶ岡遺跡 (青森県木造町館岡字亀ヶ岡) [佐藤1897年、藤沼・佐布・萩坂2002年] (図24)

亀ヶ岡遺跡は、「亀ヶ岡式土器」の由来となった縄文晩期の大型遺跡で、これまでに土製仮面が3個出土している。ここで取り上げた伝亀ヶ岡遺跡出土といわれる土製仮面は(成田祐之蔵、角田猛彦旧蔵)、「(角田)氏が弘前市古道具屋より之を獲たりと。出所は恐らく亀ヶ岡なるべし」(佐藤1987)とあるので、出土地は確実でない。ⅡC類に分類。大洞C2式～大洞A式期のものであろう。

③千苅(1)遺跡 (青森県金木町喜良市字千苅) [笹森・斎藤1995年、藤沼・佐布・萩坂2002年] (図26)

1993年、青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査し、縄文晩期の大型竪穴住居跡・土坑などの遺構や多数の遺物を検出した。仮面は遺物包含層から晩期の土器に共伴して出土したとあるが、土器型式を書いていない。遺物包含層の土器は大洞C1式～大洞A式である。ⅡB1類に分類される。



土製仮面を出土したグリッドと層位					
グリッド	層 位	仮 面	グリッド	層 位	仮 面
F 16	IVB-1	9	西B	表採	15
E 16	"	1, 3	V 7	IVB-3	13
D 15	"	5	V 10	IV	16, 19
E 14	IVB-2	2	V 12(北A)	IVB-1	8, 10, 12
E 14	IVB-3	6	U 15	IVY-4	4
F 6	IVA-1	11	V 16	IVB-3	18
L 2	"	20	T 16	IVY-4	17
B集石	"	10	S 18	IV	14
西C	IVB-1	7			

参考図 二枚橋(2)遺跡における土製仮面の出土地点と層位 (表)

④五月女范遺跡（青森県市浦村相内字相内）〔新谷1983年、藤沼・佐布・萩坂2002年〕（図22）

1981年、市浦村教育委員会によって発掘調査され、主として晩期初頭（大洞B式）と晩期中頃（大洞C2式～大洞A式）の土器が大量に出土し、そのなかに小型の仮面が1点含まれていた（新谷1983）。報告書に仮面の写真が掲載されているが、実測図や説明はなく、出土状況や共伴土器は不明である。ⅡB2類に分類される。形態・裏面の文様からみて大洞C2-A式土器に伴うものであろう。

⑤今津遺跡（青森県平館村今津字オノ神）〔岡田1986年、藤沼・佐布・萩坂2002年〕（図21）

1984年、青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査したもので、土製仮面は遺物密集ブロック（捨て場）の第2層から大量の大洞C2式土器・石器などと共に出土した。明確に共伴土器が示された貴重な資料である。ⅡA2類に分類される。

⑥虚空蔵遺跡（青森県名川町平字虚空蔵）〔鈴木1979年、藤沼・佐布・萩坂2002年〕（図28）

馬淵川の河岸段丘上にある縄文晩期を中心とする大遺跡で、これまでに2個の土製仮面が採集されている。ここで取り上げた土製仮面は、青森県立郷土館風韻堂コレクションのもので、ⅠA類に分類される。目の下に入れ墨状の沈線がある。割れ目に補修に用いたアスファルトが付着。

⑦鳥舌内（青森県名川町鳥舌内）〔東北歴史資料館1996年、藤沼・佐布・萩坂2002年〕（図25）

東北歴史資料館佐々木コレクションの土製仮面で、名川町鳥舌内と注記されている。鳥舌内は、馬淵川の支流である如来堂川の流域にある大字名で、外林遺跡や下沢田(2)遺跡などの晩期の遺跡がある。これらの遺跡が土製仮面出土地の候補となろう。ⅡA1類に分類される。大洞C1式期と推定。

⑧羽黒平遺跡（青森県浪岡町五本松字羽黒平）〔鈴木1979年、藤沼・佐布・萩坂2002年〕（図23）

羽黒平遺跡は、大きな遺跡で、3地点に分かれている。青森県立郷土館風韻堂コレクションのこの土製仮面には酸化鉄が付着しており、かつて水田から多数の縄文晩期の遺物が出土した羽黒平(3)遺跡が出土地である可能性が高い。ほぼ完全な形をしており、ⅡA1類に分類される。大洞C2式～大洞C2-A式期と推定。

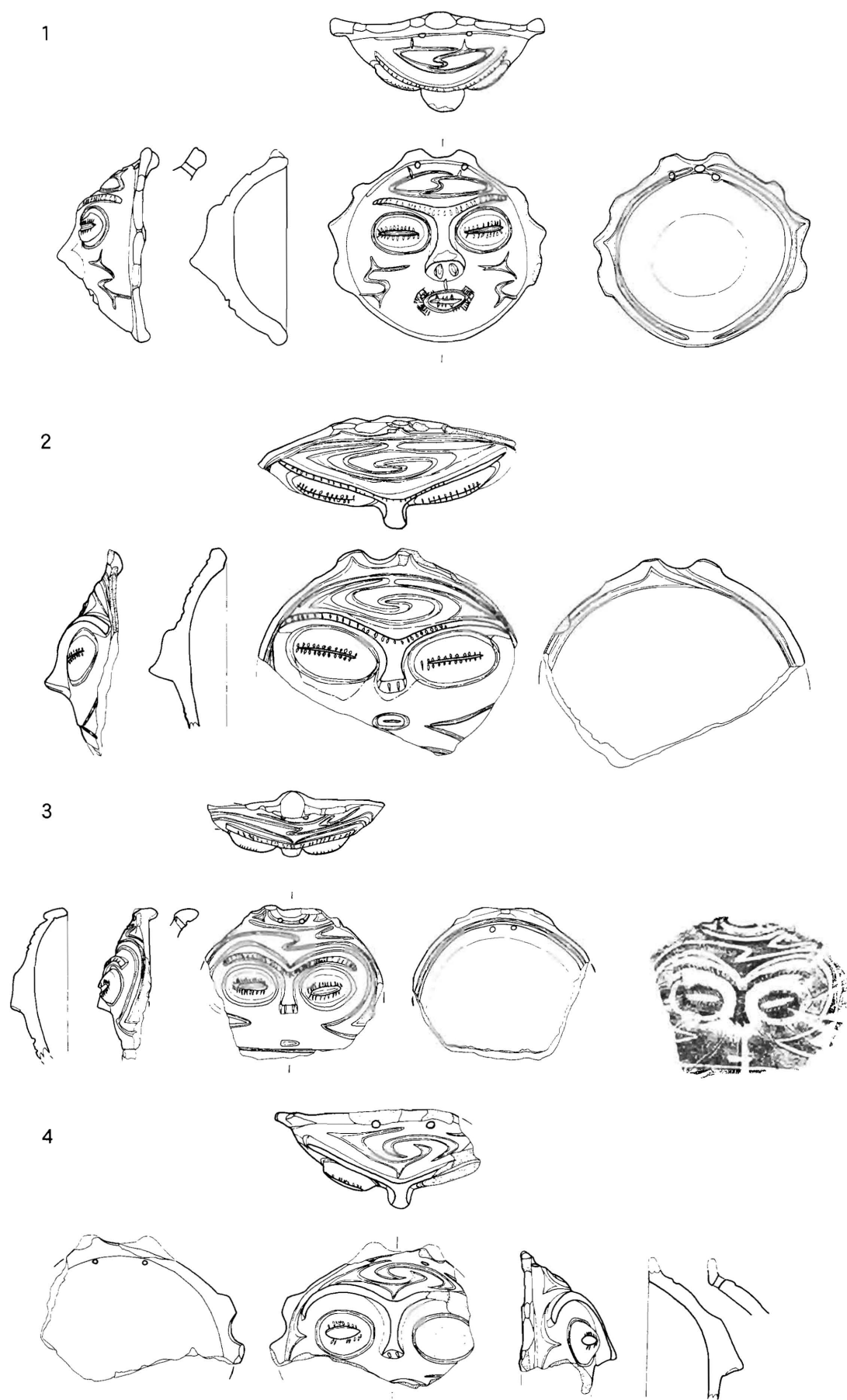
⑨山井遺跡（岩手県二戸郡一戸町小友字山井）〔高田・中村1995年〕（図29）

山井遺跡は馬淵川上流にある縄文晩期の遺跡で、1993年に一戸町教育委員会によって調査され、大洞B1式から大洞C1式までの土器・石器・土偶などが多数出土した。土製仮面は、右目と右頬の部分のみが残った全体の5分の1ほどの破片である。眉は隆帯で表現される。楕円形の大きな目は、沈線で縁取りされ、中央に横線を一本引く。頬に縄文を伴う沈線文がみられる。また口に近い部分に鼻唇溝を表したと見られる段が弧状に見られる。眉・頬の部分の縄文はLRである。復元すると目はやや釣り上がるようである。周囲がすべて欠損しているため紐孔は明らかでない。ⅡA1類に分類。共伴の土器型式は明らかにされていないが、出土土器と形状から推定して大洞C1式期であろう。

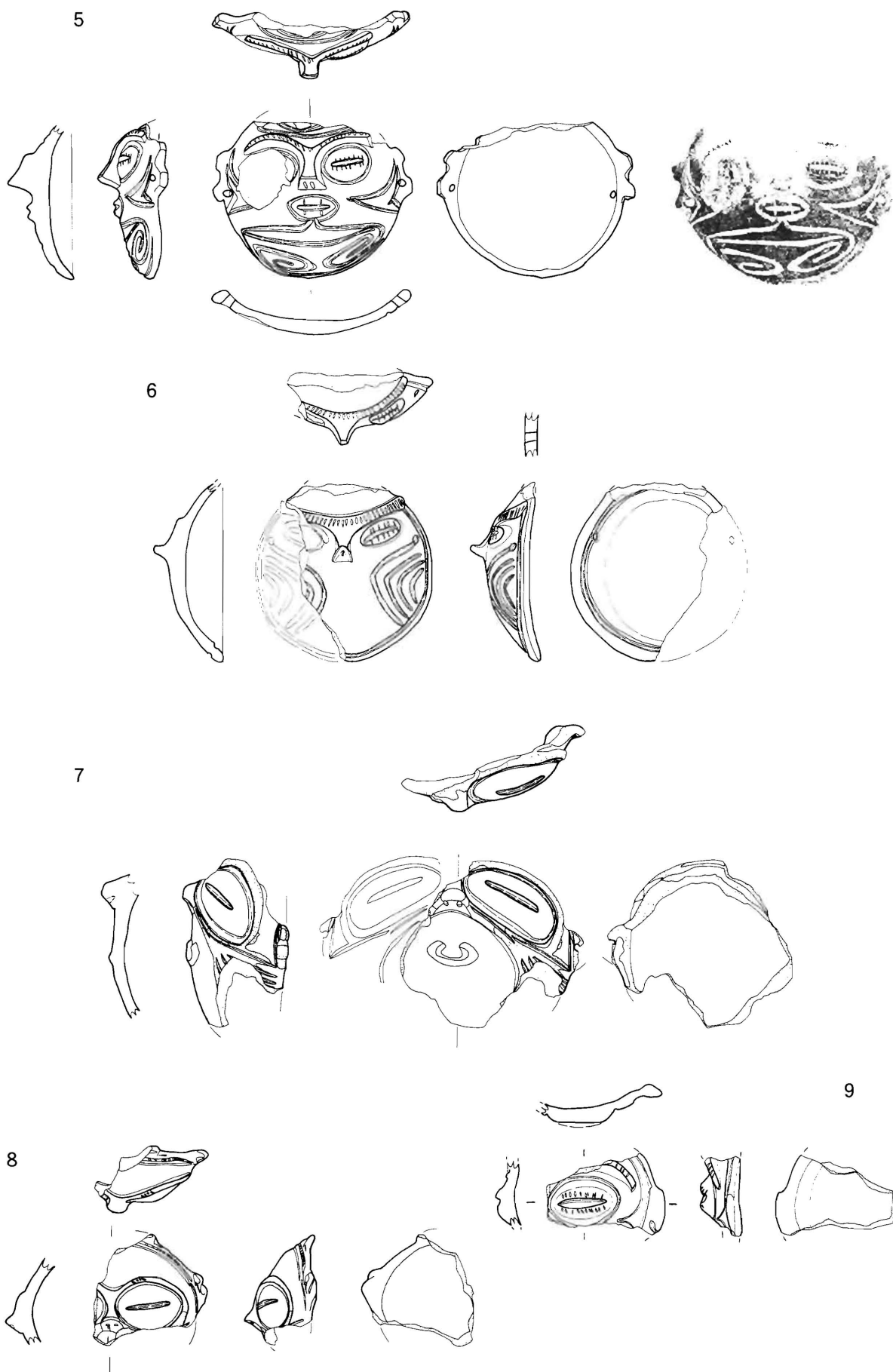
⑩伊保内地区（岩手県九戸郡九戸村伊保内）〔鈴木1979年〕（図27）

青森県立郷土館風韻堂コレクションの土製仮面である。伊保内は九戸村の大字で5ヶ所の縄文晩期の遺跡（南田Ⅰ・南田Ⅱ・蒔田Ⅰ・伊保内館・川向Ⅲ遺跡）が含まれているが、土製仮面がどの遺跡から出土したかは明らかでない。全体の2分の1ほどの破片で、左上の縁辺と左頬・顎の部分が欠損している。両目の周囲と鼻・口、頬の文様が粘土紐を貼り付けた隆帯で表現され、目の周囲と頬の文様に縄文LRが付く。楕円形の大きな目は、周囲に沈線が巡り、中央に列点を伴う横線が引かれる。鼻と口は小さく、鼻は瘤状に、口は三角形に作られる。顎の部分に沈線文が見られる。ⅡA1類に分類されるが、両目を囲む眼鏡状の隆帯と小さな口・鼻は、土製仮面より遮光器土偶の顔面に共通する特徴といえよう。裏面は皿状に窪むが、比較的深い。頭部に突起が剥落した痕がある。紐穴は不明。大洞C1式期のものであろう。

（藤沼・佐布・萩坂）

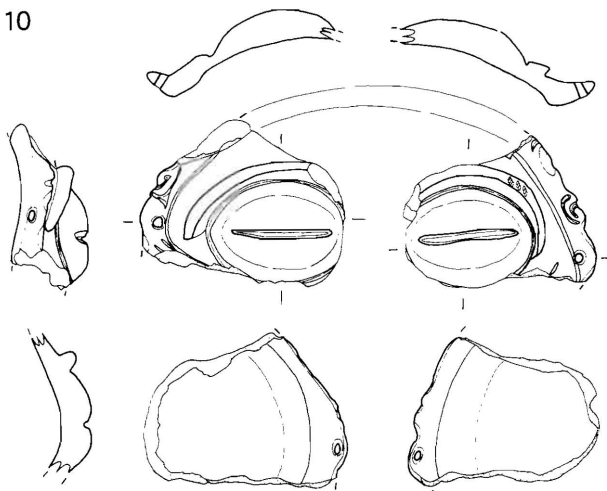


第1図 二枚橋(2)遺跡出土土製仮面(図1~4)



第2図 二枚橋(2)遺跡出土土製仮面 (図5～9)

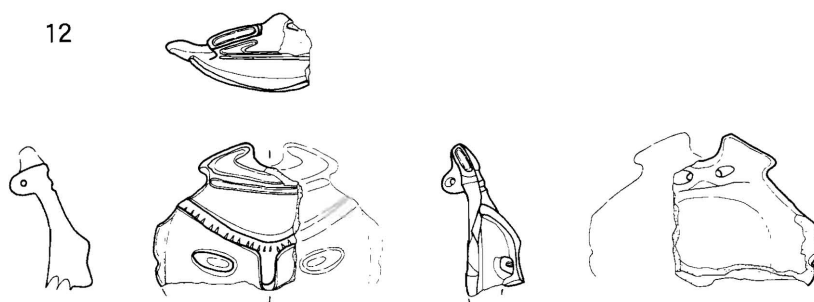
10



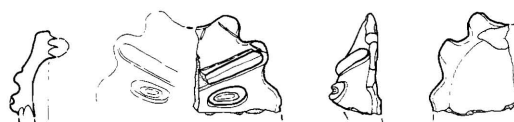
11



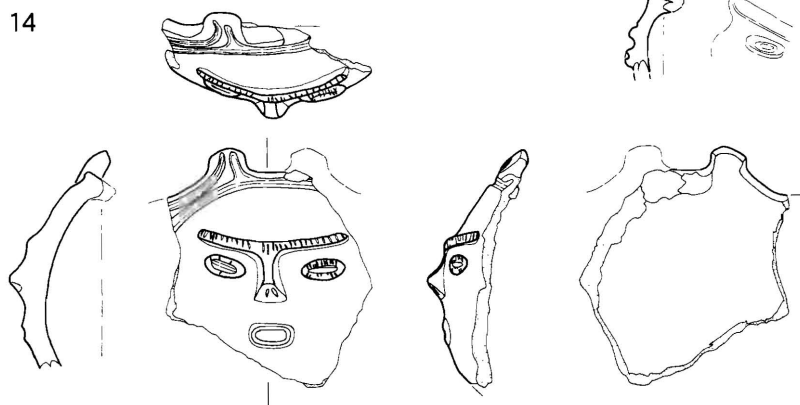
12



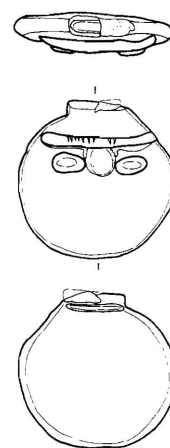
13



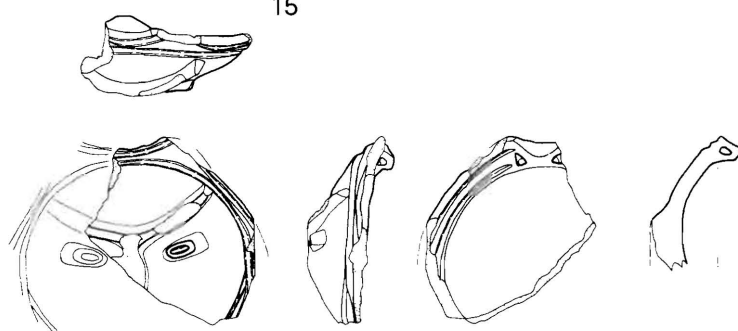
14



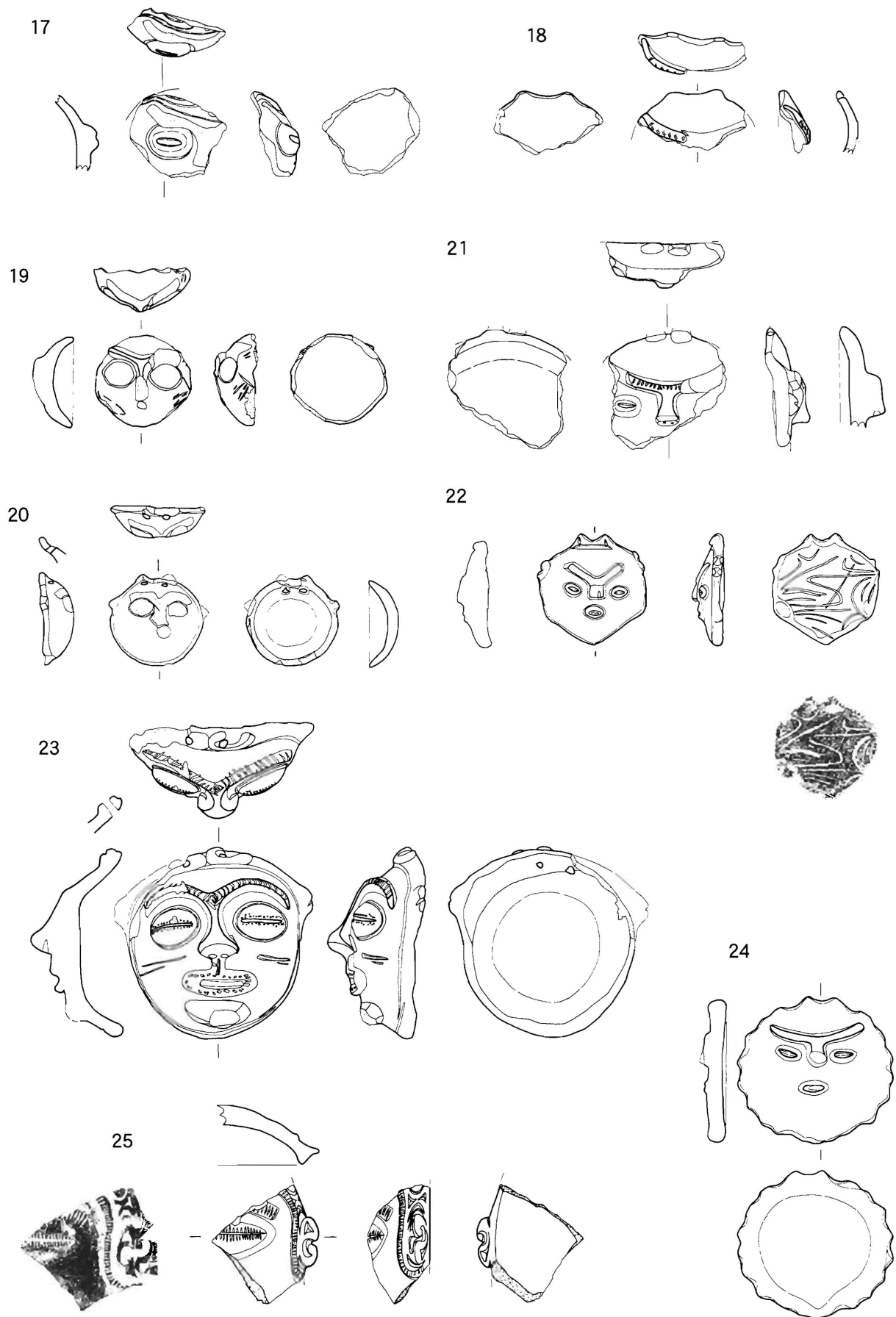
16



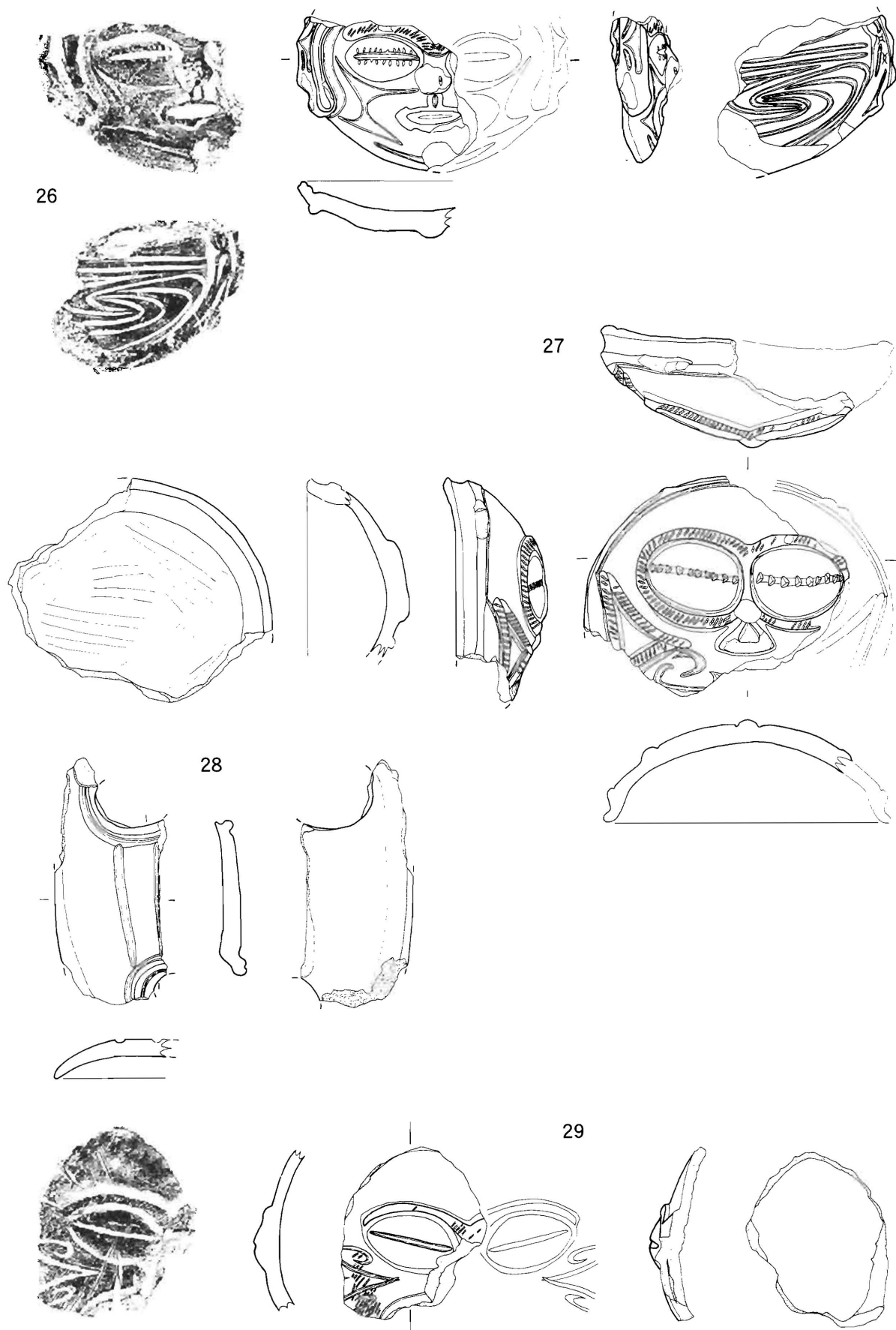
15



第3図 二枚橋(2)遺跡出土土製仮面 (図10~16)



第4図 二枚橋(2)遺跡ほか出土土製仮面
(二枚橋(2)－図17～20、今津－図21、五月女范－図22、羽黒平－図23、鳥舌内－図25、亀ヶ岡－図24)



第5図 千苺(1)遺跡ほか出土土製仮面
(千苺(1)―図26、伊保内―図27、虚空蔵―図28、山井―図29)

遺 跡		法 量					推定 横幅	分類	紐穴 位置	顔料	口の 文様	目の 列点	アスファ ルト
		縦長	横幅	高さ	深さ	重さ							
1	二枚橋(2)	9.5	11.7	4.7	2.6	128.8	11.7	Ⅱ A 1	頂部	赤	口端三角文・ 口辺刻目文	列点	
2	二枚橋(2)	10.1	12.7	3.3	1.5	105.7	4.0	Ⅱ A 1	不明	なし	なし	列点	
3	二枚橋(2)	7.5	8.6	3.0	1.6	52.0	10.0	Ⅱ A 1	頂部	なし	なし	列点	
4	二枚橋(2)	6.9	10.0	4.8	3.0	65.5	12.0	Ⅱ A 1	頂部	なし	なし	なし	
5	二枚橋(2)	7.9	10.1	3.3	1.3	65.0	10.1	Ⅱ A 1	両端	なし	口辺刻目文	列点	
6	二枚橋(2)	10.0	7.3	3.3	1.7	58.7	9.0	Ⅱ A 1	両端	なし	なし	列点	
7	二枚橋(2)	13.5	9.2	—	—	63.9	14.0	Ⅱ A 1	両端	赤黒	なし	なし	
8	二枚橋(2)	5.6	5.9	—	—	23.0	10.4	Ⅱ A 1	不明	なし	不明	なし	
9	二枚橋(2)	4.1	6.1	—	—	19.2	13.4	Ⅱ A 1	不明	なし	不明	列点	
10	二枚橋(2)	6.3	7.8	—	—	57.6	18.0	Ⅱ A 1	両端	不明	不明	なし	
		5.8	7.4	—	—	49.5							
11	二枚橋(2)	5.7	7.1	—	—	37.8	7.7	Ⅱ A 2	頂部	赤	不明	なし	
12	二枚橋(2)	5.5	5.5	2.2	0.6	36.0	9.0	Ⅱ A 2	裏面	なし	不明	なし	
13	二枚橋(2)	3.8	3.3	—	—	9.4	7.0	Ⅱ A 2	裏面?	赤	不明	なし	
14	二枚橋(2)	8.9	8.0	—	—	60.1	11.0	Ⅱ A 2	裏面?	赤	なし	列点	
15	二枚橋(2)	7.3	6.3	—	—	36.7	10.2	Ⅱ A 2	裏面	なし	不明	なし	
16	二枚橋(2)	6.0	6.0	1.4	0	43.7	6.0	Ⅱ C	なし	なし	なし	なし	
17	二枚橋(2)	4.3	5.0	—	—	15.8	8.5	Ⅱ A 1	不明	なし	不明	なし	
18	二枚橋(2)	3.2	5.6	—	—	10.0	8.8	Ⅱ A 2	不明	なし	不明	不明	
19	二枚橋(2)	4.7	5.0	2.2	1.1	20.9	5.2	Ⅱ A 3	なし	なし	なし	なし	
20	二枚橋(2)	4.8	4.8	1.5	1.0	17.0	5.2	Ⅱ A 2	頂部	なし	なし	不明	
21	今津	6.1	6.1	2.3	0.5	37.1	9.0	Ⅱ A 2	不明	なし	不明	なし	
22	五月女范	5.8	5.7	1.7	0.1	32.1	5.7	Ⅱ B 2	なし	なし	なし	なし	
23	羽黒平	9.9	9.4	4.8	2.2	148.2	10.3	Ⅱ A 1	頂部	赤	なし	列点	
24	亀ヶ岡	7.6	8.0	1.2	0	不明	8.0	Ⅱ C	なし	なし	なし	なし	
25	鳥舌内	6.2	5.5	3.0<	2.0	28.5	13.8	Ⅱ A 1	不明	赤黒	不明	列点	アスファルト
26	千苺(1)	7.1	8.1	2.2	1.5	82.6	13.8	Ⅱ B 1	不明	なし	口端三角文	列点	
27	伊保内	11.2	13.3	5.2	4.0	178.5	15.7	Ⅱ A 1	不明	なし	不明	なし	
28	虚空蔵	12.5	5.7	2.0	1.1	68.9	16.0	I A	不明	なし	なし	なし	アスファルト
29	山井	8.8	7.2	2.5<	1.2<	65.0	16.0	Ⅱ A 1	不明	なし	不明	なし	

二枚橋(2)遺跡・その他出土の土製仮面観察表

IV 青森県八戸市是川中居遺跡

薦川貴祥・新井田えり子・関根桂子・横山寛剛・秋山真吾

1. 是川中居遺跡の概要

是川遺跡は、八戸市の南東部、新井田川沿いの標高15～40mの台地に広がる縄文時代の大きな遺跡で、中居遺跡・一王寺遺跡・堀田遺跡とよばれる3つの遺跡からなる。これらを総称して是川遺跡とよぶが、漠然と是川遺跡というと中居遺跡をさすことが多い。

是川中居遺跡は、大正から昭和初期にかけて、土地の素封家である泉山岩次郎氏と義弟の斐次郎氏によって発掘調査され、泥炭層から多数の完全な土器をはじめ漆器などの植物性遺物が多数出土したことで、津軽地方の亀ヶ岡遺跡とならぶ日本でも有名な遺跡になっている。

また、是川中居遺跡は学史的にも重要で、山内清男が岩手県大洞貝塚の資料をもとに亀ヶ岡式土器の編年を行った時、中居遺跡の出土品が大洞BC式の設定に使用されている。さらに、日本石器時代の終末をめぐる、古代史研究者の喜田貞吉と考古学研究者の山内清男が、雑誌「ミネルヴァ」で論争したいわゆる「ミネルヴァ論争」でも是川堀田遺跡（古銭）とともに登場する。

しかし、是川中居遺跡の出土品の素晴らしさは、当然、学問的・学史的に重要なことであるが、なにもまして、その優秀な出土品が一括して保存され、常に公開されていることである。これは遺跡を発掘した泉山岩次郎・斐次郎氏兄弟が大事に出土品を守ってきたこと、そして寄付をうけた八戸市がきちんと「是川考古館」などの施設を作り、保存と公開に努力したからである。現在も、遺跡の解明を目的に八戸市教育委員会は発掘調査を継続しており、様々な成果を挙げている。また現地にある「八戸市縄文学習館」は、展示をはじめ、学校教育・生涯教育の場として利用されている。資料は八戸市博物館でも見ることができる。

(薦川・新井田)

2. 縄文晩期の土器

泉山岩二郎・斐二郎両氏によって、八戸市に寄贈された是川中居遺跡を中心とした出土品は、慶応義塾大学考古学研究室が整理した結果、約1700個の完形土器を含め、約4000点に及ぶことが分かった。しかし、層位的発掘法が広く浸透していなかった時代の発掘調査であったため、遺物採集が主な目的となっており、どの土器がどの土器と一緒に出土したか、あるいは土器以外の石器や土偶・植物性の遺物などがどの土器と伴出したかなどはほとんど分からない資料となっている（遺物の出土地点・層位・出土状況がほとんど記録されていない）。また、数多くの遺物が、各地の展示会で利用されたり、図録などに掲載されたりしているのにもかかわらず、遺物の実測図が公開されたことはほとんどない。そのため学術資料として利用しにくい面があった。そこで私たちは、是川中居遺跡の土器を研究するため、八戸市教育委員会の協力を得て、重要文化財に指定されていない土器のなかから、140点の土器を選びだし、実測図を作成した。選定にあたっては是川中居遺跡の土器が概観できるように、器種や器形、それに文様の種類などを考慮した。その多くは縄文晩期前葉から中葉にかけてのものである。

(器形分類)

今回分類を行った土器は、鉢・浅鉢・皿・壺・台付鉢・注口の6種類である。器種ごとに形態的特徴から更に細分を行った。

①鉢 (22点)

I 類 口頸部が直上するもの。

II 類 口縁部が内湾するもの。

III 類 頸部がゆるく内傾し、口縁端が外折するもの。文様帯の有無で更に細分した。

ⅢA類 胴部に文様帯をもつもの。

ⅢB類 胴部に文様帯をもたず、地文縄文が施されるもの。

Ⅳ類 底部から頸部まで直線的で口縁が外折するもの。

Ⅴ類 口頸部が外反し、逆ハの字状に大きく開くもの。

②浅鉢（14点）

I類 頸部が内傾し、口縁端が外折するもの。

Ⅱ類 頸部から口縁にかけて直上するもの。

Ⅲ類 口縁が直線的に開くもの。

Ⅳ類 口縁が内湾あるいは内湾ぎみに開くもの。

③皿（8点）

I類 丸底のもの。

Ⅱ類 平底のもの。

④壺（72点）

I類 頸部が長く、胴部が扁平で楕円形のもの。

Ⅱ類 頸部が短く肩が張り、器高が浅いもの。文様の有無で更に細分した。

ⅡA類 文様が施文されるもの。

ⅡB類 無文のもの。

Ⅲ類 胴部下半または底部に最大径をもつもの。

Ⅳ類 口縁部に最大径をもつもの。

Ⅴ類 胴部が球形あるいは球形に近く、丸みをもつもの。

Ⅵ類 胴部が長く、器高が高いもの。底部の形状で更に細分した。

ⅥA類 平底あるいは丸底のもの。

ⅥB類 尖底のもの。

Ⅶ類 肩が張り、器高が高めのもの。

Ⅷ類 残存部が口頸部のみで、上記の分類項目に該当しないもの。

⑤台付鉢（12点）

I類 口縁部が外反し、逆ハの字状に大きく開くもの。

Ⅱ類 口縁部が内湾あるいは内湾ぎみに開く浅鉢に台部がつくもの。

Ⅲ類 頸部が内傾し、口縁端が外折するもの。

Ⅳ類 口縁部が内湾するもの。

⑥注口（12点）

I類 胴最張部に注口が位置し、胴部が扁平なもの。

Ⅱ類 胴最張部に注口が位置し、胴部にふくらみをもつもの。

Ⅲ類 胴最張部に注口が位置するとともに隆帯が巡るもの。底部の形状により更に細分を行った。

ⅢA類 丸底のもの。

ⅢB類 平底のもの。

（文様分類）

次に文様について見ていく。ここでは土器に施文される文様の要素の中でも主文様を構成するものに注目して分類を行った。なお、それぞれの文様にはいくつかのバリエーションがあるため、その種類によって更に細分を行った。

①三叉文

A類 二つの三叉文が連結したもので、この中には連結部分が刺突状になるものもある（図20.45.83）。

B類 二つの三叉文が互いに咬みあうように入り組むもの（図13.34.36.70.72他）。

C類 二つの三叉文が又の部分で向かい合うもの（図17.28.132）。

D類 一つの三叉文と、三叉文の又の一つが反転した三叉文が対になって施されるもの（図83.96）。

E類 向かい合った二つの三叉文の間に入組沈線を施したもの。この中には三叉文と入組沈線が連結するものも見られる（図27.34.72.80.110.117他）。

鉢・壺・台付鉢・注口に見られる。17は一部三叉文が崩れ、短沈線状になっているが、三叉文の要素が強いと思われ、三叉文C類とした。

②羊歯状文

A類 入り組むもの。この中にはいわゆるK字状・Z字状のものも含まれる（図1.14.21.23.30.78他）。

B類 入り組まないもの（図26.40.51.71.101他）。

C類 三叉文の要素が見られるもの（図3.6.8.118）。

D類 文様全体が平行化して、点列に近いもの（図10.22.24.29.77他）。

台付鉢を除く器種すべてに見られる。

③菱形文

A類 入り組むものあるいは連結するもの。この中には連結部分が刺突状になるものもある（図15.35.38.44.45他）。

B類 入り組まないもの（図14.16.31.36）。

鉢・皿・壺・注口に見られる。

④雲形文

雲形文においては区画文・配置文による分類を基準とした（藤沼1989）。文様帯が上下の沈線で区切られた中に構成される場合、その上下の沈線を連結し区画するものが区画文である。また、配置文とは文様帯の内部に埋め込まれるか、文様帯を区切る上、下沈線のいずれかにのみ接続する形をとるものである。つまり、区画文が文様帯を完全に横に分割するのに対し、配置文が配された文様帯はすべて連続し、ぐるりとつながる形になる。しかし連続文様より配置文そのものが主文様を構成することもある。

（i）区画文 A1類（図119）、A2類（図5.8.9.39.62）、A3類（図4.37.40.43.44.73他）、B1類（図41）、B2類（図82.123）、C1類（図42.53.84.85他）、D類（図52）に分類される。

（ii）配置文 AI類（図102.107.124）、B類（図111.112.140）、CI類（図3.126）、CII類（図67.127.137.138）、CIV類（図7.19）、D類（図65.66.103.104.125）、E類（図50.121.122.138.139）に分類される。

全器種に見られる。3は胴部上半と下半で配置文の向きが異なるが、それぞれ上半、下半ごとにおいてはすべて同じ方向を向いて並列していることから、向きの異なる配置文CIが二段になっているものと解釈した。また、52のように、点列が縦方向に並んで配されるものは今回扱った資料の中では他に認められない。その縦の点列の両脇の沈線が上下の平行沈線と連結し、完全に文様帯を区画するため区画文D類とした。

⑤入組文

A類 横転したS字文が連続して配置され、その両端が三叉状の文様と入り組むもの（図61.128）。

B類 横転したS字文が、一方の端がS字文化した沈線と入り組むもの（図92）。

C類 横転したS字文とC字文から構成される文様だが、規則性が見出せないもの（図87.88）。

鉢・壺に見られる。比較的広い文様帯をもつ器形に描かれるようである。87はS字文とC字文が主体となっている。88は一つのS字文の両端にそれぞれC字文が入り組み、さらにそのC字文同士がもう一端で入り組みそれが主体となって三叉状の文様が充填され構成され则认为られる。

⑥楕円文

A1	
A2	
A3	
B1	
B2	
C1	
C2	
D	

区画文(左)と配置文(右)の種類
(藤沼1989)

A	I	
	II	
	III	
	IV	
B	I~IV	
C	I	
	II	
	III	
	IV	
D		
E		

配置文であるC字文の両端が沈線と連結して構成されたと考えられる楕円状のもの。楕円の内部には沈線が充填される場合がある。浅鉢・壺・注口に見られる(図86.116)。

⑦平行沈線間に縦の短沈線が施されるもの。弧線が付加される場合がある。壺においてのみ見られる(図105.109)。

⑧工字文

鉢・壺に見られる。89においては晩期後葉のものと思われるが、借用した資料に含まれており、この機会に掲載することとした。同じく115も変形工字文が施されることから晩期後葉に位置づけられると思われる(図60.89.91.115)。

⑨上記の文様に該当しないもの

ここでは、上記のいずれかの文様に類似はするが明確でないもの、または類似性が見られないものについて個々に触れることとする(図12.32.46.48.49.56.57.90.91.108)。

12は上、下の沈線に三角形状の文様が連結し、文様が互い違いに配されている。32は文様帯中央にめぐる弧線が入り組み、それに短沈線が上、下それぞれの平行沈線と連結して文様帯を区画することから区画文と考えられるが、ここで区画文として分類を行ったものには該当せず、特徴がやや異なると言える。また、46においては区画文A類の要素が強いが若干様子が異なり、基本となるA1の部分上、下の平行沈線と連結せず、その内側に配された短沈線のみがそれぞれ上下の平行沈線と連結する形となっている。49は残存部が少なく、文様全体の規則性も不明であるが、一部区画文C1類に類似する要素が認められる。また、48は胴部から底部において短沈線による文様が描かれるが、規則性は見出せない。一部配置文C類のC字文に類似する文様が認められる。57においては文様にはっきりとした規則性はないが、入組文と共によく用いられる三叉状の文様が二つ連結し、工字状になったと考えられる文様が主体となるようだ。56は胴部にひっかいたような短沈線が見られるが、文様であるのか明確ではない。90は胴部上半の幅の狭い文様帯に、短沈線で文様が描かれる。S字状の文様が主体となっているようである。91の文様においては工字文的要素が見られる。また、注口のI類においては三叉文や菱形文等が沈線と連結し、場合によっては入組状の沈線となる文様が見られ、これはこのタイプの器形の注口特有の文様と言える。なお、108は胴部の一部分にのみ文様が施文され、弧線状の沈線が入り組み連結し、三叉文やノの字文が充填されるものであり、注口I類の文様構成と類似する。

(まとめ)

以上、是川中居遺跡における晩期前葉～中葉の土器について器形、文様に着目して見てきた。各器種のうち壺がかなりの割合を占め、バラエティも豊富であった。特に壺Ⅴ類においては更に細分が可能である。粗製土器を分析資料の対象とはしておらず、全体の組成比率も不明であるため断定できないが、是川中居遺跡において精製土器のうち壺が大きな比率を占めていた可能性が考えられる。また、壺Ⅱ類や鉢Ⅴ類のタイプの器形は、菱形文、三叉文、羊歯状文といった晩期前葉の要素をもつ文様が大部分であることから、これらの器形は晩期前葉特有のものと思われる。また、鉢Ⅲ類・浅鉢Ⅱ類のタイプの器形は一般的に晩期中葉後半によく見られるものであり、時期により特徴的な器形が存在し、描かれる文様もおおよそパターン化する傾向にあるようだ。また、台付鉢においてはⅢ・Ⅳ類で横にのびた区画文が描かれるタイプのものには胴部上半の一箇所に豆粒状の突起が付くという共通性が見られる。

今回分類を行ううえで、周辺遺跡との比較やより詳細な分析を行い、是川中居遺跡の晩期前葉～中葉の土器の特徴を明確にしたかったが、十分な時間がなくほぼ分類を行う作業に終始してしまった感がある。その点を今後の課題として検討を加えていきたい。

(新井田・関根)

3. 縄文後・晩期の石刀

(はじめに)

是川中居遺跡では、石刀2点・石棒3点・石剣3点が重要文化財に含められているが、未指定の石刀・石棒・石剣も多数ある。私たちは、二枚橋(2)遺跡の石刀と比較する材料を得たいために、是川中居遺跡の石刀の実測を始めたのであるが、頓挫してしまい、石刀の全体量やその内容も把握できていない状態である。ここでは実測図を作成した石刀など41点について紹介する。

是川中居遺跡の石刀を並べてみると、二枚橋(2)遺跡や観音林遺跡の石刀とはずいぶん違うという印象を受ける。実測図を見ても同じである。ここには二枚橋(2)遺跡の石刀を代表とする内反りで、柄頭に入組三叉文を彫刻したようなものは含まれていないし、逆に是川中居遺跡の石刀の柄頭にみる同心円(楕円形文)を連ねたような文様、X字形の文様などは、二枚橋(2)遺跡の石刀には殆ど見られないものである。両者の違いは地理的なものもあるかも知れないが、是川中居遺跡の石刀は晩期前半のものが多く、二枚橋(2)遺跡は晩期後半のものが多いためであろう。

(分類)

是川中居遺跡の石刀は、破片が多いため、全体の形を想定しながら、柄部の形成の仕方、柄頭の形や文様などを考慮して分類した。

I 類－刀身は中膨らみとなるが、背部と刃部がほぼ真っ直ぐに平行すると想定されるものである。柄部の形成で2つに細分される。

I A 類－正面図でみると刀身部より柄部が細く作られている。刀身の断面はレンズ状のことが多い。柄頭は長方形を基調とし、文様をもつものと無文のものがある(図1.13.16.22.25)。

I B 類－刀身部と柄部の区別がつかないものである。刀身部の断面は楔形や扁平な楕円形である。柄部は方形で文様があるもの、台形で文様があるもの、楕円形で平行線がめぐるものなどいろいろな形・文様がみられる(図2.3.10)。

Ⅱ 類－背部と刃部がほぼ真っ直ぐに平行すると想定されるもの。破片が小さいものが多いが、刀身部と柄部の区別はなく、刀身部の断面は扁平な楕円形が多いようである。柄部は台形を基調とし、無文のものと平行沈線がめぐるものがある。柄頭の上・下面に溝があるものがある(図8.11.12.14.20.21)。

Ⅲ 類－内反りのものである。小さい破片のため柄部の形成の仕方は不明なものが多い。柄頭は台形を基調とし、無文であるが、上面と下面に刻み目をもつものがある(図9.17.27.29.32)。

Ⅳ 類－内反りのものと思われる。刀身部の幅は広く、柄部の形成は有段の両関となっている。柄頭は

縦長で狭く、上・下面の刻みで作り出されている。刀身部の断面は扁平である（図23）。

V類－柄部が撥形となるものである（図28）。

VI類－断面が円形に近いものを石棒類として一括した（図6.7.19.35.37～41）。

（柄頭の文様）

柄頭に文様がある石刀（VI類の石棒としたものを除く）は、I・II類あわせて12点である。文様の種類はあまり多くない。側面の文様はここでは含めていない。

1. 数条の平行線文をぐるりと描いたもの（図10.11.12.14）。1条だけめぐるものもある（図13.15.16）。I類とII類に限定される。

2. 平行線文をぐるりとめぐるせ、その間にX状の弧線を描いたもの（図5）。しかし、X状の弧線が側面を通じ裏面と繋がっているものは、展開図によって楕円形を3個並べ、その中に菱形あるいは楕円形を描いていることが分かる（図1.2.3）。この文様はI類に限定される。

3. 平行線文をぐるりとめぐるせ、その間に直線的なX状文を描いたもの。しかし展開図をみるとX状文の間に楕円文を描いていることが分かる（図4）。これもI類である。

是川遺跡出土の柄頭の文様は、平行沈線をめぐるせたものとX状文（展開図でみると楕円文）が多く、とくにX状文は分類のI類に限定される特色をもつ。二枚橋(2)遺跡や観音林遺跡で見られた入組三叉文はない。この違いは地域差もあるが、是川遺跡のものが二枚橋(2)遺跡より古い晩期前半に属するからであろう（出土土器を参照。是川遺跡は晩期前半、二枚橋(2)遺跡は晩期後半の土器を主体とする）。柄頭の断面も、二枚橋(2)遺跡の三叉文のものと比べると、丸みを帯びるなどの特色がある。

（横山・秋山）

（是川中居遺跡および出土品に関する基本的文献）

○河村末吉「陸奥国三戸郡地方に於ける石器時代遺物に就て」『東京人類学会雑誌』16－179、1901年

○大里雄吉「陸奥国是川村中居石器時代遺跡発見の植物質遺物に就いて」『歴史地理』49－6、1927年

○杉山寿栄男「図版 陸奥是川石器時代遺跡発見の木製品」『人類学雑誌』42－7、1927年

○杉山寿栄男「石器時代の木製品と編物」『人類学雑誌』42－8、1927年

○杉山寿栄男『日本原始工芸』1928年

○中谷治宇二郎『日本石器時代提要』1928年

○中谷治宇二郎「東北地方石器時代遺跡調査予報」『人類学雑誌』44－3、1929年

○甲野勇「青森県三戸郡是川村中居石器時代遺跡調査概報」『史前学雑誌』2－4、1930年

○杉山寿栄男「石器時代有機質遺物の研究概報－特に是川泥炭層出土品に就て」『史前学雑誌』2－4、1930年

○鹿野忠雄「是川泥炭層出土甲虫の一種について」『史前学雑誌』2－4、1930年

○宮坂光次「青森県是川村一王寺史前時代遺跡発掘報告」『史前学雑誌』2－6、1930年

○山内清男「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文土器の終末」『考古学』1－3、1930年

○八戸郷土研究会「青森県是川村石器時代遺物絵葉書」（2組、各12枚。杉山寿栄男が解説）1930年

○杉山寿栄男・喜田貞吉『日本石器時代植物性遺物図録』1932年

○江坂輝弥「八戸市是川中居遺跡の再調査」『考古学ジャーナル』60、1971年

○保坂三郎編『是川遺跡出土遺物報告書』（八戸市教育委員会が発行）1972年

○八戸市博物館『縄文の美 是川中居遺跡出土品図録土器編』1985年

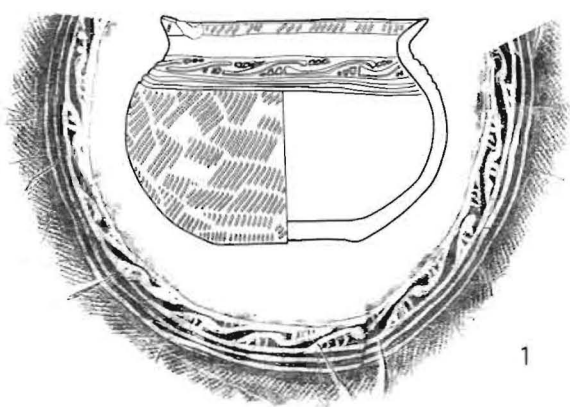
○八戸市博物館『縄文の美 是川中居遺跡出土品図録第2集』1988年

○八戸市博物館『縄文の漆工芸』1988年

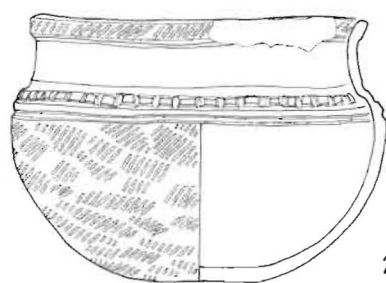
（参考文献）

○東北大学文学部考古学研究室 芹沢長介監修『峠下聖山遺跡』1979年

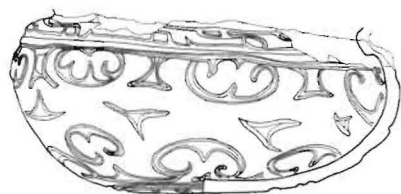
- 飯島義雄「仮称「連繋入組文」と「横位連続工字文」について」『考古風土記』6、1981年
- 青森県埋蔵文化財調査センター『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』1985年
- 新谷武・岡田康博「青森県平舘村今津遺跡出土の鬲状三足土器」『考古学雑誌』71－2、1986年
- 藤沼邦彦「亀ヶ岡式土器の文様の描き方」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会編、1989年
- 青森県教育委員会「北の誇り・亀ヶ岡文化 縄文時代晩期編」『図説ふるさと青森の歴史シリーズ③』1990年
- 三厩村教育委員会 葛西勲編『宇鉄遺跡発掘調査報告書』1995年
- 福田正宏「亀ヶ岡式土器における入組文のゆくえ」『物質文化』63、1997年
- 大畑町教育委員会『二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』2001年



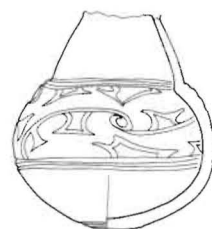
1



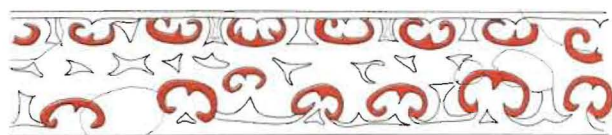
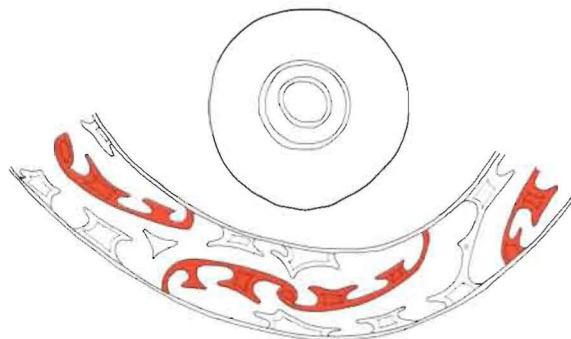
2



3



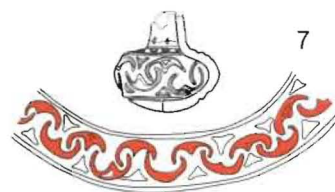
4



5

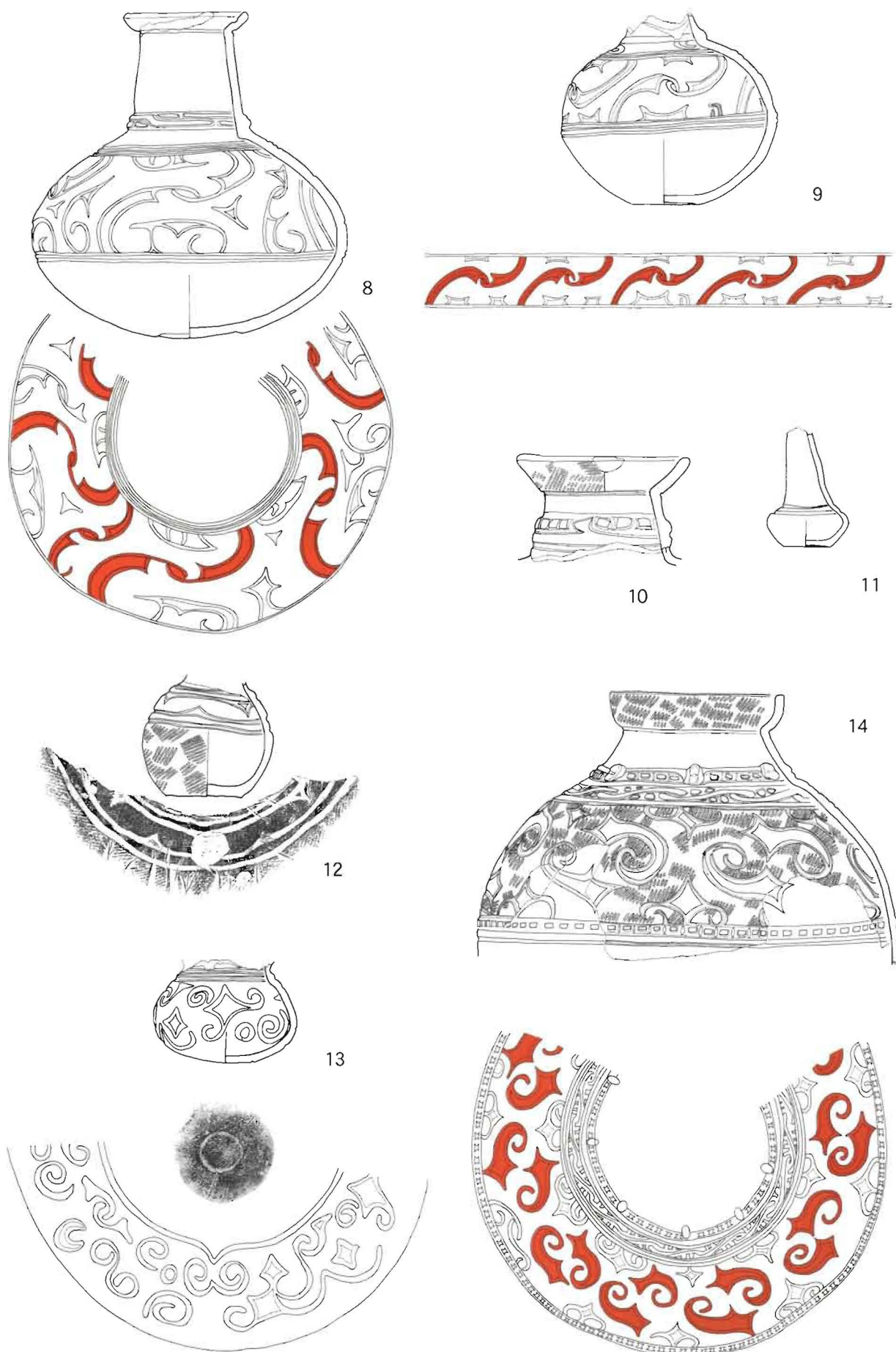


6

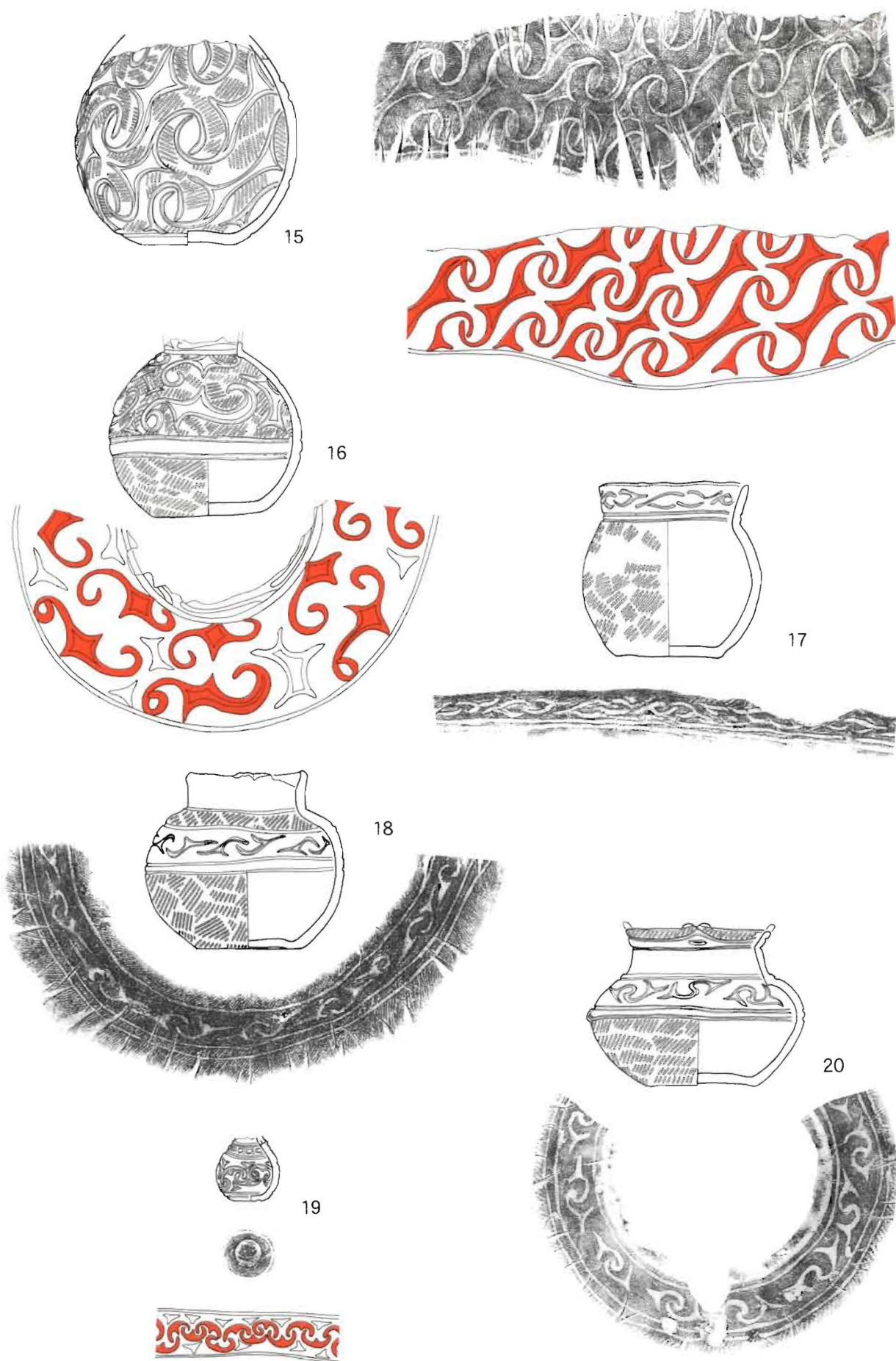


7

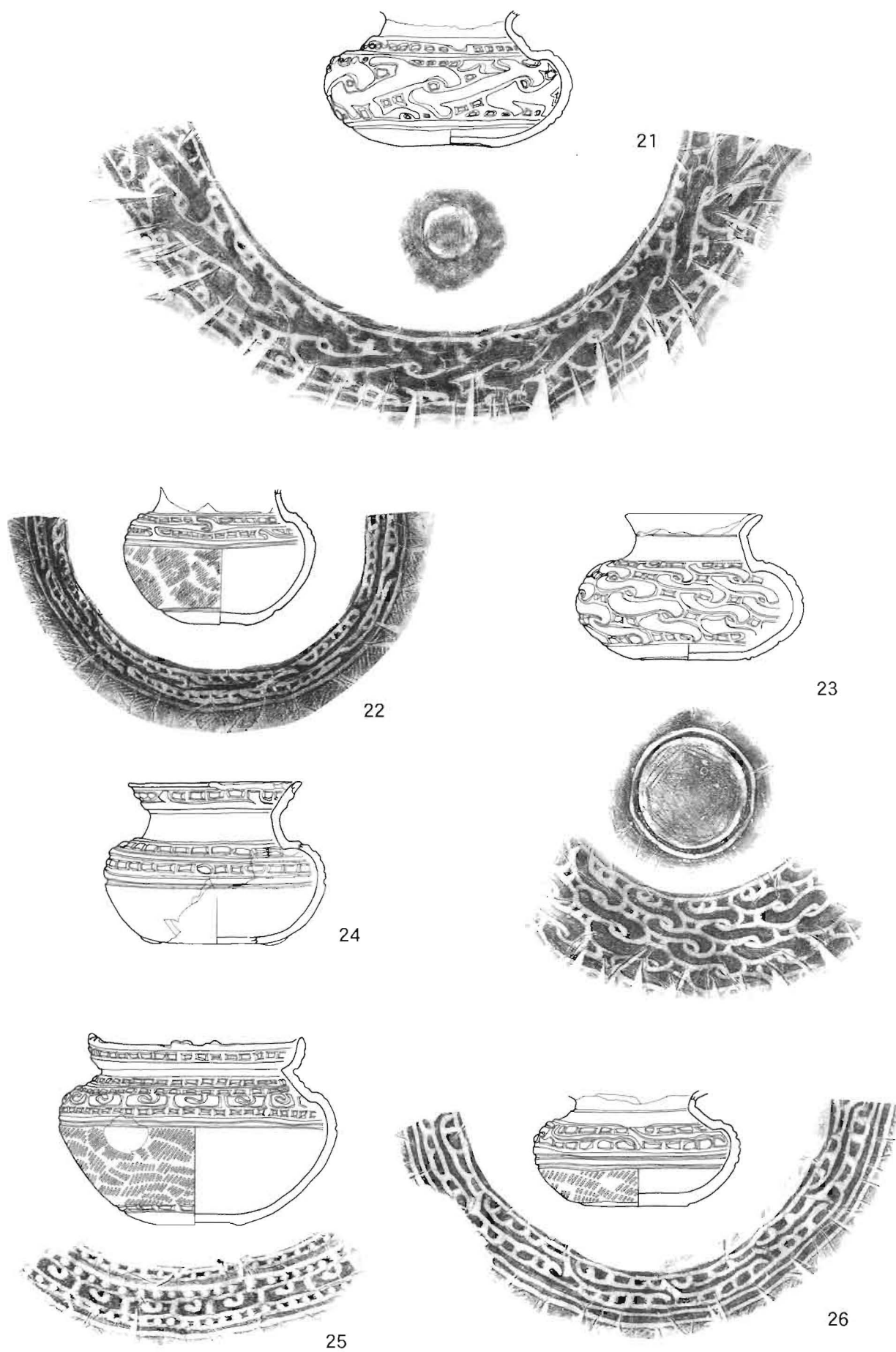
第1図 是川中居遺跡出土土器（図1～7）



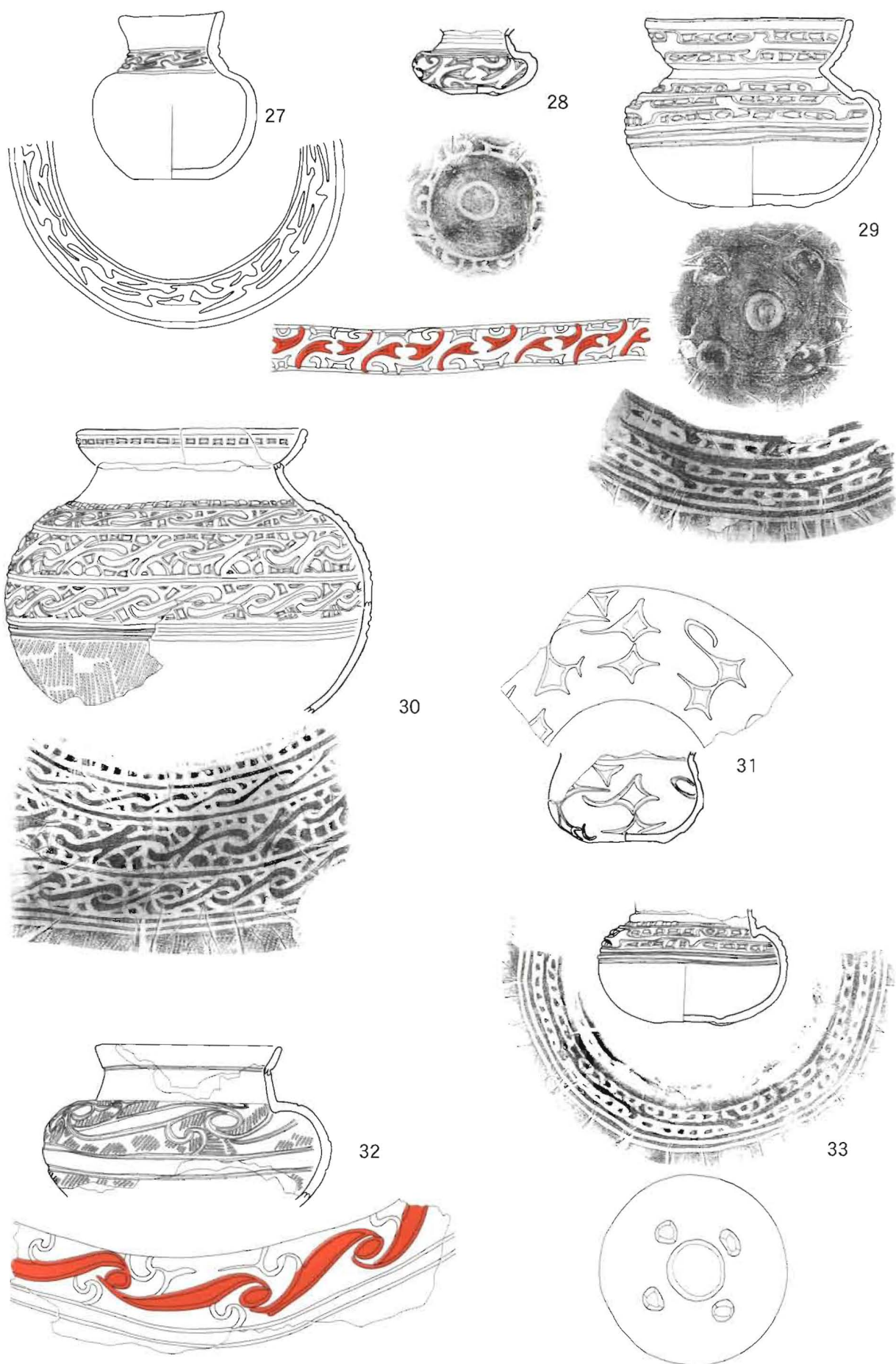
第2図 是川中居遺跡出土土器（図8～14）



第3図 是川中居遺跡出土土器 (図15~20)



第4图 是川中居遺跡出土土器 (図21~26)



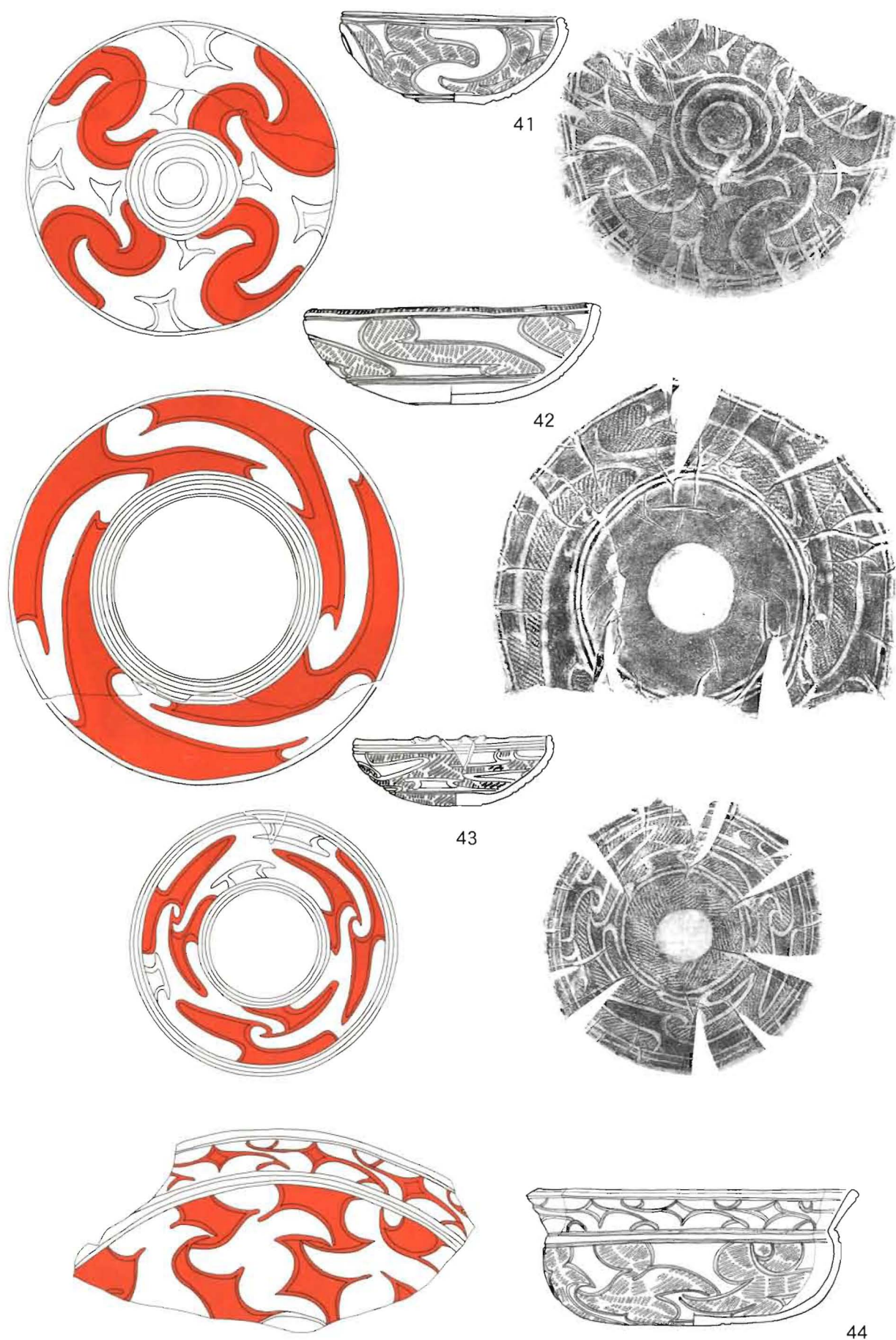
第5図 是川中居遺跡出土土器 (図27~33)



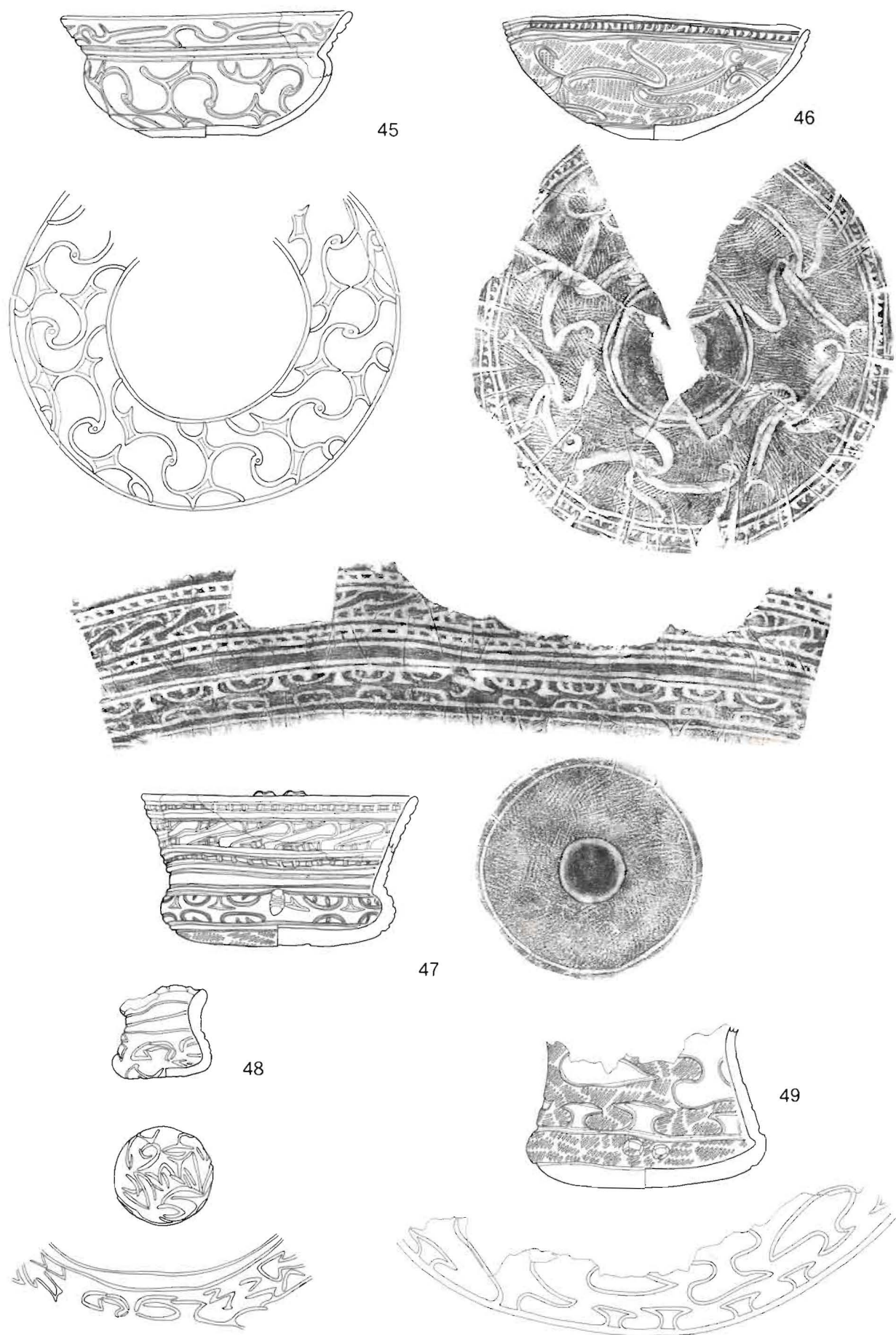
第6図 是川中居遺跡出土土器（図34～36）



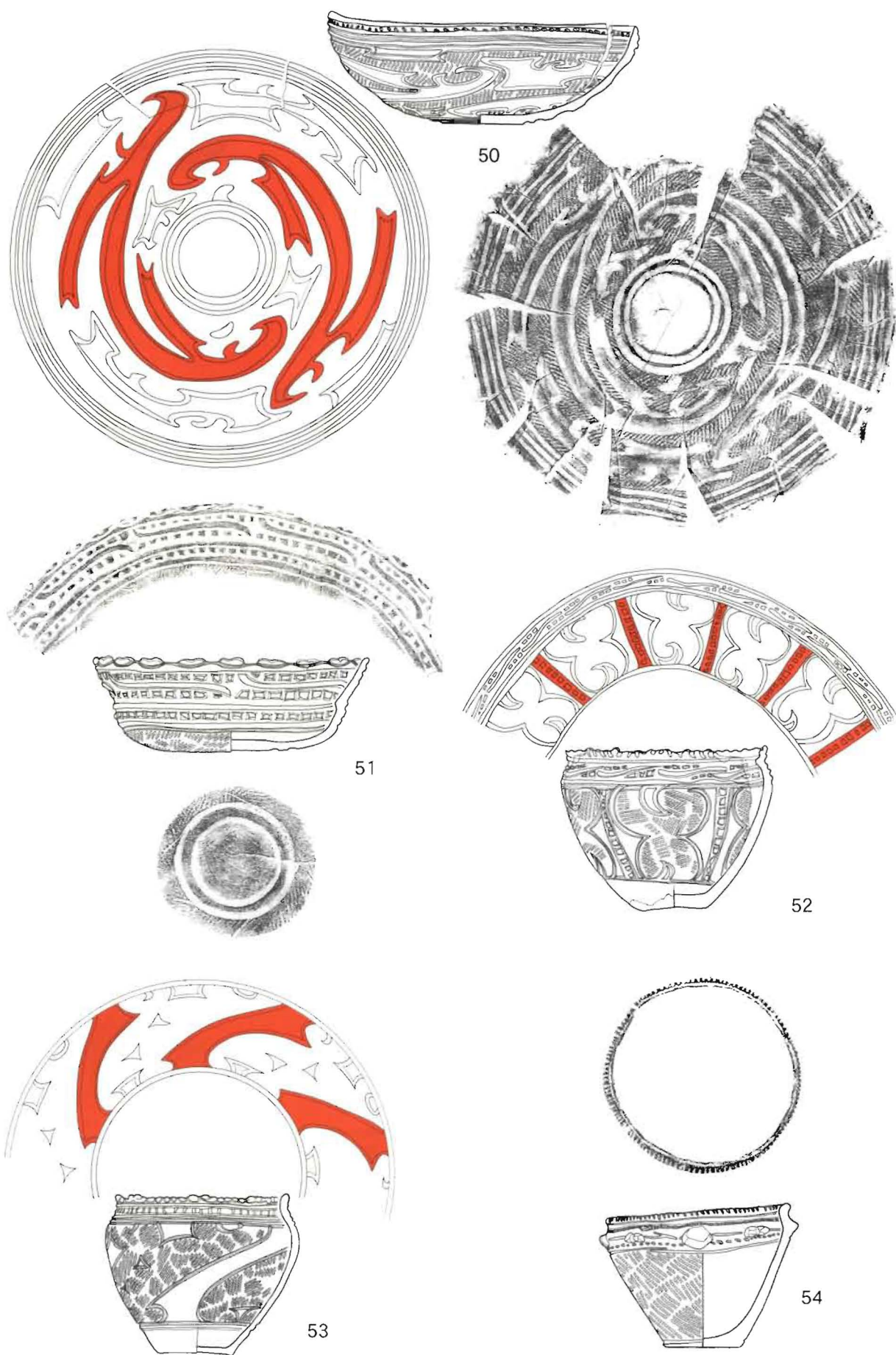
第7図 是川中居遺跡出土土器 (図37~40)



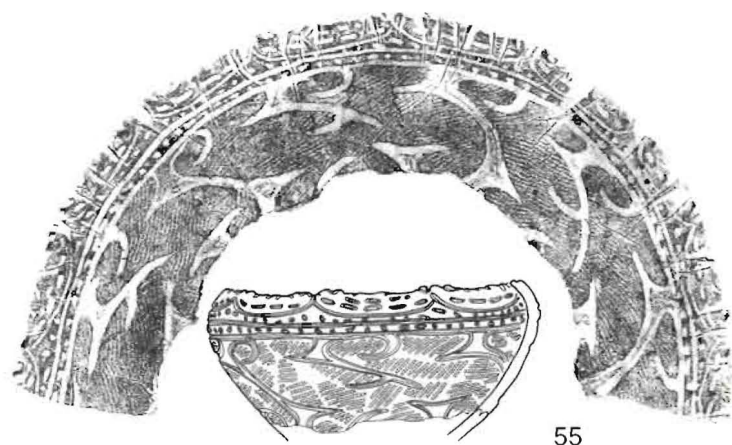
第8図 是川中居遺跡出土土器 (図41~44)



第9図 是川中居遺跡出土土器（図45～49）



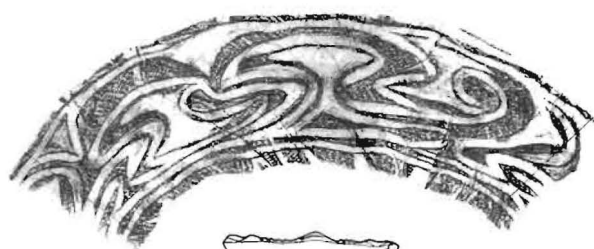
第10図 是川中居遺跡出土土器 (図50~54)



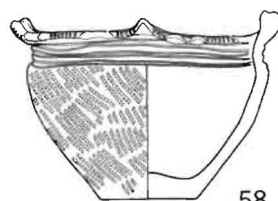
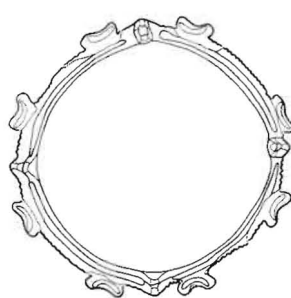
55



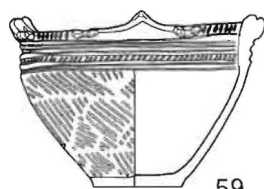
56



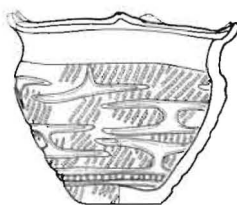
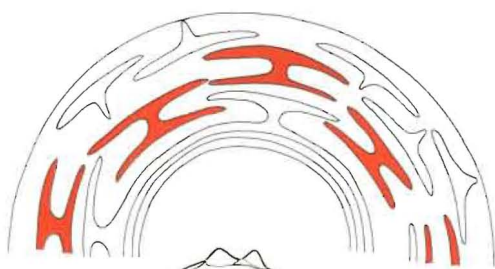
57



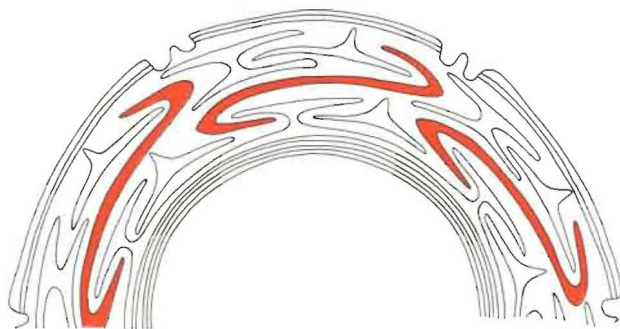
58



59

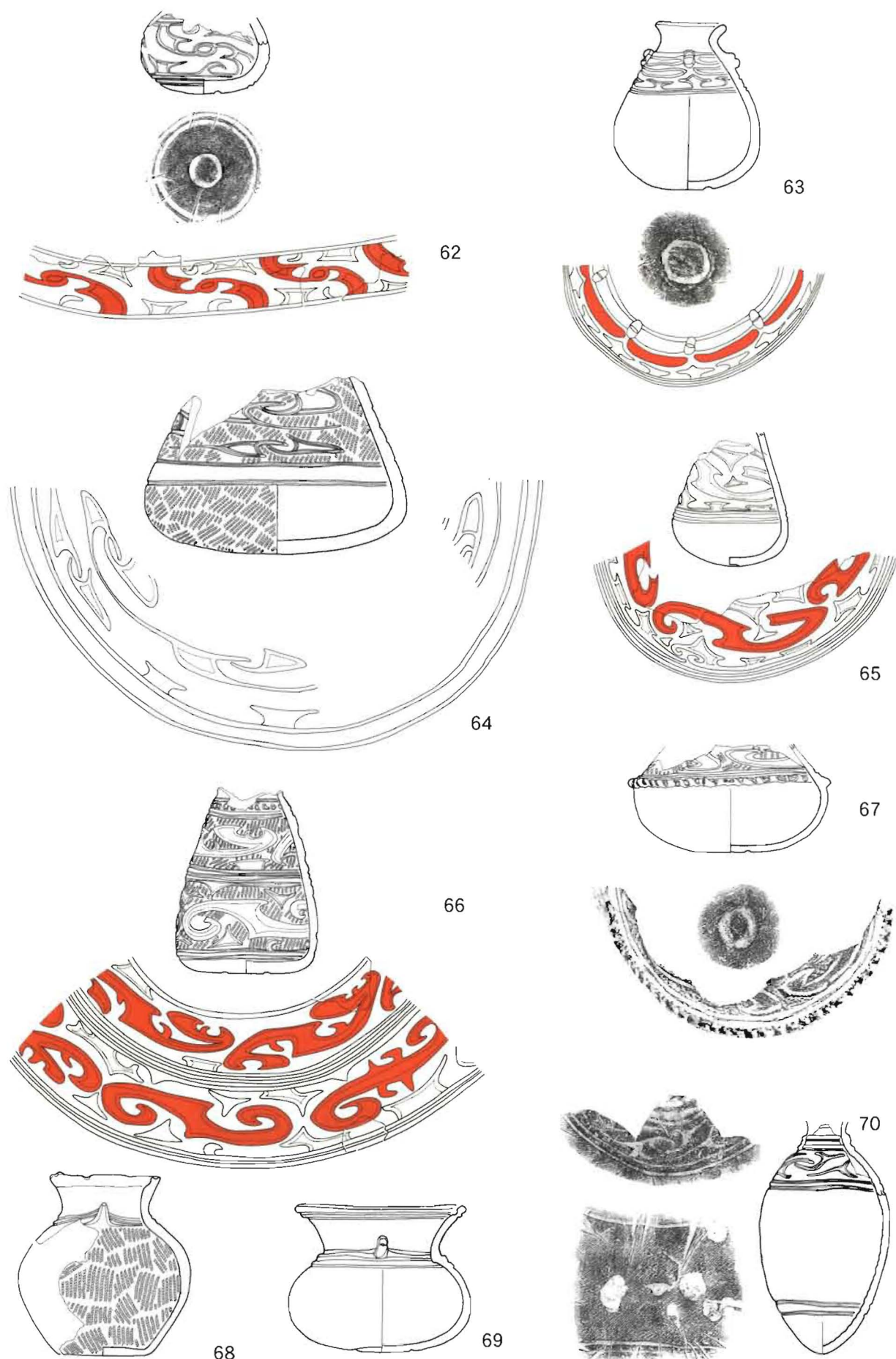


60

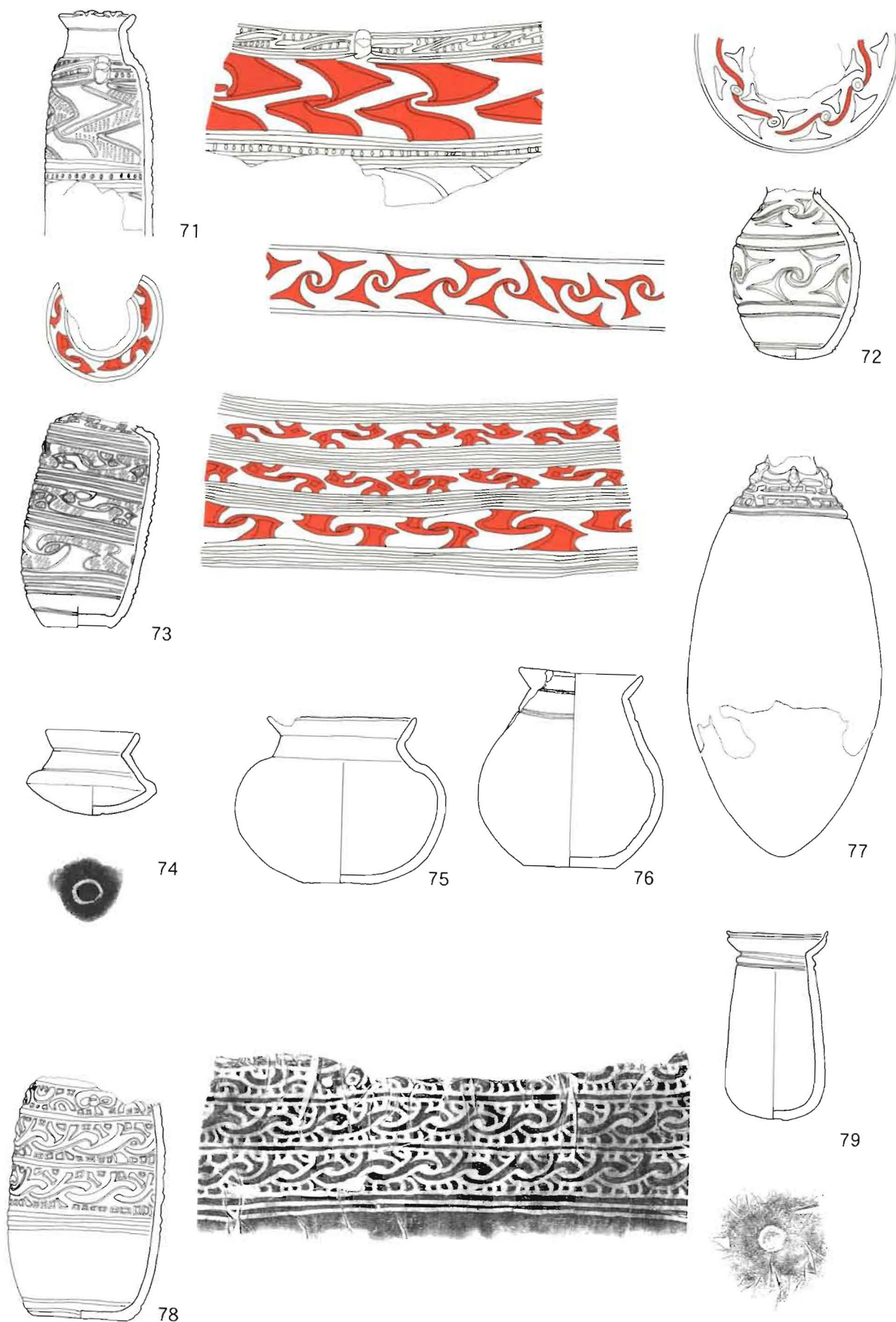


61

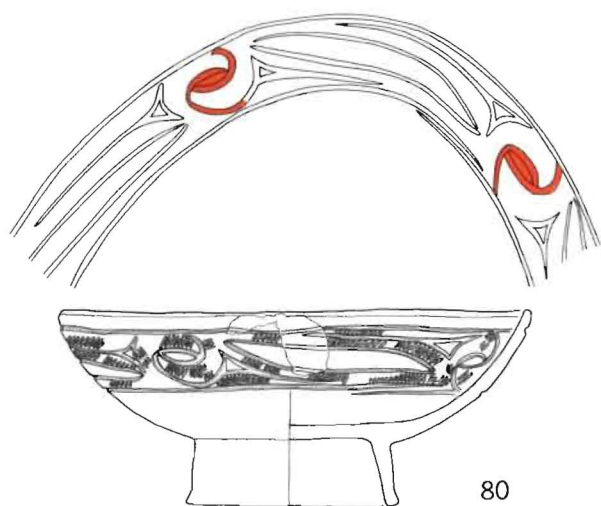
第11図 是川中居遺跡出土土器 (図55~61)



第12図 是川中居遺跡出土土器 (図62~70)



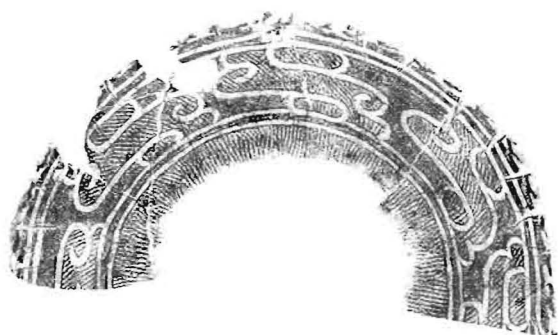
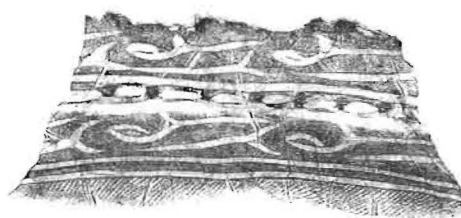
第13図 是川中居遺跡出土土器 (図71~79)



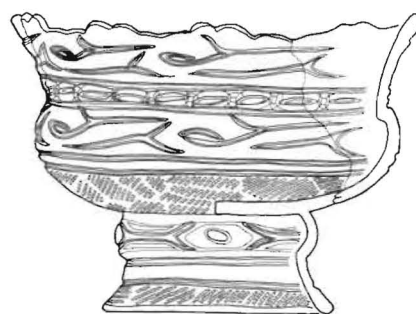
80



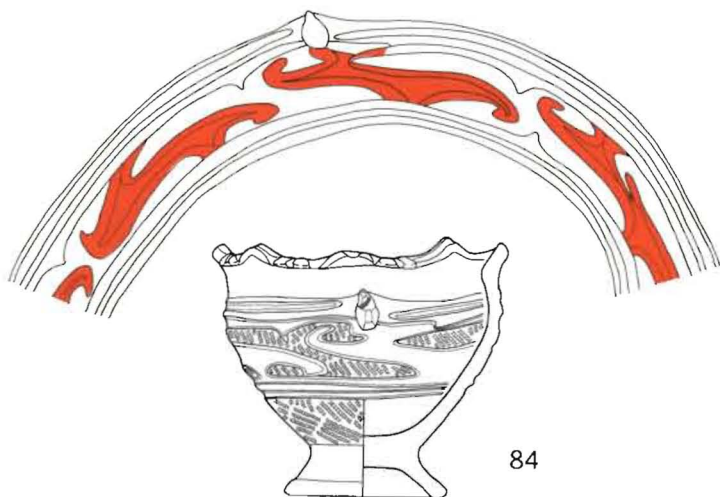
81



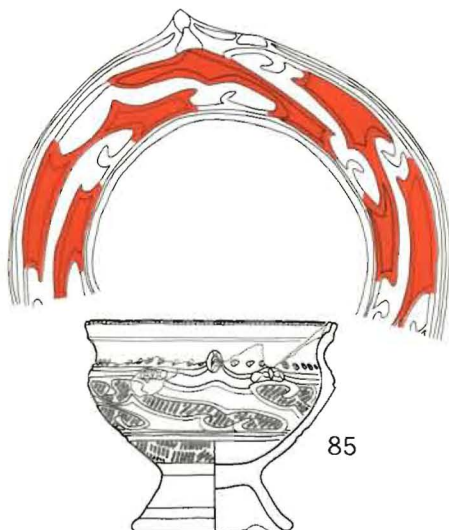
82



83

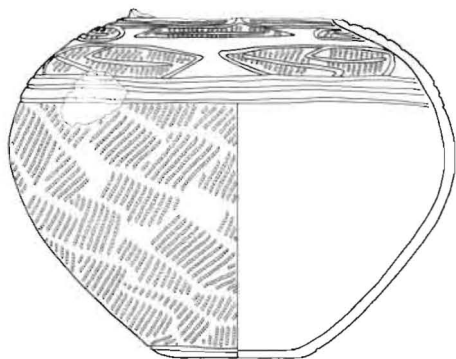


84

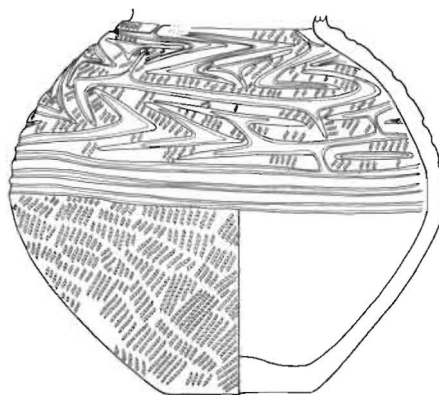


85

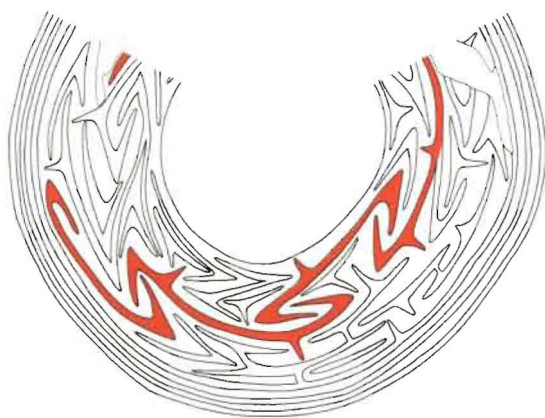
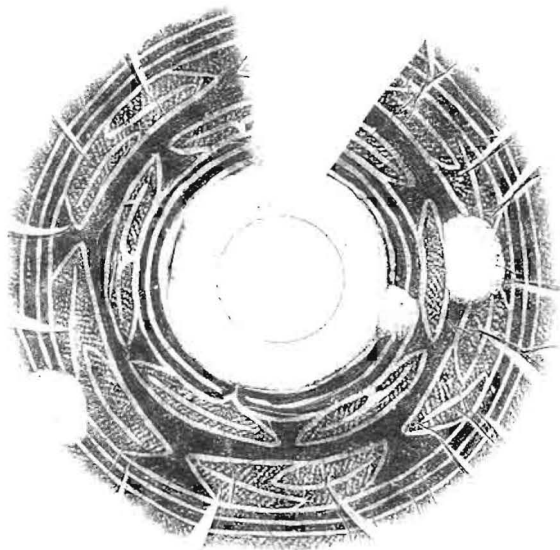
第14図 是川中居遺跡出土土器 (図80~85)



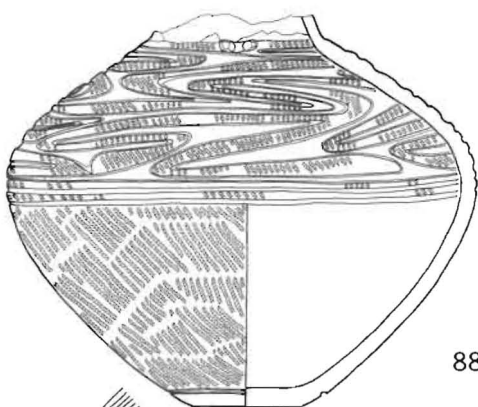
86



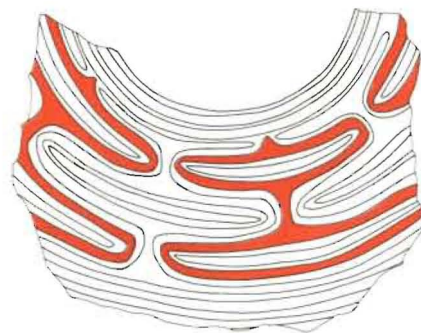
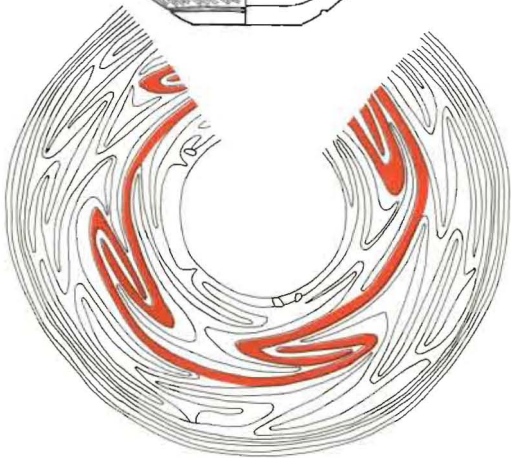
87



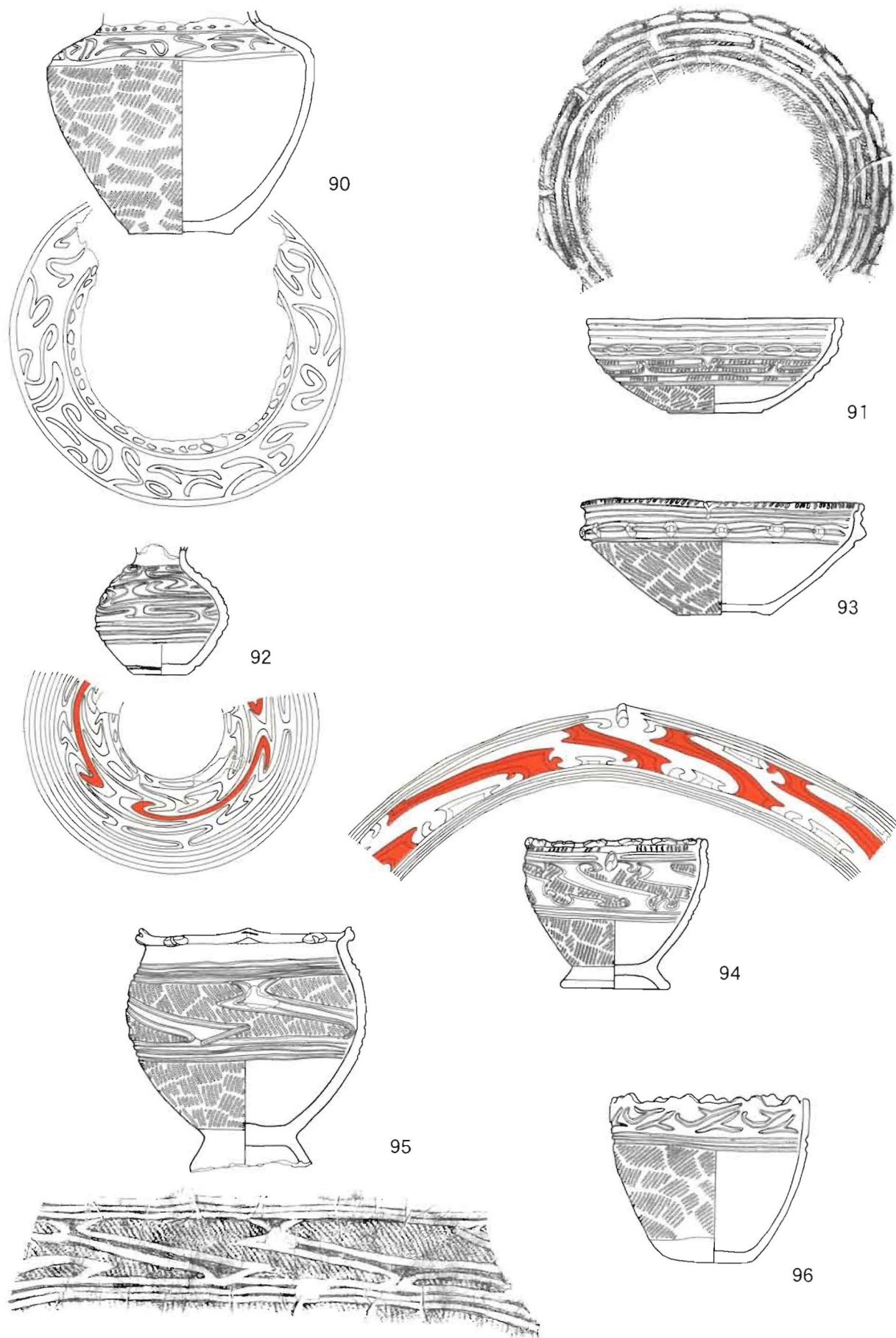
89



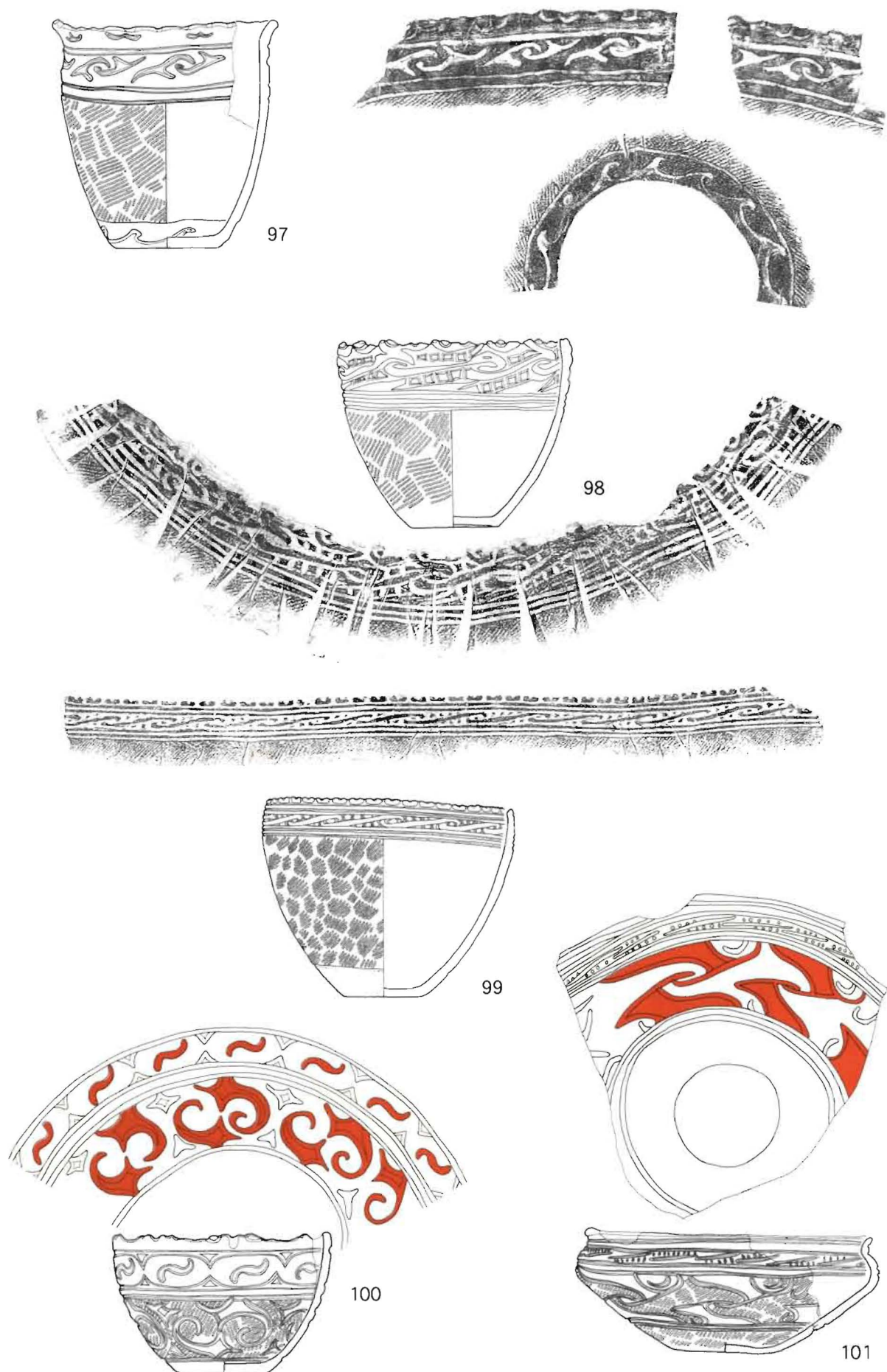
88



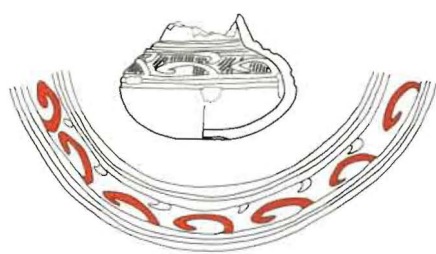
第15図 是川中居遺跡出土土器 (図86~89)



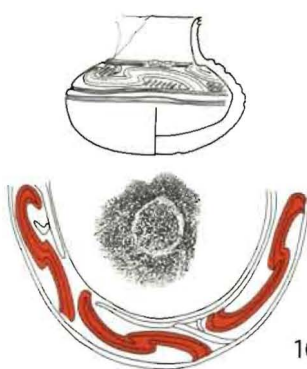
第16図 是川中居遺跡出土土器 (図90~96)



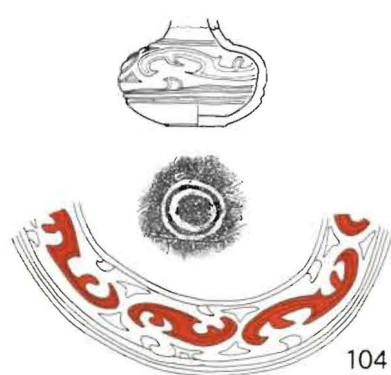
第17图 是川中居遺跡出土土器 (図97~101)



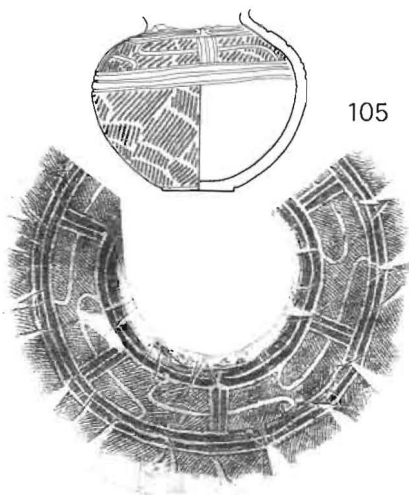
102



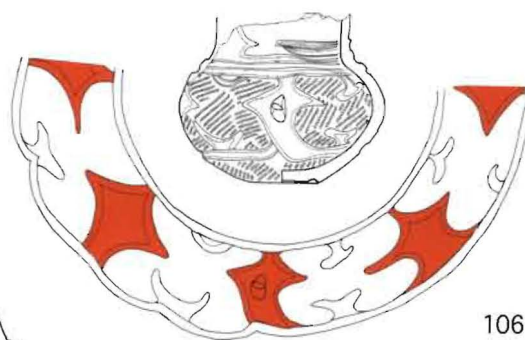
103



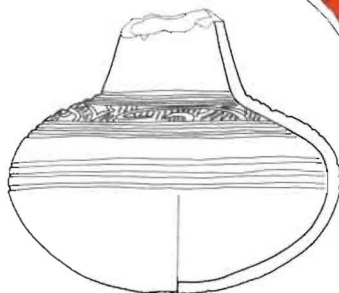
104



105



106



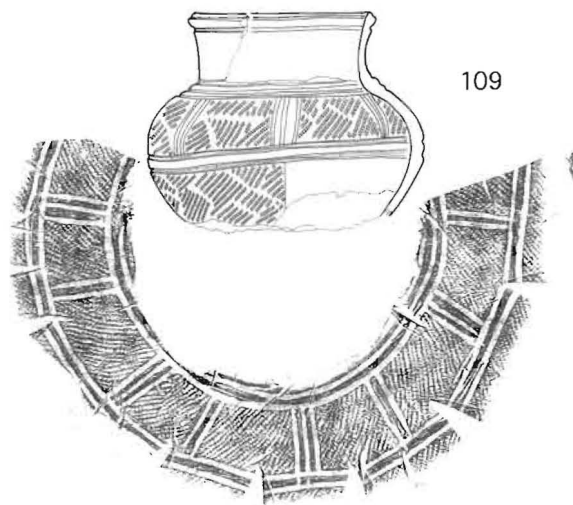
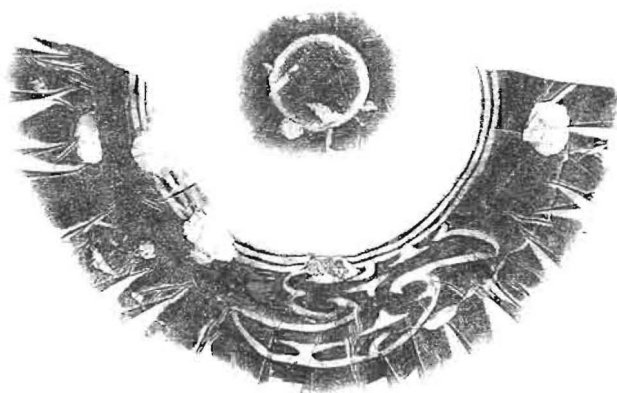
107



108



109



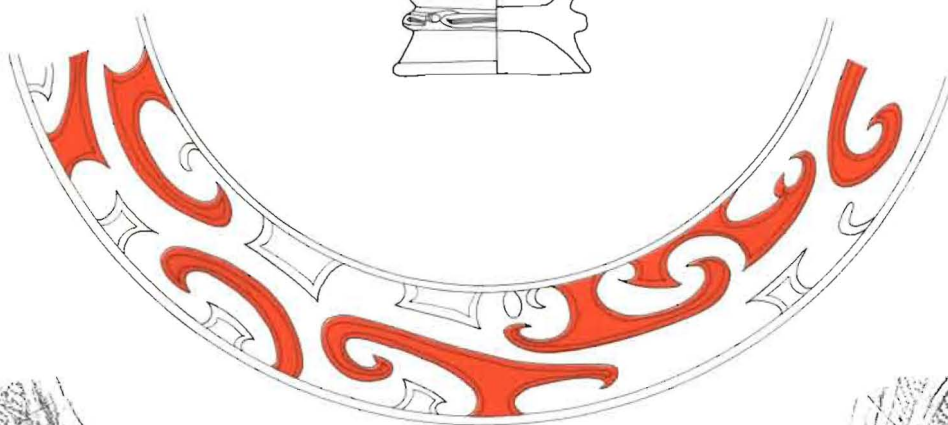
第18図 是川中居遺跡出土土器（図102～109）



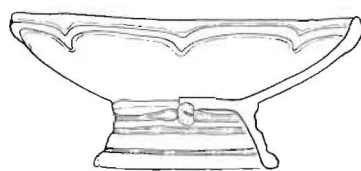
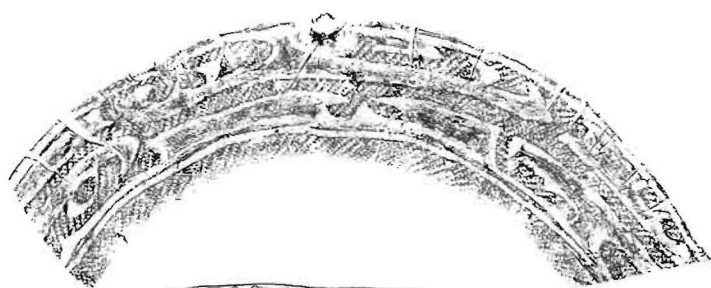
110



111



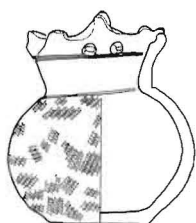
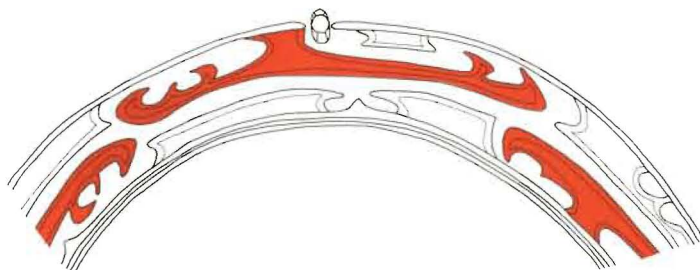
第19図 是川中居遺跡出土土器（図110～111）



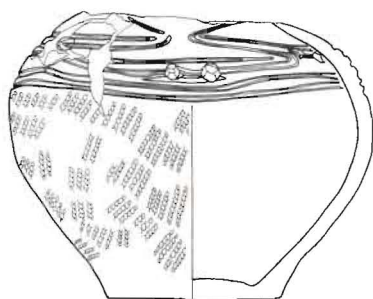
113



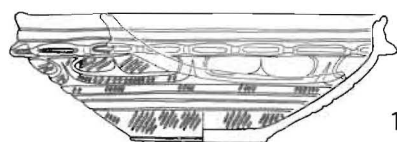
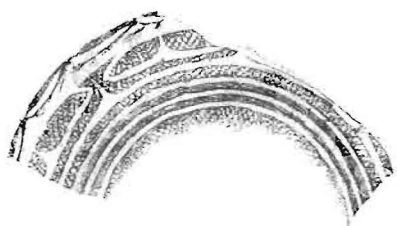
112



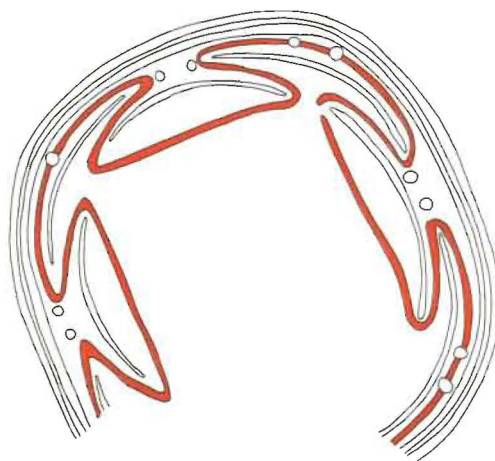
114



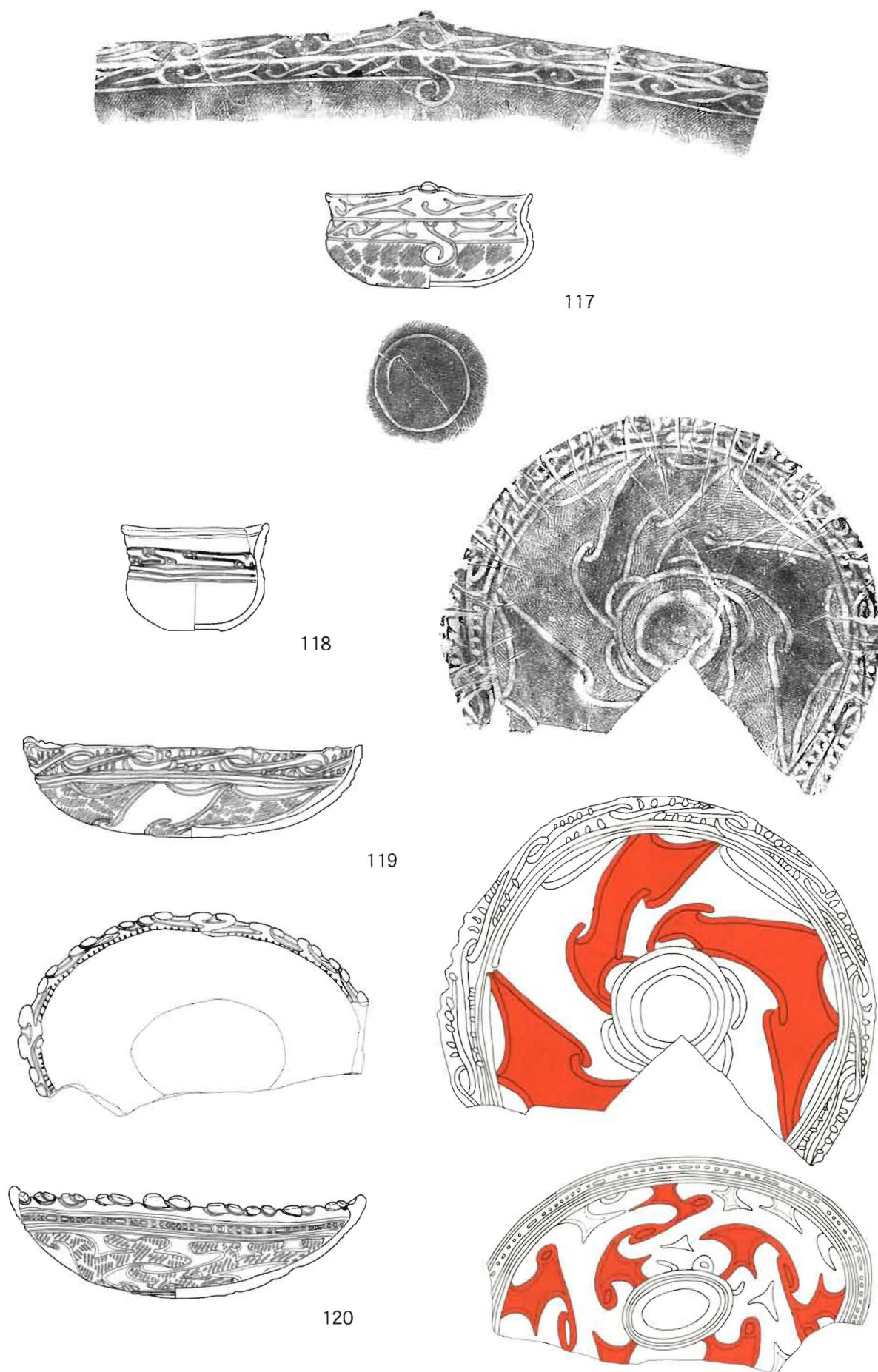
115



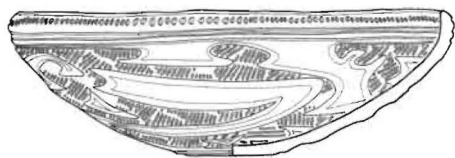
116



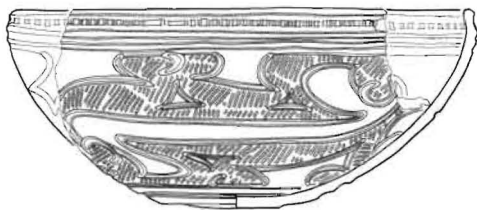
第20図 是川中居遺跡出土土器（図112～116）



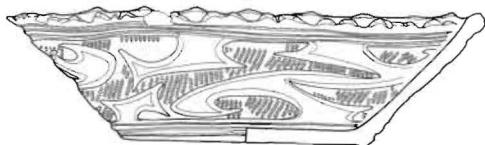
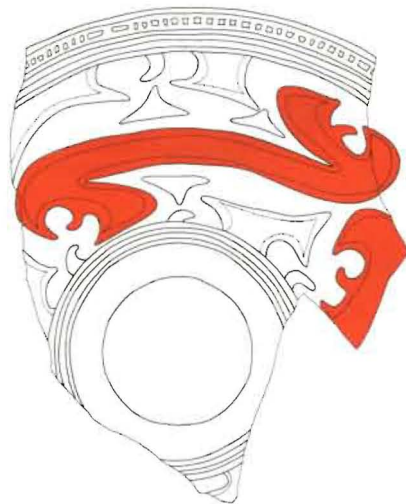
第21図 是川中居遺跡出土土器 (図117~120)



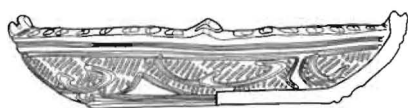
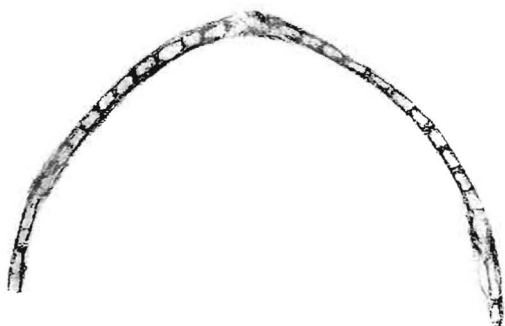
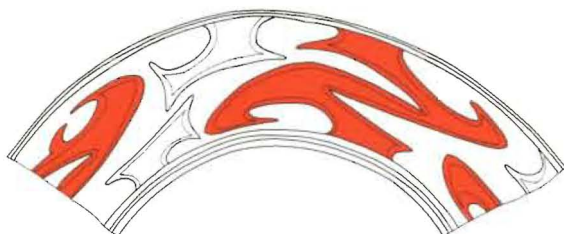
121



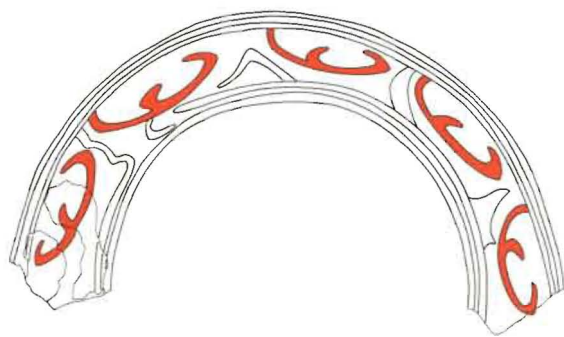
122



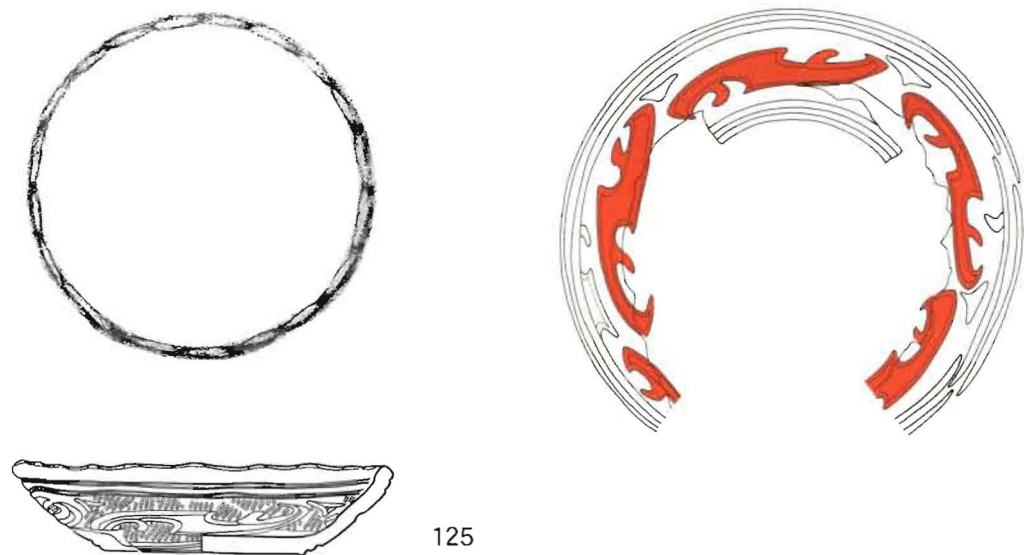
123



124



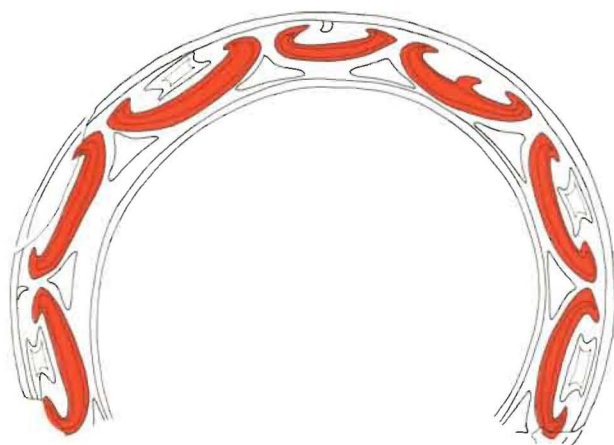
第22図 是川中居遺跡出土土器 (図121~124)



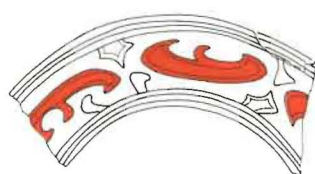
125



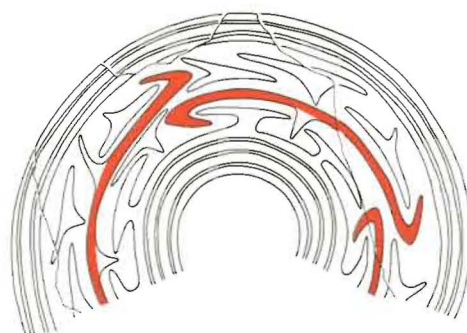
126



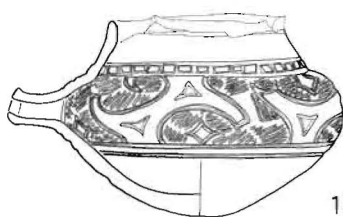
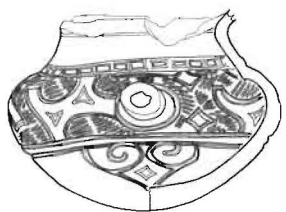
127



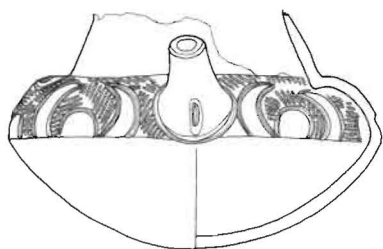
128



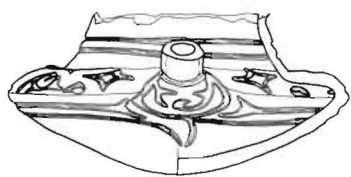
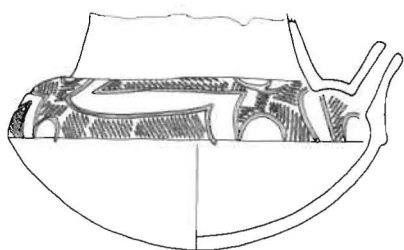
第23図 是川中居遺跡出土土器（図125～128）



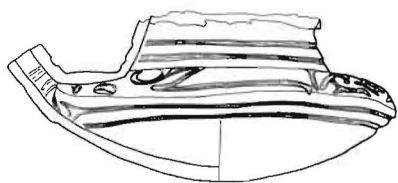
129



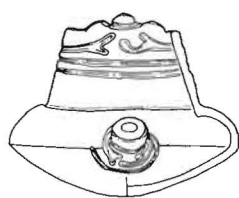
130



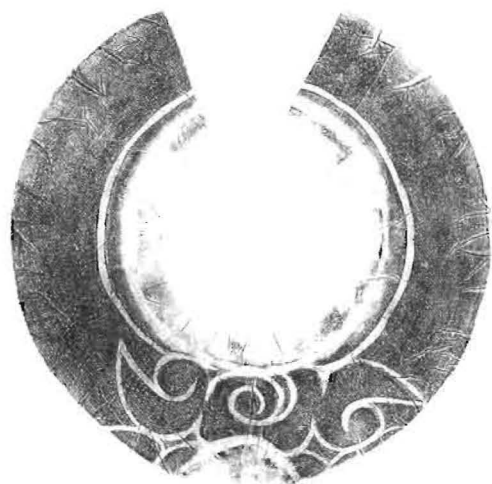
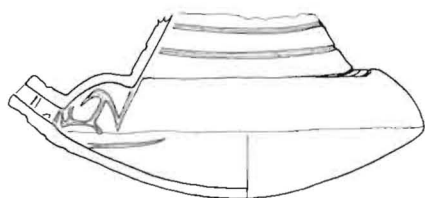
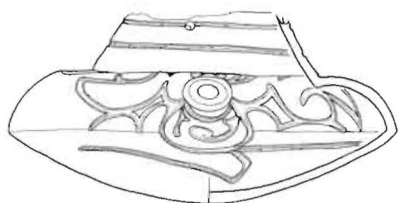
131



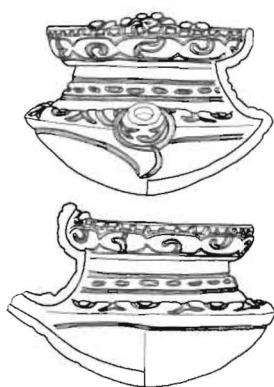
第24図 是川中居遺跡出土土器 (図129~131)



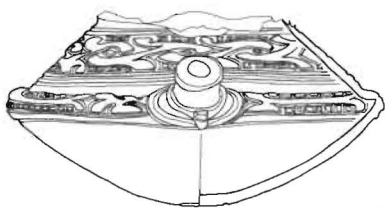
132



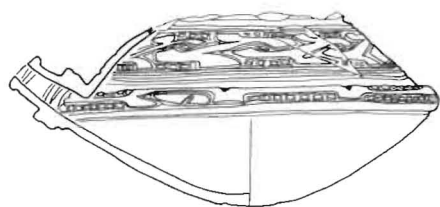
133



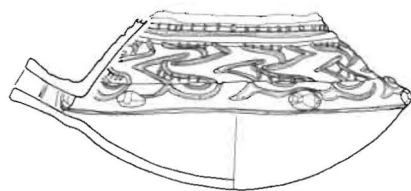
134



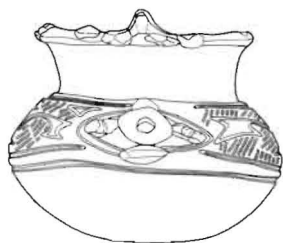
135



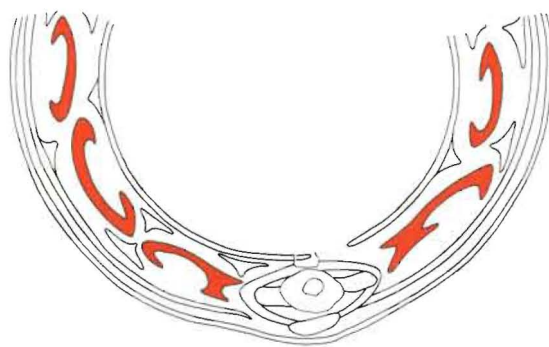
第25図 是川中居遺跡出土土器 (図132~135)



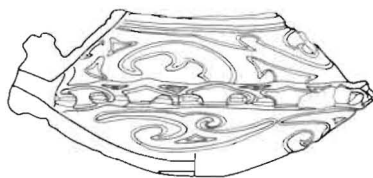
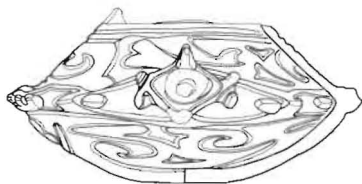
136



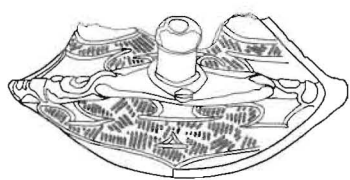
137



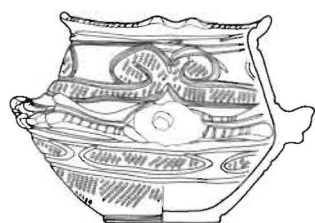
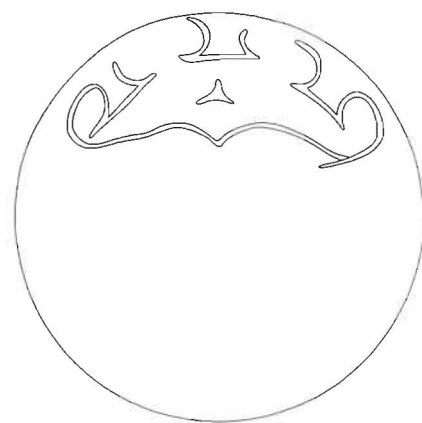
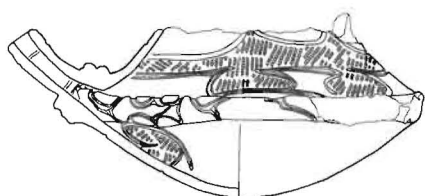
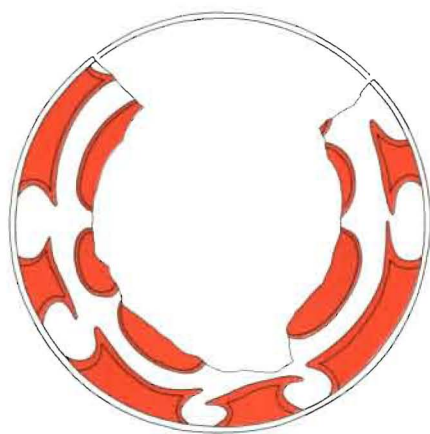
138



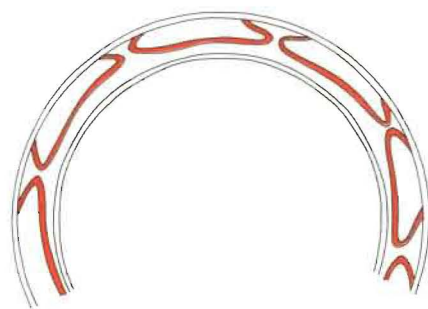
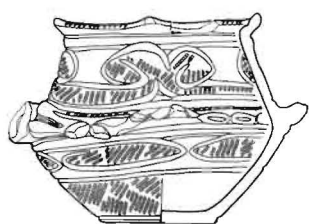
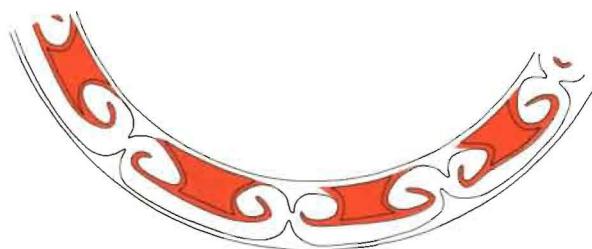
第26図 是川中居遺跡出土土器（図136～138）



139



140



第27図 是川中居遺跡出土土器（図139～140）

番号	器種	分 類	特 徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
1	壺ⅡA	羊歯状文A	頸部に羊歯状文が施される。	LR	9.6	13.4
2	壺ⅡA	不明	頸部に列点が施される。	LR	10.8	15.1
3	壺ⅡA	羊歯状文C(頸) 配置文CⅠ(胴)	頸部に羊歯状文、胴部に配置文が施される。三叉文、四角形文が充填される。底部にはノの字文が施される。赤漆の下に黒漆か。	無	(7.3)	15.5
4	壺Ⅴ	区画文A3	胴部に区画文が2単位施される。三叉文、四角形文、五角形文が充填される。	無	(8.8)	8.1
5	壺Ⅰ	区画文A2	頸部に突起、列点、胴部には区画文が4単位施される。ノの字文、三叉文、四角形文が充填される。赤彩。	無	7.2	7.7
6	壺Ⅴ	羊歯状文C	頸部に羊歯状文が施される。赤彩。	無	12.9	11.8
7	壺Ⅰ	配置文CⅣ	頸部に刻目、列点、胴部には配置文が6単位施される。三叉文が充填される。	無	(4.1)	4.3
8	壺Ⅰ	羊歯状文C(頸) 区画文A2(胴)	頸部に羊歯状文、胴部には区画文が6単位施される。その他区画文と似た文様が1単位充填される。三叉文、五角形文が充填される。赤漆の下に黒漆か。	無	18.5	17.7
9	壺Ⅴ	区画文A2	頸部にノの字文、胴部に区画文が5単位施される。四角形文が充填される。赤漆の下に黒漆か。	無	(10.6)	11.8
10	壺Ⅷ	羊歯状文D	頸部に羊歯状文が施される。赤彩。	LR	(5.9)	(9.1)
11	壺Ⅶ	不明	頸部に2条の平行沈線が施される。赤彩。	無	(6.8)	4.6
12	壺Ⅴ	不明	胴部の上下の沈線に三角形の文様が連結している。赤彩。	LR	(6.2)	6.9
13	鉢Ⅴ	三叉文B	胴部に菱形文、三叉文、S字文、渦巻文、U字文、円形文が施される。	無	(5.6)	7.9
14	壺Ⅴ	羊歯状文A(頸) 菱形文B(胴)	頸部に突起、列点、羊歯状文、胴部に列点、2個一対の菱形文が施される。	LR	(15.3)	23.1
15	壺Ⅴ	菱形文A	胴部に菱形文が施される。赤彩。	LR	(11.3)	12.1
16	壺Ⅴ	菱形文B	胴部に菱形文が施される。三叉文、五角形文が充填される。赤彩。	LR	(10.2)	10.8
17	鉢Ⅴ	三叉文C	頸部に三叉文が施される。	LR	9.7	9.8
18	壺Ⅴ	三叉文B	口縁部にB突起、胴部に三叉文が施される。	LR	10.7	10.9
19	壺Ⅴ	配置文CⅣ	頸部に列点、胴部に配置文が6単位施される。三叉文が充填される。赤彩。	無	(3.5)	3.4
20	壺ⅡA	三叉文A	口縁部にB突起、胴部に突起、三叉文が施される。外面に炭化物が付着。	LR	8.7	11.9
21	壺ⅡA	羊歯状文A(頸) 羊歯状文D(胴)	頸部、胴部に羊歯状文が施される。赤彩。	無	(7.1)	14.6
22	壺ⅡA	羊歯状文D	胴部に羊歯状文が施される。	L	(7.7)	10.0
23	壺ⅡA	羊歯状文A	胴部に羊歯状文が施される。	無	(8.2)	12.5
24	壺ⅡA	羊歯状文D	口縁部に羊歯状文、胴部に列点が施される。底部が四脚。赤漆の下に黒漆か。	無	(8.8)	(10.1)
25	壺ⅡA	不明	口縁部にB突起、列点、頸部に列点、胴部に列点、ノの字文が施される。胎土に海綿状骨針。	LR	10.6	15.2
26	壺ⅡA	羊歯状文B	胴部に羊歯状文が施される。	LR	(6.2)	11.5
27	壺Ⅶ	三叉文E	頸部に三叉文が施される。	無	9.1	9.0
28	壺ⅡA	三叉文C	胴部に三叉文が施される。四角形文が充填される。底部が四脚。赤彩。	無	(3.4)	6.8
29	壺ⅡA	羊歯状文D	口縁部、頸部、胴部に羊歯状文が施される。底部が四脚。赤彩。	無	10.4	14.1
30	壺Ⅴ	羊歯状文A	口縁部に列点、胴部に列点、羊歯状文が施される。赤彩。	LR	(15.2)	20.1
31	壺Ⅴ	菱形文B	胴部に菱形文が施される。赤彩。	無	(5.1)	8.5
32	壺ⅡA	区画文?	胴部に区画文が3単位施される。	LR	(8.2)	15.8
33	壺ⅡA	羊歯状文B	頸部に列点、胴部に羊歯状文が施される。底部が四脚。赤彩。	無	(6.2)	10.6
34	壺Ⅴ	三叉文E(上半) 三叉文B(下半)	胴部上半、下半に別々の三叉文が施される。胎土に海綿状骨針。	LR	9.3	10.1
35	壺ⅡA	菱形文A	口縁部に列点、胴部に列点、菱形文が施される。三叉文、四角形文、五角形文が充填される。赤彩。	LR	11.1	15.8
36	壺Ⅴ	三叉文B(頸) 菱形文B(胴)	頸部に三叉文、胴部に菱形文が施される。三叉文、四角形文が充填される。赤彩。	LR	18.4	21.4
37	浅鉢Ⅳ	区画文A3	胴部に区画文が6単位施される。ノの字文が充填される。	LR	5.2	12.4
38	皿Ⅰ	菱形文A	頸部に列点、胴部に菱形文が施される。	LR	4.6	16.7

是川中居遺跡出土土器観察表(1)

番号	器種	分 類	特 徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
39	浅鉢Ⅲ	区画文A 2	頸部に列点、胴部に列点、区画文が3単位残存。底部付近に列点が施される。	LR	7.5	16.4
40	浅鉢Ⅰ	羊歯状文B(頸) 区画文A 3(胴)	口縁部に刻目、B突起、頸部に羊歯状文、胴部に区画文が3単位残存。	LR	6.1	15.6
41	浅鉢Ⅳ	区画文B 1	胴部に区画文が4単位。三叉文、四角形文が充填される。胎土に海綿状骨針。	LR	4.9	12.5
42	浅鉢Ⅳ	区画文C 1	口縁部に刻目、胴部に区画文が4単位施される。	LR	5.5	16.3
43	浅鉢Ⅳ	区画文A 3	口縁部にB突起、胴部に区画文が3単位施される。四角形文が充填される。	LR	3.9	11.1
44	鉢Ⅴ	菱形文A(口) 区画文A 3(胴)	口縁部に菱形文、胴部に区画文が4単位施される。	LR	7.6	(14.9)
45	鉢Ⅴ	三叉文A(口) 菱形文A(胴)	口縁部に三叉文、胴部に菱形文が施される。	無	6.8	14.9
46	浅鉢Ⅲ	区画文	頸部に刻目、胴部に区画文が5単位施される。	LR	6.8	16.8
47	鉢Ⅴ	羊歯状文A	口縁部にB突起、列点、羊歯状文、胴部に突起、楕円文が施される。三叉文が充填される。胎土に海綿状骨針。	LR	8.4	(15.3)
48	壺Ⅲ	不明	口縁部に刻目、胴部に短沈線文が施される。	無	5.1	5.5
49	壺Ⅳ	区画文C 1 ?	胴部に区画文、底部付近に突起が施される。四角形文が充填される。	LR	(9.0)	13.3
50	皿Ⅳ	配置文E(1)	口縁部に刻目、胴部に配置文が2単位施される。ノの字文、四角形文が充填される。	LR	6.0	17.5
51	鉢Ⅴ	羊歯状文B	口縁部にB突起、羊歯状文、胴部に列点が施される。内外面に炭化物が付着する。	LR	5.3	15.2
52	鉢ⅢA	羊歯状文A(頸) 区画文D(胴)	口縁部に刻目、頸部に羊歯状文、胴部に列点、区画文が5単位施される。ノの字文が充填される。赤彩。	L	9.1	(11.6)
53	鉢ⅢA	区画文C 1	口縁部にB突起、刻目、頸部に列点、胴部に区画文が3単位施される。三叉文、四角形文が充填される。内面に炭化物が付着する。	LR	8.6	10.6
54	鉢ⅢB	不明	口縁部に刻目、頸部に突起、刺突が施される。	RL	8.1	10.8
55	鉢Ⅱ	区画文C 1	口縁部にB突起、刻目、胴部に区画文が3単位施される。四角形文が充填される。	LR	(5.8)	13.4
56	鉢Ⅰ	不明	口縁部に刻目、胴部に短沈線文が施される。	RL	5.3	(7.6)
57	鉢ⅢA	入組文	口縁部に山形突起、B突起、刻目、胴部に入組文が施される。	RL	8.5	7.6
58	鉢ⅢB	不明	口縁部に山形突起、突起、刻目が施される。	RL	7.8	11.3
59	鉢ⅢB	不明	口縁部に山形突起、突起、刻目、頸部に刻目が施される。	RL	6.8	(9.6)
60	鉢ⅢA	工字文	口縁部にB突起、胴部に工字文が施される。三叉文が充填される。内外面に炭化物が付着する。	LR	7.8	9.0
61	鉢ⅢA	入組文A	口縁部に刻目、胴部に突起、入組文が3単位施される。三叉文が充填される。	LR	12.3	(16.3)
62	壺Ⅴ	区画文A 2	胴部に区画文が3単位施される。ノの字文、四角形文が充填される。胎土に海綿状骨針。赤彩。	無	(4.4)	7.0
63	壺Ⅲ	不明	頸部に突起。赤彩。	無	9.2	8.0
64	壺Ⅲ	三叉文B	胴部に三叉文が施される。	LR	(9.7)	14.4
65	壺Ⅲ	配置文D(2)	胴部に配置文が施される。四角形文が充填される。赤彩。	無	(7.0)	(6.4)
66	壺Ⅲ	配置文D(2)	頸部に列点、胴部に配置文が上段2単位、下段3単位施される。ノの字文、三叉文、四角形文、五角形文が充填される。	LR	(10.6)	8.1
67	壺Ⅰ	配置文CⅡ	胴部に配置文、隆帯に刻目が施される。	RL	(5.9)	11.1
68	壺Ⅴ	不明	口縁部にB突起、頸部に突起が施される。	RL	10.4	(8.1)
69	壺Ⅴ	不明	頸部に突起が施される。胎土に海綿状骨針。赤彩。	無	8.2	10.1
70	壺ⅥB	三叉文B	頸部に三叉文が施される。赤彩。砲弾形。	LR?	(13.0)	7.4
71	壺ⅥA	羊歯状文B(頸) 区画文A 3(胴)	口縁部にB突起、頸部に羊歯状文、胴部に突起、刻目、区画文が3単位施される。	LR	(12.2)	6.1
72	壺ⅥA	三叉文E(上半) 三叉文B(下半)	胴部上半、下半に別々の三叉文が施される。赤彩。	無	(9.4)	7.2
73	壺ⅥA	区画文A 3	胴部に区画文が、上から1段目3単位、2段目5単位、3段目5単位、4段目4単位施される。	LR	(11.9)	6.9
74	壺ⅡB	不明	無文である。器形が注口土器に似る。	無	4.7	7.3
75	壺ⅡB	不明	無文である。	無	9.3	11.8

是川中居遺跡出土土器観察表(2)

番号	器種	分 類	特 徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
76	壺Ⅲ	不明	頸部に平行沈線が施される。	無	11.0	10.3
77	壺ⅥB	羊歯状文D	頸部に突起、羊歯状文が施される。赤彩。	無	(17.1)	10.9
78	壺ⅥA	羊歯状文A (上半、下半)	胴部に突起、羊歯状文が施される。	無	(13.4)	8.7
79	壺ⅥA	不明	口縁部、頸部に平行沈線が施される。赤彩。	無	10.0	5.6
80	台付鉢Ⅱ	三叉文E	胴部に三叉文が施される。	LR	7.9	18.9
81	台付鉢Ⅲ	不明	口縁部に刻目が施される。	LR	(10.0)	(8.1)
82	台付鉢Ⅴ	区画文B 2	口縁部にB突起、突起、胴部に区画文が4単位、台部に胴部と異なる区画文が施される。	RL	7.6	10.2
83	台付鉢Ⅰ	三叉文D(口、胴) 三叉文A(台)	口縁部にB突起、三叉文、頸部の突起間に短沈線、胴部に三叉文、台部に三叉文が施される。透かし孔あり。	LR	12.0	(13.8)
84	台付鉢Ⅲ	区画文C 1	口縁部に山形突起、B突起、胴部に突起、区画文が3単位施される。	RL	10.5	11.9
85	台付鉢Ⅲ	区画文C 1	口縁部・頸部に刺突、胴部に突起、区画文が4単位施される。ノの字文が充填される。	LR	8.5	10.0
86	壺Ⅴ	楕円文	胴部に楕円文が5単位施される。	LR	(14.1)	18.0
87	壺Ⅴ	入組文C	胴部に入組文が施される。三叉文が充填される。	LR	(14.9)	17.6
88	壺Ⅴ	入組文C	胴部に突起、入組文が施される。三叉文が充填される。赤彩。	RL	(15.9)	18.9
89	壺Ⅴ	工字文	胴部に工字文が3単位残存。	無	(8.6)	(9.3)
90	壺Ⅶ	不明	頸部に刺突、胴部に短沈線文が施される。	LR	(12.2)	15.1
91	浅鉢Ⅱ	工字文	頸部の突起間に短沈線文、胴部に工字文が施される。赤彩。	LR	5.3	14.4
92	壺Ⅴ	入組文B	胴部に入組文が施される。「横し文」、三叉文が充填される。赤彩。	無	(7.2)	7.3
93	浅鉢Ⅱ	不明	口縁部に刻目、頸部の突起間に短沈線が施される。	RL	6.3	15.7
94	台付鉢Ⅳ	区画文C 1	口縁部にB突起、頸部に刻目、胴部に突起、区画文が4単位施される。ノの字文、四角形文が充填される。内外面に炭化物が付着する。	LR	8.3	10.1
95	台付鉢Ⅲ	区画文C 1	口縁部に山形突起、B突起、胴部に区画文が3単位施される。	RL	(13.2)	13.1
96	鉢Ⅰ	三叉文D	口縁部にB突起、三叉文が施される。内外面に炭化物が付着する。	LR	9.0	19.0
97	鉢Ⅳ	三叉文B	口縁部に弧線文、胴部に三叉文、底部に波状文が施される。外面に炭化物が付着する。	LR	12.5	(12.4)
98	鉢Ⅰ	羊歯状文A	口頸部にB突起、羊歯状文が施される。内外面に炭化物が付着する。	LR	10.3	12.9
99	鉢Ⅰ	羊歯状文A	口頸部にB突起、羊歯状文が施される。内面に炭化物が付着する。	LR	10.8	13.9
100	鉢Ⅰ	菱形文A	口頸部にB突起、S字文、胴部に菱形文が施される。三叉文が充填される。内外面に炭化物が付着する。	LR	7.8	(10.9)
101	浅鉢Ⅰ	羊歯状文B(頸) 区画文A 3(胴)	頸部に羊歯状文、胴部に区画文が2単位残存。	LR	6.6	(15.0)
102	壺Ⅰ	配置文AⅠ	胴部に配置文が7単位施される。ノの字文が充填される。赤彩。	LR	(5.2)	7.4
103	壺Ⅰ	配置文D(1)	胴部に突起、配置文が3単位施される。ノの字文が充填される。赤彩。	LR	5.6	7.3
104	壺Ⅰ	配置文D(2)	胴部に配置文が3単位施される。三叉文、ノの字文が充填される。赤彩。	無	(4.0)	5.9
105	壺Ⅴ	縦短沈線	胴部の平行沈線間に縦の短沈線が施される。	LR	(6.7)	8.7
106	壺Ⅴ	菱形文A (頸、胴)	頸部に菱形文、胴部に突起、菱形文が施される。ノの字文、四角形文が充填される。	LR	(6.8)	8.3
107	壺Ⅰ	配置文AⅠ	胴部に配置文が5単位施される。ノの字文、三叉文が充填される。赤彩。	無	(11.5)	13.4
108	壺Ⅴ	不明	胴部の入組沈線にノの字文、三叉文が充填される。赤彩。	無	(9.1)	10.3
109	壺Ⅴ	縦短沈線	胴部の平行沈線間に縦の短沈線が施される。	LR	(8.8)	11.1
110	台付鉢Ⅰ	三叉文B(台) 三叉文E(口) 三叉文(胴)	口縁部に山形突起、三叉文、頸部の突起間に短沈線、胴部に三叉文、台部に三叉文が施される。	LR	10.5	14.4
111	台付鉢Ⅲ	配置文B(2)	胴部に突起、配置文、台部の突起間に短沈線が施される。ノの字文、四角形文が充填される。	LR	(14.2)	12.8
112	台付鉢Ⅲ	配置文B(2)	口縁部に刻目、胴部に突起、配置文が2単位施される。四角形文が充填される。外面に炭化物が付着する。	LR	10.4	10.4
113	台付鉢Ⅱ	不明	頸部に隆帯文、台部に突起が施される。	無	6.0	14.1
114	壺Ⅴ	不明	口縁部に山形突起、B突起、突起が施される。赤彩。	L	8.5	7.6

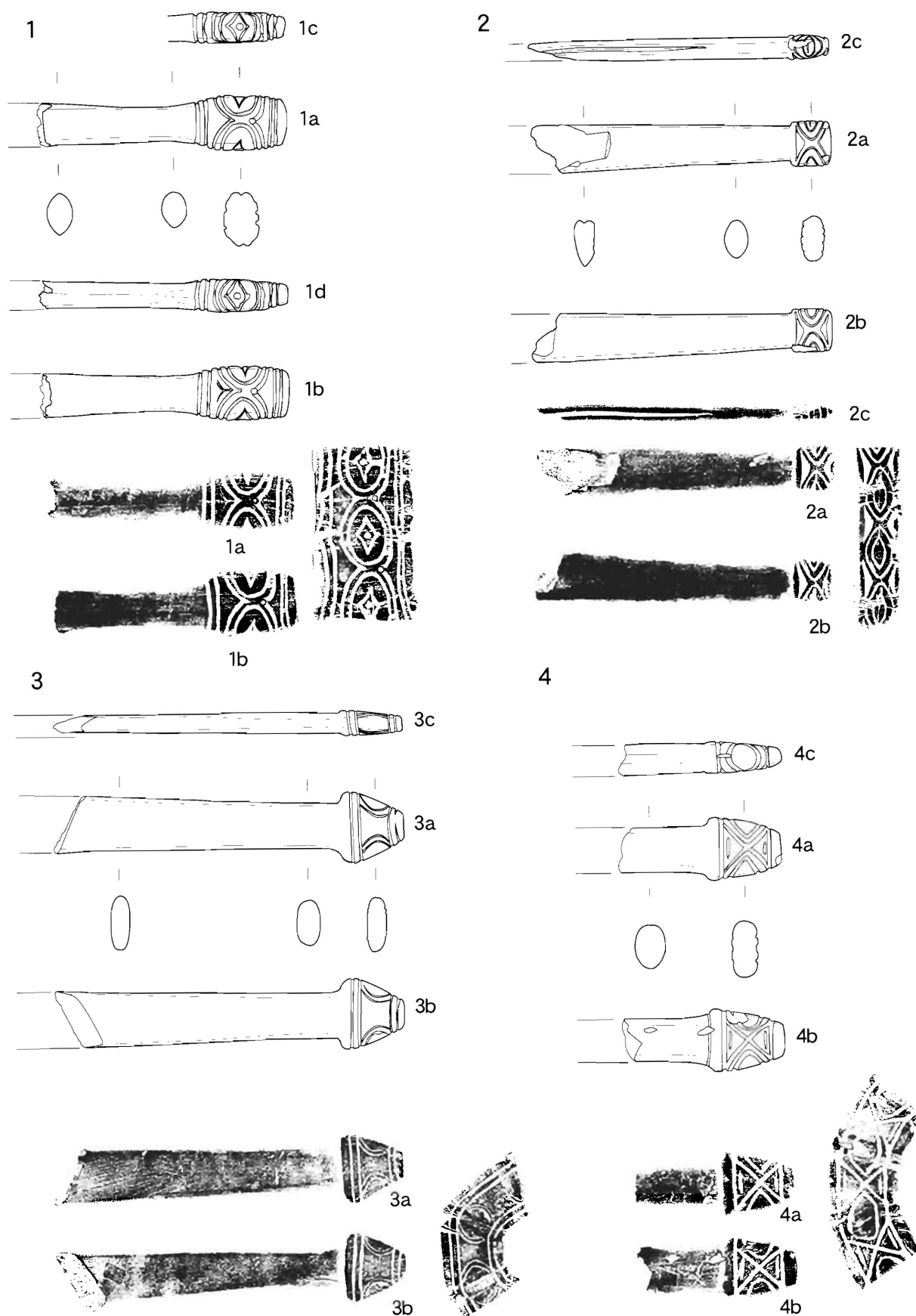
是川中居遺跡出土土器観察表(3)

番号	器種	分類	特徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
115	壺Ⅴ	変形工字文	胴部に突起、変形工字文が施される。	LR	(11.3)	14.6
116	浅鉢Ⅱ	楕円文	頸部の突起間に短沈線、胴部に楕円文が施される。	LR	5.1	(12.3)
117	鉢Ⅴ	三叉文E(口、胴) 三叉文(胴)	口縁部に山形突起、三叉文、胴部に三叉文が施される。	LR	11.8	5.2
118	鉢Ⅴ	羊歯状文C	頸部に羊歯状文が施される。赤彩。	無	5.6	8.1
119	皿Ⅰ	羊歯状文A(頸) 区画文A 1(胴)	口縁部にB突起、頸部に羊歯状文、胴部に区画文が3単位施される。	LR	5.7	19.0
120	皿Ⅰ	区画文A 3	口縁部にB突起、口縁内面に沈線、刻目が施される。頸部に列点、胴部に区画文が4単位、ノの字文、三叉文、四角形文、五角形文が充填される。	LR	5.8	19.0
121	浅鉢Ⅳ	配置文E	口縁部に刻目、胴部に配置文が2単位残存。三叉文、四角形文が充填される。	LR	5.9	18.0
122	浅鉢Ⅳ	配置文E	口縁部に列点、胴部に配置文が1単位残存。ノの字文、三叉文、四角形文、五角形文が充填される。	LR	8.1	(14.9)
123	皿Ⅱ	区画文B 2	口縁部に山形突起、B突起、胴部に区画文が2単位残存。五角形文が充填される。	LR	5.5	19.0
124	皿Ⅱ	配置文A 1	口縁部に山形突起、刻目、胴部に配置文が5単位残存。ノの字文、四角形文が充填される。	LR	3.8	16.2
125	皿Ⅱ	配置文D(2)	口縁部に波状突起、胴部に配置文が4単位施される。ノの字文、三叉文、四角形文が充填される。	LR	3.7	15.4
126	皿Ⅱ	配置文C 1	口縁部に刻目、胴部に配置文が7単位施される。ノの字文、三叉文、四角形文が充填される。	RL	3.2	16.6
127	皿Ⅱ	配置文C Ⅱ	口縁部に刻目、胴部に配置文が3単位残存。ノの字文、三叉文、五角形文が充填される。	LR	3.0	(11.6)
128	鉢ⅢA	入組文A	口縁部に刻目、胴部に入組文が2単位施される。三叉文が充填される。	LR	6.0	(9.1)
129	注口Ⅱ	区画文C 1	頸部に列点、胴部に区画文が4単位施される。ノの字文、三叉文、四角形文が充填される。	LR	(8.1)	13.5
130	注口Ⅱ	区画文C 1	胴部に区画文が施される。	RL	(9.8)	15.3
131	注口Ⅰ	菱形文(胴) 三叉文(胴)	胴部に菱形文、三叉文が施される。ノの字文、三叉文、四角形文が充填される。	無	(6.8)	15.7
132	注口Ⅰ	三叉文C	口縁部に山形突起、三叉文が施される。	無	7.4	9.2
133	注口Ⅰ	菱形文	胴部に菱形文主体の入組沈線文、頸部に補修孔。	無	(7.5)	15.6
134	注口ⅢA	羊歯状文A(口) 三叉文(胴)	口縁部にB突起、列点、羊歯状文、胴部に刻目、注口部に三叉文が施される。	無	7.4	10.0
135	注口ⅢA	羊歯状文A(胴) 羊歯状文D(肩)	胴部に羊歯状文、肩部に羊歯状文、最張部の隆帯に列点、胎土に海綿状骨針。	無	(7.9)	15.2
136	注口ⅢA	羊歯状文A	頸部に列点、胴部に羊歯状文が施される。	無	(7.1)	16.3
137	注口Ⅱ	配置文C Ⅱ	口縁部に山形突起、B突起、胴部に配置文が5単位、注口部に突起が施される。三叉文が充填される。	LR	9.4	11.8
138	注口ⅢA	配置文C Ⅱ(上半) 配置文E(下半)	胴部に配置文(上半、下半それぞれ4単位)が施される。三叉文、五角形文が充填される。赤彩。	無	(6.5)	14.4
139	注口ⅢA	配置文E	胴部に配置文が施される。	LR	(7.4)	14.9
140	注口ⅢB	配置文B(2)	胴部上半に配置文が4単位、下半に楕円文が5単位施される。	LR	8.5	12.1

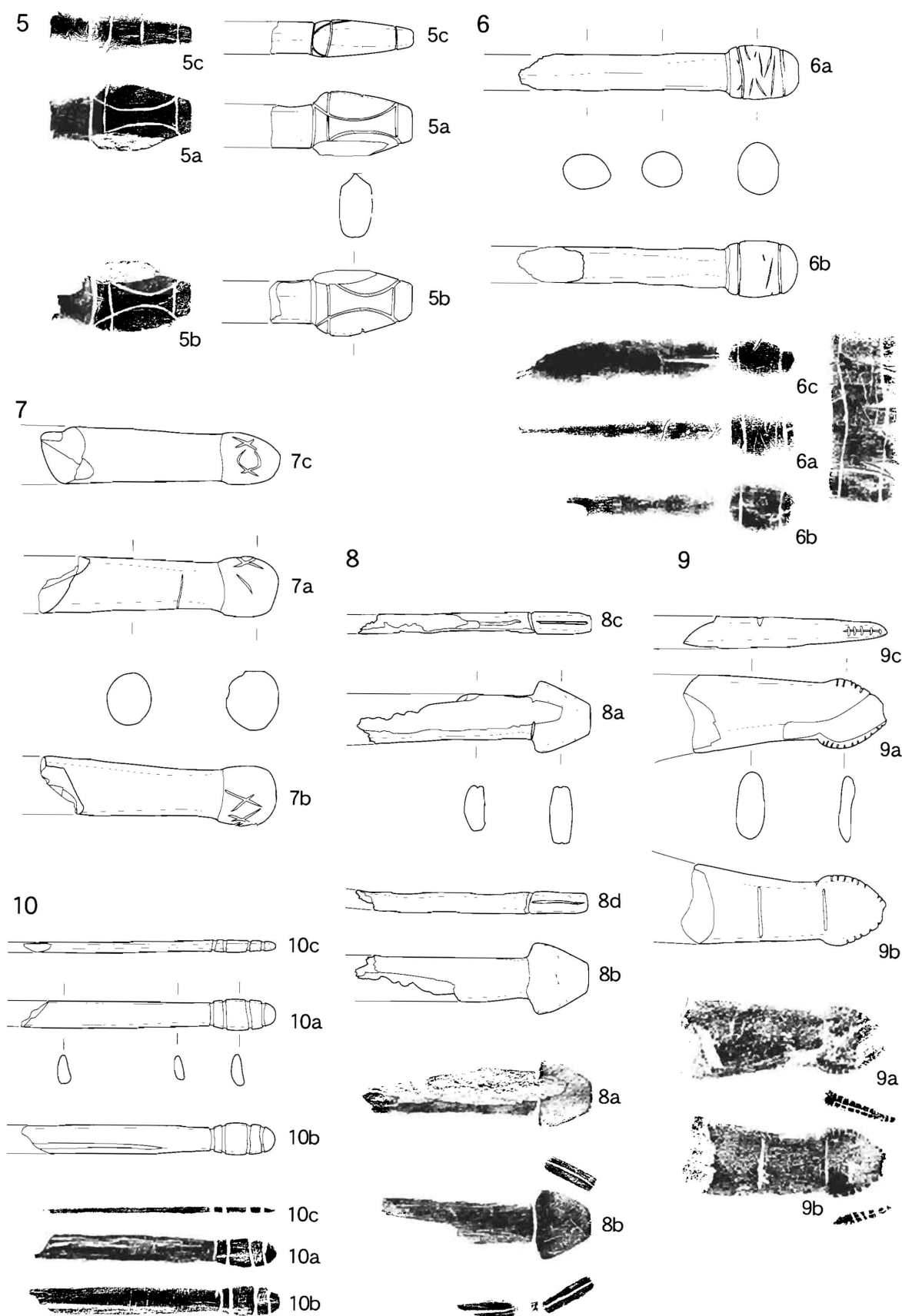
是川中居遺跡出土土器観察表(4)

1	105-580	21	105-515	41	192-136	61	104-28	81	107-50	101	102-195	121	102-194
2	105-465	22	105-14	42	102-164	62	105-203	82	102-27	102	105-35	122	102-199
3	102-87	23	105-40	43	102-211	63	105-206	83	108-60	103	105-81	123	103-29
4	105-398	24	105-496	44	102-146	64	105-402	84	107-67	104	105-31	124	103-33
5	105-194	25	105-430	45	102-1	65	105-21	85	108-50	105	105-10	125	103-2
6	105-19	26	105-116	46	102-150	66	105-196	86	105-433	106	105-61	126	103-12
7	105-184	27	105-314	47	102-171	67	105-409	87	105-490	107	105-214	127	102-239
8	105-421	28	105-157	48	102-427	68	105-411	88	105-146	108	105-201	128	101-153
9	105-416	29	105-435	49	105-63	69	105-241	89	105-519	109	105-123	129	109-13
10	105-495	30	105-434	50	102-163	70	105-76	90	105-440	110	108-40	130	109-84
11	105-83	31	105-500	51	102-192	71	105-240	91	102-215	111	108-62	131	109-71
12	105-1	32	105-489	52	104-25	72	105-127	92	105-165	112	108-14	132	109-103
13	105-37	33	105-70	53	104-4	73	105-197	93	102-151	113	106-8	133	109-73
14	105-403	34	105-273	54	101-38	74	105-228	94	107-109	114	105-513	134	109-109
15	105-281	35	105-418	55	102-189	75	105-75	95	107-108	115	105-444	135	109-48
16	105-207	36	105-280	56	101-52	76	105-417	96	101-142	116	102-226	136	109-23
17	105-284	37	102-204	57	H105-533	77	105-419	97	101-12	117	102-205	137	109-115
18	105-509	38	102-157	58	101-36	78	105-48	98	101-123	118	102-220	138	109-119
19	105-163	39	102-148	59	101-13	79	105-200	99	101-42	119	103-5	139	109-60
20	105-67	40	104-145	60	104-2	80	107-54	100	102-222	120	103-13	140	109-97

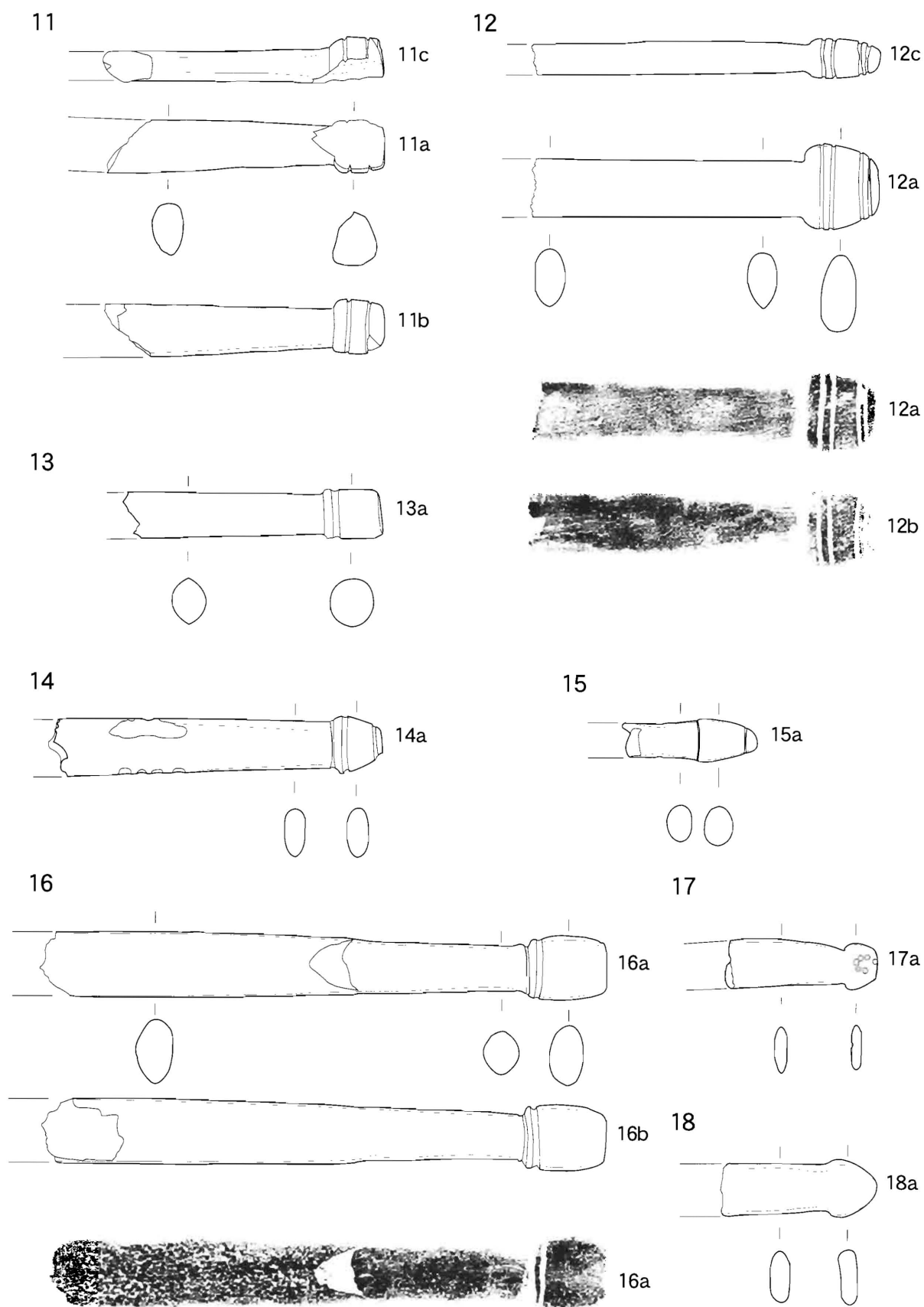
是川中居遺跡出土土器に注記された整理番号



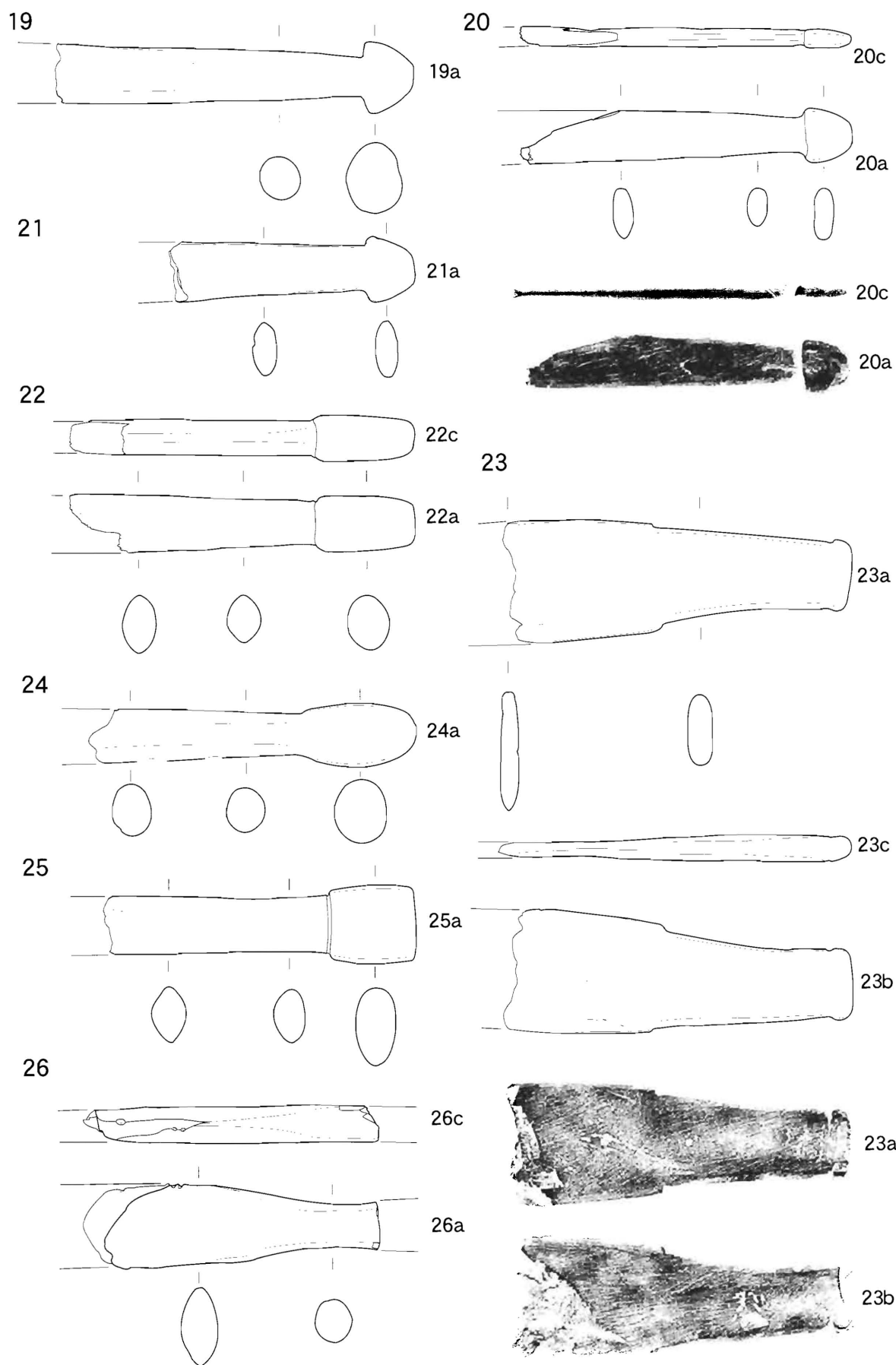
第28図 是川中居遺跡出土石刀（図1～4）



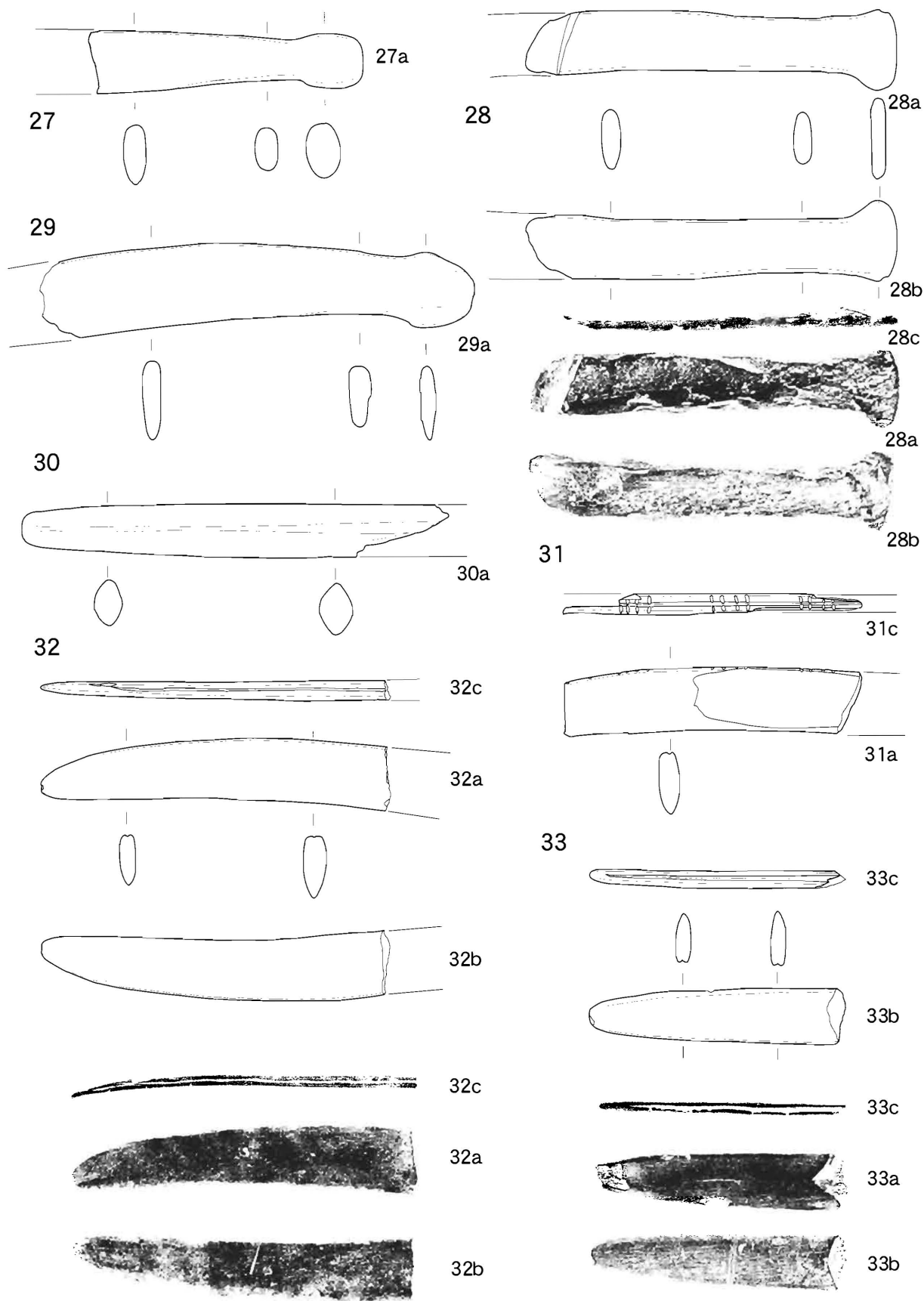
第29図 是川中居遺跡出土石刀 (図5~10)



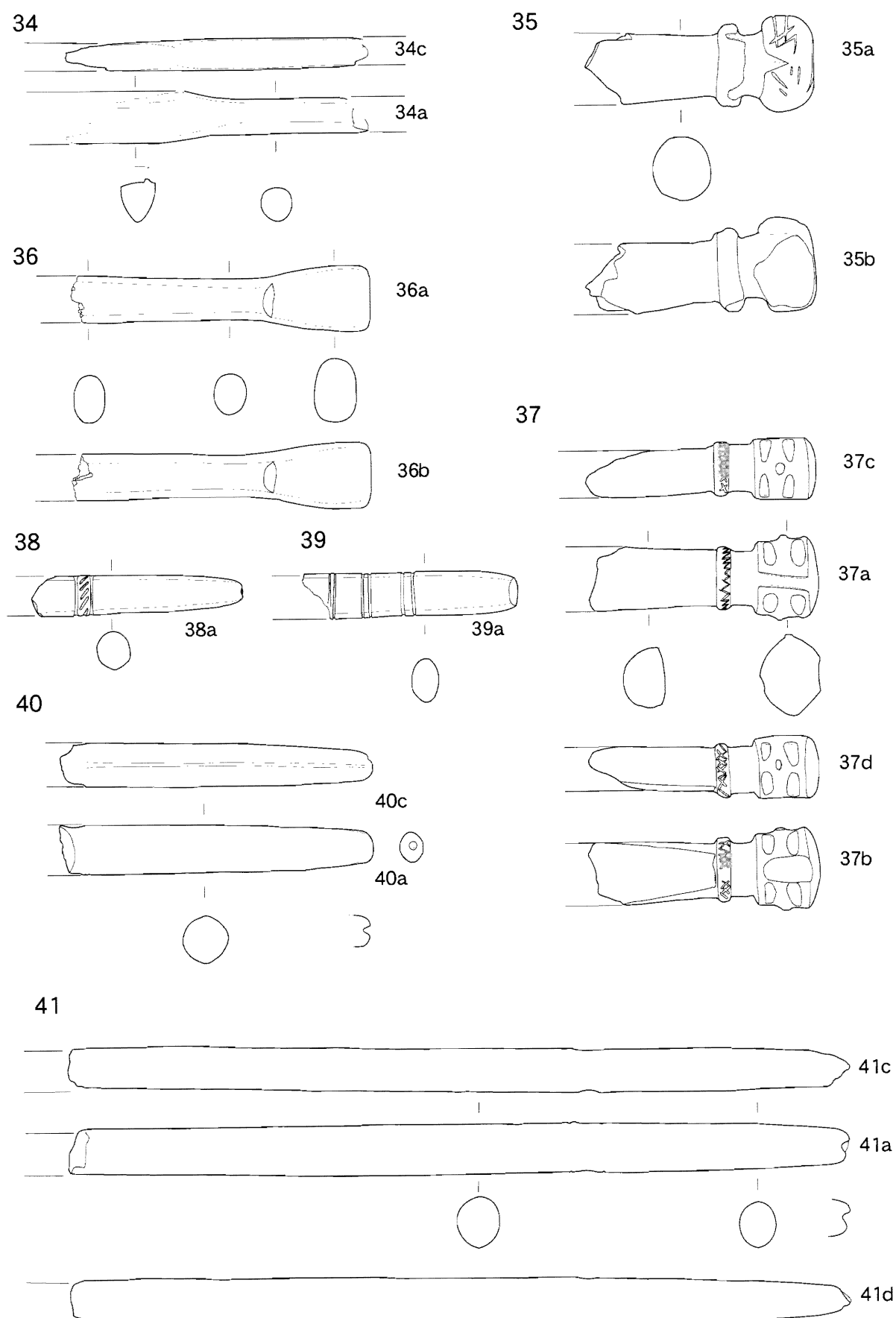
第30図 是川中居遺跡出土石刀（図11～18）



第31図 是川中居遺跡出土石刀 (図19~26)



第32図 是川中居遺跡出土石刀（図27～33）



第33図 是川中居遺跡出土石刀（図34～41）

番号	分類	部位	特 徴	柄部の 形成	柄頭の 形成	文様	石質	計測値 (cm)			重さ (g)
								最大長	最大幅	最大厚	
1	I A	柄～ 身	柄頭に平行線文をめぐらせ、 間に弧線を描いた文様が施さ れる。赤彩。	断面差	方形	有		(13.15)	3.9	1.8	99.9
2	I B	柄～ 身	柄頭に平行線文をめぐらせ、 間に弧線を描いた文様が施さ れる。背に溝がある。	なし	方形	有		(15.95)	2.6	1.2	82.6
3	I B	柄～ 身	柄頭に平行線文をめぐらせ、 間に弧線を描いた文様が施さ れる。	なし	台形	有		(18.4)	3.7	1.1	105.2
4	I	柄	柄頭に平行線文をめぐらせ、 間に弧線を描いた文様が施さ れる。全体が赤黒い。	不明	台形	有		(8.5)	3.4	1.6	67.9
5	I	柄	柄頭に平行線文をめぐらせ、 間に弧線を描いた文様が施さ れる。全体が赤っぽい。	不明	台形	有		(7.45)	3.4	1.75	59.5
6	VI	柄～ 身	柄頭に平行線文をめぐらせ、 間に刻線が施される。赤彩。	なし	円形	有		(14.5)	2.7	2.5	121.7
7	VI	柄	柄頭に×印の刻線が施される。	なし	円形	有		(12.4)	3.2	2.8	167.1
8	II	柄	柄頭正面に刻線が、上下面に 溝がある。	なし	台形	有		(12.1)	3.7	1.2	59.3
9	III	柄	柄頭の上下面に刻線と沈線が ある。	不明	台形	有		(10.6)	4.1	1.45	77.3
10	I B	柄～ 身	柄頭に4条の平行沈線がめぐ る。全体が赤黒い。	なし	円形	有		(13.1)	1.6	0.5	19.1
11	II	柄～ 身	柄頭に2条の平行沈線がめぐ る。	なし	方形	有		(14.5)	2.8	2.2	114.5
12	II	柄～ 身	柄頭に4条の平行沈線がめぐ る。	なし	台形	有		(18.1)	4.0	2.0	197.0
13	I A	柄～ 身	柄頭に1条の沈線がめぐる。	断面差	方形	有		(14.5)	2.6	2.3	120.1
14	II	柄～ 身	柄頭に2条の平行沈線がめぐ る。	なし	台形	有		(17.4)	3.0	1.2	112.0
15	I ?	柄	柄頭に1条の沈線がめぐる。	不明	台形	有		(7.0)	2.3	1.5	32.5
16	I A	柄～ 身	柄頭に1条の沈線がめぐる。	断面差	方形	有		(29.4)	3.4	2.0	318.3
17	III	柄	柄頭は無文。	不明	台形	有		(7.9)	2.3	0.7	27.9
18	II ?	柄	柄頭は無文。	なし	台形	無		(8.2)	3.0	1.0	40.0
19	VI	柄～ 身	柄頭は無文。	なし	台形	無		(18.7)	3.7	3.0	175.7
20	II	柄～ 身	柄頭は無文。	なし	台形	無		(17.4)	2.9	1.1	89.2

是川中居遺跡出土石刀観察表(1)

番号	分類	部位	特 徴	柄部の 形成	柄頭の 形成	文様	石質	計測値 (cm)			重さ (g)
								最大長	最大幅	最大厚	
21	Ⅱ	柄～ 身	柄頭は無文。	なし	台形	無		(12.9)	3.0	1.3	84.5
22	I A	柄～ 身	柄頭は無文。	断面差	方形	無		(18.1)	3.1	2.5	163.6
23	Ⅳ	柄～ 身	柄頭に挟りがある。刀身の幅 が広い。	両関	方形	無		(18.4)	6.4	1.3	200.5
24	Ⅵ?	柄～ 身	柄頭は無文。	なし	円形	無		(17.2)	3.3	2.6	198.0
25	I A	柄～ 身	柄部と柄頭の境に1条の沈線 がめぐる。	断面差	方形	無		(16.3)	4.2	2.2	200.5
26	不明	柄～ 身	刀身は幅が広く、柄部は狭い。	両関	不明	無		(15.6)	4.3	1.9	185.4
27	Ⅲ	柄～ 身	柄頭は無文。	断面差	方形	無		(14.4)	3.2	1.9	115.3
28	V	柄～ 身	柄頭は無文。	断面差	撥形	無		(19.6)	4.2	1.1	121.8
29	Ⅲ	柄～ 身	柄頭は無文。	なし	台形	無		(22.9)	4.2	1.1	187.5
30	不明	身～ 切っ先	柄頭は無文。	不明	不明	無		(22.5)	2.9	2.9	172.6
31	不明	身	背に1条の溝と、沈線がある。 赤彩。	不明	不明	有		(15.6)	3.3	1.1	85.0
32	Ⅲ	身～ 切っ先	背に1条の溝がある。	不明	不明	有		(18.5)	3.3	1.1	85.0
33	不明	身～ 切っ先	背に1条の溝がある。	不明	不明	有		(13.5)	2.8	1.0	58.2
34	不明	柄～ 身	刀身にくらべ柄部が細い。	両関	不明	無		(16.3)	2.7	1.6	98.9
35	Ⅵ	柄	柄頭に刻線がある。	なし	方形	有		(12.3)	5.1	3.5	271.2
36	V?	柄～ 身	柄部と柄頭の境に刻線がある。	なし	撥形?	無		(16.0)	3.5	2.25	162.1
37	Ⅵ	柄	柄頭に8つの窪みと2つの瘤 がある。柄部の隆帯部に格子 目状の文様がある。	なし	方形	有		(12.3)	4.4	3.2	187.5
38	Ⅵ	不明	柄部に2条の平行沈線がめぐる。 その間に刻線がある。	なし	不明	有		(11.3)	2.3	1.9	79.9
39	Ⅵ	柄	柄部に2条ずつの平行沈線が めぐる。	なし	不明	有		(11.5)	2.4	1.5	74.5
40	Ⅵ	不明	柄頭は無文。断面は丸味をお びるが稜がある。側面に小穴 がある。	なし	不明	無		(16.8)	2.6	2.2	176.5
41	Ⅵ	ほぼ 完形	柄部と柄頭の境に段がある。 その両側に刻線がある。側面 に小穴がある。	断面差	方形	無		(41.8)	2.7	2.3	456.9

是川中居遺跡出土石刀観察表(2)

V 青森県五所川原市観音林遺跡

藤沼邦彦・蔦川貴祥・佐布環貴・向出博之・横山寛剛・秋山真吾

1. 観音林遺跡（青森県五所川原市松野木字花笠81）の概要

五所川原駅の東約5kmにある松野木に位置し、梵珠山の西麓から岩木川流域に突き出た標高約30m、周囲の水田面の比高10mほどの低い舌状台地に立地する。遺跡のある丘陵に沿って、北側に松野木川、南側に神山川という小さな川が流れている。現在は丘陵上が平坦に削られ、建築現場の資材置き場となっており、丘陵上にあった遺構はかなり破壊された可能性がある。遺跡名の由来は、かつてこの地に観音堂があったことによるという。

昭和54年および昭和58年から平成3年まで、畑地造成事業に伴って、10次にわたる発掘調査が、五所川原市教育委員会（担当：新谷雄蔵）によって行われた。その結果、縄文時代前期から平安時代にわたる複合遺跡であることが分かり、多数の遺物が発見された。縄文時代晩期の遺構は竪穴住居跡1軒であるが、遺物は大洞BC式から大洞A式までの土器、石器、石製品（岩偶・石刀・石棒・小玉・勾玉など）、土製品（土偶・耳飾りなど）などが多数出土した。土器は大洞C1式から大洞A式までのものが多い。とくに大洞C2式と大洞A式との中間型式と推定される大洞C2-A式（仮称）に属する土器がまとまっており、雲形文と工字文を結びつける様な文様を持つ土器が多数見られる。

ここで取り上げた実測図は、後・晩期の石刀類、晩期の土偶・岩偶、晩期の大洞C1式・C2式・C2-A式土器である。主要な石刀類と土偶・岩偶はすべて実測図を完了したが、土器類は文様があるものにかぎっても全体の4分の1しか実測図・文様の展開図が完了していないので、五所川原市教育委員会のご協力を得ながら、今後も作業を継続する予定である。

（藤沼・蔦川）

2. 縄文晩期の土器

実測図には大洞C1・C2・C2-A式のうち文様をもつ土器を取り上げた。晩期中葉～後葉の文様の描き方・変遷を研究するための基礎資料とするため、できるだけ文様の展開図を添えるように努めた。発掘調査報告書にある土器の実測図のなかには、実物と比べると、大分違うものがあるので、引用する時は、注意する必要がある。

文様の分類は、文様を描くときに文様帯を割りつける働きをする区画文や配置文の種類を基準にした。区画文・配置文は、ふつう沈線でかこまれた磨消（無文）部となるが、沈線あるいは彫り込み部として表現されるものもある。

〔区画文〕区画文は文様帯を区画して単位文様を割りつける働きをするもので、表のようにモチーフによって3つに分けた（区画文1～3）。

区画文1は縦に3本の沈線が並ぶもの。

区画文2は点対称の弧線の組み合わせからなるもの。

区画文3は配置文Ⅲ7の上下に付加文を付けて文様帯の上下線に接するようにしたもの。

〔配置文〕配置文は、文様帯の内部に埋め込まれるか、あるいは文様帯の上・下線のいずれか一方にのみ接続するもので、配置文以外の部分は連続した文様（縄文を持つことが多い）を構成する。表のようにⅠ～Ⅲに大別し、さらにモチーフの種類で細別した。

配置文Ⅰは、文様帯の上・下線のそれぞれ一方にのみ接続する文様が2個一対で構成される配置文で、2種類に細別した。

配置文Ⅰ1は、弧線の組み合わせからなり、キノコ形である。

配置文Ⅰ 2は、充填文に使用される四角形文あるいは三角形文とほぼ同じ形である。

配置文Ⅱは、文様帯の上線に接続する配置文で、2種類に細別した

配置文Ⅱ 1は、配置文Ⅲ 1の上に細長い付加文を付けた形のもの。

配置文Ⅱ 2は、配置文Ⅲ 6の上・下に細長い付加文を付けた形のもの。

配置文Ⅲは、文様帯に組み込まれた配置文で、14種類に細別した。

配置文Ⅲ 1は、C字文を横にしたもの（横C文とする）。

配置文Ⅲ 2は、Ⅲ 1を点対称に入り組ませたもの。

配置文Ⅲ 3は、Ⅲ 1を沈線化させたもの。

配置文Ⅲ 4は、Ⅲ 2が基本形であろう。文様の端部に切り込みや付加的なものを加えて変化に富んだ配置文となっている（参考図5を参照）。図7は、この配置文を2個配したもので、ノの字・四角形文・五角形文などの充填文を加えて、一定幅の美しい縄文帯を作りだし、伸びやかな曲線文として展開させるのに成功している。また2個の配置文は、拓本を見ると分かるように、同形・同大で、重ねると見事に一致する。

配置文Ⅲ 5は、弧線の組み合わせからなるもの。

配置文Ⅲ 6は、S字を横にして、延ばしたもの（横S文）。

配置文Ⅲ 7は、Ⅲ 6「横S文」を逆さまにしたもの（逆横S文）。

配置文Ⅲ 8は、Ⅲ 6「横S文」を沈線化したもの。

配置文Ⅲ 9は、Ⅲ 7「逆横S文」を沈線化したもの。

配置文Ⅲ 10は、Ⅲ 7「逆横S文」の両端にC字形の切り込みを加えたもの（参考図6を参照）。

配置文Ⅲ 11は、Ⅲ 9「逆横S文」の上下に付加文を加えて構成したもの。

配置文Ⅲ 12は、し字を横にして、延ばしたもの（横し文）を、点対称的に入り組ませたもの。

配置文Ⅲ 13は、Ⅲ 9の上下に「横し文」を付加させたもの。参考図2は、配置文Ⅲ 9を配置したもの（参考図1）に、「横し文」を入り組ませるように充填させた文様であるが、この「横し文」の端を、Ⅲ 9の上下に付加させると、Ⅲ 13ができあがる（参考図3）。配置文Ⅲ 13は、かなり変則的で、単独では描きにくいので、Ⅲ 13を用いた文様は、最初にⅢ 13を描くのではなく、まずⅢ 9を配置して、それに「横し文」を付加させるようにして描いたのであろう（参考図1→参考図3）。

配置文Ⅲ 14は、Ⅲ 13の「横し文」の部分を変形させたもの。

以上のように、今回とりあげた観音林遺跡の配置文Ⅲは14種類あるが、基本になるのはⅢ 1・Ⅲ 4・Ⅲ 5・Ⅲ 6、とくにⅢ 1とⅢ 6が重要で、他のものはⅢ 1とⅢ 6のモチーフを逆さまにしたり、入り組ませたり、沈線化したり、付加文をつけたりしているだけにすぎない。いわゆる沈線多重手法による連繫入組文とよばれる複雑そうな文様であっても、配置文と数種類の充填文が重層的に描かれているだけなので、基本となる配置文の構成を確認し、重層的な充填文の埋め方を調べれば、整然とした文様構成を持つものが多いことが理解される。

また、出来上がった文様を見る立場で、観音林遺跡の主要な土器文様を大まかに分類してみると次のようになる。

(1) 雲形文－区画文あるいは配置文に充填文を埋めてできた文様で、磨消縄文の手法によるものが多い。縄文帯がのびのびと展開するものが多い（図3～12、17）。時期も大洞C1式と大洞C2式に属するものである。図11と12の配置文は連繫入組文の横S形配置文とよく似ており、雲形文から連繫入組文に移行する過程をよく示す資料かもしれない。

(2) 連繫入組文－沈線による横S形を基調とした配置文を中心に、さらに横S文や「エ」の字形文・ナ（なべぶた）形文などを重層的に配置してできたものが多い。とくに充填文を埋めた部分の隆線は工字的にみえるのも大きな特色である（図13～16、19～24）。渡島半島の沈線多重手法による連繫入組

文と関連する資料である。二枚橋(2)遺跡や宇鉄遺跡でも多数出土している。時期は大洞C2-A式（大洞C2式と大洞A式の間型式）に属するものと考えている。

(3) 横位連続工字文-沈線による二個一組の三角文を配置してできた工字文的な文様である（図18）。この文様は、連繫入組文を構成する文様の一部にも見られるので、連繫入組文と同じ大洞C2-A式頃のものであろう。

（藤沼・向出）

3. 縄文晩期の土偶・岩偶

観音林遺跡出土の土偶のうち縄文時代晩期に属すると考えられる土偶20点を実測集成した。岩偶も1点ある。縄文晩期の土器は大洞BC式～大洞A式が出土しているが、もっとも多いのは大洞C2式～大洞A式である。土偶の形態を大別すると次のようになり、観音林遺跡の土偶は屈折土偶とX字形土偶の割合が高いのが特色であることが分かる。

(1) 遮光器土偶-小型中実（図1）。腕部（図2）。

(2) 結髪土偶-頭部（図3）。脚部（図5、6）。

(3) 屈折土偶-しゃがんだもの（図7）。脚を軽く屈めたもの（図8、10、12）。

(4) X字形土偶-やや大型化したX字形土偶である（図15～20）。図15～18の4点は、発掘調査でまとまって発見された5点のうちの4点である。一括性の高い資料である。図19の文様は(3)屈折土偶の図7の文様（入組沈線文など）と似ており、同時期のものであろう。

(5) その他の土偶-図9、11、14。このうち図9と14は脚を軽く屈めているようにも見えるので、(3)屈折土偶に近いものであろう。形態や腰部の文様もよく似ている。また図14は頭部の形態が(4)X字形土偶の頭部に類似する。したがって(3)・(4)・(5)の土偶はほぼ同じ時期のものであろう。

以上の土偶の年代を、これまでの研究成果と観音林遺跡出土土器から推定すると、(1)遮光器土偶は大洞BC～C1式のもの。(2)結髪土偶は大洞A式のものであろう。脚部の図5、6もこの時期の結髪土偶あるいは刺突文土偶のものと推定される。(3)屈折土偶と(4)X字形土偶、(5)その他の土偶は、すでに述べたように同時期のもので大洞C2式～大洞A式に属すると推定される。図4の脚部は遮光器土偶の後にくる頭部に角状の突起のつく中空土偶のものと推定されるので、やはり大洞C2式に属すると考えてよい。したがって観音林遺跡の土偶は、大洞C2～大洞A式の時期のものが最も多いことになる。

岩偶が1点ある（図21）。右肩の裏側の部分が剥落しているだけで、ほぼ完全な形である。丸い頭部に目と口が表現されている。目は楕円形で、中に沈線が引かれる。口は小さな三角形である。頭部の裏側に渦巻文が、体の表・裏の全面に渦巻文と入組文が隙間なく描かれている。図7と19に共通する文様であるので、大洞C2～大洞A式の時期のものと考えられる。

（佐布）

4. 縄文後・晩期の石刀

観音林遺跡出土の石刀は縄文時代後・晩期に属すると思われるものを実測した。すべて破片資料である。柄部あるいは切っ先部のどちらかが残存しているものを対象としたが、特徴的なものは、両端が欠けているものもいくつか含めた。石刀のほか、断面が円形に近い石棒（精製石棒）やいわゆる石剣の実測図も含まれている。

（分類）

破片資料が多いため、二枚橋(2)遺跡の石刀を参考に分類した。

I類-刀身が内反りになるもので、刀身部と柄部の境に有段の刃関がある。柄頭は方形で無文のもの（図4）、台形を基本とし入り組み三叉文をもつもの（図1）とがある。

Ⅱ類－破片が小さいが、刀身はやや内反りとなりそうである。刀身部と柄部の区別は明瞭でないが、刀身部より柄部の幅が狭く作られている。刀身部の断面は扁平な楕円形のものとは扁平な楔形のものがある。柄頭は半円状に丸みを帯び、無文である（図9、10）。図7の柄頭は小さなV字形が刻まれている。

Ⅲ類－小さな柄部の破片である。柄頭は丸みのある長方形あるいは楕円形という感じである。文様は、平行線文をぐるりと巡らせ、その間にX状に弧線に向かい合わせたものである（図3）。

Ⅳ類－刀身部から柄部にかけての破片である。刀身の断面はレンズ状である。柄部は斜めの段で作られ、刀身部より幅がせまい。柄頭は撥形である（図18）。

Ⅴ類－刀身はやや内反りになる可能性があり、柄部は刀身部よりやや幅がせまい。刀身部の断面は楔形である。柄頭は沈線で区別され、丸みを帯びた端部が少し下に曲がっている。柄部の上面にやや幅のある溝が彫り込まれている（図19）。

Ⅵ類－断面の丸いものを石棒（石剣を含む）として一括した（図5、6、8）。

（柄頭の文様）

石棒を除くと、柄頭に文様をもつ石刀は3点のみで、入組三叉文を基調とするもの（図1、2）と平行沈線をめぐらせ、その間に向かい合う弧線をX状に配したもの（図3）とがある。入組三叉文を基調とした柄頭は、二枚橋(2)遺跡に多くみられる。晩期後半に属するものである。X状の弧線文は是川遺跡の石刀に多い。その他に切っ先に近い部分に刻み目を入れたものがある（図11）。

（年代）

Ⅵ類の石棒類を除く石刀のおおよその年代は、Ⅰ・Ⅱ類が晩期の大洞C2式～大洞C2-A式に、Ⅲ類は晩期前半に属すると考えられる。Ⅳ・Ⅴ類は秋田県大湯環状列石に多いので後期前半と推定される。

（横山・秋山）

〔観音林遺跡に関する基本的文献〕

○1975年、新谷雄蔵『観音林遺跡』観音林遺跡研究会

○1976年、新谷雄蔵「観音林遺跡の調査研究」『考古風土記』1

○1984年、新谷雄蔵『観音林遺跡－第二次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集

○1985年、新谷雄蔵『観音林遺跡－第三次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集

○1986年、新谷雄蔵『観音林遺跡－第四次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集

○1987年、新谷雄蔵『観音林遺跡－第五次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集

○1988年、新谷雄蔵『観音林遺跡－第六次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集



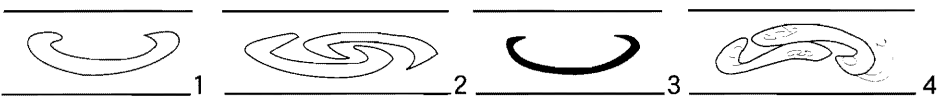
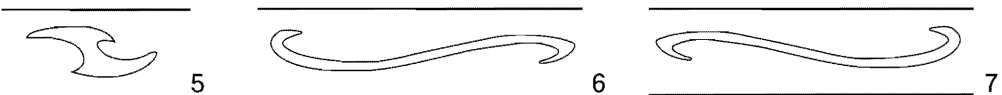


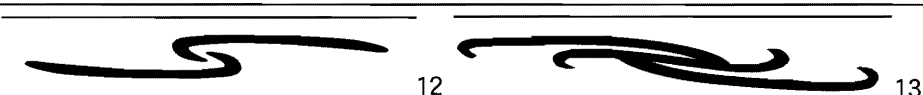
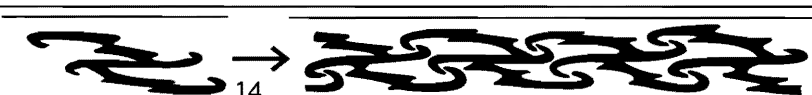






○1989年、新谷雄蔵『観音林遺跡－第七次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集

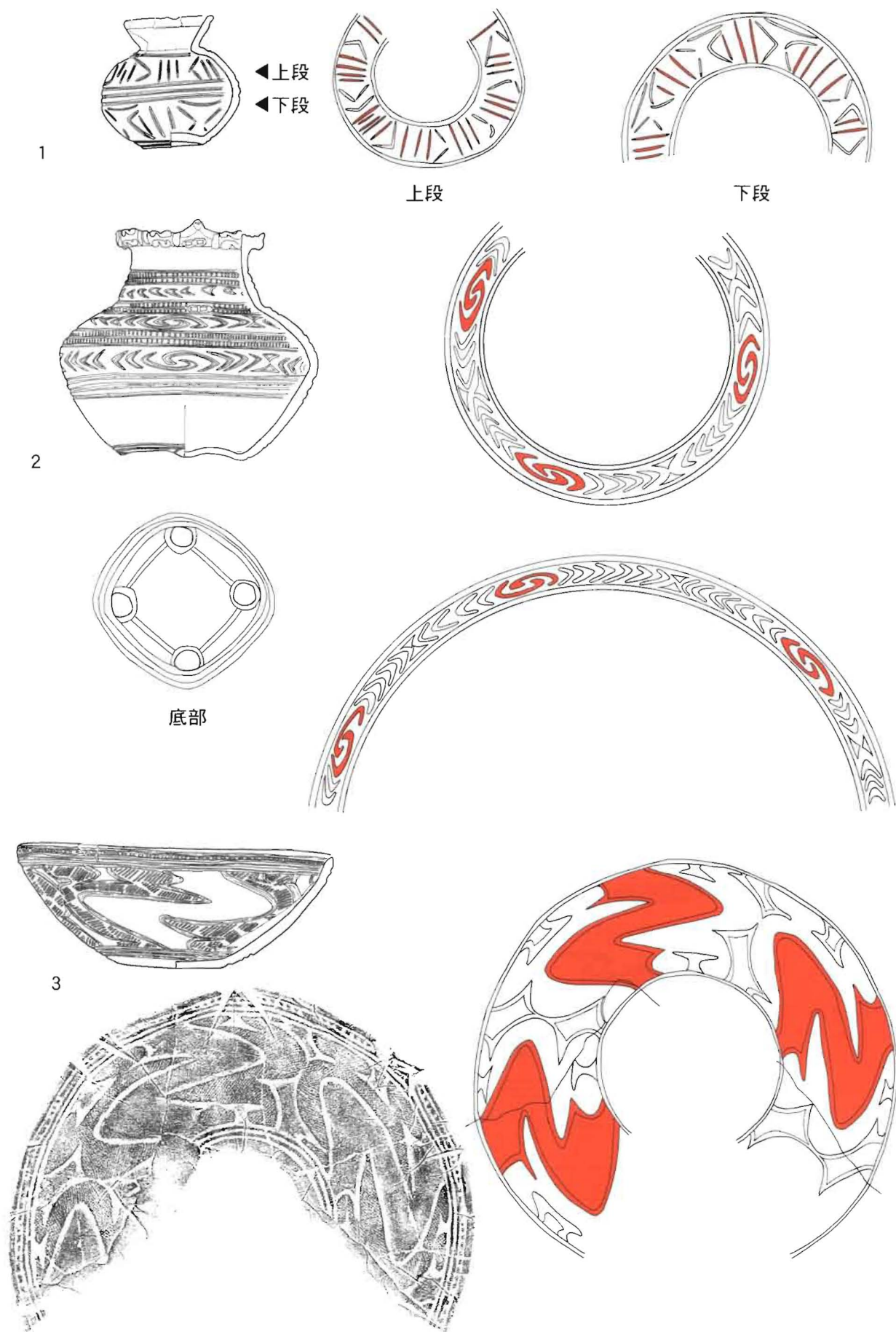
○1990年、新谷雄蔵『観音林遺跡－第八次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集

○1991年、新谷雄蔵『観音林遺跡－第九次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集

○1992年、新谷雄蔵『観音林遺跡－第十次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集

○1993年、五所川原市『五所川原市史 史料編1』

	観音林遺跡の土器の区画文・配置文の分類および参考図		
区画文			
配置文Ⅰ			
配置文Ⅱ			
配置文Ⅲ			
			
			
			
			
			
参考図 1			
2			
3			
4			
5			
6			



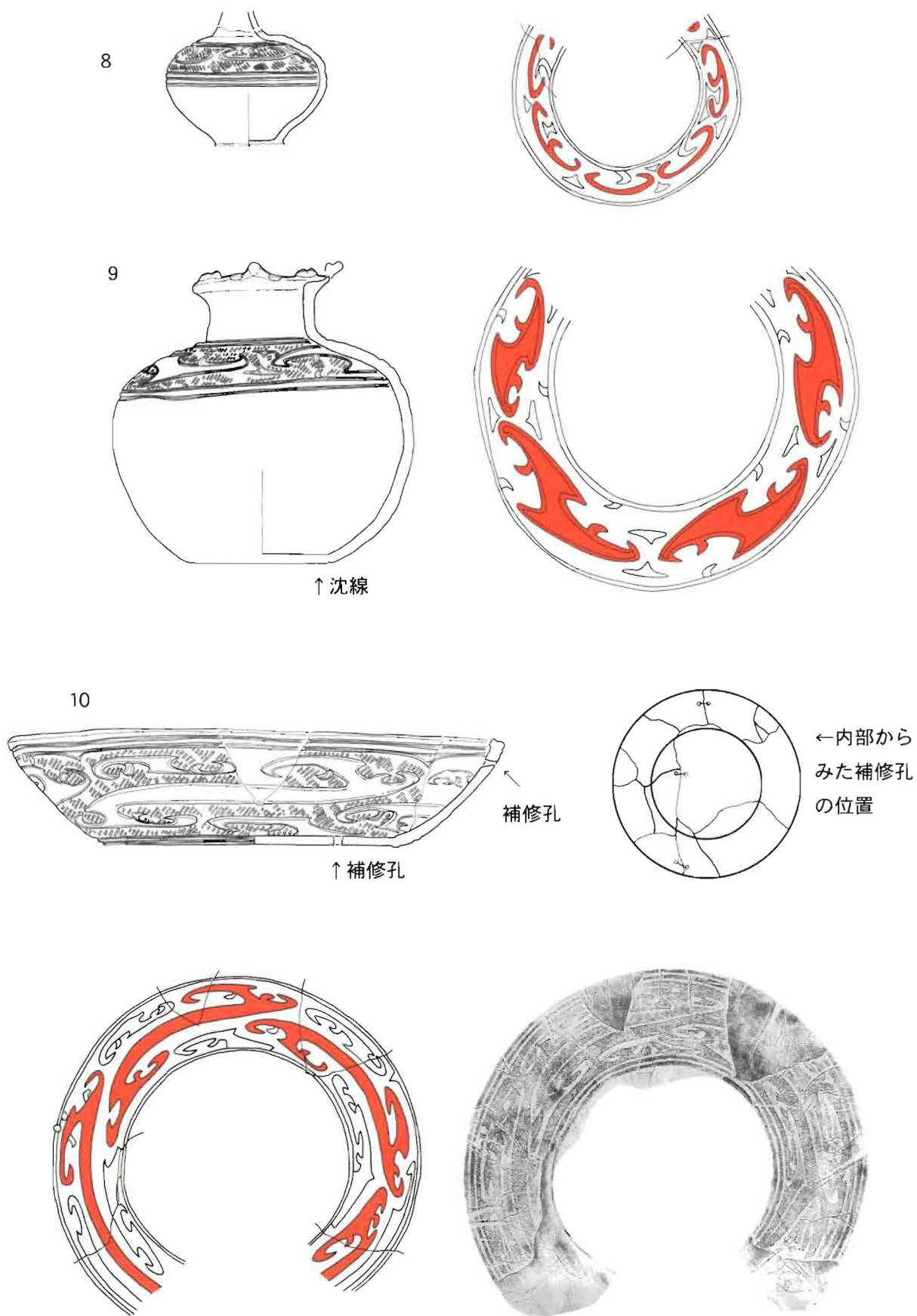
第1図 観音林遺跡出土土器 (図1～3)



第2図 観音林遺跡出土土器（図4～6）



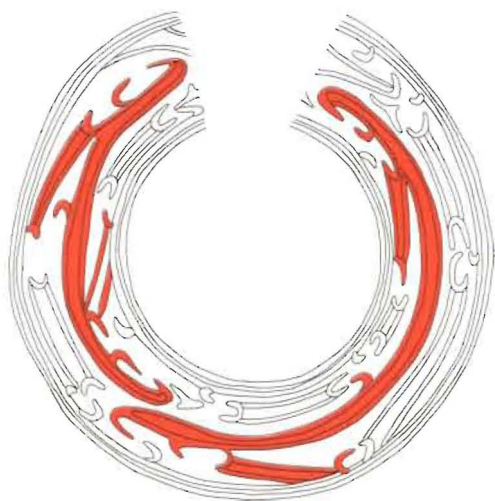
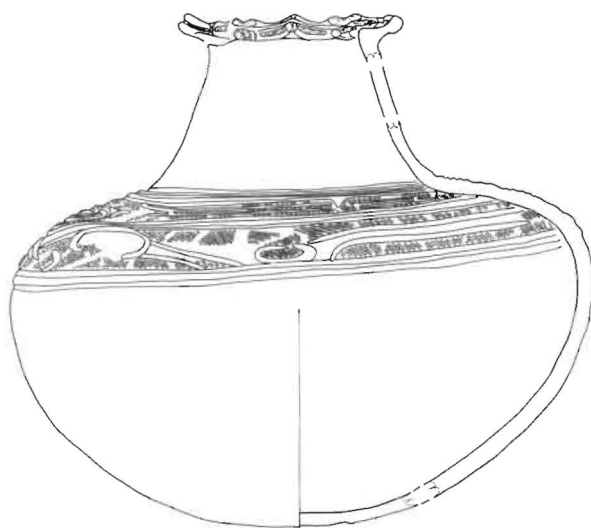
第3図 観音林遺跡出土土器（図7）



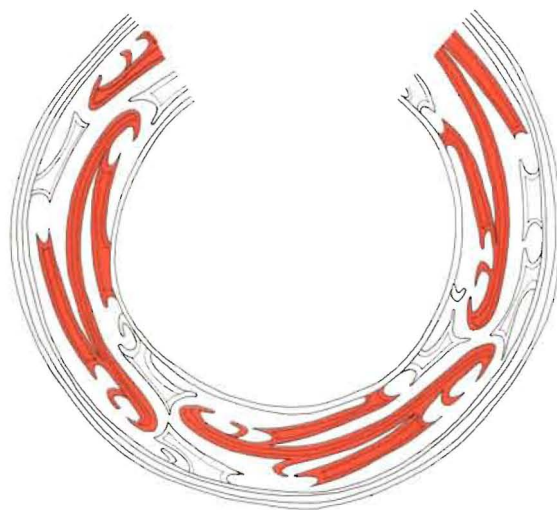
第4図 観音林遺跡出土土器（図8～10）



11

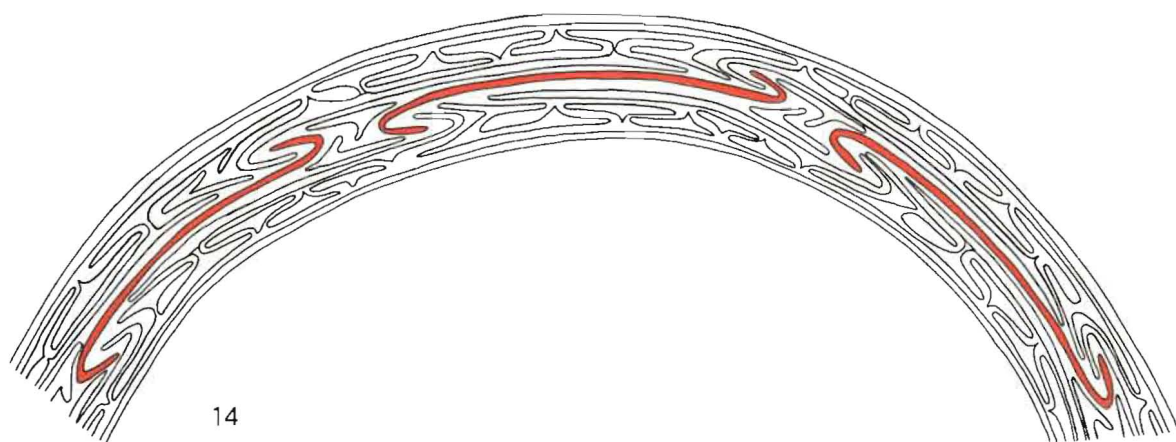
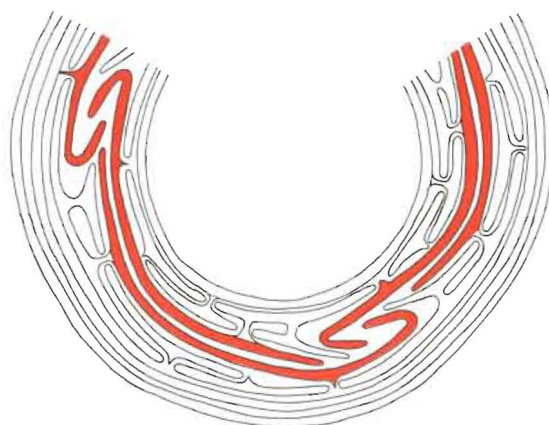


12

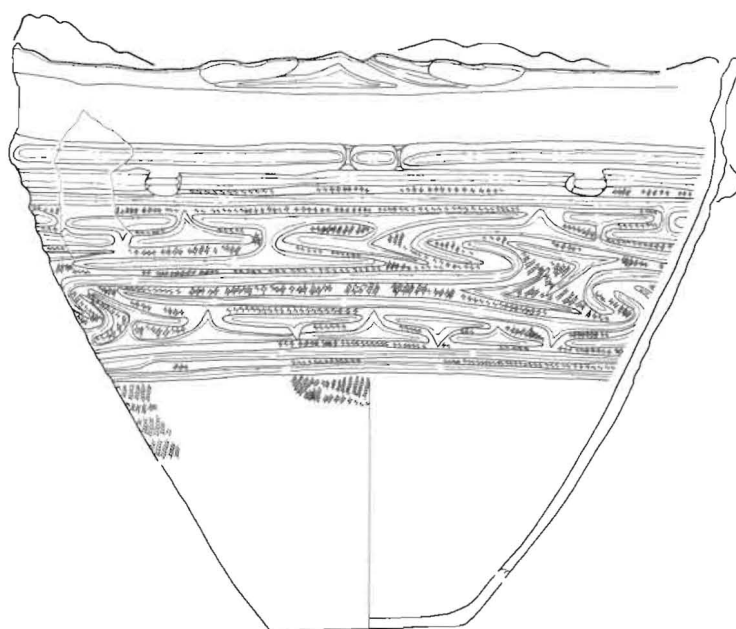


第5図 観音林遺跡出土土器（図11～12）

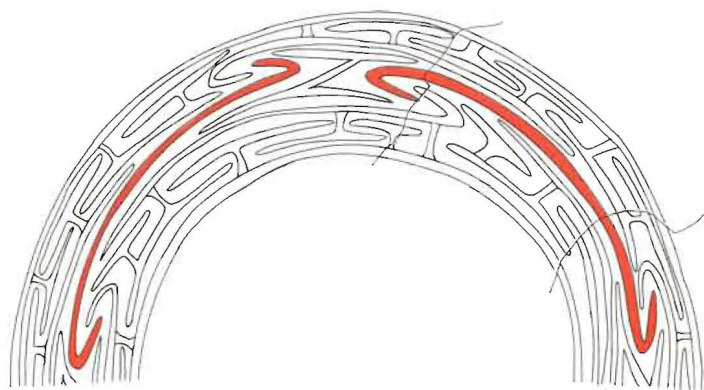
13



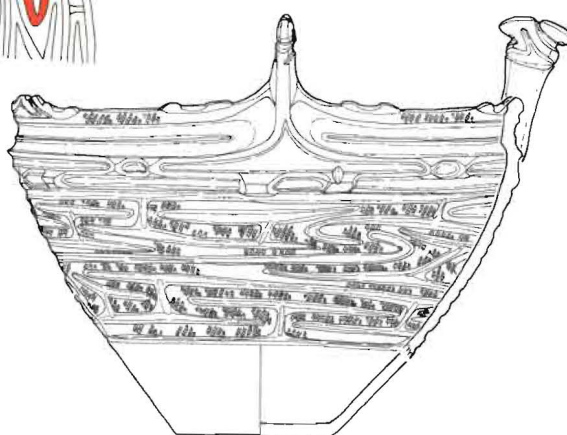
14



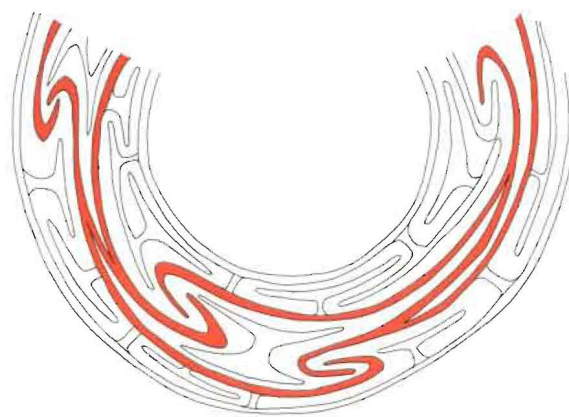
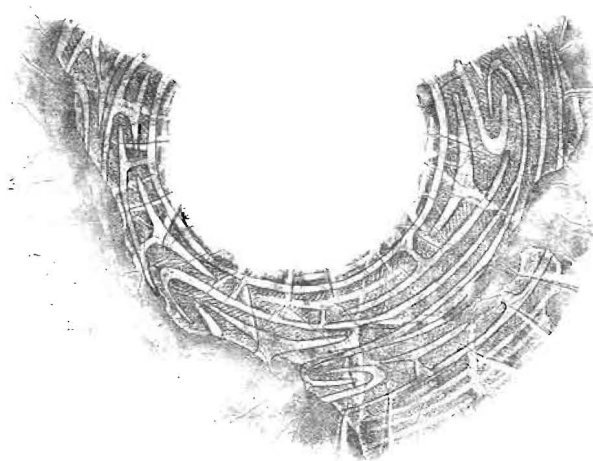
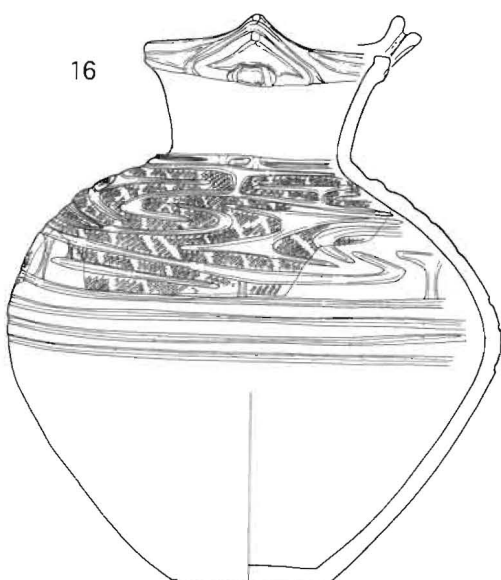
第6図 観音林遺跡出土土器 (図13~14)



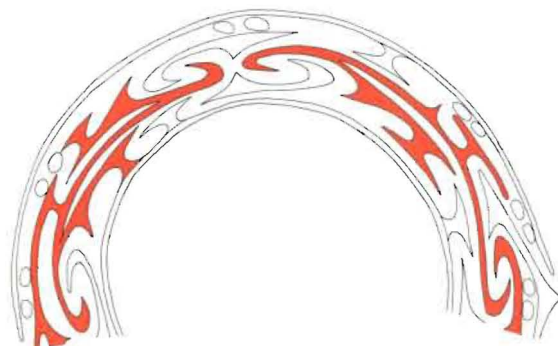
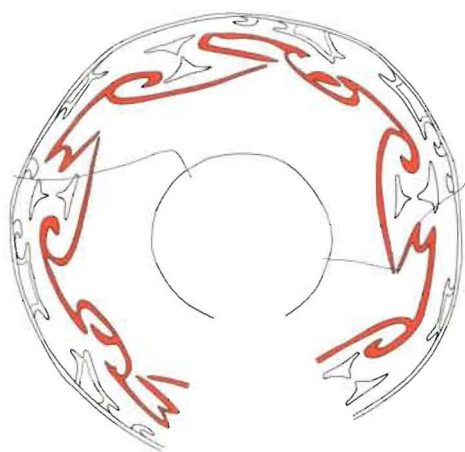
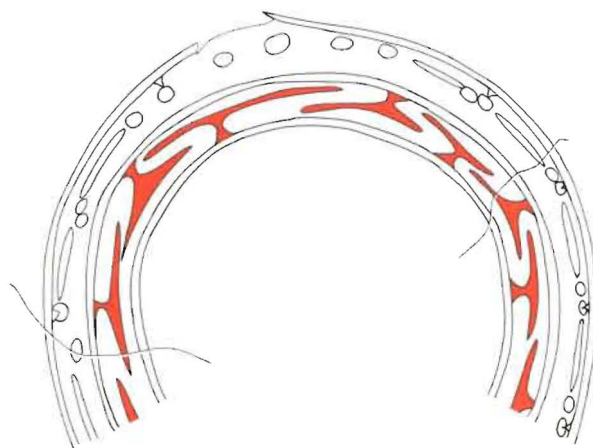
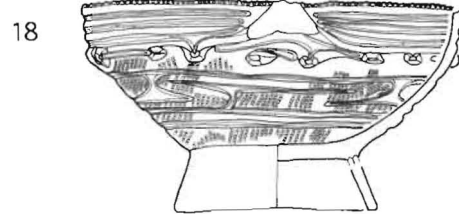
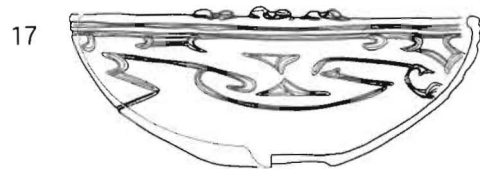
15



16



第7図 観音林遺跡出土土器（図15～16）

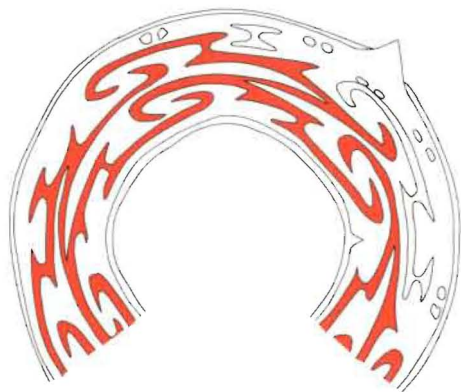


第8図 観音林遺跡出土土器 (図17~19)

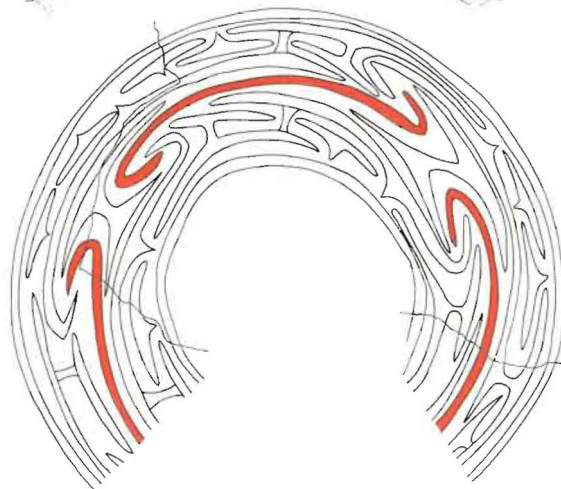
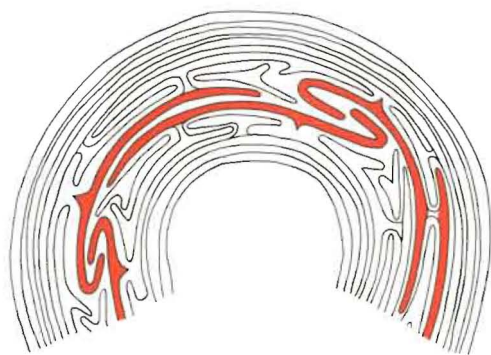
20



22

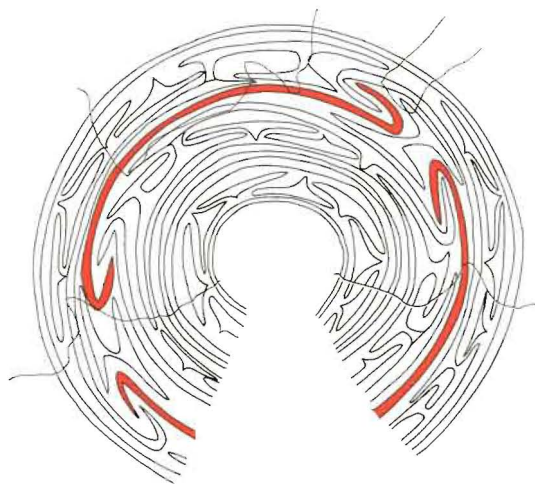
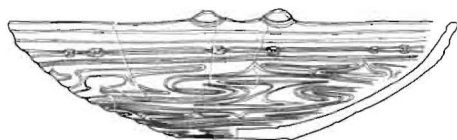


21

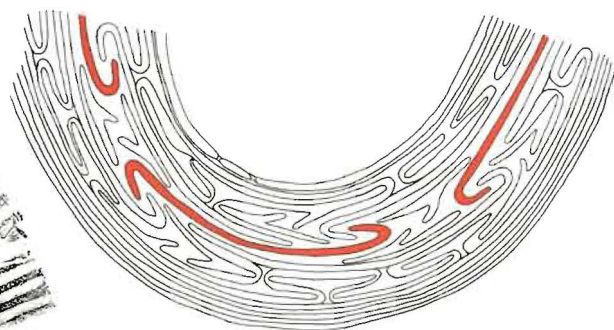
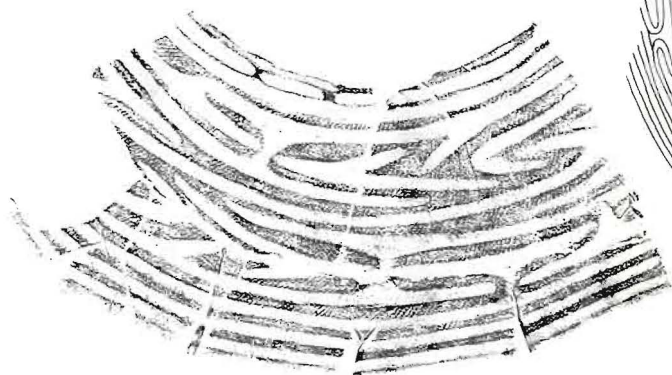
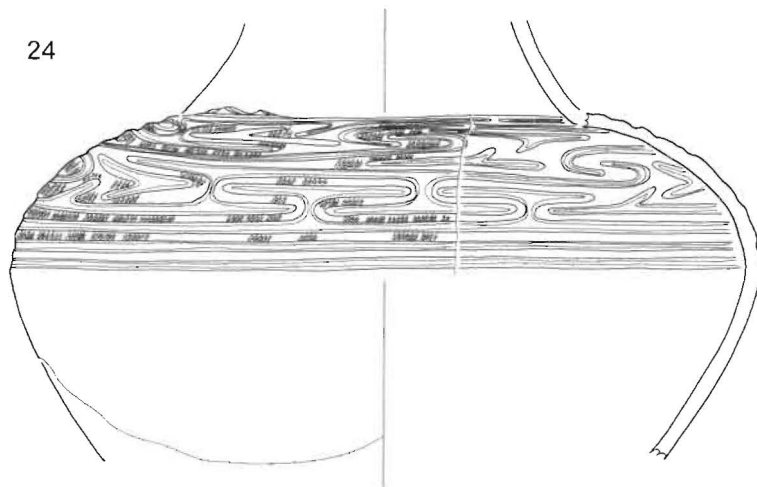


第9図 観音林遺跡出土土器 (図20~22)

23



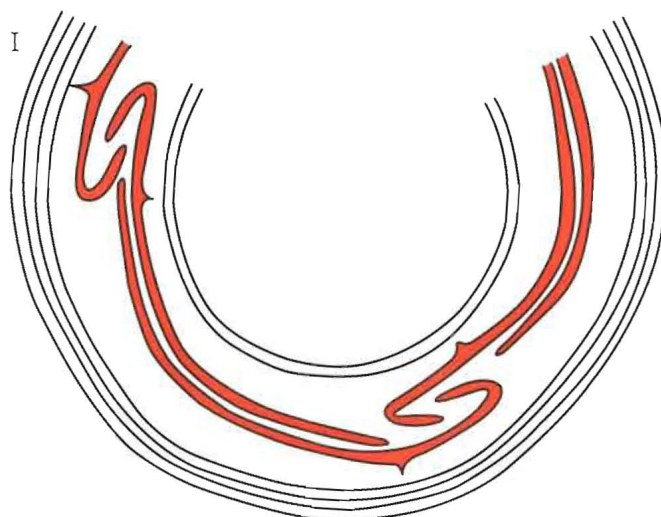
24



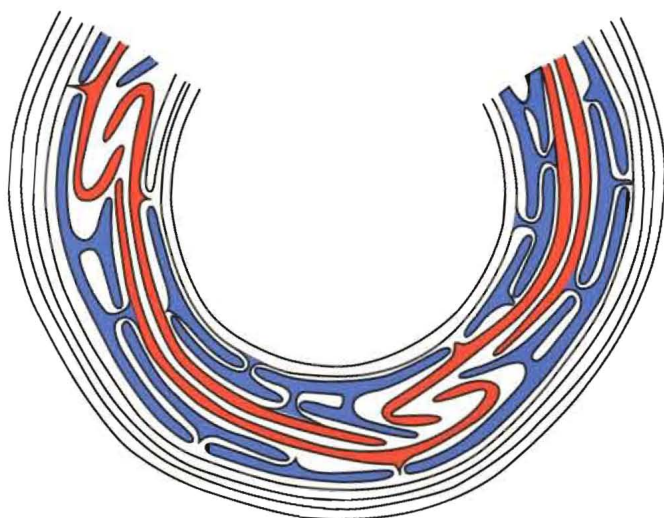
第10図 観音林遺跡出土土器 (図23~24)

25 (図13参照)

配置文Ⅲ12 (横し文) を
配置する。

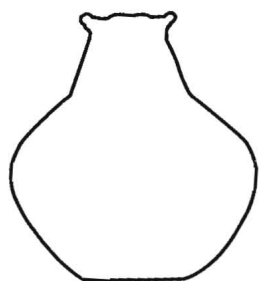


II

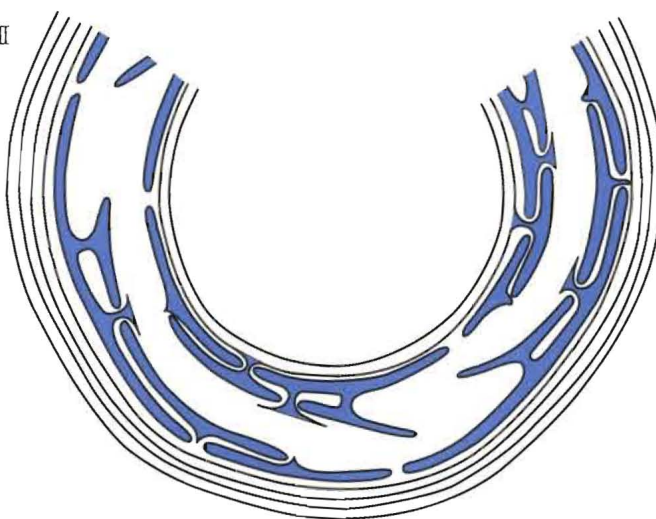


配置文の上下に充填文① (エの字文・十状文)
を点対称に充填し、完成。

充填文①の抜き出し。
充填文①は点対称に
施されている。

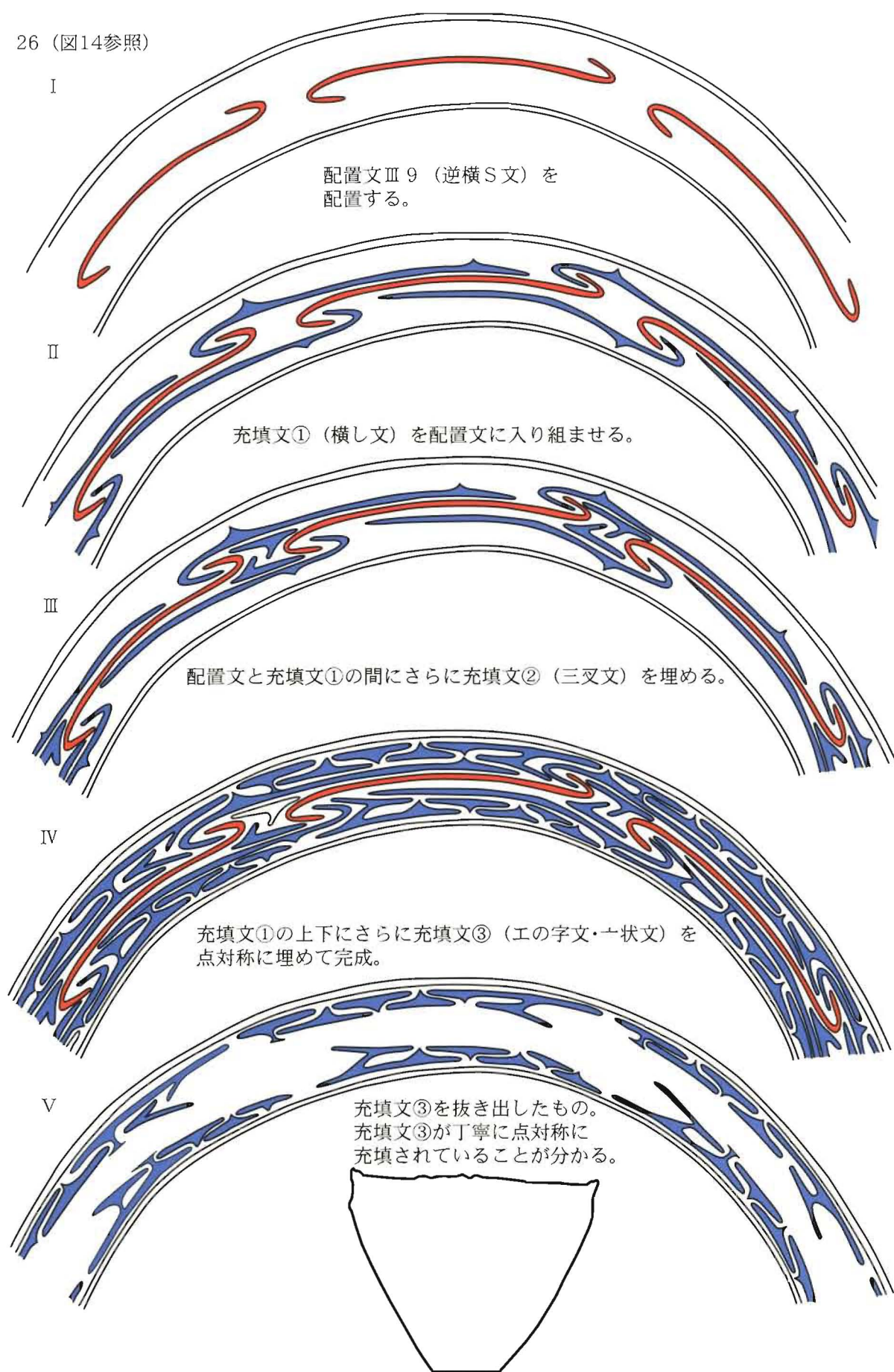


III



第11図 観音林遺跡出土土器の文様の描き方 (図25)

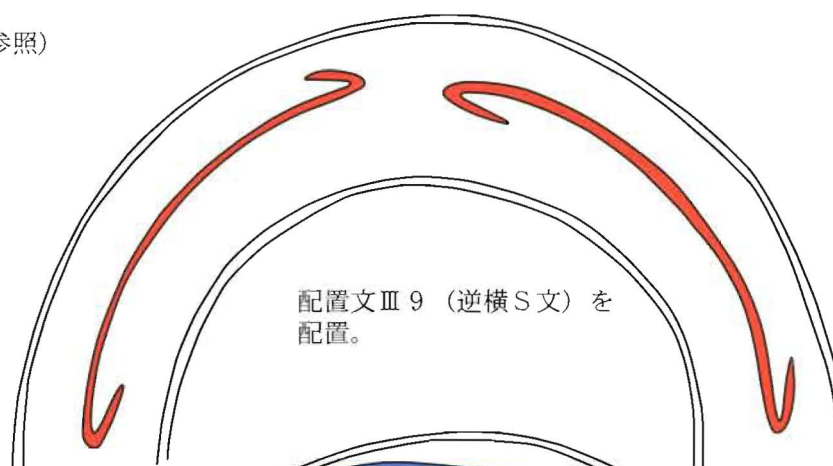
26 (図14参照)



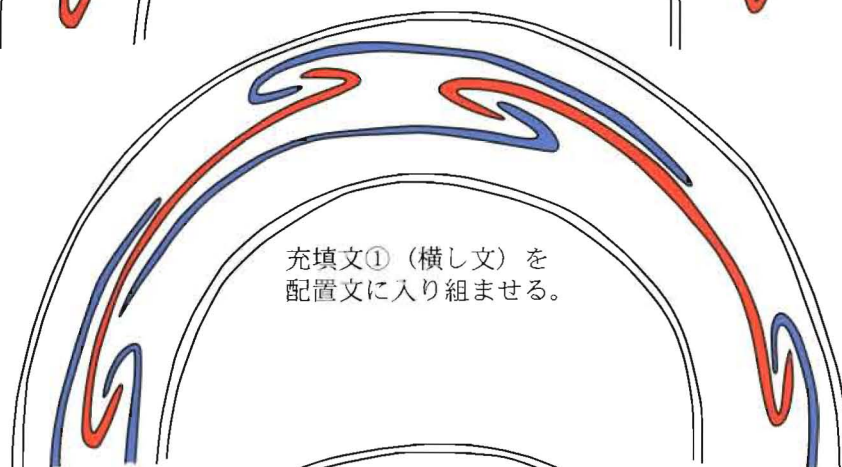
第12図 観音林遺跡出土土器の文様の描き方 (図26)

27 (図15参照)

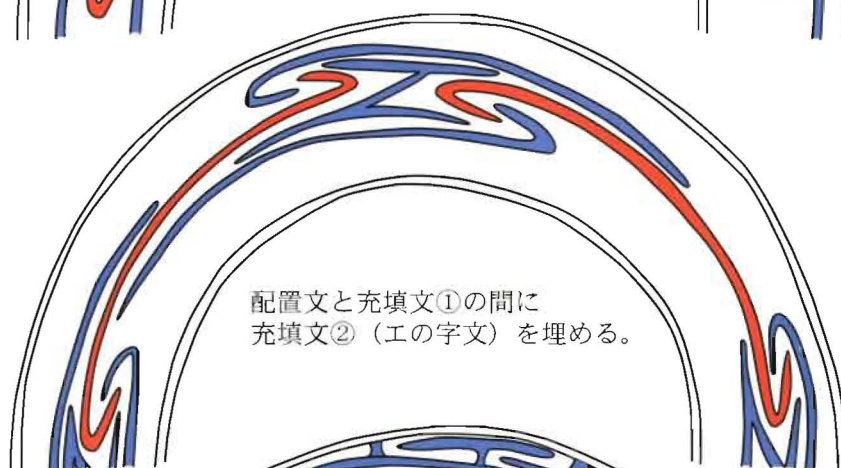
I



II



III

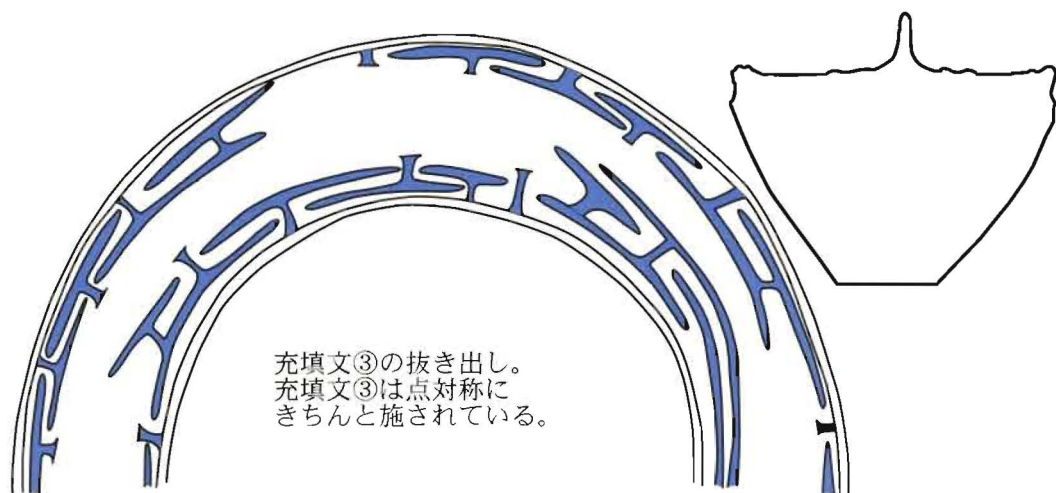


IV



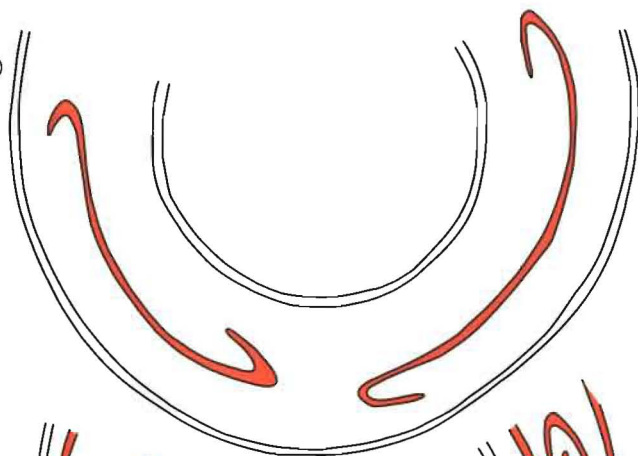
第13図 観音林遺跡出土土器の文様の描き方 (図27)

V



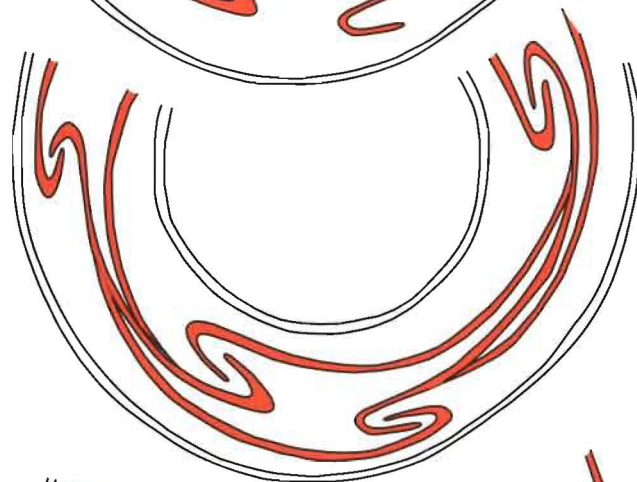
28 (図16参照)

I



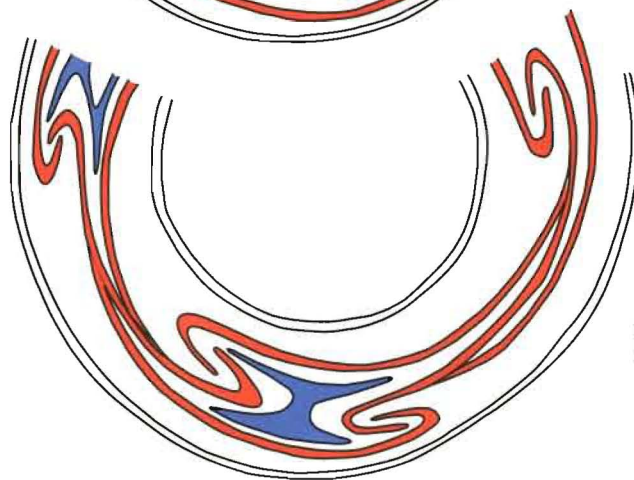
横S文を配置。

II



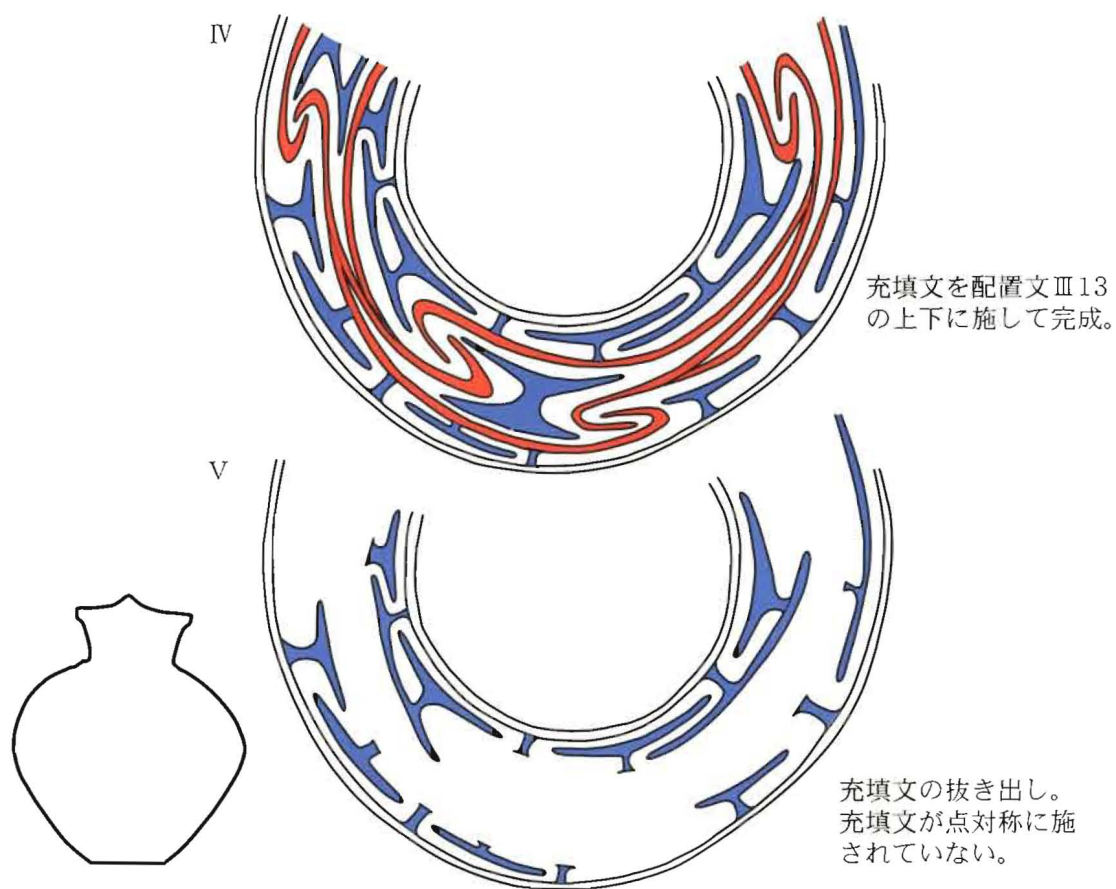
横S文に横し文を
付加させると配置
文Ⅲ13になる。

III

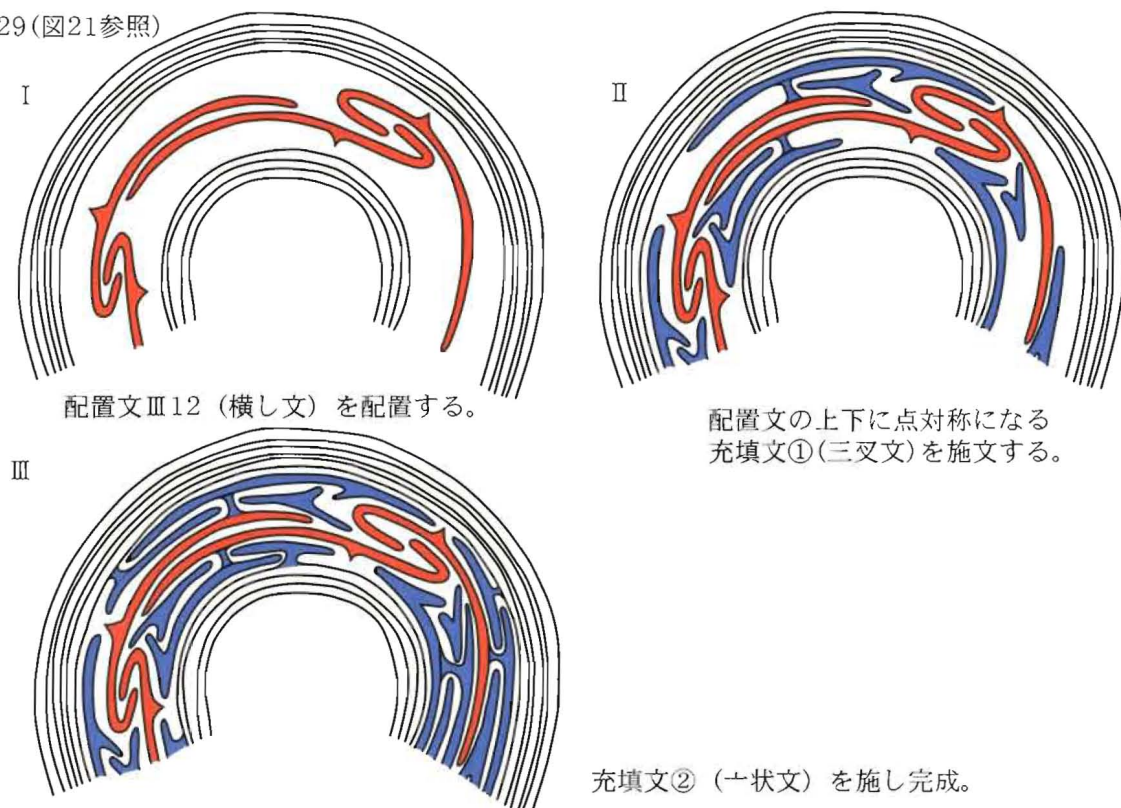


配置文の間に「エ」の
字文を入れる。

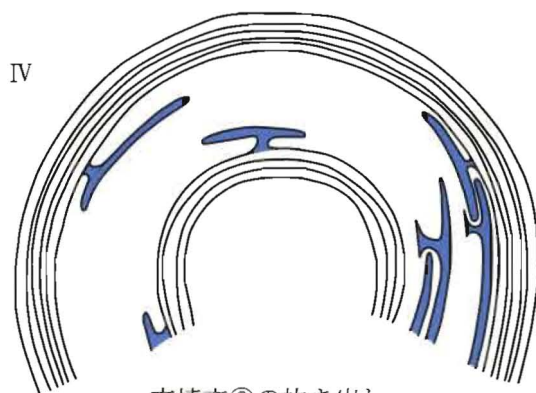
第14図 観音林遺跡出土土器の文様の描き方 (図27~28)



29(図21参照)



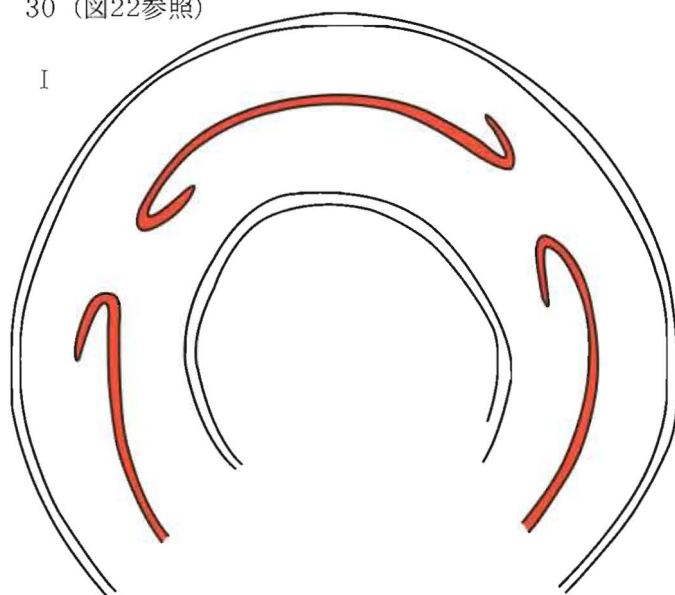
第15図 観音林遺跡出土土器の文様の描き方(図28~29)



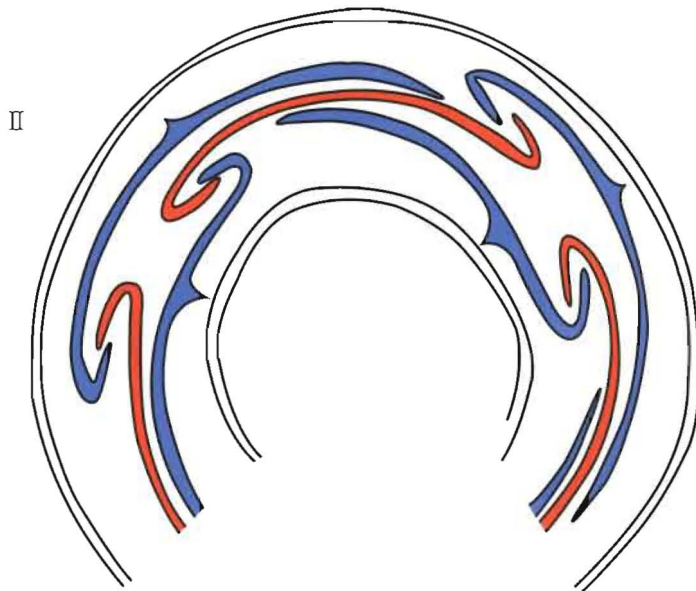
IV
 充填文②の抜き出し。
 充填文は点対称に配置されるが
 充填文②は、点対称でない。



30 (図22参照)

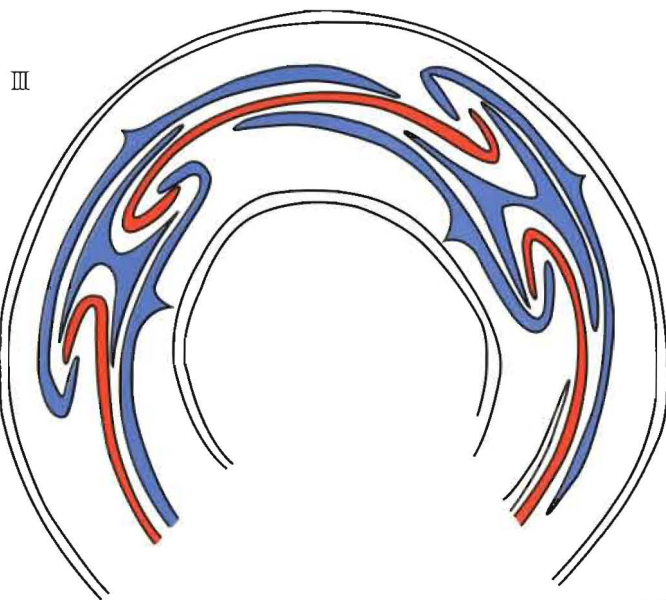


I
 配置文Ⅲ 9 (逆横S文) を配置
 する。

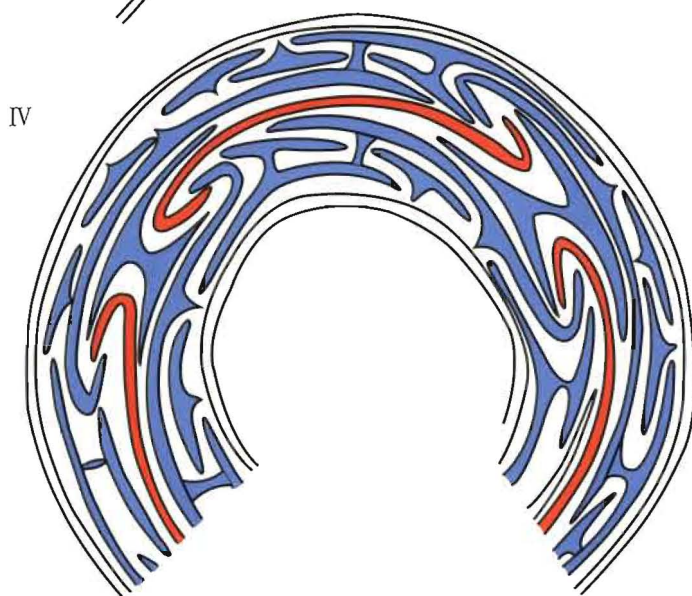


II
 配置文に充填文① (横し文)
 を入り組ませる。

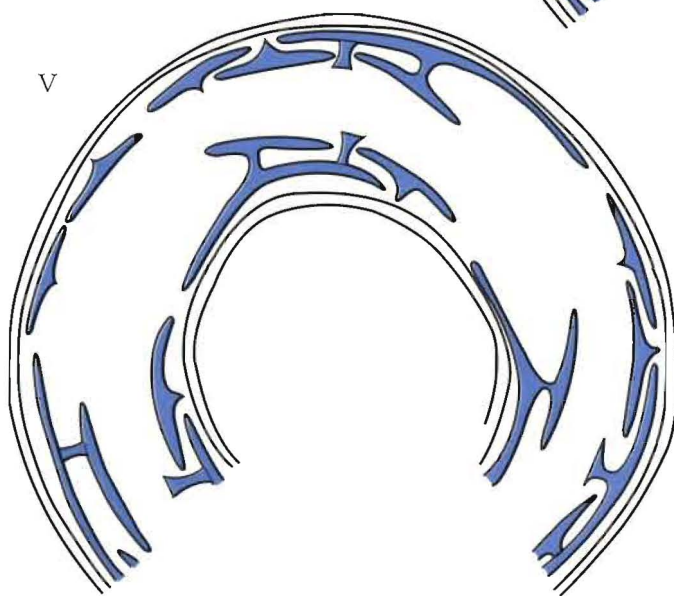
第16図 観音林遺跡出土土器の文様の描き方 (図29~30)



配置文と充填文①の間に充填文②(工の字文)を施文する。



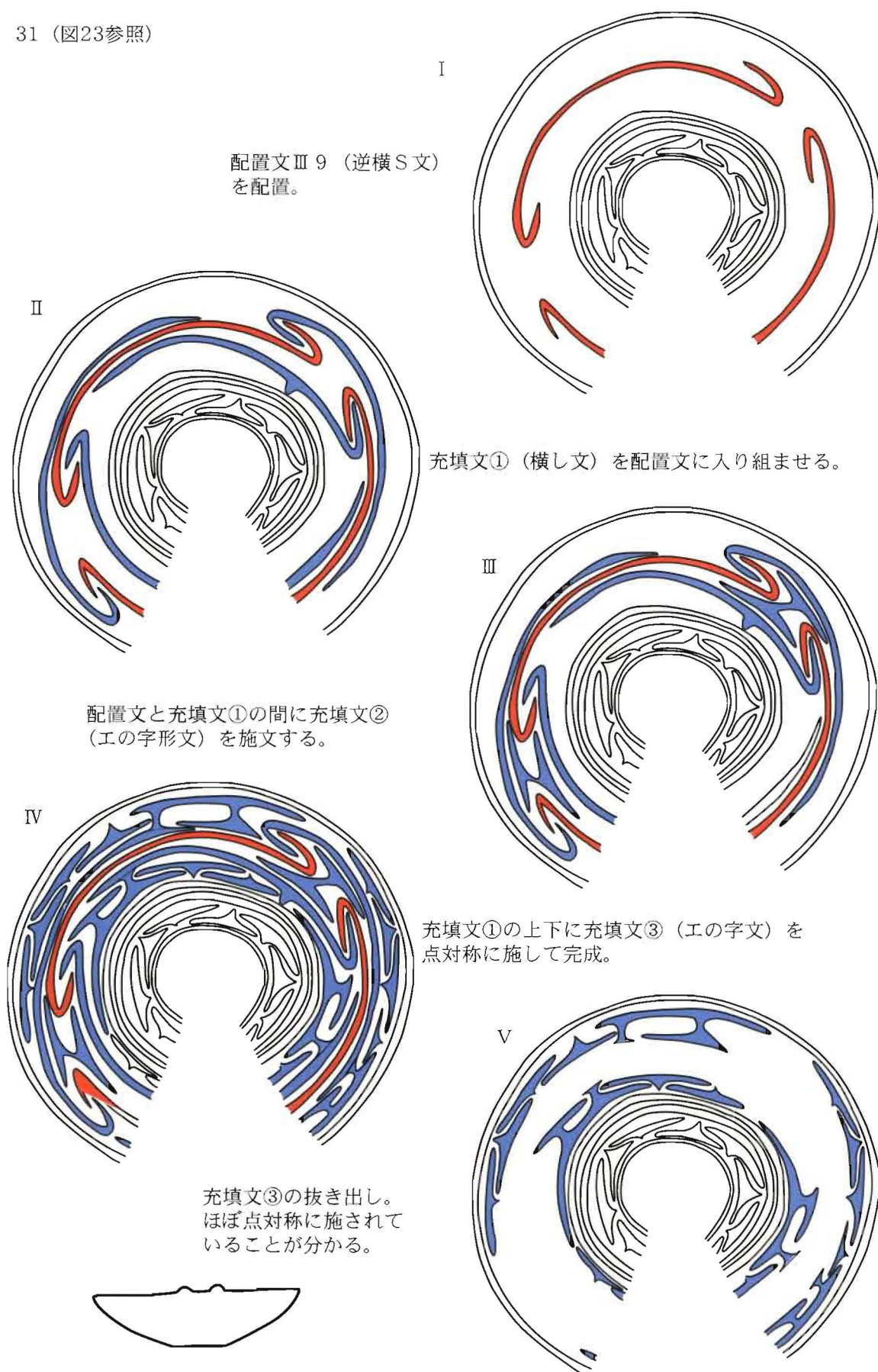
充填文①の上下に充填文③(工の字文)を点対称に施して完成。



充填文③の抜き出し。
充填文③は、ほぼ点対称に施される。

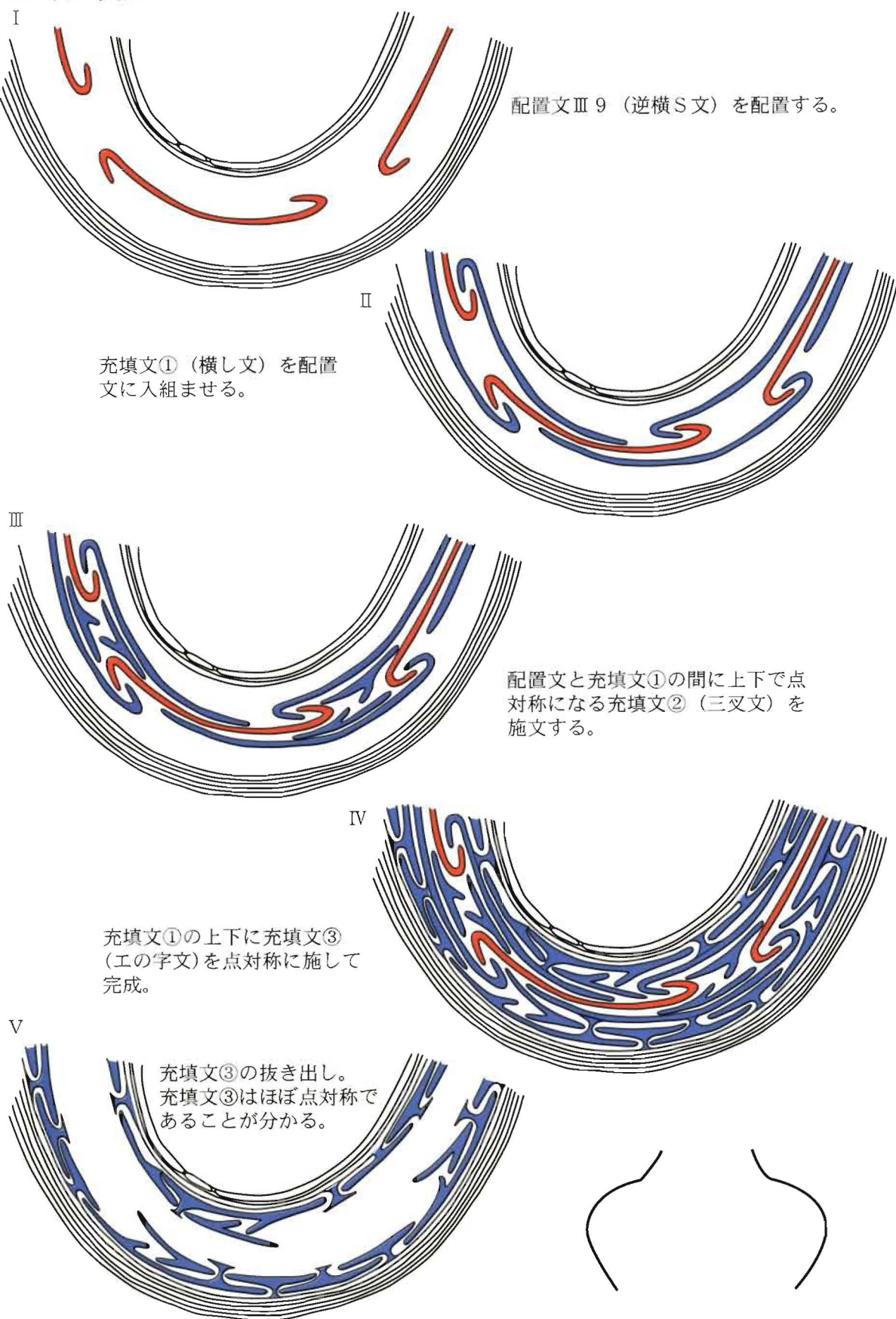


第17図 観音林遺跡出土土器の文様の描き方 (図30)



第18図 観音林遺跡出土土器の文様の描き方 (図31)

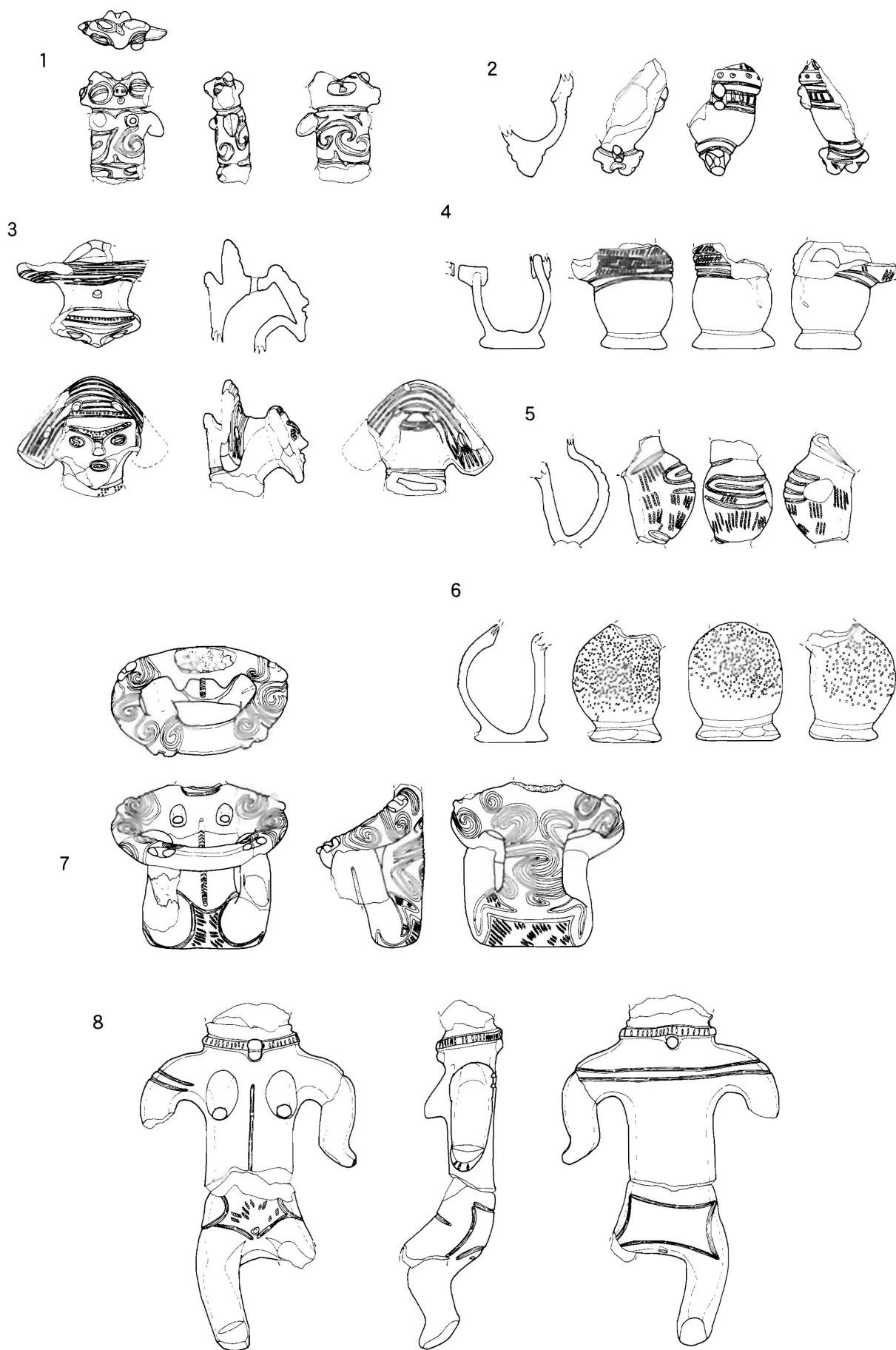
32 (図24参照)



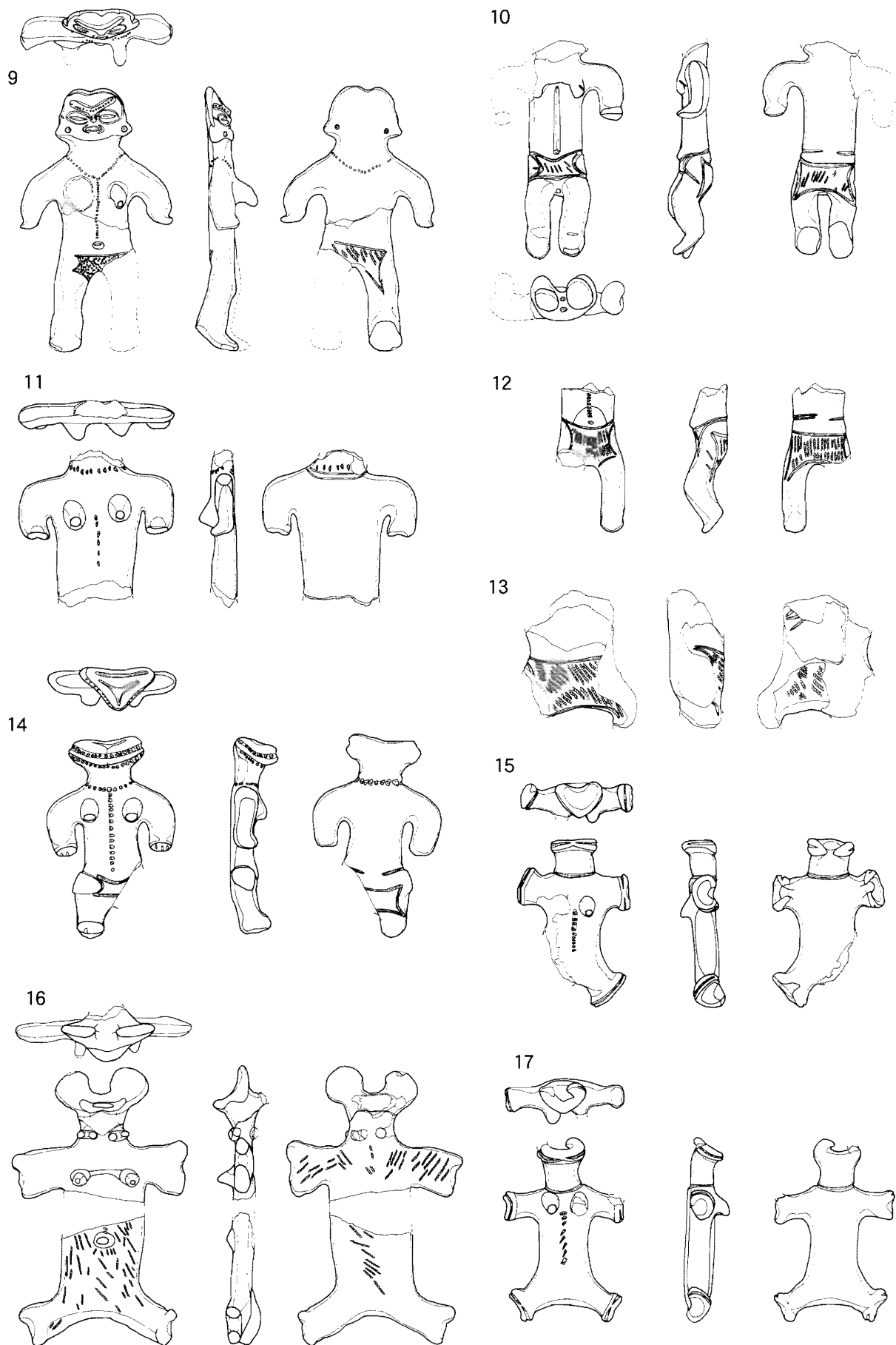
第19図 観音林遺跡出土土器の文様の描き方 (図32)

番号	器種	分類	特徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
1	壺	区画文 1	文様帯を区切った後、くの字形の文様を充填する。	無	7.2	7.7
2	壺	配置文 Ⅲ 2	口縁部の装飾が著しい。3個の配置文を配し、くの字形の文様と三角形文を充填する。頸部は同一方向の、くの字形の文様のみ施文。赤彩。	無	13.3	14.3
3	浅鉢	区画文 2	区画文は3単位。三叉文や四角形文を充填し、のびやかな文様を形成する。器面は良く磨かれている。	L R	6.5	17.2
4	皿	配置文 Ⅰ 1	配置文は3単位。ノの字文や四角形文等を充填することで連続した雲形文を形成する。	L R	4.8	14.7
5	壺	配置文 Ⅱ 1	口縁部と底部は欠損。配置文は3単位あるが1つだけ文様帯の下に線に接続する。四角形文やノの字文が充填されている。浮き彫りの手法がとられている。	無	(8.4)	7.8
6	皿	配置文 Ⅲ 1	3単位の配置文はそれぞれ細部で形が異なる。五角形文や菱形文などが充填される。	R L	4	15.2
7	浅鉢	配置文 Ⅲ 4	大きな配置文を2単位施した後、更に小型の文様が充填されて曲線的な文様を生み出す。全体的によく磨かれ丁寧に作られている。また、2つの配置文は互いに良く似ている。	L R	6.8	20
8	壺	配置文 Ⅲ 3	配置文は5単位。ノの字文や三角形の文様が充填される。赤彩。	R L	(6.3)	8.7
9	壺	配置文 Ⅲ 5	配置文は4単位。三角形文やノの字文が入る。底部に沈線が巡る。赤彩。	L R	16	20.1
10	皿	配置文 Ⅲ 10	S字を基本とする文様にC字の切込みを加えた配置文が3単位。補修孔が3箇所ある。底部の内面に段が付く。	L R	6.2	26.6
11	壺	区画文 3	横に細長く伸びたS字を基本とする区画文が2単位。文様帯の上下の線に接続しない長方形の文様やノの字文などが充填される。底部は丸く窪んでいる。良く磨かれている。赤彩。	R L	24.7	22.4
12	壺	配置文 Ⅱ 2	横に細長く伸びたS字を基本とする配置文が3単位。四角形文などが充填される。文様帯の中はLR縄文、体部はRL縄文。	L R R L	15.5	20.2
13	壺	配置文 Ⅲ 12	口縁に工字文的な文様がある。配置文は2単位。一状文が充填されることで工字文的な文様となる。赤彩。	無	(12.5)	12.4
14	深鉢	配置文 Ⅲ 9	体部1/2は欠けている。3個の配置文の間に2個1対の三叉文が充填される。更に配置文の上下に連続的に一状文を点対称に充填し工字文的な文様を生み出す。	L R	(22.1)	25.7
15	鉢	配置文 Ⅲ 9	2個の配置文の間に「エ」の字文を施し更に配置文の上下に連続的に一状文を点対称的に充填し、工字文的な文様を生み出す。	L R	(19.5)	20.7
16	壺	配置文 Ⅲ 13	体部下半から底部までは欠損。2個の配置文の間に「エ」の字文を施し更に配置文の上下に連続的に一状文を充填し、工字文的な文様を生み出す。	L R	(11.7)	(14.5)
17	浅鉢	その他	弧線を組み合わせた文様を一周させ内部に三叉文や四角形文などを埋めて雲形文を形成している。浮彫的な手法がとられている。赤彩。	無	6.7	(16.8)
18	台付鉢	配置文 Ⅰ 2	全体の1/3が欠けている。摩滅が著しい。正面の突起は欠損している。配置文により工字文的な文様が生み出されている。だが、上下交互に配されるわけではなく、線も雑である。内面・外面ともに炭化物が付着している。内面の炭化物は口縁部に集中している。	L R	(6.3)	16.5
19	台付鉢	配置文 Ⅲ 11	突起の上部は欠損している。配置文は2単位。一方が文様帯の下部に付くが、配置文Ⅲの分類に入れる。三角形の文様と配置文が入組む。	R L	(8.4)	14.9
20	台付鉢	配置文 Ⅲ 14	口縁部の突起の先端は欠損している。配置文は3単位。台部は欠損しているが、透かし彫りの痕が見られる。	R L	(8.4)	14.9
21	浅鉢	配置文 Ⅲ 9	全体の1/2が欠けているが配置文は2単位と考える。三叉文と一状文を充填し工字文的な文様が見られる。	無	4.3	11.3
22	浅鉢	配置文 Ⅲ 9	2個の配置文の間に「エ」の字文を施し更に配置文の上下に連続的に一状文を点対称に充填し、工字文的な文様を生み出す。	無	5.3	18
23	浅鉢	配置文 Ⅲ 9	2個の配置文の間に「エ」の字文を施し更に配置文の上下に連続的に一状文を点対称に充填し、細い隆線からなる工字文的な文様を生み出す。更に底部付近に2条の沈線がめぐり底部に一状文が施される。	無	5.1	(13.4)
24	壺	配置文 Ⅲ 9	2個の配置文の間に2個1対の三叉文が充填される。更に配置文の上下に連続的に一状文を点対称的に充填し工字文的な文様を生み出す。	L R	(14.4)	31

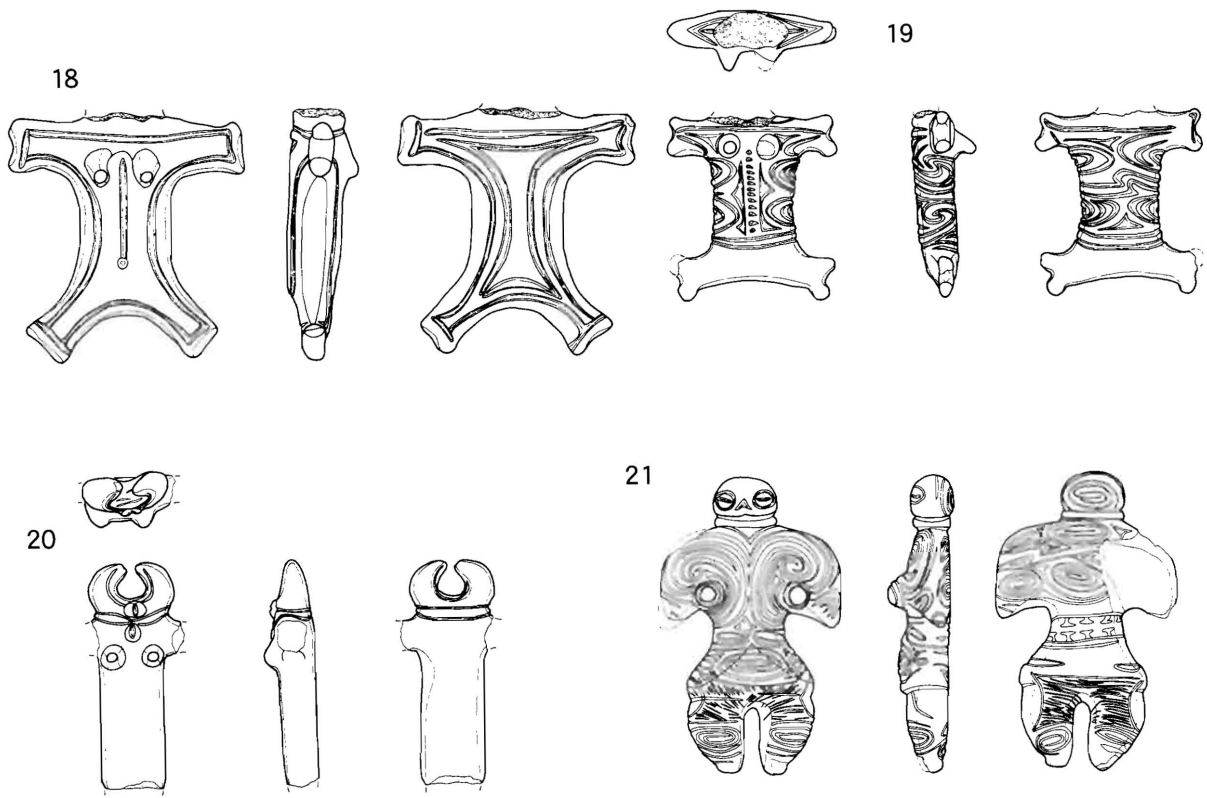
観音林遺跡出土土器観察表



第20図 観音林遺跡出土土偶（図1～8）



第21図 観音林遺跡出土土偶 (図9～17)

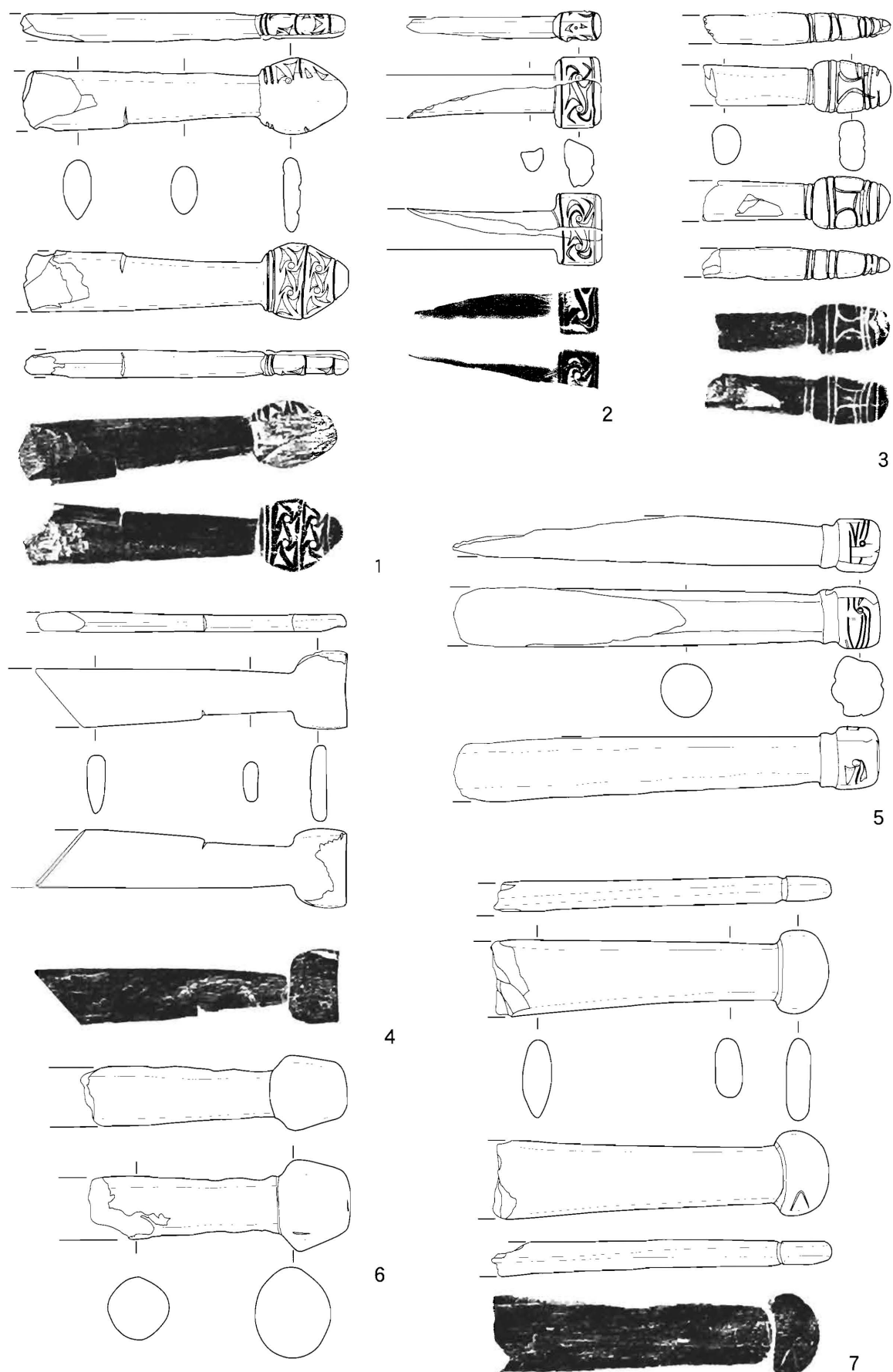


第22図 観音林遺跡出土土偶（図18～21）

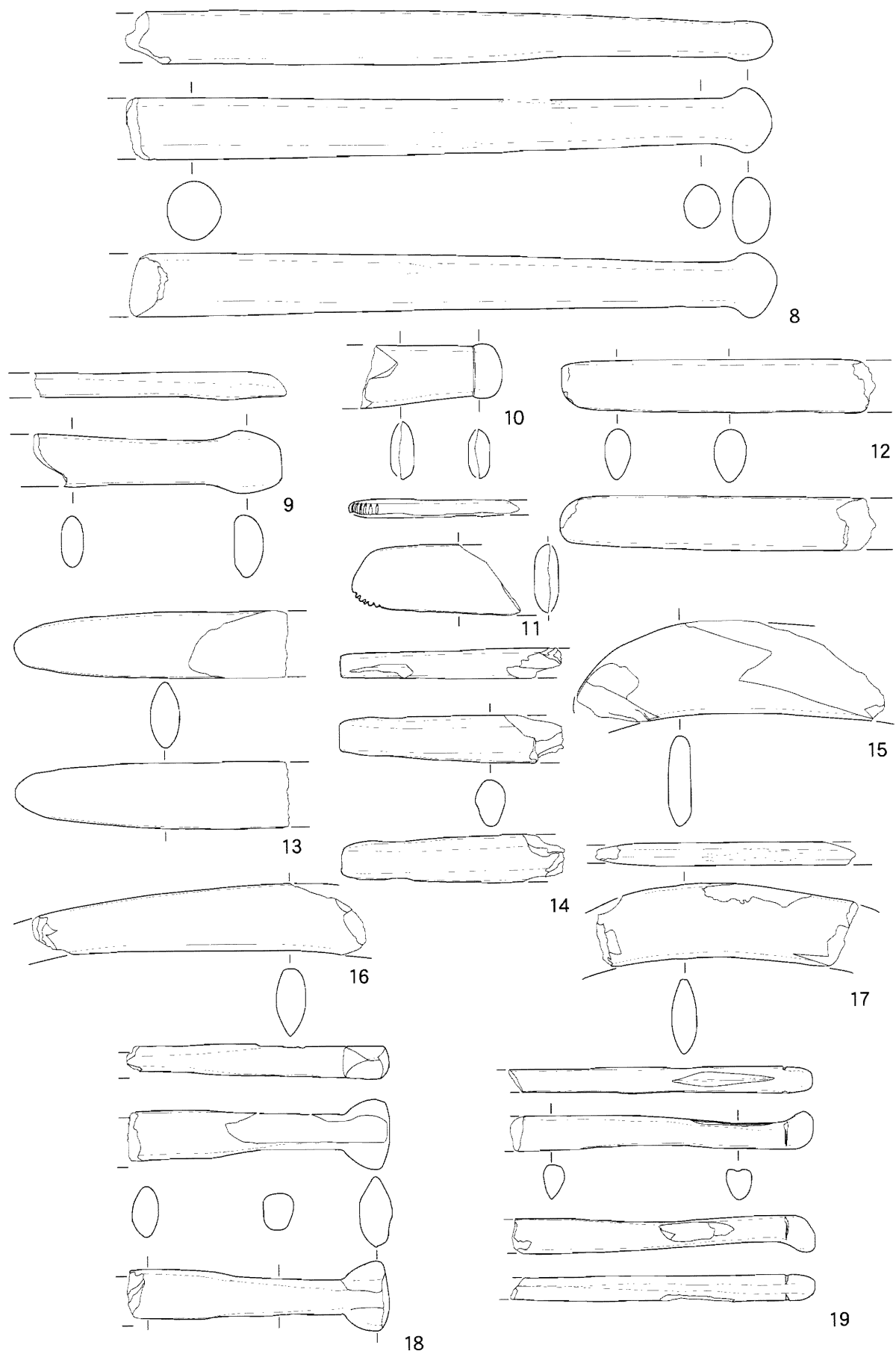
番号	残存部	分類	作り	乳房	性器	正中線	朱彩	縦 (cm)	横幅 (cm)	重さ (g)	備 考
1	1,2,4	遮光器	実	○	×	×	×	6.2	4.6	38.6	後頭部にB突起、C字文。
2	3 or 4	遮光器	空	—	—	—	×	6.4	2.4	20.2	列点・B突起による文様から遮光器土偶の腕部と考えられる。
3	1	結髪	空	—	—	—	○	6.6	6.9	76.9	顔面が前へ突き出る、頭頂部に穿孔、結髪部にも穿孔。
4	5 or 6	その他	空	—	穿孔	—	○	5.8	5.5	65.8	入念なミガキ調整、LR縄文磨消し、入組み沈線文。
5	5 or 6	結髪 or 刺突	空	—	—	—	×	5.9	4.0	40.1	LR縄文に入組沈線文、表裏不明。
6	5 or 6	結髪 or 刺突	空	—	—	—	×	6.6	5.0	82.3	丸みを帯びた足に細かい刺突文、表裏不明。
7	2,3,4	屈折	実	○	—	刺突	○	9.0	9.5	195.0	深く足を曲げ、つながった腕が乗る。尻は平たい。胴部に入組み沈線文。朱彩。右肘と首にアスファルト。
8	2,4,5	屈折	実	○	刺突	沈線	×	19.0	11.1	359.4	首周りの隆帯の前後に飾りのような突起。肩から背面にかけて横位に二条の沈線文、腹部の膨らみは見られない。手に指の表現、風化による肌の荒れが激しい。
9	1,2,3,4,5	その他	実	○	×	刺突	×	14.4	8.2	114.4	顔は写実的、口の左右にくの字の沈線、首周りに刺突列、ヘソの表現。パンツ状区画文あり。
10	2,4,5,6	屈折	実	○	刺突	沈線	×	11.9	7.3	80.6	背面は平らで寝かせると足が浮く。乳房が左右でつながる。パンツ状区画文。
11	2,3,4	その他	実	○	×	刺突	×	8.6	8.3	78.5	全体的に平たい、首周りに刺突列、背面側には二条の沈線。
12	2,6	屈折	実	—	×	刺突	×	8.1	3.7	36.8	腹部が膨らむ。正中線とは離れた位置に臍の表現あり。パンツ状区画文。
13	2	屈折	実	×	×	×	×	7.5	6.2	100.2	パンツ状区画文があり、背面もしくは正面に沈線文。
14	1,2,3,4,5	その他	実	○	×	刺突	×	11.0	6.9	68.4	頭部と首周りに刺突列、パンツ状区画文がうっすらと観察できる。
15	1,2,3,4,6	X字	実	○	×	刺突	×	9.2	6.1	57.3	首周りを一周する沈線、頭部と手足が同じ作り、17によく似る。
16	1,2,3,4,5,6	X字	実	○	×	刺突	×	15.5	10.5	126.8	目の表現なし、首周りにB突起が4つ、胴部LR縄文。臍は隆帯。
17	1,2,3,4,5,6	X字	実	○	×	刺突	×	10.2	6.5	66.2	首周りを一周する沈線、頭部と手足が同じ作り。15によく似る。
18	2,3,4,5,6	X字	実	○	×	沈線	×	10.3	9.5	128.9	胴部に腕から足に沿う弧状沈線、背面は二重の弧状沈線、首破損面にアスファルト。
19	2,3,4,5,6	X字	実	○	×	刺突	×	7.4	6.8	62.5	胴部に入組み沈線文、手が二又に分かれる。
20	1,2	X字	実	○	—	—	×	9.1	3.8	—	頭部に角状突起、胴部は長く、無文。
21	1,2,3,4,5,6	岩偶	—	○	—	—	○	10.2	7.2	81.9	右腕の背側欠損、入組み沈線文、渦巻き沈線文。

×は無し。—は残存なしなどで不明。○は有り。

観音林遺跡土偶観察表



第23図 観音林遺跡出土石刀（図1～7）



第24図 観音林遺跡出土石刀（図8～19）

番号	分類	部 位	特 徴	柄部の 形成	柄頭の 形状	文様	石質	計測値 (cm)			重量 (g)
								最大長	最大幅	最大厚	
1	I	柄	柄頭に入組三叉文が施される。赤彩。	刃関	台形	有	粘板岩	(16.6)	4.0	1.5	117.8
2	I ?	柄	柄頭に入組三叉文が施される。赤彩。	不明	方形	有	粘板岩	(10.0)	2.4	2.4	25.2
3	Ⅲ	柄	柄頭に平行線文をめぐらせ、間に弧線を描いた文様が施される。	不明	円形	有	粘板岩	(9.7)	2.7	1.5	49.9
4	I	柄	明確な段差をもつ刃関がある。	刃関	方形	無	粘板岩	(16.1)	4.0	1.0	82.3
5	Ⅵ	柄	柄頭に入組三叉文が施される。赤彩。	なし	方形	有	粘板岩	(22.1)	3.2	2.7	252.2
6	Ⅵ	柄	柄と柄頭の境に敲打痕がみられる。	なし	台形	無	粘板岩	(13.5)	4.8	3.9	245.0
7	Ⅱ	柄	柄頭にV字形の刻線が施される。	断面差	台形	有	粘板岩 (千枚岩)	(17.5)	4.4	1.4	164.1
8	Ⅵ	柄～身	柄頭は無文。	なし	円形	無	珪化木	(34.8)	3.4	2.9	472.0
9	Ⅱ	柄	柄頭は無文。	なし	台形	無	ホルンフェルス	(13.4)	3.3	1.5	92.4
10	Ⅱ	柄	柄頭は無文。片面が剥離している。	不明	台形	無	珪化木	(7.6)	2.8	(1.0)	39.6
11	不明	切っ先	切っ先に6本の刻みが施される。剥離面にアスファルトが付着している。	不明	不明	無	珪化木	(9.0)	3.7	(0.9)	42.8
12	不明	身～切っ先	刀身が真っ直ぐである。断面は楔形である。	不明	不明	無	粘板岩	(16.8)	2.8	1.8	146.8
13	不明	身～切っ先	刀身が真っ直ぐである。断面はレンズ状である。	不明	不明	無	ホルンフェルス	(14.6)	3.5	1.4	118.1
14	不明	身～切っ先	切っ先が角張る。断面は楔形に近い。	不明	不明	無	珪化木	(12.0)	2.5	1.5	69.1
15	不明	身～切っ先	刀身が大きく湾曲（内反り）する。断面は扁平な楕円形である。	不明	不明	無	粘板岩	(16.4)	5.4	1.3	141.9
16	不明	身～切っ先	刀身が大きく湾曲（内反り）する。断面は楔形である。	不明	不明	無	珪化木	(17.8)	3.6	1.6	132.5
17	不明	身～切っ先	刀身が大きく湾曲（内反り）する。断面はレンズ状に近い。	不明	不明	無	粘板岩	(14.0)	4.1	1.3	114.8
18	Ⅳ	柄	柄頭は無文。	両関 ?	撥形	無	千枚岩か珪化木	(13.9)	3.7	1.7	110.4
19	V	柄～身	柄頭が沈線により区別される。柄部の上面に溝がある。	刃関	特殊	無	粘板岩	(15.6)	1.5	1.2	55.0

観音林遺跡出土石刀観察表

VI 岩手県一戸町野里遺跡

古川温子・山田祐子・其田香保里・深見嶺

1. 野里遺跡（岩手県二戸郡一戸町小鳥谷字野里）の概要

野里遺跡が所在する一戸町は、岩手県中北部、馬淵川中流域にあり、縄文時代の遺跡に恵まれた所である。一戸町には縄文時代の遺跡が413あるが、そのうち晩期の遺跡は114を占めるといふ。これらのなかには、蒔前遺跡・山井遺跡など有名な遺跡があり、その出土品は、平成14年に開館した御所野縄文博物館で見ることができる。

野里遺跡は、一戸町の中心部から南に約5.1km 離れた小鳥谷地区にある縄文時代の遺跡で、J R東北本線の小鳥谷駅から北に僅か250mのところの位置する。この地点は、馬淵川の支流である平糠川が馬淵川と合流する地点の左岸に発達した標高約160～210mの一戸段丘にあたり、野里遺跡は、平糠川に沿ったこの河岸段丘の広い平坦地の縁辺に立地する。遺跡の現況は、畑地が大部分であるが、一部は小鳥谷中学校敷地や宅地になっている所もある。遺跡の東側は、平糠川に面した崖となっており、崖と遺跡の間に、J R東北本線が南北に伸びている。

平成7年（1995）、野里遺跡は、町道小鳥谷中学校線の工事に伴い、一戸町教育委員会によって発掘調査された。この時の調査範囲は、J R東北本線を挟んで平糠川に隣接する地区、約360㎡である。Ⅰ～Ⅲ区に分けて調査が行われたが、遺構が検出されたのはⅠ区の約200㎡に限られた。その結果、縄文時代の早期～中期・晩期の遺物と遺構が発見された。早期と前期の遺物は量も少なく、遺構も検出されなかった。中期と晩期は、出土品も多く（ダンボール箱で約20個分）、竪穴住居跡6軒・フラスコ状土坑4基・土坑14基・土器埋設遺構2基・炉跡4基（土器埋設炉2基・石囲炉2基）・遺物集中地点（捨て場）1ヶ所などの遺構も検出された。遺構のうち縄文中期のものは、複式炉をもつ竪穴住居跡4軒と土器埋設遺構1基で、他の遺構は、形状や共伴遺物から、縄文晩期に属するものと考えられている。

晩期の竪穴住居跡は、平面形が径3mの円形で、中央に石囲炉をもっている。土坑やフラスコ状土坑は、調査区の中央のやや北側に集中傾向がある。土坑の平面形は径1.5mの円形で、壁がほぼ垂直に立ち上がるものであるが、その多くは上部が耕作などで破壊されたフラスコ状土坑である可能性が高いという。土器埋設遺構は、深鉢を正立の状態では埋めたもので、内部から小型の鉢が出土した。土器埋設炉と石囲炉は、ともに屋内炉になるのか屋外炉になるのか不明であるという。遺物集中地点は、調査区の南側に約35㎡にわたって広がっており、3層に分けて発掘したが、大洞B式～大洞C1式の土器が混在し、層位による時期差は認められないという。これに伴う遺物として石器（石鏃・石匙・石筥・石錐、磨製石斧、凹石・磨石・石皿・砥石など）、石製品（岩版、玉類など）、土製品（土偶・匙形土製品・中空土製品など）がある。

私たちのゼミナールでは、縄文晩期を主要な研究テーマとして取り上げている。そこで、一戸町教育委員会にお願いして、未報告の野里遺跡の遺物と調査記録を借用し、主として縄文晩期の遺物について整理（接合・修理・実測図作成など）する機会を与えていただいた。今回、取り上げた実測図は、未報告資料ということもあり、晩期の主要な土器・土偶・土製品に限って掲載することにした。

（其田・深見）

2. 縄文晩期の土器

平成7年度に調査した野里遺跡出土の縄文晩期の土器は、大洞B式～大洞C1式に限られる。未報告資料であることから、整理したすべての資料を掲載することができないので、形や文様がよくわかる土器を選んで取り上げた。文様の単位や構成がわかるもの・復元できるものは、できるだけ文様の展開図を

添えた。


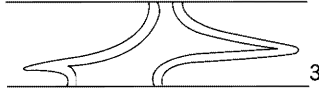


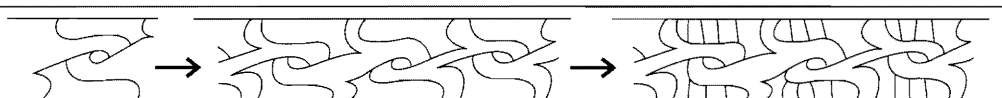
文様の分類は、文様を描くときに文様帯を割りつける働きをする区画文あるいは配置文の種類を基準にした。なかには区画文あるいは配置文に当てはめてよいか迷うものもあったが、あえてどちらかに分類したものもある。羊歯状文が列点化したような文様は、観察表では列点文などと表記した。

〔区画文〕区画文は文様帯を区画して単位文様を割りつける働きをするもので、分類表のようにモチーフによって3種類に細分した（区画文1～3）。

区画文1は、点対称的に入り組ませた2本の弧線の内側に、それぞれ三角形あるいは四角形の鰭部を付したものである。鰭部の形に変化があるが、基本的には同一である。充填文を加えることによって複雑な雲形文を簡単に描くことができる。また文様帯に沿って横に細長く描いた鰭部に列点を埋めると羊歯状文ができあがる（参考図1）。

区画文2は、区画文1の鰭部をさらに変化あるものに描いたものである。

区画文3は、一点で強く屈曲した弧線を、点対称にしたもので、よく利用される区画文である。

分 類	区画文・配置文の分類および参考図
区画文1,2	
区画文3	
配置文Ⅰ	
配置文Ⅲ	
参考図	

〔配置文〕配置文は、文様帯の内部に埋め込まれるか、あるいは文様帯の上・下線のいずれか一方にのみ接続するもので、配置文以外の部分は連続した文様（縄文を持つことが多い）を構成する。分類表のようにⅠ～Ⅲに大別し、さらにモチーフの種類で細別した。

Ⅰは、文様帯の上・下線のそれぞれ一方にのみ接続する文様が2個一対で構成される配置文で、1種類のみ取り上げた。

配置文Ⅰ1は、C字を横にした文様（横C文）とそれを逆さまにした文様（逆横C文）を並べて一対にし、それぞれに棒状の付加文をつけて、文様帯の上・下線に接続させたものである。

Ⅱは、文様帯の上線に接続する配置文であるが、今回取り上げた資料には見当たらない。

Ⅲは、文様帯に組み込まれた配置文で、4種類に細別した。

配置文Ⅲ1は、ノの字形の弧線の一端に、四角形の鰭部を付けたもの。ノの字形の部分が、沈線になっているものも、磨消部となっているものも一括した。

配置文Ⅲ2は、2本のノの字形の弧線の間四角形の鰭状のものを置いたもの。四角形の鰭部の二つの角から1本ずつ2本の弧線が伸びだす形になる。

配置文Ⅲ3は、三叉文の一端を、点対称に入り組ませたもので、区画文1とよく似た構図となる。Ⅲ3を並べたものは、これのみで構成され、他の充填文が埋められることは少ない。

配置文Ⅲ4は、弧線の組み合わせで作られた2個のL字形文（磨消部）を、入り組むように点对称に配したものである。

（土器のまとめ）以上の土器は、大洞B式～大洞C1式土器の中から、形や文様の分かるものを選んだものである。晩期前半の土器型式の特徴がよくでているものである。精製土器は丁寧な作られ、器面は磨かれ、光沢をもつものが多い。赤彩されたものもある。文様も丁寧で、文様の描き方を調べると、描く手順が分かりやすいものが多い。これを八戸市是川遺跡出土の晩期前半の土器と比較すると、形・文様・器面の調整・色合い・質感などがよく似ていることが分かる。野里遺跡の土器も、是川遺跡のものと同じように、馬淵川流域の縄文晩期の土器の特色をよく示していると考えられる。

（古川・山田）

3. 縄文晩期の土製品

晩期に属すると思われる土製品のうち、特色のよく分かる土偶・中空土製品・匙形土製品を取り上げた。

（土偶）小さな破片まで含めると10点の土偶を実測したが、今回は、特色のよく分かる大きな破片や頭部が残っているものに限って、実測図を取り上げた。遮光器土偶（中空）2点、遮光器土偶（小型中実）2点、小型X形土偶1点である。中空の遮光器土偶（図43）は、頭部が壺の口のように開いており、内部を覗き込めるタイプである。体部の文様は、土器と同じものが見られる。小型中実の遮光器土偶（図45）は、省略が著しく、目鼻だちがよく分からない。小型のX字形土偶（図46）は、小さな乳房が付いている。以上の土偶はすべて晩期前半の特徴をよく示している。

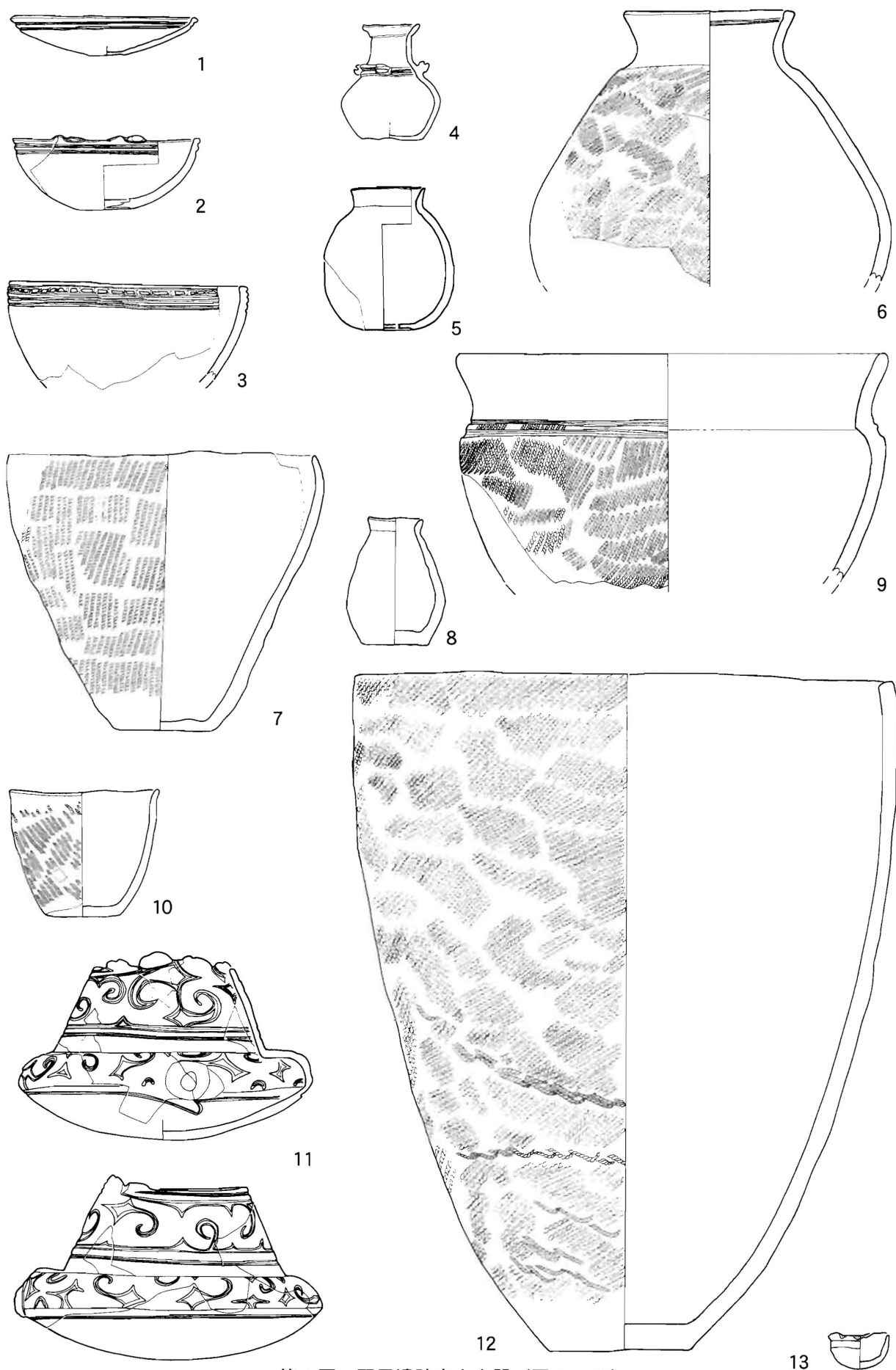
（中空土製品）亀形土製品ともよばれる中空土製品の破片が1点ある。表面に正中線があり、C字文で飾られている。端部の側面に、内部に通じる孔が開いている。

（匙形土製品）小さな把手の付いた匙形の土製品が1点ある。表面がよく磨かれている。全体の形は不明である。匙形以外のものになる可能性もある。

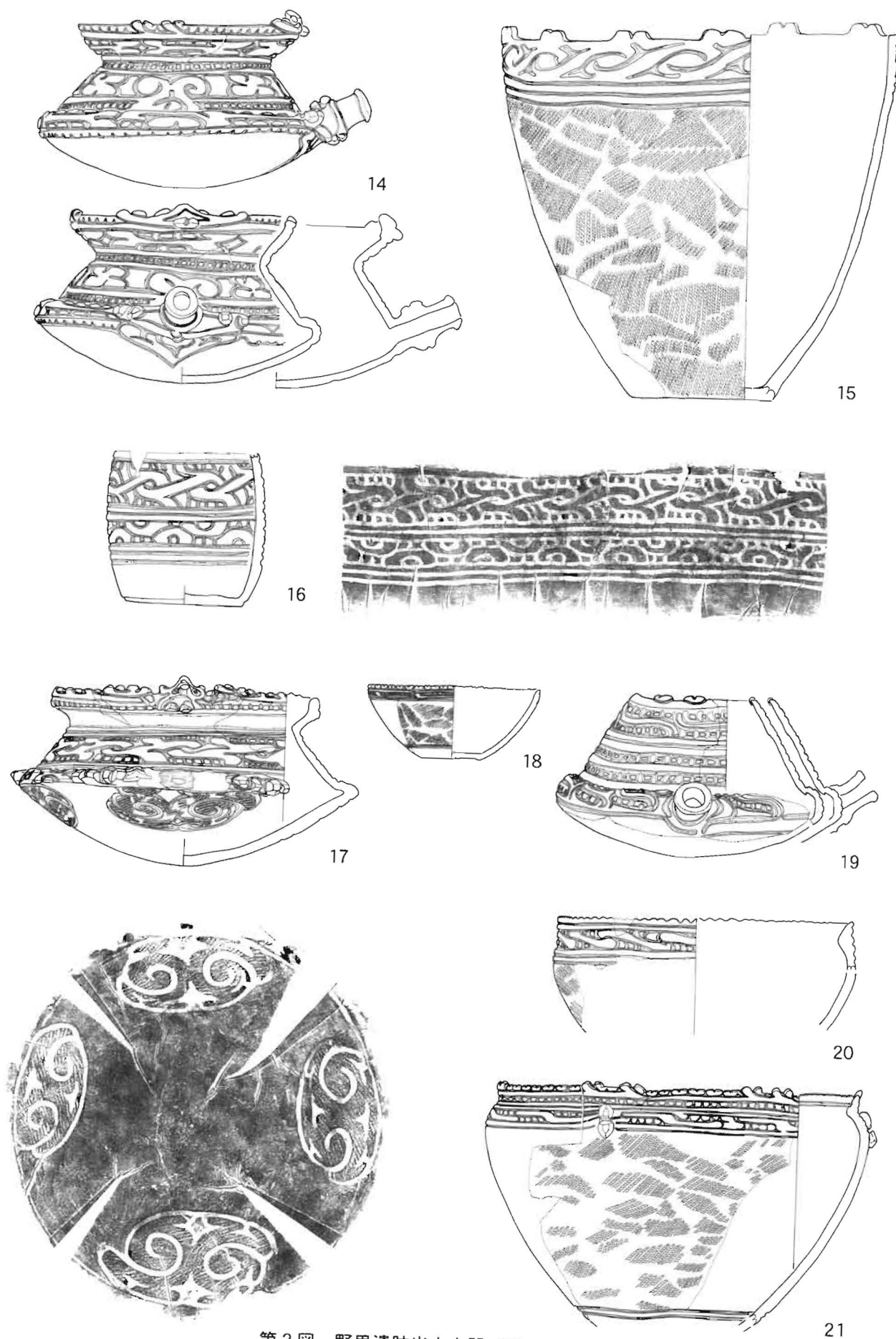
（山田・其田）

〈文献〉

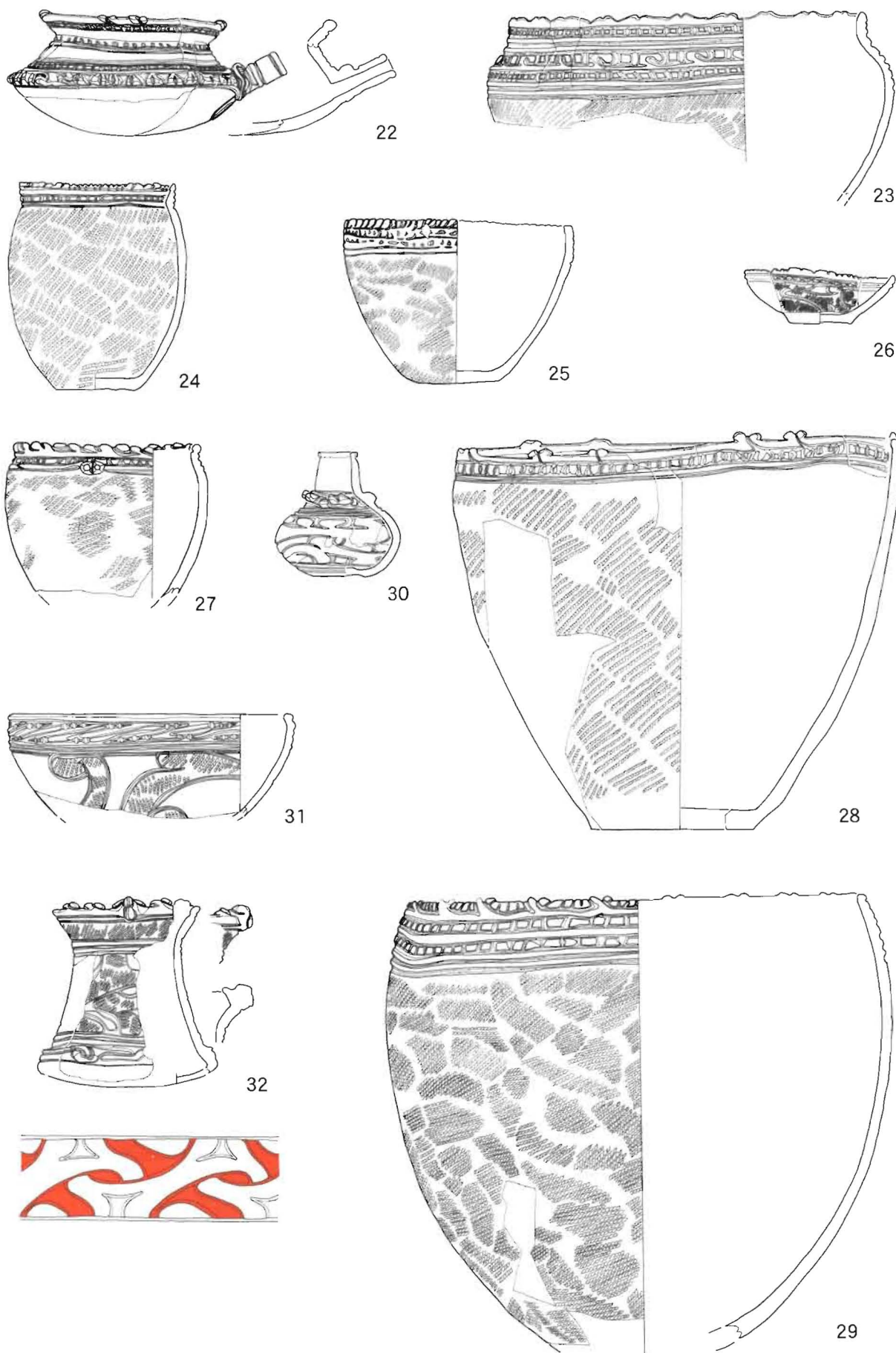
1994 一戸町教育委員会編『一戸町の遺跡（Ⅳ）』



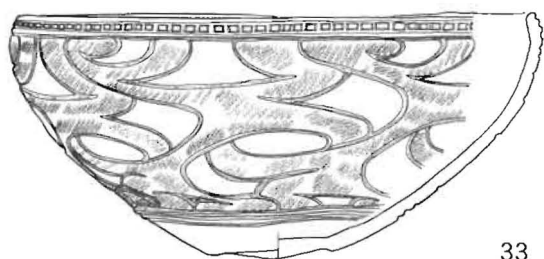
第1図 野里遺跡出土土器 (図1~13)



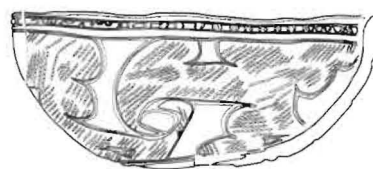
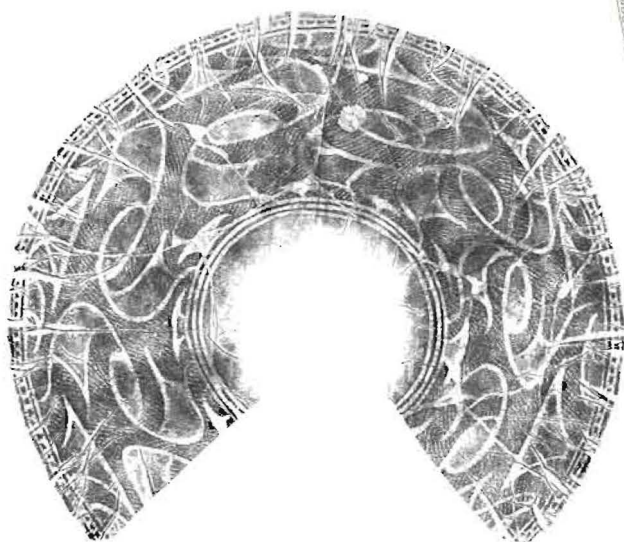
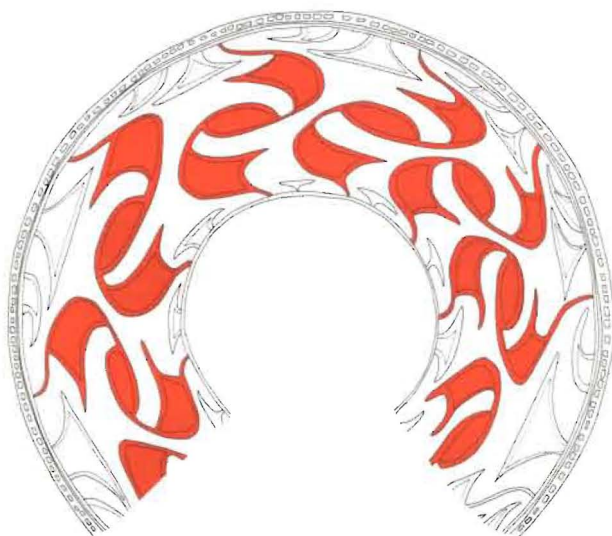
第2図 野里遺跡出土土器 (図14~21)



第3図 野里遺跡出土土器 (図22~32)



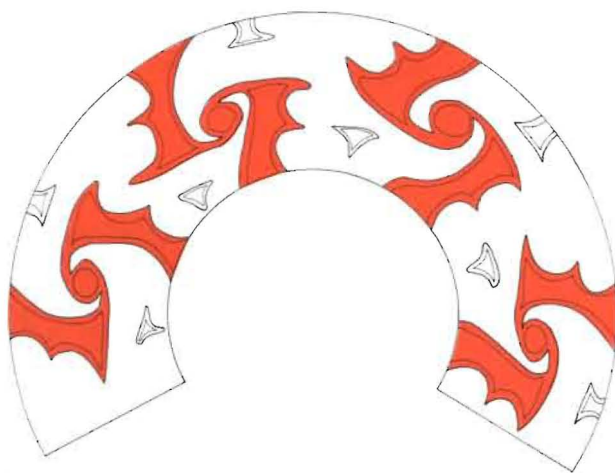
33



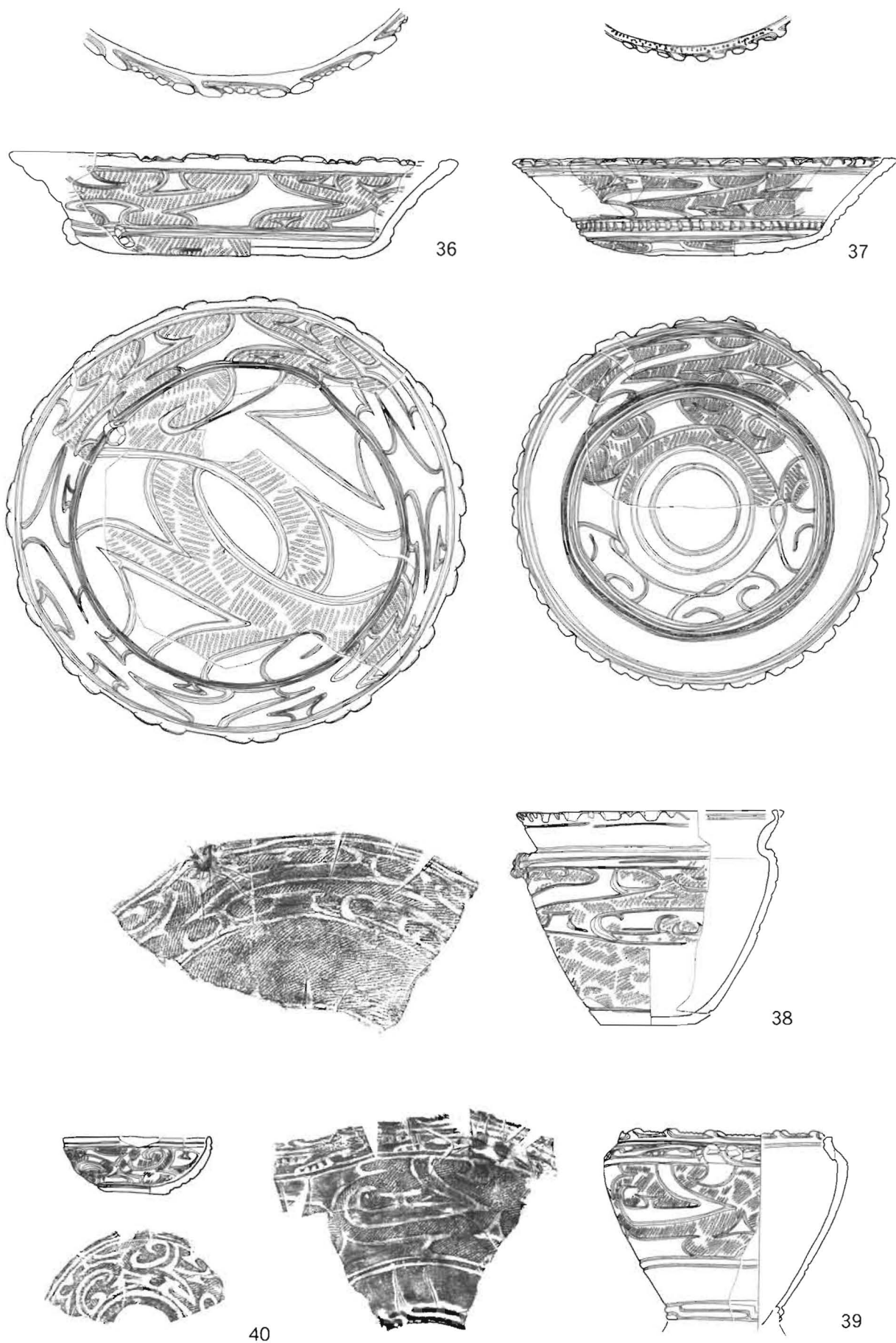
34



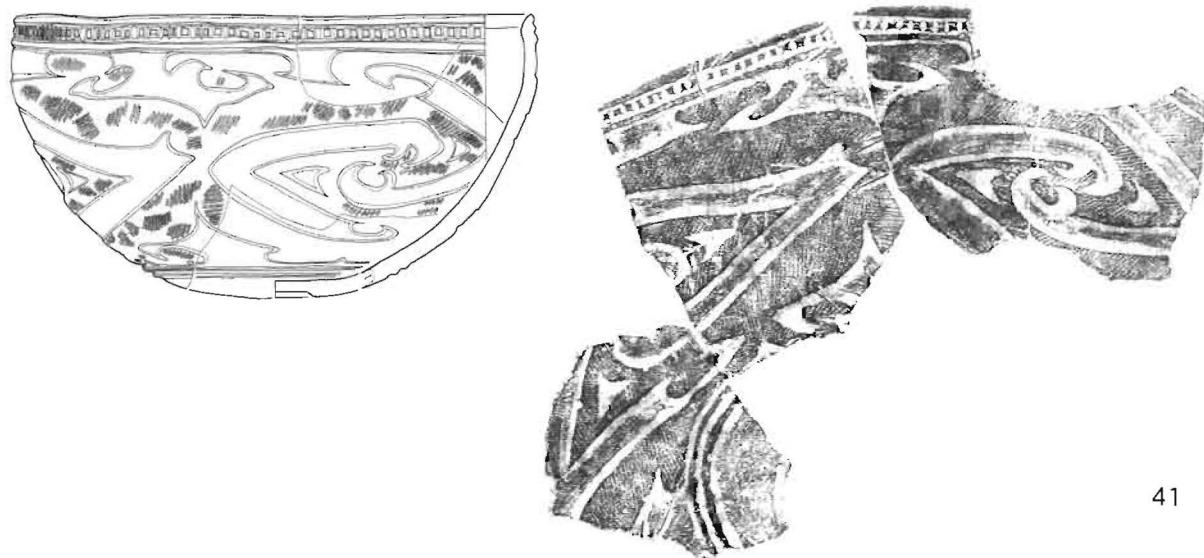
35



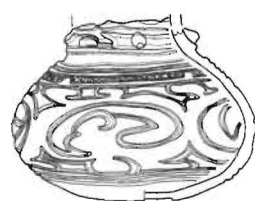
第4図 野里遺跡出土土器 (図33~35)



第5図 野里遺跡出土土器 (図36~40)



41

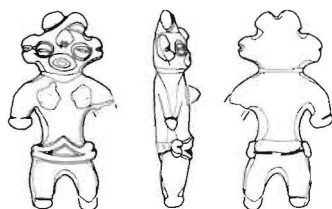


42

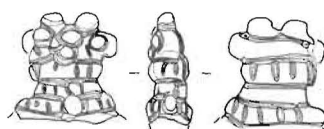
〈土製品〉



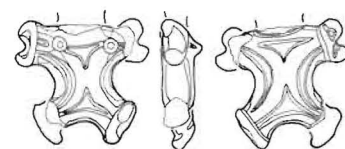
43



44



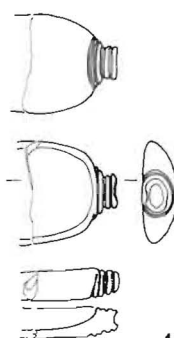
45



46



47



48



49

第6図 野里遺跡出土土器 (図41~49)・土製品 (図43~49)

番号	器種	分類	特 徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
1	浅鉢	—	口縁は平縁で内面に段がつく。器面全体を磨いており、内面は特に丁寧である。口縁部に2条の沈線がめぐり、部分的に赤彩の痕跡が残っている。	無	2.2	10.4
2	浅鉢	—	口縁は平縁でB突起がつく。破片資料であるため何単位つくのかは不明。器面全体に磨きがある。口縁部に2条の沈線がめぐり、	無	4.3	(9.7)
3	浅鉢	列点文 (羊歯状文)	底部は欠損している。口縁は平縁である。器面全体に磨きがある。口縁部には列点と2条の沈線がめぐり、ただし列点部は2本の沈線の間に刻み目を入れるのではなく、間隙の無い羊歯状文の描き方をしている。	無	(6.0)	(11.7)
4	壺	—	頸部に粘土紐をめぐらせ、その上の4ヶ所に粘土粒2個をはりつける。器面は粗く磨かれている。体部下半に意図的に開けられたと考えられる穿孔がある。	無	6.5	6.4
5	壺	—	外面から頸部内面にかけて磨かれ、やや黒い光沢を持つ。	無	7.9	(7.1)
6	壺	—	欠損しているため底部形状は不明。頸部は粗く磨かれている。	L R	(15.1)	(15.6)
7	深鉢	—	内側は丁寧に磨かれている。外面に炭化物の付着が見られる。	R L	16.7	(15.5)
8	壺	—	胎土に砂粒が多く混じり、調整は粗く、内部には紐積み成形の様子が観察できる。	無	7.3	5.6
9	鉢	—	頸の付け根に2条の沈線がめぐり、頸部は無文である。内面外面共に調整は粗く、焼きしまりも悪く、ざらざらする。外面に炭化物の付着が見られる。	L R	(13.0)	23.7
10	深鉢	—	体部に縄文を施文しているが、口縁部の縄文はナデで消えている。	L R	8.5	7.4
11	注口	配置文 Ⅲ1 Ⅲ2	注口部は欠損しているが、注口部の真上の口縁部に4単位のB突起がつく。外面は丁寧に磨きがかかっており、黒く光沢を持つ。文様帯は、頸部と体部の2列存在するが、両者の文様構成はほぼ同じである。	無	(10.2)	16.2
12	深鉢	—	口唇部はナデにより平らに整形している。内面は磨かれている。土器埋設遺構から出土しており、完形である。この土器の内部から図25の土器が検出された。	L R ・ 綾繰	37.6	30.2
13	鉢	—	手づくねでつくられており、つくりは非常に粗い。内面に成形の際の爪跡が残る。口縁部に1条の沈線がめぐり、	無	2.1	3.3
14	注口	区画文 3	注口部の上下と両脇にB突起がつく。口縁部は、注口部の真上にA突起がつき、このA突起の左右にB突起が2単位ずつつく。このA突起と90度の位置にもB突起が2単位ずつつく。外面は良く磨かれており、黒く光沢を持つ。文様帯は、口縁部、頸部、体部に分かれ、底部にも沈線による文様が施文される。口縁部と体部の文様構成はほぼ同一で、区画文3によって描かれる。頸部文様帯も、区画文3によって生まれる文様である。	無	6.8	10.5
15	深鉢	配置文 Ⅲ3	口縁部は平縁でB突起がつく。頸部に3条の沈線がめぐり、口縁部と沈線の間には2個の三叉文を二つ巴状に組み合わせた文様が並ぶ。口縁部のB突起と配置文の数は同じである(7個以上確認)。体部にはL R縄文が施文されている。内面は磨かれている。調整はやや粗い。外面全体に炭化物の付着が見られる。	L R	(20.8)	22.3
16	壺	区画文 1・ 羊歯状文	体部上半が欠損しているが、是川遺跡の出土品の例から底径に対して器高が2倍以上ある細長い壺であることがわかる。外面はよく磨かれ、黒く光沢を持つ。残存する文様帯のうち上段は羊歯状文となる。下段は半円文を交互に並べた文様である。	無	(8.7)	(8.9)

野里遺跡出土土器観察表(1)

番号	器種	分類	特 徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
17	注口	区画文 1・羊歯状文	口縁部にはB突起が並び、注口部真上にはB突起を縦に配置した突起がつく。文様帯は口縁部・頸部・体部の3列に分かれ、底部にも文様が存在する。口縁部文様帯は、B突起の下に列点があるのみである。頸部文様帯は図16の土器と同じ羊歯状文である。底部には弧線の組み合わせからなる渦巻状の文様が4個配置される。	L R	10.7	19.4
18	鉢	列点文 (羊歯状文)	口縁部はB突起が並ぶ波状を呈する。B突起の下に羊歯状の列点文がめぐり、さらに1条の沈線をはさんで以下は非常に目の細かいL R縄文が施文される。底部から5mmの位置に2条の沈線がめぐり、以下は無文である。全体に丁寧なつくりで器壁の厚さが法量に見合って薄く、内面・外面文様部はよく磨かれている。	L R	4.1	(9.0)
19	注口	列点文・羊歯状文	注口部の真上に当たる口縁部にはB突起が2単位確認できるが、左右を対象にするには最低3単位のB突起があったと推定される。文様帯は、大きく頸部と体部に分かれる。上から1列目は羊歯状文がめぐり、その下には2列の列点がめぐる。体部文様帯は1列目と同じ文様構成で、羊歯状文がめぐる。部分的にしか残存していないが、底部にも沈線による文様がある。成形自体は丁寧だが、調整は粗く外面にはあまり磨きがかかっていない。	無	(8.3)	(17.0)
20	鉢	列点文 (羊歯状文)	底部から体部は欠損。口縁部には羊歯状文がめぐる。つくりはやや粗く、内面には磨きが見られるが、外面の文様部などはあまり丁寧に調整されていない。	R L	(6.3)	(17.0)
21	鉢	列点文 (羊歯状文)	2単位一組のB突起が配置される。頸部から肩部にかけて列点と羊歯状文がめぐる。肩には突起が1個つく。調整は丁寧で内面も良く磨かれている。正面には赤彩の痕跡が見られる。	R L	(13.9)	(19.7)
22	注口	列点文	口縁は平縁で、注口部の真上とそれに対応する面、またそれに対して90度の位置に2単位一組のB突起が4組つく。口縁部と頸部の境、また頸部と体部との境には1条の列点がめぐり、体部には隆帯を削りだしたB突起が並ぶ。注口部真下の底部分には、破損のため全体は不明だが三叉文による文様がつくと思われる。つくりが全体に粗く、成形はゆがんでおり、外面もほとんど磨かれていない。	無	(6.5)	12.9
23	鉢	列点文 (羊歯状文)	体部から底部にかけて欠損している。頸部から肩部にかけて羊歯状文や列点、沈線文などがめぐる。	L R	(10.4)	(22.1)
24	深鉢	列点文	頸部に列点文がめぐる。内面は良く磨かれている。外面は頸部から底部にかけて炭化物の付着が見られる。	L R	11.3	9.7
25	鉢	列点文	口縁部は波状を呈し、口縁部直下の列点とつながっている。頸部には2条の列点が続くが、施文は丁寧でない。この土器は、土器埋設遺構の土器である図12の内部から検出されたものである。	L R	9.3	12.8
26	浅鉢	列点文・配置文?	口縁部には列点がめぐる。体部に配置文によって生まれた連続文様が描かれる。	L R	3.1	(6.7)
27	鉢	列点文	口縁部はB突起が並び、小波状を呈する。頸部に1条の列点文がめぐり、横位のB突起が1個つく。内面が良く磨かれているが、外面は丁寧でない。	R L	(8.3)	(11.0)
28	深鉢	列点文	平縁に2単位一組のB突起を配列する。頸部に1条の列点文がめぐる。内面はよく磨かれているものの、胎土に砂粒が多いため、全体に作りは粗く見える。外面に炭化物の付着が見られる。	L R	21.6	24.3

野里遺跡出土土器観察表(2)

番号	器種	分類	特 徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
29	深鉢	列点文・羊歯状文	底部は欠損している。口縁部は、口唇部直下に施された羊歯状文と同化して、刻み目とB突起が施される。頸部には2条の列点文がめぐり、胎土に砂粒が多く混入しており、内面・外面共に磨きは粗い。外面には炭化物の付着が見られる。	L R	(24.4)	27.6
30	壺	区画文 1 ?	受け皿状の口縁部が貼り付けられていたものと考えられるが、口縁部は剥落している。頸部の付け根部にはB突起の貼り付けが並び、体部には三叉文や四角文を充填した雲形文が描かれる。外面は化粧土を塗っていたため剥落が激しく、文様も不明な部分がある。全体に赤彩された痕跡も残っている。	無	(6.5)	6.8
31	浅鉢	羊歯状文・?	頸部に羊歯状文がめぐり、体部文様の詳細は不明であるが、単位文様である雲形文が描かれているようである。調整は丁寧で、内面・外面共によく磨かれている。	L R	(5.9)	16.0
32	壺	区画文 1 ?	体部はわずかししか残っていない。口縁にB突起が並び、そこに縦位のB突起が1個付けられる。体部にはK字状の雲形文がめぐり、外面に炭化物の付着が見られる。	L R	(9.7)	(9.8)
33	浅鉢	列点文・区画文 1	完形品。口縁部には列点文が1条めぐり、体部の文様帯には7単位の区画文が並び、曲線的な雲形文を形成する。つくりは丁寧で、内面・外面共によく磨かれている。	L R	11.0	21.0
34	浅鉢	列点文・区画文 1	口縁は平縁で、口縁部には1条の列点文がめぐり、体部の文様は4単位の区画文の間に三叉文や四角形文が充填された雲形文である。内面にはよく磨きがかかるが、外面の調整はやや粗い。しかし、よく焼きしまっている。	L R	5.3	(13.8)
35	壺	区画文 1	壺の肩部の破片である。区画文の間に四角形文などを充填して雲形文を作る。つくりは丁寧で、内面は紐積みの跡が見えるが、外面は丁寧に磨かれており、よく焼きしまっている。	R L	(6.3)	(14.3)
36	皿	【体部】区画文 3 【底部】区画文 1	底部と体部の境にはB突起が1単位縦位につく。底面と体部にはそれぞれ磨消縄文による文様が施される。口唇部には、羊歯状文が施され、その間にB突起が並び、体部には四角形の充填文を入れた文様が施され、4単位からなると推定される。底面には、三角形文や四角形文などの充填文を入れた文様が施される。つくりは丁寧で、内面・外面共によく磨かれ、よく焼きしまっている。炭化物の付着が見られる。	L R	6.3	(18.2)
37	皿	【体部】区画文 3	底面と体部にはそれぞれ磨消縄文による文様が施される。口縁部にはB突起が並び口唇部には刺突が施される。体部には充填文を入れた文様が施され、体部と底部の境には列点がめぐり、底部は同心円状に沈線によって区切られ、ノの字状の充填文を入れた文様が施される。つくりは丁寧で、内面・外面ともによく磨かれ、焼きしまっている。	L R	5.6	(18.8)
38	鉢	区画文 3	口唇部に削り出したB突起が並び、肩の張り出しに縦位のB突起が1単位つく。肩部から体部中ほどまでは、四角形やノの字形の充填文を入れた磨消縄文による文様が施される。体部下半は縄文のみで、体部下方は無文となる。文様の調整、磨きなどのつくりが全体に粗く、頸部屈曲の内面には粘土を伸ばした際の爪跡が多数残る。外面に火を受けて黒く焼けている部分がある。	L R	(11.1)	(14.6)
39	台付鉢	羊歯状文・配置文 I 1 ?	台付鉢であると推定される。口縁部は直下の羊歯状文と連なり、B突起と波縁が並び、肩部張り出し部分に羊歯状文が施される。体部文様帯も存在するが破片であるため全体の文様構成は判断しにくい。台部の付け根には、沈線文が描かれた隆帯がつく。文様の調整は丁寧であるが、内面は黒く磨かれる。内面・外面共に炭化物が厚く付着している。	L R	(10.5)	(13.4)

野里遺跡出土土器観察表(3)

番号	器種	分類	特 徴	縄文	大きさ (cm)	
					器高	器幅
40	浅鉢	配置文Ⅰ1?	約半分が欠損している。文様はやや複雑な充填文を入れたものである。内面外面に磨きがかかり、よく焼きしめるが、小型であるため細部はやや雑である。	L R	3.2	(8.2)
41	浅鉢	配置文Ⅲ4	口縁部には1条の点列がめぐる。やや複雑な充填文が入り、雲形文が施される。内面はよく磨かれているが、外面の調整はやや粗い。よく焼きしまつてかたい。	L R	(11.0)	(13.4)
42	壺	配置文Ⅰ1	口縁部は欠損している。頸部にはB突起がつく。体部の文様はノの字文や四角形文を充填文とした浮彫的雲形文である。外面の調整は丁寧で、化粧土が塗られており、全体に赤彩の痕跡が見られる。頸部に穿孔が2ヶ所あり、修理孔とみられる。頸部から上が欠損した後に穿孔して利用した痕跡とも考えられる。	無	(7.4)	9.9

野里遺跡出土土器観察表(4)

(土偶)

番号	残存部	分類	作り	乳房	性器	正中線	朱彩	縦 (cm)	横幅 (cm)	重さ (g)	備 考
43	1,2	遮光器	中空	○	—	—	×	(10.9)	(11.5)	176.1	頭部は王冠状にならず壺のように開く、眼部を取り囲む隆帯上と体部にLR縄文、目の両脇にB突起による耳の表現。
44	1,2,3,5,6	遮光器	中実	○	×	×	×	8.0	(4.3)	28.7	頭頂部と耳の位置にB突起、鼻と口は粘土粒の貼り付け、眼は沈線による表現、左足の先は粘土粒の剥落。
45	1?	遮光器?	中実	×	×	×	×	(4.5)	4.1	20.6	中実の遮光器土偶か? 明確な顔面の表現が無く、列点と突起による装飾。
46	2,3,6	X字	中実	○	×	×	×	(5.0)	(4.8)	21.1	胴体に三叉文と両脇に沿う沈線文、頭部は接合面での剥離。
47	1	遮光器	中空	—	—	—	×	(3.0)	(5.4)	12.8	眼部の隆帯に鼻孔と口または人中の表現、眉と耳の位置にB突起、側頭部に列点らしきものがある。

(匙型土製品・中空土製品)

番号	種類	朱彩	縦 (cm)	横幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
48	匙型土製品	○	(3.8)	(4.1)	(1.2)	29.2	先端は欠損。本体部分は楕円形の盆状をなしていると推定されるが匙形以外のものになる可能性もある。本体から手づくねで短い取っ手を作り出す。取っ手の先端は浅く窪む。表面は良く磨かれる。赤色顔料の痕跡が認められるが、塗ってあったものか付着しただけかは不明。
49	中空土製品	○	(6.8)	(5.0)	(2.1)	9.4	平面は楕円形を呈すると推定される。表面は粗い。表面を沈線で囲い、中央を竹管による押し引きの沈線が縦断している。その左右に沈線文が施されている。左右の文様は対称的ではなく、文様の配置も不規則。外面の全体に赤色顔料の痕跡有り。

野里遺跡出土土製品観察表

1	N Z 95 I 区 焼土中 P 16	11	N Z 95 I 区 S I 04 P - 4	21	N Z 95 I 区 HC12 焼土No.1	31	N Z 95 I 区 HD12~13 II A 層(2)	41	N Z 95 I 区 HE12~13 I 層
2	N Z 95 I 区 HE12 II B 層	12	N Z 95 I 区 埋ガメ 4	22	NZ95 I 区HC~ HG 11~12 I 層	32	N Z 95 I 区 HB12 II 層	42	N Z 95 I 区 焼 土No.1内P-10
3	N Z 95 I 区 SK06 3 層	13	N Z 95 I 区 焼土内 HC11	23	N Z 95 I 区 GH12 I 層	33	N Z 95 I 区 焼土内 HB12	43	NZ95 SK-02
4	N Z 95 I 区 焼土No.1P12	14	N Z 95 I 区 II A 層	24	N Z 95 I 区 HD12 II B 層	34	N Z 95 I 区 焼土内 HB12	44	NZ95 HB11
5	N Z 95 I 区 HC12焼土内	15	N Z 95 I 区 S I 04 P - 1	25	N Z 95 I 区 埋ガメ4の中の土器	35	N Z 95 I 区 HD12~13 II A 層	45	NZ95 HB12~ 13
6	N Z 95 I 区 焼土No.1HC12	16	N Z 95 I 区 SK08 フク土	26	N Z 95 I 区 GH12~13 II A 層(1)	36	N Z 95 I 区 焼土内 P - 5	46	NZ95 HA12
7	N Z 95 I 区 GD-11 I 層	17	N Z 95 I 区 II A 層(1)P-2	27	N Z 95 I 区 HD12 焼土上面	37	N Z 95 I 区 HB12 II A 層上面	47	NZ95 HB12
8	N Z 95 I 区 II A 層P-1	18	N Z 95 I 区焼土 内HE12~13	28	N Z 95 I 区 HC12 焼土 No.1内	38	N Z 95 I 区 HB12~13 II A 層	48	NZ95 HB~ HC 12~13 II A 層
9	N Z 95 I 区 HA12~13 II A 層(1)	19	N Z 95 I 区 HA12・HC12 ~13 II A 層(1)	29	N Z 95 I 区 SK16 3 層	39	N Z 95 I 区 焼土内 HB12	49	NZ95 HC~ HG 11~12 I 層
10	N Z 95 I 区 GB11 I 層	20	N Z 95 I 区 HD12 II B 層	30	N Z 95 I 区 焼土上面 P-4	40	N Z 95 I 区 HE12・P-17 II B 層		

野里遺跡出土遺物注記一覧

VII 主な参考文献

- 1897年、佐藤伝蔵「共同備忘録(7)」東京人類学会雑誌12-138
- 1968年、村越 潔ほか編『岩木山』岩木山刊行会
- 1972年、保坂三郎編『是川遺跡出土遺物報告書』八戸市教育委員会
- 1974年、野村崇編『札刈遺跡』木古内町教育委員会
- 1974年、青森県教育委員会『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書14
- 1975・1984～1992年、新谷雄蔵『観音林遺跡― 第一～十次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第6～15集
- 1976年、野村崇ほか編『札刈』北海道開拓記念館
- 1979年、稲野裕介「亀ヶ岡文化における石剣類の研究」『北奥古代文化』11
- 1979年、吉崎昌一ほか編『聖山』北海道大学教養部人類学研究室
- 1979年、芹沢長介編『峠下聖山遺跡』東北大学文学部考古学研究会
- 1979年、会田容弘「東北地方における縄文時代終末以降の土偶の変遷と分布」『山形考古』3-2
- 1979年、鈴木克彦「縄文時代の土製仮面(土面について)」『青森県立郷土館だより』10-1
- 1980年、稲野裕介「石剣類に施される刻みについて」『北上市立博物館研究報告』3
- 1981年、藤沼邦彦「縄文晩期の土器―東北地方―」『縄文土器大成』4、講談社
- 1981年、林 謙作「縄文晩期の土器―北海道―」『縄文土器大成』4、講談社
- 1981年、飯島義雄「仮称入組文と横位連続工字文について」『考古風土記』6
- 1981年、高橋龍三郎「亀ヶ岡式土器の研究―青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について」『北奥古代文化』12
- 1983年、新谷雄蔵・川村真一『五月女泡遺跡』市浦村教育委員会
- 1984年、青森県立郷土館『亀ヶ岡石器時代遺跡』
- 1984年、八戸市博物館『土偶―縄文人の祈り』
- 1985年、野村崇『北海道縄文時代終末期の研究』みやま書房
- 1986年、岡田康博ほか編『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第95集 青森県教育委員会
- 1986・1987年、後藤信祐「縄文時代後晩期の刀剣形石製品の研究(上・下)」『考古学研究』33-3・4、考古学研究会
- 1987年、鈴木克彦「風韻堂コレクションの石棒・石刀・石剣」『青森県立郷土館調査研究年報』11
- 1987年、宇部則保ほか編『是川中居遺跡―長田沢地区』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第2集
- 1989年、藤沼邦彦「亀ヶ岡式土器の文様の描き方―雲形文を中心に―」『考古学論叢Ⅱ』
- 1989年、飯島義雄「体部文様からみた聖山式土器」『考古学論叢Ⅱ』
- 1989年、藤沼邦彦「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観』4、小学館
- 1990年、青森県埋蔵文化財調査センター編『北の誇り・亀ヶ岡文化』図説ふるさと青森の歴史シリーズ③、青森県教育委員会
- 1993年、高橋龍三郎「大洞C2式土器細分のための諸課題」『先史考古学研究』4
- 1995年、藤井安正ほか編『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(1)』鹿角市教育委員会
- 1995年、葛西勲編『宇鉄遺跡発掘調査報告書』三厩村教育委員会
- 1995年、高田和徳・中村明央『山井遺跡』一戸町文化財調査報告書36集
- 1995年、笹森一郎・斉藤岳『千刈(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書174集

- 1995年、鈴木克彦「亀ヶ岡式土器の器形・器形組成から見た地域性」『北海道考古学』31
- 1996年、佐藤嘉広「東北地方の弥生土偶」『考古学雑誌』81-2
- 1996年、葛西 勳編『宇鉄遺跡』三厩村教育委員会
- 1996年、東北歴史資料館『東北地方の土偶』
- 1996年、千歳市教育委員会『ウサクマイN・蘭越7遺跡における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書XX
- 1997年、藤沼邦彦『縄文の土偶』歴史発掘③、講談社
- 1998年、福田正宏「亀ヶ岡式土器における入組文のゆくえ」『物質文化』63
- 1998年、シンポジウム「聖山以後の渡島半島」実行委員会編『シンポジウム「聖山以後の渡島半島」資料集』
- 1998年、須藤隆『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究－縄文から弥生へ－』纂修堂
- 1999年、青森県立郷土館『至高の縄文祭祀芸術－注口土器と土偶－』
- 2000年、福田正宏「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」『古代』108
- 2001年、国立歴史民俗博物館編『落合計策縄文時代遺物コレクション』国立歴史民俗博物館資料図録1
- 2001年、金子昭彦『遮光器土偶と縄文社会』ものが語る歴史シリーズ④、同成社
- 2001年、橘善光・奈良正義編『二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』大畑町文化財報告書第12集
- 2002年、藤沼邦彦・佐布環貴・萩坂華恵「青森県における縄文時代の土製仮面について」『青森県史研究』6、青森県
- 2002年、竹原仁志・市川健夫「二枚橋(2)遺跡出土の石刀について」『海と考古学とロマン』、同刊行会事務局
- 2002年、橘善光「亀ヶ岡文化と祭祀の世界」『海と考古学とロマン』、同刊行会事務局

編集後記

実測図があれば簡単に実測図集が出来上がるであろうと楽観視していたのは間違いであった。いざ実測図を点検すると、不備な点が多数出てきたし、遺跡によってはもう少し実測図を増やしたいものもあった。実測図の数が多いので、トレースも、割り付けも大変であった。卒業生に依頼していた原稿や観察表も、遅れたり、ついに届かなかつたりで、大学院生の蔦川・小向・向出の三君はてんてこ舞いの忙しさであった。卒業生の其田さん・萩坂さんは、休日には応援に駆けつけてくれた。実測図集作成に参加してくれた卒業生・在校生の皆さまに心から感謝の意を表したい。本当に有り難う。苦勞して出来上がった実測集である。卒業生も在校生もこれを利用して亀ヶ岡文化に関する沢山の論文を書いて欲しい。これが実測図作成の最大の目的と言ってよい。

(藤沼邦彦)

弘前大学人文学部考古学ゼミナール卒業生名簿 (2004.3.25現在)		
平成12年度卒業生 (日本文化コース・日本文化論所属)		
	栗原 徹	栃木県壬生町民生部保健課
平成13年度卒業生 (考古学ゼミ第1回卒業生)		
	萩坂 華恵	青森県教育委員会文化財保護課三内丸山対策室・発掘調査補助員
	其田香保里	青森県埋蔵文化財調査センター・発掘調査補助員
	山田 祐子	秋田県埋蔵文化財センター
	古川 温子	株三井住友海上火災保険
	竹下由紀子	北海道大学大学院文学研究科
	佐布 環貴	財団法人千葉県文化財センター・技能補助員
平成14年度卒業生 (考古学ゼミ第2回卒業生)		
	佐藤 亜紀	家事手伝い
	新井田えり子	財団法人岩手県埋蔵文化財センター・期限付補助員
	関根 桂子	財団法人山形県埋蔵文化財センター・調査補助員
	横井 猛志	青森県埋蔵文化財調査センター・発掘調査補助員
	竹内 友香	松前町教育委員会・発掘調査補助員
	小向 良	弘前大学人文社会科学研究科
	向出 博之	弘前大学人文社会科学研究科
平成15年度卒業生 (考古学ゼミ第3回卒業生)・中退		
	市川 健夫	東北大学大学院文学研究科進学 (予定)
	深見 嶺	弘前大学大学院人文社会科学研究科進学 (予定)
	工藤 晴代	株小山内バッテリー社 (内定)
	竹原 仁志	(中退) 日本郵政公社芳賀郵便局 (内定)
在校生名簿		
	人文社会科学研究科一蔦川貴祥・小向 良・向出博之。学部3年生一矢崎あかね、横山寛剛、木下梨恵、久末恵輔、2年生(考古学ゼミ所属内定者)一秋山真吾、安保里美、板橋秋穂、境沢宏美、鈴木春菜、松田元生、山口朋美、沢田恭平。	

弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 1

亀ヶ岡文化遺物実測図集

2004年 3 月31日発行

編集 藤沼邦彦・蔦川貴祥・小向良・向出博之

発行 弘前大学人文学部日本考古学研究室

〒036-8560 青森県弘前市文京町 1

電話 0172-39-3273

印刷 小野印刷